聖書は大ドラマである

小池辰雄著作集

第十巻

⑩ドラマ

聖書は大ドラマである

小池辰雄著作集

第十巻

この、第十巻「聖書は大ドラマである」を

萬人に　捧げる



エル・グレコ「聖霊降臨」

序言

第一巻『無者キリスト』を創刊して以来、十余年、茲に最終刊たるこの第十巻『聖書は大ドラマである』を上梓するに至りました。第一巻『無者キリスト』（一九七五年）、第三巻『無の神学』（一九八二年）及びこの第十巻『聖書は大ドラマである』（一九八八年）の三巻は著作の年次から言っても正に始と中と終で、第十巻を頂点とした正三角形の相でもあり、無を中心とした三重の円現の相でもあります。第十巻は、宇宙的歴史的大ドラマたる聖書、劇的有機体的な生まの神学をうちに蔵している聖書の一つの小さき投影の書であります。これは聖書に捉えられた告白的解説の書ですが、部分にして全体、三日月が満月を抱いている書です。

聖書は文学形態としてのドラマではないが、その内容は正に大ドラマです。それはどんなドラマか。絶対次元の霊なる人格神が著者であり、劇の主人公はキリストなる聖霊の実体であり、惨澹たる人間の歴史に絶対界から光を浴びせている多次元的なドラマであります。神の本願は聖名の故の人間救済にあるのですが、それがどのような終末になるかは誰か知らんやであります。

さて聖書のもつ舞台は世界の三大陸の要に當るパレスティナを中心とした近東、南欧、北アフリカであり、時は永遠を背景とした天地創造から歴史の終末に互る大時限であり、霊的空間は諸々の天界、

煉獄的相対界、地獄界（陰府）であり、役者はイスラエル民族を主役とした諸民族の人物及庶民であり、劇そのものはイスラエル民族の興亡浮沈を契機とした世界救済の預言的史劇であります。

本巻の各頁に掲げた聖句は、旧約、新約いづれも原典からの私訳です。訳文は文語調が主流です。文語調（敢て文語体とは稱はず）が原典の諸調への近似性を感ずるのと紙面の関係にも由るのですが、純然たる口語調もあります。假名づかいは歴史的と現代との組み合はせといったら好いやり方です。

私の翻訳の精神は、ヘブライ語（旧約）、ギリシヤ語（新約）の原典と雖も、その奥の神の根源語の媒介であり、表徴であり、暗号ですらあるとの自覚のもとに、神の根源語を霊聴する祈りの心根をもってするにあります。そのように聖書の言は奥が深いから、弾力性、余韻、兩義乃至多義性もありで、筆を投げたくなる場合もしばしばでした。内面的な詩調豊かな言で、旧約の預言書、詩篇、雅歌、新約の福音書のキリストの言、パウロの書翰のあちこち、ヨハネ黙示録が特にそうです。

聖書は断じて過去の書ではなく、永遠を背景とした現在性、現実性の強い書です。読んでいると、日本という現場と現在に迫ってくるから、火花が散って、おのずから告白的解説となるわけです。

聖書は、従って、第三者的な立場で読める書ではありません。汝と我の対決の場あり、我と汝の融合の場あり、最も究極的には神・キリストへの回帰、帰入、一如に化せられゆく現実の書であります。教訓の書でもなく、客観的叙述の書でもありません。絶対次元からの迫りに圧倒されながら力が与えられる書です。躓いても転んでも、滑っても倒れても、捉えて抱きあげてくれる愛の書であり、光を

浴せ、生命づけて前進せしめではやまぬ力の書であります。だから歓喜と希望が湧き立ち、疲れを知らぬ態勢とされます。

神・キリストは我らを信じ貫き愛し貫き給う。神・キリストの光、生命、義愛の中核的実体は何か。それが聖霊なのであります。その聖霊はどうして受霊するのか。十字架のキリストという神の義と愛の贖罪門のもとで降参すると扉が開き、詩篇第二十三の如き現実となり、キリストに祈り入ることによってであります。選びの人は、終には内的に変貌されます。

少しく個人的なことを述べさせていただくなら、愚生は一九〇四年如月七日の安息聖日の太陽が南天にさしかかった頃その和光を初めて浴びた由です。二十歳に垂んとする頃入信、爾来六十余年、日本語文語訳旧新約聖書を身読、ぼろぼろにすること三回、一九四〇年から自室の一角を会堂にしての日曜聖書講筵、及び旅をしての伝道集会、その数知れずであります。一九五〇年晩秋、大阿蘇のふところで天界のキリストから直接聖霊の降臨にあづかり、爾来、聖書の驚くべき聖霊の次元の中へといよいよ深く回帰、帰入、祈入、体受しつつあるのです。

そのような愚生が聖書という大ドラマの中に投身して、その現実の中から聖書を告白しているのが、拙著全十巻であり、この第十巻であります。

さて読者の皆さまは、敍上の如きドラマなる聖書ですから、本書を月日を逐って毎日この史劇の展開と共に聖書の中に自分を入れて、ドラマの人物の一人となって読んでゆかれますように！　これを

身読と稱います。本書は内容的には大体歴史的な順です。一月からの旧約の世界を順次読まれる傍ら、同時に九月からの新約の世界も読まれたら好いと思います。各日付の上欄の標題のあとに記されてある聖書の箇所は、その頁の主題に関連あるものですから、聖書を参考にお読み下さい。略語表は巻頭に掲げてあります。なほ、補助の意味で自作の詩と諸種の挿画が然るべき箇所に散在してあります。読者は他面何月何日のところであろうと即ち聖書のどの箇所であろうと自由に読まれることも結構なことです。

智的水準の高度な日本は経済大国になったけれども、精神大国にならなければまことに危い。今や国民社会生活の諸種の面に於て危機的現象が見えています。その最大の原因は教育界にあります。そのためには是非とも聖書を「トレ・レゲ」「採りて読め！」であります。また日本中の書店が聖書を備えるべきであります。本巻の悲願は特に日本の青年男女が聖書を身読するに至らんことであります。

誰の人生もドラマです。共に泣き、共に苦しみ、共に叫び、共に歓び、共に感謝し、共に讃美してくれる無比の友は聖書です。神・キリストから来る光を、力を、生命を、義を、愛を、こんどは弱き人、なやめる人、求める人、苦しむ人、虐げられた人に我々自身が領ち与える人に化せられてゆくところに本当の幸がありましょう。

聖書は外出のときもカバンやハンドバックの中に、部分的に聖書を破ってでも入れて、身読すべき書です。愚生もそのことを実行している人間です。読めば直ちに力が来る。聖霊は、人生の色々なこ

とに出遭えば出遭うだけ、逆に力を与えてやまぬ無限無量のキリストの霊です。

世界的大詩人ゲーテは本当に聖書を身読した人の一人です。彼は聖書を「万巻の書中の書」と言い、霊界のキリストと自然界の太陽には無条件に平伏すと言いました。どうぞ聖書を「わが書」として下さい。合掌。

一九八八年一月十九日　失明の母召天三十一周年の命日　　キリストの無者　天光

小池辰雄

〔註記〕○邦訳聖書の章節が原文聖書の章節と異なる場合原文聖書の章節は〔　〕の中に入れて表はす。

○自作讃歌（詩）の歌調を（S）X番で表はしたものは、日本の讃美歌の番号を指す。

〈旧新約聖書各巻略語表〉

旧約聖書	エズラ書	オバデア書	新約聖書	テモテへの前の書
創世記	ネヘミヤ記	ヨナ書	マタイ伝福音書	テモテへの後の書
出エジプト記	エステル書	ミカ書	マルコ伝福音書	テトスへの書
レビ記	ヨブ記	ナホム書	ルカ伝福音書	ピレモンへの書
民数紀略	詩篇	ハバクク書	ヨハネ伝福音書	ヘブル人への書
申命記	箴言	ゼパニヤ書	使徒行伝	ヤコブの書
ヨシュア記	伝道之書	ハガイ書	ロマ人への書	ペテロの前の書
士師記	雅歌	ゼカリア書	コリント人への前の書	ペテロの後の書
ルツ記	イザヤ書	マラキ書	コリント人への後の書	ヨハネの第一の書
サムエル前書	エレミヤ記		ガラテヤ人への書	ヨハネの第二の書
サムエル後書	エレミヤ哀歌		エペソ人への書	ヨハネの第三の書
列王紀略上	エゼキエル書		ピリピ人への書	ユダの書
列王紀略下	ダニエル書		コロサイ人への書	ヨハネの黙示録
歴代志略上	ホセア書		テサロニケ人への前の書	
歴代志略下	ヨエル書		テサロニケ人への後の書	
	アモス書			

〔註〕ゴシックの部分が略語。

目次

序言

旧新約聖書各巻略語表

旧約聖書（一月―八月）

〔註〕（画）…挿画一頁　（詩）…詩一頁のこと

一月

1 天地の創造　創一・一　27
2 人の創造　創一・二七、二・七　28
3 夫婦一体　創二・二三　29
4 楽園喪失　創三・九（画）（詩）2　30
5 アベルの血の叫び　創四・一〇　34
6 エノクの歩みと昇天　創五・二四　35
7 ノアの大洪水　創八・一一　36
8 バベルの塔　創一一・一　37
9 アブラムの出ハラン　創一二・一、二　38
10 信義一相　創一五・六　39
11 義人の力　創一八・三二　40
12 獨子の献供　創二二・一〇―一二（画）　41
13 ヤコブの石枕　創二八・一七（画）　43
14 ヤボクの渡し　創三二・二九（画）　45
15 ヨセフの生涯　創四五・八　47
16 モーセの生ひ立ち　出二・一〇　38
17 モーセの召命と神名　出三・一四　49
18 過越（すぎこし）　出一二・一三　50
19 出エジプト（上）　出一四・一三、一四　51
20 出エジプト（下）　出一五・二（画）　52
21 十言（上）　出二〇・二、三、四、七、八、一二　54
22 十言（下）　出二〇・一三…一七　55
23 偶像礼拝　出三二・九、三二　56
24 幕屋（上）　出三三・七　57

25 幕屋（下） 出二五・二一、二二 58
26 シナイ契約 出一九・五、六 59
27 血の贖罪力 レビ一七・一一 60
28 聖潔法 レビ一九・二、一八 61
29 ヨベルの年 レビ二五・一〇 62
30 一房の葡萄の谷 民一三・二四（画） 63
31 逃れの町 民三五・一一 65

二月

1 モーセの祈り 申三・二六 66
2 妬む神 申四・二四 67
3 聴けイスラエルよ！ 申六・四―九 68
4 神の撰び 申七・七 69
5 神の霊言と大自然の食物 申八・三 70
6 心の割礼 申三〇・六 71
7 モーセの歌 申三二・一〇、一一（詩3） 72
8 我れ汝と共に ヨシ一・五、六 76
9 遊女ラハブ ヨシ二・一一（画） 77
10 ヨルダンを渉る ヨシ三・一七 79
11 実存主か他神か ヨシ二四・一五 80
12 平安の神 士六・二三、二四（画） 81
13 ギデオンの精鋭三百 士七・二〇 83
14 ナザレ人サムソン 士一三・五 85
15 盲者サムソン 士一六・二八（画2） 87
16 モアブの女ルツ ルツ一・一六 88
17 ハンナの讃歌 サム前二・二 89
18 天童 サムエル サム前三・三、四 90
19 エベネゼル サム前七・一二 91
20 騾馬を捜して王と成る サム前一〇・六、七 92

21 祭儀か信従か　サム前一五・二二　93
22 ダビデの召命　サム前一六・七　94
23 ダビデの立琴　サム前一六・二三　95
24 ダビデとゴリアテ　サ前一七・四五（画）　96
25 ダビデとヨナタン　サム前二〇・四二　98
26 流浪のダビデ（上）　サム前二二・一四　99
27 流浪のダビデ（下）　サ前二四・一四、一七　100
28 弓の歌（前半）　サム後一・一九　101
29 弓の歌（後半）　サム後一・二六　103

三月

1 剱の問題　サム後二・二六　104
2 神の櫃と踊るダビデ　サム後六・一四　105
3 実存主は幕屋ダビデは王宮　サム後七・六　106
4 ダビデとバテシバ　サム後一一・二　107
5 ダビデとナタン　サム後一二・七、一三　108
6 ダビデとアブサロム　サ後一八・三、三二　109
7 ダビデ辞世の歌　サム後二三・一―七　110
8 ソロモンの智慧　王上三・一二（画）　111
9 ソロモンの神殿　王上八・二七…三〇　113
10 ソロモンの背神　王上一一・九　114
11 エリヤと鴉、エリヤと寡婦　王上一七・六、一六、二一、二二　115
12 カルメル山上の霊戦王上一八・三六、三七　116
13 エリヤの遁避行　王上一九・五、一二、一三（画）　117
14 ナボテの葡萄園　王上二一・三　119
15 エリヤの昇天　王下二・一一、一二（画）　120
16 エリヤの衣鉢エリシヤ王下二・一四、一五　122
17 エリシヤの無尽の油　王下四・七　123
18 エリシヤとシュネムの石女　王下四・三二…三七　124

19 ナアマンの癩病　王下五・一〇　125

20 神の人の武士道　王下六・一七、二二　126

21 浮ぶ斧、死骨の力　王下六・六、一三・二一　127

22 神とサタンとヨブ（上）　ヨブ一・九　128

23 神とサタンとヨブ（中）　ヨブ一・二一　129

24 神とサタンとヨブ（下）　ヨブ二・一〇　130

25 ヨブおのが誕生を詛う　ヨブ三・三、一一、一二、二〇　131

26 ヨブの自己省察　ヨブ七・一、九・二〇、一〇・一　132

27 「わが証者は天に在り」　ヨブ一二・一〇、一二・一三、一三・一五、一四・七、一六・一九―二二　133

28 「我知る、我を贖ふ者は活く」　ヨブ一九・二五、二六、二七　135

29 ヨブの今昔の感　ヨブ二三・八…一三、二七・二―四　136

30 エリフの執成　ヨブ三二・八…（画）　137

31 神の天地万物　ヨブ三八・六、七…四一　139

四月

1 ヨブの見神　ヨブ四二・一、二、五、六　140

2 ヨブの祝福　ヨブ四二・八…一六（画）　141

3 シュラミの女の愛の言　雅一・二、三、二・一、三、六　144

4 春が来た！　雅二・八―一四　145

5 彼我一如　雅二・一六、一七　146

6 女性美　雅四・一―五　147

7 愛は最大の力　雅八・六、七（詩）　148

8 萬象流転　伝　一・二―七　150

9 「日の下に新しきものなし」　伝一・八…一八

10 「万事に時期あり」 伝三・一…八 152
11 畏神遵法 伝一一・一、一二・一…七… 153
12 宗教・道徳・学問 箴一・七…二三、三・三…三四、四・二七、六・二三 154
13 畏神に天道あり 箴八・一三、九・一〇、一〇・一二、二九、一二・一九、一三・一四、一四・二七 155
14 七轉八起 箴一六・一八、三二、一七・九、一九・一七、二〇・二〇、二七、二四・一六、二五・二八 156
15 神秘と栄光 箴三〇・一八、一九、三〇・三〇 157
16 自己否定の道 詩一・一—六 158
17 求神の道 詩一四・一、二、三 159
18 至福 詩一六・五、六、七、八 160
19 天然の神秘 詩一九・一—六（詩） 161
20 人生の歌 詩二三・一—六（詩） 163
21 神はわが光 詩二七・一、五、一四（画） 165
22 罪のゆるし 詩三二・一、二、五 167
23 信仰の凱歌 詩四六・一—一〇 168
24 砕かれた霊魂 詩五一・一、九…一七 169
25 神に飢え渇く 詩六三・一、三、五—八 170
26 ただあなただけ 詩七三・一…二六 171
27 葡萄樹 詩八〇・一、三、八…一八 172
28 力より力へ 詩八四・一…七 173
29 戦闘の幕屋 詩九一・一…一六 174
30 旧約の福音 詩一〇三・一…二一 175

五月

1 出エジプト 詩一一四・一—八 176
2 私は愛する 詩一一六・一…一七 177

3 神はわが力、わが歌、わが救　詩一一八・一…　178
4 隅の首石　詩一一八・一九…二九　179
5 神の護り　詩一二一・一―八　180
6 涙の種子、歓びの禾束　詩一二六・一―六　181
7 深淵・待晨　詩一三〇・一―八　182
8 思慕の魂　詩一三七・一―六　183
9 汝知り給ふ　詩一三九・一…一七　184
10 汝を隠蔽とする　詩一四三・一…一一　185
11 大愛大能の神　詩一四五・三…二〇　186
12 萬象の讃美　詩一四八・一…一四　187
13 エステル　エス二・五―七、一七、一八　188
14 我唯だ汝らのみを知る　アモス三・二　189
15 公道・正義の本流　アモス五・二四　190
16 汝何を見るや　アモス七・八、八・二　191
17 ホセアの悲劇的結婚　ホセア一・一九、二〇　192
18 神の深き顧みの愛　ホセア三・一、二、三　193
19 わが歓喜は愛に在り　ホセア六・六　194
20 神の愛の綱　ホセア一一・一、四　195
21 選民への終末的希望　ホセア一四　196
22 終末的平和の祈求　ミカ三、四　197
23 神と共に歩む　ミカ六・八　198
24 「誰か汝の如き神在らんや」　ミカ七　199
25 嫉妬の火。神の隠蔽　ゼパ一・一八、二・三　200
26 戦乱と淫乱　ナホム一・二、三・一―四　201
27 観望塔　ハバ一・二、二・一―三　202
28 義人生信　ハバ二・四　203
29 因果應報　オバ三、四、一五　204
30 第二神殿建造の預言　ハガイ一・五、六、七

31 相互帰入 ゼカ一・一四―一六 206

六月

1 メシヤ王国の預言 ゼカ九・九、一〇 207
2 メシヤとエホバ ゼカ一二、一三、一四 208
3 義の陽 マラキ四・一、二、五 209
4 心を裂いて立ち帰らん ヨエル二 210
5 瓢の徴 ヨナ一・一二、一七、三・一、二 211
6 神の本願 ヨナ四・一〇、一一 212
7 幕屋より幕屋に 代上一七・五 213
8 ソロモンの神殿 代下二・五、六 214
9 ペルシヤ王クロスの詔勅 エズラ一・一、二 215
10 ネヘミヤの祈り ネヘ一・五―一〇 216
11 権力者の傍若無神の相 イザヤ一 217
12 軍備全廃の預言 イザヤ二・四 218
13 葡萄園の歌 イザヤ五・一…七 219
14 イザヤの召命（其一） イザヤ六・一―五 220
15 イザヤの召命（其二） イザヤ六・六―一〇 221
16 信仰不動 イザヤ七・九（画） 222
17 インマヌエル イザヤ七・一四 224
18 躓きの石 イザヤ八・一三、一四 225
19 遺れる者 イザヤ一〇・二〇―二三 226
20 霊的人格メシヤ イザヤ一一・一―三 227
21 第二の楽園 イザヤ一一・六―九 228
22 終末的和合 イザヤ一九・二三―二五 229
23 終末的救済と栄光 イザヤ二四―二七 230
24 貴き隅石 イザヤ二八・一六 231
25 天道地路 イザヤ三〇・一五、二一 232
26 畏神は国宝 イザヤ三一・三、三三・六 233

27 世界の破滅　イザヤ三四・一―四　234
28 楽園回復　イザヤ三五（詩2）　235
29 ヒゼキヤの祈り　イザヤ三八・一七―二〇（詩2）　238
30 エレミヤの召命　エレ一・四―九　241

七月

1 生命の水の源　エレ二・一二、一三　242
2 我に帰れ！　エレ三・二二　243
3 わが腸よわが腸よ！　エレ四・一九―二六（画）　244
4 一者の存在　エレ五・一　246
5 獅子と狼と豹　エレ五・六　247
6 預言者の宗教　エレ七・四―七　248
7 泪の泉　エレ九・一（詩）　249
8 唯だ神を誇る　エレ九・二三、二四　251
9 義しきかな神は！　エレ一二・一　252
10 麻帯　エレ一三・一　253
11 エレミヤの執り成しの祈り　エレ一四・七―九　254
12 鵲鴝（しゃこ）の族　エレ一五―一七　255
13 陶工と陶器　エレ一八・一―四　256
14 聖言は火の如し　エレ二〇・七―九　257
15 佳き無花果　エレ二四・五―七　258
16 罪無き者の血　エレ二六・一四、一五　259
17 本願によって立ち帰る　エレ三一・一八―二〇　260
18 新契約　エレ三一・三一―三四　261
19 永遠の契約　エレ三二・三七―四一　162
20 断罪による滅亡の現実　哀一・一、二、三、一八、二〇　263
21 聖憤に因る惨状　哀二・一、一二、二〇　264

22 苦難の中に神在ます　哀三　265
23 本願回帰　哀四、五　266
24 起死回生への預言　エゼ一一、一八　267
25 義人の義はその人に帰す　エゼ一八・二〇　268
26 枯骨の復活　エゼ三七・一―六　269
27 神殿の霊水　エゼ四七・九、一二　270
28 出バビロン　イザヤ四〇・一―一一（画）　271
29 大宇宙の神　イザヤ四〇・一三…二六　273
30 鷲の如く翼を張りて　イザヤ四〇・二七―三一　274
31 エホバの僕イスラエル　イザヤ四一・八…一四　275

八月

1 傴（いた）める葦、ほの暗き蠟燭　イザヤ四二・一―四　276
2 雲散霧消の贖罪　イザヤ四三、四四　277
3 隠れて在ます神　イザヤ四五・一四、一五　278
4 我は荷い我は救う　イザヤ四六・四　279
5 神の栄光の宗教　イザヤ四八・九―一一（詩2）　280
6 わが僕イスラエル　イザヤ四九・一―七　283
7 神の義と救　イザヤ四六…五一　284
8 朝な朝な門弟らしく　イザヤ五〇・四―九　285
9 未見未知の霊止（ひと）　イザヤ五二・一三―五三・二　286
10 悲痛の荷手　イザヤ五三・三―六　287
11 神の羔　イザヤ五三・七―一〇上　288
12 どん底の執り成し　イザヤ五三・一〇下―一一

二 289
13 夫なる神と妻なるイスラエル 五四・一、四、五、一〇 290
14 永遠の契約 イザヤ五五・一―三 291
15 天道地路 イザヤ五五・六―九（詩2） 292
16 神に迎えられる人 イザヤ五七・一、二 295
17 天地の抱擁 イザヤ五七・一五 296
18 わが嘉する断食 イザヤ五八・六―九上 287
19 安息日に神を楽しむ イザヤ五八・一三、一四上 298
20 神の甲冑契約の霊言 イザヤ五九・一六、一七、二一 299
21 神の光を浴びて イザヤ六〇・一、一五、一六、一九、二〇 300
22 神霊臨みて福音を イザヤ六一・一―三 301
23 神に在っての喜び楽しみ イザヤ六一・一〇、六二・一 302
24 我は独りで酒槽を踏んだ イザヤ六三・二、三、五 303
25 神の底ぬけの愛 イザヤ六三・八、九 304
26 本当のしがみつきの信仰 イザヤ六三・一〇、一一、一五、一六、一七 305
27 思いがけない神 イザヤ六四・四、六五・一 306
28 栄光の乳房 イザヤ六五・一七…六六・一〇、一一（詩2） 307
29 神霊の力は火をも制する ダニ三・二五―二七 310
30 メネ・メネ・テケル・ウパルシン ダニ五・二五―二八 311
31 大破局と星の人 ダニ六・二一、二二、二二・一、三 312

新約聖書（九月―十二月） 313
（裏 314）

九月

1 言い逆いの徴（上） ルカ二・三四 315
2 言い逆いの徴（下） ルカ二・三四（画） 316
3 受肉 ヨハネ一・一―一八 318
4 少年イエス ルカ二・四九 319
5 聖霊のバプテスマ マタイ三・一一…一七 320
6 キリストとサタン マタイ四・四、七、一〇 321
7 天国回帰（上） マタイ四・一七―五・三 322
8 天国回帰（下） マタイ五・三、一〇（詩） 323
9 律法と福音 マタイ五・二一、二二 325
10 敵をも愛する マタイ五・四四、四五上 326
11 最高の言 マタイ五・四五下、四八（画） 327
12 いのり マタイ六・六 329
13 主の祈り（其一） マタイ六・九―一三 330
14 主の祈り（其二） マタイ六・一〇 331
15 主の祈り（其三） マタイ六・一二 332
16 主の祈り（其四） マタイ六・一三（詩） 333
17 人を審かぬこと マタイ七・一 335
18 求めよ、さらば与へられる マタイ七・七 336
19 黄金律 マタイ七・一二 337
20 狭き門 マタイ七・一三、一四 338
21 聖意体現 マタイ七・二一 339
22 百卒長の信仰 マタイ八・八、一〇 340
23 人の子は枕する所なし マタイ八・二〇、二四（詩）（画） 341
24 我は罪びとを招かんとて来れり マタイ九・

一三 344
25 天翔の十字架道 マタイ一〇・三四、三八 345
26 一粒の芥種 マタイ一三・三一、三二 346
27 湖上のキリスト マタイ一四・二七 347
28 カナンの女 マタイ一五・二二…二八（詩） 348
29 エレクシャの磐（ペテロ） マタイ一六・一五 348
30 生魂（いのち）の重さ マタイ一六・二四―二六 350

十月

1 カナの婚宴 ヨハネ二・三…一一 352
2 イエスとサマリヤの女 ヨハネ四・一三…二三（画） 353
3 無者キリスト ヨハネ五・二〇…三九 355
4 我は生命のパンなり ヨハネ六・三三…五三 356
5 キリストの榮化 マタイ一七・一―七 357
6 「ペテロの魚」 マタイ一七・二七 358
7 童心の天国 マタイ一八・三（詩）（画） 359
8 幕屋の原相 マタイ一八・二〇 362
9 愛と永遠の生命 ルカ一〇・二七、二八 363
10 深所（ふかみ）に漕ぎ出でよ！ ルカ五・四、五（詩） 364
11 イエスと富める青年 マルコ一〇・一八 366
12 マルタとマリヤ ルカ一〇・四二上 367
13 ラザロの復活 ヨハネ一一・四三（画） 368
14 我も汝を罪せじ ヨハネ八・一一 370
15 放蕩息子 ルカ一五・二四（画）$_2$ 372
16 主の大饗宴 ルカ一四・一五、二四（詩） 374
17 盲人バルテマイ マルコ一〇・四七、五一、

五二　376
18 パリサイ人と取税人の祈り　ルカ一八・一三（詩）　377
19 寡婦のレプタ二枚　マルコ一二・四四　379
20 十人の乙女　マタイ二五・四（画）　380
21 羊と山羊　マタイ二五・四〇　382
22 ナルドの香油　マルコ一四・三、八、九（詩）（画）　383
23 洗足　ヨハネ一三・八（詩）　386
24 最後の晩餐　マタイ二六・二六―二八　388
25 我は道なり眞相なり、生命なり　ヨハネ一四・六…二八　389
26 葡萄樹　ヨハネ一五・一…九（詩）　390
27 聖霊、助主、慰主　ヨハネ一六・七、三三　392
28 大祭司の祈り　ヨハネ一七・一…二三　393
29 ゲッセマネの血禱　マタイ二六・三八、三九（画）　394
30 十字架　マタイ二七・二〇―二二　396
31 今日私と一緒にパラダイスだ！　ルカ二三・四三　397

十一月

1 十字架の義と愛　マタイ二七・四〇ルカ二三・三四（画）2（詩）　398
2 キリストとマグダレーナ　ヨハネ二〇・一五…一八（詩）　402
3 エマオ途上のキリスト　ルカ二四・一三―三二（画）2　405
4 聖霊を約束するキリスト　マタイ二八・一九、その他　408
5 復活のキリストとペテロ　ヨハネ二一・一五

…一九（画） 409
6 キリストの昇天 ルカ二四・五〇―五三（画） 411
7 約束の聖霊 行伝一・八（詩3） 413
8 五旬節（ペンテコステ） 行伝二・一―四（詩） 417
9 キリストの無者ベテロ 行伝三・四―一三（画） 419
10 最初の殉道者ステバノ 行伝七・五一、五二（詩）（画） 421
11 パウロの回帰 行伝九・三、四、一七、一八（詩）（画） 424
12 キリスト者（クリスティアノス） 行伝一一・一九―三〇 427
13 神の中に生き動きまた在る 行伝一七・二八 428
14 パウロの按手 行伝一九・五―七 429
15 パウロの棄身の伝道 行伝一九・一一、二〇・二三、二四、二八 430
16 神の力 ロマ一・一―一六 431
17 神の義の顕現 ロマ一・一七 432
18 恵信の義 ロマ三・二一―二四 433
19 新しき永遠の生命 ロマ六・三、四、六・二二、二三 434
20 罪との戦 ロマ七・二二―二五 435
21 霊と肉 ロマ八・一―九（詩） 436
22 聖霊の讃歌 ロマ八・二六、二七 438
23 神・キリストの愛 ロマ八・三二…三九 439
24 アナテマ魂 ロマ九・一、二、三 440
25 神より出でて神に帰る ロマ一一・三三…三六 441
26 愛は律法の完成 ロマ一三・八、一〇 442
27 十字架と聖霊 コリ前一・一三、一八、二・一五 443

28 アナンケー　コリ前九・一六　444

29 自主と僕の実存　コリ前九・一九…二二　445

30 聖霊とその霊賜（たまもの）　コリ前一二・一、四―六　446

十二月

1 愛の讃歌　コリ前一三・二、四、七、八、一三　447

2 復活の讃歌　コリ前一五・四四、四五　448

3 自由の霊　コリ後三・一七、一八　449

4 神・キリスト一点張り　コリ後四・七―一〇、五・一…二一　450

5 無一物無尽蔵　コリ後六・八…一〇　451

6 鴻大なる黙示　コリ後一二・七―一〇　452

7 十字架・聖霊の体受　ガラテヤ二・一九、二〇　453

8 無限無量なるキリストの愛　エペソ二・八…三・一九　454

9 神・キリストの超在、遍在、内在エペソ四・四―六（詩）　455

10 キリストの戦士たれ　エペソ六・一〇―一七（詩）　457

11 無的実存と一切の秘決　ピリピ二・五―七、四・一二、一三　459

12 天地一如、萬物浸透　コロ三・一…一一　460

13 絶えず祈る、御霊を熄（や）さない　テサ前五・一六…二八　461

14 罪びとの首（かしら）　使徒の首　テモテ前一・一五　テモテ後一・六、二・九、四・六、七　462

15 聖霊の維新　テトス三・四―六　463

16 神の大祭司キリスト　ヘブル四・一五…　464

17 永遠の贖罪、永遠の嗣業　ヘブル九・一一―

一五 465
18 慕ふ所は天に在り ヘブル一一・一…一六 466
19 陣営より出でて御許へ ヘブル一三・一一―一三 467
20 本来信・行一相一如 ヤコブ一・二三… 468
21 愛と栄光の聖霊 ペテロ前四・七…一四 469
22 一日千年 ペテロ後三・八―一三（詩2） 470
23 永遠の生命たる言（ロゴス） ヨハネ一書一・一…三・一六 473
24 愛は神より出づ ヨハネ一書四・七…一三 474
25 我れ戸の外に立ちて叩く 黙一・八…一九、三・二〇、二一（画） 475
26 血の復讐、羔の怒、羔の血 黙六―七（詩） 477
27 羔の君と十四万四千人 黙一四・一―五 479
28 ハル・マゲドンの戦 黙一六・一三…一六 480
29 羔の婚姻 黙一九・六―九 481
30 神の幕屋 黙二一・二―四 482
31 キリストの再臨 黙二一・二二…二二・二〇（詩4） 483

聖書は大ドラマである

舊約聖書（一月—八月）

1月1日

天地の創造
（創世記1：1―2：3）

元始に神は天地を創造した。（創一・一）

聖書は神の啓示の書、超科学の書である。聖書は永遠に実在する神が、古代ヘブライ（イスラエル、ユダヤ）人に体感させた行為と言葉の劇的現実を伝えている書である。

天地の創造によって宇宙（空間）に歴史（時間）が始まった。この歴史には元始があったから終末がやってくる。聖書の創世記がその元始を語り、黙示録がその終末と新天新地の到来を預言している。

創世記第一章（一・一―二・三）を見ると、神は六日間で創造の業を成して第七日目に安息した。この神話的表現から七日目毎に神との平安に入る安息日を迎えることになった。

ところで神は創造の業の一つ一つを見て「善し」（文語訳）「良し」（口語訳）とした。原語（ヘブライ語）では「トーブ」だが、この語はこの場合善悪良否の判断ではなく、「結構だ、わが意を得た」という意で「美し、好いかな」という善悪の彼岸的な神意と私は見る。楽園喪失以前の創造の神品であるからだ。因みに、「美」という漢字の構成は大羊で、大きな羊の毛は美しいという美観に由来している由。創造の天地は正に美しかったのである。その第一の業は「光あれ！」で即「光があった」。光は宗教界、自然界の神秘的根源現象である。キリストや釈尊、聖者高僧の後光は霊界の光、元旦の旭光は自然界の光。我らも全身光に貫かれよう！

1月2日

人の創造
（創世記1：27，2：7）

神は人をおのが相に創造した。……男性と女性に神は彼らを創造した。（創一・二七）

混沌たる宇宙に神の霊気が漂うていたが、神は先づ光を創造し、天には日月星辰を配し、地には諸々の植物、爬虫類獣類、海には魚類、空には昆虫類鳥類を創造した。そして最終段階に人類の創造にとりかかった。これが第一章の創造譚であるが、この第一章第二七節は神秘な人間の本質を告げるもので、この一句を全存在を以て信受する人は本当の幸福を知るにちがいない。知るとは全存在で体感体認することを謂う。

神が神の相に即して人を創造したという。神は無相の相である。人間の側からは端倪すべくもない。霊的な実在を偶像化してはならない。その無相の相に即して創造された人間は神性を宿した。だから人は神の現象体である。本来極めて神秘的存在なのである。日本の古代人も人を霊止、神霊の止まる存在と解した。仏教でも衆生悉く仏性ありと称う。であるから魂がある限り、人は宗教界に属している。万人は宗教人である。男性も女性も神性を宿している。神の「似姿」という訳はおもわしくない。

さてまた二章七節の神話的表現によると、「実存主神は大地の土で人を形成してその鼻に生命の気息を吹き入れた、すると人は生気魂となった」とある。即ち人は天的な霊気と地的な要素から成る天地融合の霊肉渾然たる霊幸う生命体！　豊かな人間性よ！

1月3日

夫婦一体
（創世記2：18—25）

これぞわが骨の骨、わが肉の肉。（創二・二三）

創世紀第二章の神話によると、神は万物創造の終りにアダム（大地を素材として作ったので地人と謂う）を創造したが、彼が孤独でいるのは結構なことではない。彼に適う助者を作ってやろう。そこで神は彼に手を按いて深く眠らせて、謂はば霊的痲睡状態として、彼の心臓部とおぼしき肋骨を取り出して、女を創造した。アダムは睡りから覚めると、神が女をアダムの面前に伴れて来た。驚き喜んだアダムは感激のあまり叫んだ。

これこそは私の骨の骨だ、私の肉の肉だ！　その名は女だ、男から取られたからだ。

この神話的太古の詩句は驚くべき傑作である。本来個たる単独存在が、神の憫みによって男女という相対存在となった。だから「二人一体」たる原始の夫妻が茲に成った。であるからアダムの叫び「これぞわが骨の骨、肉の肉」はエバ（原語は「ハッワー」で生者、及び生命づける者、即ち「生きものの母」の意となる）（三・二〇参照）にとっても同じ叫びとなる。夫婦愛を表現してこれに優るものがあろうか。現代人よ原始に還れ！　と謂おう。

生きとし生けるもののうち　エバの姿に比ふもの（註）これは私の「楽園喪失」という譚歌（十節から成る）の第五節・歌調「苔莫茂れる櫻井の」第八巻【詩歌集】三二五—二七頁参照

ひとつもあらずエバの美は　神の芸術の傑作ぞ！

東西古今に謳はるる　美の極致こそ女体なれ

1月4日

楽園喪失
（創世記2：8—17，3：1—24）

汝は何処に居るのか（創三・九）

ユーフラテスの上流地方と思ったらよい、エデンの東の方に神は園を設けて、その園に見て美しく、食べて美味い各種の樹々を生ぜしめ、真中には生命の樹と善悪を知る樹を植えた。そしてアダムにこう言った、どの樹の果もお前は「食べに食べて」（自由に食べて）よいが、善悪を知るの樹はだめだ、それを食べた日にお前は「死を死ぬ（必ず死ぬ）ぞ」と。ところが狡猾な蛇、サタンの使者がエバに、善悪を知るの樹を食べて神さまのようになったら好い、と唆かしたので、彼女はその口車に乗ってその実を食べ、アダムにも食べさせた。二人は直ちに善悪を知って、神の言に背いたという意識のもとに、木の下蔭に身を匿した。すると神はアダムに「お前は何処に居る!?」と問いかけた。この神の声には審判と愛憫の両音がひびいている。ところがアダムはエバに責任をなすりつけ、エバは蛇のためだと罪を転化した。これがため二人は楽園から追放された。

以上が楽園喪失神話のあらましだが、寔に人間の現実相を深刻に表わしている。アダム・エバの原罪は、そのまま我々の我執の罪である。万人は救を要する。我々も「汝何処に在りや」と神に呼びかけられたら、直ちに神のみ許に立ち帰ろう。神は無条件に立ち帰りを欣び、迎へて抱き入れ給う。



（創2：17：3：1—8）蛇の誘惑によりエバとアダムは禁断の木の実を食べる（ティツィアーノ）

1月4日

楽園喪失の歌

作詞：1980・11・28
歌調：「苧葉茂れる桜井の」奥山朝恭作曲

1.
地は形なくただ空（むな）し　渕のおもてはただ闇し
神のみ霊は水面を　いとくすしくぞおほいける
神は叫べり「光あれ」！　ここにはじめて光あり

2.
神のみ業のいやはてに　人を創造れり地をもて
神は霊気をその中に　吹き入れたれば生気あり
そのすがたこそみ像に　一如なりけれあなかしこ

3.
空には鳥が飛びかわし　地には獣が逼いまわる
されどアダムは独りにて　彼の相手はなかりけり
神は不憫に思いやり　アダムをじっと見つめけり

4.
神はアダムに手を按きて　深き眠りにおとし入れ
肋骨を一つとり　これを女に創造たり
アダムはエバを見て言へり「わが骨の骨 肉の肉」

5.
生きとし生けるもののうち　エバのすがたに比うもの
ひとつもあらずエバの美は　神の芸術の傑作ぞ！
東西古今に謳はるる　美の極致こそ女体なれ

6.
エデンの園はパラダイス　アダムとエバは思うまま
楽しきくらしをいとなめり　これをねたみて木蔭より
サタンの使者 美しき蛇　エバに近よりささやきぬ

1月4日

楽園喪失の歌

作詞：1980・11・28
歌調：「苛葉茂れる桜井の」奥山朝恭作曲

7.
「善きと悪しきを知るの樹を　汝れら喰(くら)はば開眼し
神の如くに成るべし」と　エバは巧みに騙されて
禁断の果をまづ喰(くら)い　アダムも共に喰いけり
8.
神の言に叛きたる　二人はここに罪を知り
木(こ)の下蔭に身をかくし　神のみ前を恐れたり
ときに声あり「わがアダム 汝いづこに今在るや！」
9.
神のみ言いと深し　さばきとあわれみひびきたり
さあれ二人は楽園を　追い出(だ)されて荒れし地に
汗を流して働きて　なりわいたつる道に就(つ)く
10.
されどみ神は約しけり「汝の裔(すえ)にメシヤ出で
蛇の首領(かしら)にうち勝ちて　救いの道をきりひらき
罪のゆるしを必ずや　与うべければ平安(やすき)かれ！」と

1月5日

アベルの血の聲
（創世紀4：1—15）

汝の兄弟の血の聲地より我に叫べり（創四・一〇）

アダムがエバをからだで知って、カインとアベルを生んだ。カインは農耕者となり、アベルは牧羊者となった。両者とも神に供物を捧げた。ところが神は兄カインとその供物を顧なかったが、アベルとその犠牲的供物なる羔を顧た。それでカインはこれを不満として怒った。神は供物を誇り気に供えたカインの心を見給うたのであろう。アベルは全身的な献供の心で羔の「初生」を供したのであった。

カインは弟アベルを妬み恨んでこれを打ち殺した。神はカインに「お前の弟アベルは何処に居るのか」。カインは「知りません」と偽った。神は更に、「お前は何をしたのか。お前の弟の血が大地から私に叫んだのだ！」彼は地に咀われて耕作がものにならず、流浪人になった。彼は罪の呵責に耐えかねて、神に「私の罪は大きすぎて負うことができません」と告白した。神はこの砕けた心を受けて罪をゆるした。

アダム・エバが神意に反したので神との縦の関係が破れた。その二人から生れたカインとアベルに於て殺人という怖るべき罪が生じて横の関係が破れた。縦横のこの乱れを如何にせん。人類の個人、社会、国際間の乱れや破れは歴史の終末まで続く。アベル以来の血はキリストに到って贖罪の血となり、救済の道が拓かれているのに！

1月6日

エノクの歩みと昇天
（創世紀5：21—24）

エノクは神と共に歩いていたが、居なくなった。神が彼を取り去ったので。（創五・二四）

アベル（ヘーベル）の死を継いでセツ（シェーツ）が生れた。アダムから数えて七代目がこのエノク（ハノーク）で、彼は六十五歳のときメトセラを生み、爾来三百年間神と共に歩いたが、ある日突然居なくなった。彼は霊化されて神に天界へ取り去られたのであった。彼の地上の生涯はふしぎにも三六五年間で、一年の三六五日と同数であるとは。

神と共にという事態が特記されているのは、彼が私意を去って神意と一つになって生活したことを意味する。即天去私の無的実存の在り方であった。相手が神だから、その歩き方は天衣無縫的な自由である。神と共にというのは、すべしすべからずといった道徳的、律法的な消息より次元の高い在り方である。聖意がおのづから体現されているのである。相対界の見ゆるエノクの奥に絶対界の見えないエノクが在って一つに融合しているような相である。それ自体が不死の相である。三百年というが、それは一日千年の質、今日即永遠の質なのである。此岸即彼岸なのである。

「居なくなった」の原語は「アイン」という原語から来ている「エーネンヌー」で無、不在、無人、無一物などの意味を有つ表現で、霊神と共に霊化されて霊界にすがたを消したわけである。霊体を与えられた霊人として去った。預言者エリヤと共にキリストの先駆的存在であった。

1月7日

ノアの大洪水
（創世紀8：1―9：17）

鴿黄昏に彼に還った。視よ、その嘴に摘みたての橄欖の一葉が。（創八・一一）

ノア（ノーアハ）の大洪水の物語は創世記六・五―九・一七に記されてある。人間界に諸悪が跋扈して「人の心の思い慮るところただ悪のみ」という堕落荒廃ぶりを神は視て人を作ったことを痛く悔い、悲しみと怒に堪えないのであった。

ただ「ノアは義人で彼の同輩の中で完全な者で、神と偕に歩いた」（六・九）。それで神はノアに糸杉材（ゴーフェル）で方舟を作ることを命じた。山間で造船とは何ごとかと彼は思ったが神命に惟れ従った。それは正に巨船であった。方舟に乗り込んだのはノアの一族（セム・ハム・ヤペテ三大種族の源）と獣類、爬虫類、昆虫類、鳥類の雌雄であった。

やがて神意動くや大洪水が襲いかかった。さしもの山地も大海原と化した。島と変貌した高山アララットに方舟が止まったのは数ヶ月も経ってのことであった。ノアは鴿を放って陸地を偵察させたが空しく還って来た。七日経って再た放った。すると黄昏に斜陽を浴びて孤影が！　見よ、その嘴に緑葉が！　橄欖（オリーブ）の一葉であった。ノアは洪水が減いた新天地で新たに仕事にかかる希望の徴をこの橄欖の一葉に見た。

神は審判を世界史上で、大暴風雨、大地震、火山の大爆発、大戦乱等を以て降し給う。そのような苦難のどん底で平伏して祈り、霊鳥の一葉を霊視せん哉！

1月8日

バベルの塔
（創世紀11：1—9）

全地は同一の音声と同一の言語であった。（創一一・一）

創世記第十一章一—九節は有名なバベルの塔の物語であるが、アダム・エバから由来している太古の世界では同一言語であったという。ユーフラテス大河の中流河畔のシナル（バビロニヤ）の地のバベル（バビロン）の人達が壮大な櫓型の塔を建て、その塔頂が天にまで達く摩天閣を創作し始めた。神はその高慢な文明意識を嘉しとせず、彼らの言語を乱して相互に意志が通じないようにした。それで建築を放棄して彼らは地の四方に散った。バベルの塔はこの物語から文明の崩壊を意味する塔のこととなった。

この二十世紀末文明はバベルの塔的な人本主義的バビロン文明の極限状況ではないか。人類は地球とその動植物によって生命を保っている。その地球は太陽に絶対依存している。即ち人間は地動説を真理としている自然的存在である。魂をもった霊的存在たる人間は霊界の絶対的存在たる神に拠る存在である。これは神本主義であり、謂はば人動説である。だから霊的コペルニカス的転向を今こそ新たになすべきである。

いざ霊肉渾然として神と太陽の愛の霊と力を以て生活しよう。各民族はその言語を語りながら同一なる神の根源語のひびきを感じ、多即一、一即多の和合の心境となり、他国語を知る楽しみを覚え、民族歌謡を互に歌って楽しもう。ハレルヤ！

1月9日

アブラムの出ハラン
（創世記12：1—9）

1 実存主（エホバ）アブラムに言ひ給ふ「汝（な）が地を出でに出でよ！ 汝が親族を離れ汝が父の家を出でてわが汝に示す地に行け。2 我れ汝を大民族と成さん。汝を祝福し、汝が名（な）を大ならしめん。かくて汝は祝福そのものたらん。（創一二・一、二）

アブラム（神との契約の後アブラハムと改名）（一七・四、五）の故里はユーフラテス下流西域のウール（光）であるが、父テラはこの天体礼拝宗教の地を去って北西はるかなるハランの地に移住した。父の没後家長アブラムにある日神が上掲の如く語りかけた。アブラム（七十五歳）は神命に従って決然と立ち出でた。どの道を何処へとも知らずに。しかし旅路の先導者は神とその声である。導かれてカナン（今のパレスティナ）の地へ向ったのであった。時は紀元前二千年の頃である。アブラムは神に信従しつづけ、祝福の約束にあづかり、信仰の祖たるにふさわしい生活をおくる。アブラムはその信仰の故に万民の祝福の基となった。

さて我々も人生の旅をしているのだが、ある日「出でよ！」との神の声を聞いたら、その現場、現職、現況から立ち出でよう。人生の峠であり、岐路である。このような神の声を聞くには日常生活に於て、よく神に祈り入ることだ。神・キリストの懐（ふところ）に己れを投身して。神の祝福は隣人（ひと）へ祝福を領ち与えざるを得ない質のものである。

1月10日

信義一相
（創世記15：1―7）

アブラムは実存主（エホバ）を信じた、神はこれを彼（かれ）の義となし給うた。（創一五・六）

アブラムがハランを立ち出でたときは既に七十五歳であったが、今や八十歳を越えているのに妻サライとの間に嗣子（よつぎ）が出来ないので悩んでいた。すると或る夜、神がアブラムを幕屋の外に呼び出して、「さあ天を仰いで星を数えて見よ、あれが数えられるかね。」神（かん）は彼に言った、「汝の裔（すえ）もこう成るよ」と。「彼はエホバに信じ入った。そこで神（かれ）はこれを彼に対して義とみなした」（直訳）。

信仰とはこのアブラムのように、自分の経験的判断や常識を乗り越え、神意、神言を全存在を以て信受することである。おのれを否とし、神を然り（アーメン）とする、即ち一と十（マイナス　プラス）だからそこに霊的放電、火花が散るような関係である。

信仰とは神の言または行（ぎょう）に圧倒されて、全存在を以て神の中に信入する内的霊的行為である。だから信仰とは仰ぐのではなく行（ゆ）くのである、信行である。するとその状態は神の中で信交的一如の相となる。かかる信を神は義とし給う。信義一相である。一般に「信仰によって義とされる」信仰義認という神学的表現が観念化しているので私は敢てここに新宗教改革の原点があると申したい。本当の信仰とは神・キリストの神行に圧倒されて信入する信即行、信行一相で、そこにはキリストのみ霊の力が必然臨むのでそこから外的行為がおのづから発するというものである。

1月11日

義人の力
（創世記18：22—33）

神言ひ給ふ「十名居らば我れ滅ぼさじ」（創一八・三二）

塩の湖（死海）の南方低地の町ソドムの道徳的荒廃、風俗紊乱のため神の審判が予感されたのでアブラハムは神エホバに訊ねた、「貴神は義人を悪者と一緒にお滅しになるのですか。若しこの町に五十人の義人がいたら、どうなさいますか。」「我はその五十人のゆえに滅ぼさない」アブラハムは更に四十五人、三十人、二十人と格さげをして遂に「十名居たら」と迫った。神は「十名居たら滅ぼさない」と言って問答は終った。しかしソドムにもゴモラにも十名の義人が居なかったと見えて神の審判が降って硫黄と火で焼き滅ぼされた（一九・二四）。

南王国ユダが滅亡する夕暮時に預言者エレミヤに神は、「もしエルサレムに一人の公義（審判と同語）を行い真理（神然たるもの）を追求する者を発見したら、これを恕す」と言った。神の前に神然たるものを行ずる義人はキリストの他に一人もいない。パウロが「義人なし、一人だになし」と告白したのはこのことで、神意を完璧に行じ聖意を体現したキリストの十字架の死が贖罪の力をもっていた。そしてこの贖罪の絶対恩寵は地の極まで世の末までも現実の力をもっている。問題はこれを全存在を以て体受するか否かにある。体受すれば聖霊が臨んでくる。

1月12日

独子の献供
（創世紀22：1—19）

10 アブラハムは手を伸べ刀を執ってその子を屠ろうとした。11 時にエホバの使者天から彼を呼んで「アブラハムよ、アブラハムよ」と言った。彼は応えて「ハイ！　御覧の通り！。」12 使者は言った「お前の手をその子にかけるな、彼に何もするな。今や私は知った、お前が神を畏れる者だということを。即ちお前の独子をも私の為に惜しまないから。」（創二二・一〇—一二）

砂漠の宗教は犠牲的供物が特色だが、これは動物でなくて人身御供で全く異例である。神が特例を以てアブラハムの信仰を試みようとした。即ち彼の愛する独子をモリアの山で燔祭として献げよ、という神命であった。彼は黙ってこれに従い、独子を伴れて旅にのぼった。これは正に信仰ではなく信行である。自刃を命ぜられるよりも辛い行為である。"No reason why, but to do (go) and die (kill)"（テニソンの詩句）「何故との理由なくただ実行して（往きて）死する（殺す）のみ」であった。この信を嘉して神の使者が燔祭を中止させた。アブラハムが信仰（行）の祖と謂われるのはこの信即行が焦点である。同じ神は自ら独子ナザレのイエスを人類の贖罪のため十字架に懸け給うた。我々にとって信仰（行）は十字架道で何らかの意味で人の為己を与えることである。



（創22：1—12）アブラハムは独子イサクを献供せんとする（レンブラント）

1月13日

ヤコブの石枕
（創世記28：10—22）

畏るべき哉この処。これは神殿に外ならず、またこれは天門である。
（創二八・一七）

イスラエル父祖時代の三代ヤコブの父イサクは、ヤコブに、先住民族カナンの女を娶（めと）るな、上部メソポタミアのパダンアラムへ行って母方の伯父ラバンの娘を娶れと言った。ヤコブはそれでハランの方へと旅に出た。旅路で日が暮れたので路傍の石を枕にして眠った。夢の中で天地にかかる梯（はしだて）を天使が昇り降りするのを見た。すると、我はアブラハムの神イサクの神エホバである。お前が枕している地をお前に与える、天下の諸族はお前の子孫によって福祉にあづかる、我はお前と旅をしてお前を護り我が語ったことを実現するまでお前を離れない、という主旨を告げた。目醒めてヤコブはエホバが此処に在ますを知らなかった、畏るべき哉此の処、此処は神殿だ、天門だと独語した。

ヤコブの石枕の旅寝に於ける啓示は、夢であって夢ではない。霊の現実である。神共に在ます処、そこが動的な神殿であり天門である。人生や世界の歴史は、神と共に旅をすること、宗教は動的な相に於て活きていることの啓示である。後の神殿宗教、教会堂宗教に対して宗教改革を預言している。宗教の活きた相は旅の幕屋にあることが創世記から黙示録まで聖書が事実伝えているところである。而も神・キリストのみ霊が内在し給うとき旅人自らが神殿であり、天門である（エペソ二・二二参照）。



（創28：10―17）ヤコブ石枕の夢で天の梯を天使が昇り降りするのを見る

1月14日

ヤボクの渡し
（創世記32：23〔22〕―33〔32〕）

彼言へり、汝が名は最早ヤコブと称はるべからず、イスラエルなり。そは汝神及び人々と戦ひて勝ちたればなり。（創三二・二九〔二八〕）

ヤコブは神と共に旅をして目的地に着いた。そこで伯父ラバンの娘ラケルに出会ったので嬉しさのあまりラケルに抱きつき接吻をして声を揚げて泣いた。彼は腕力も強い熱血児である。彼はハランの地で四人の女を知り、十二支族の基たる男児を授かった。即ち最愛のラケルはヨセフ、後にベニヤミンを、ラケルの姉レアはルベン、シメオン、レビ、ユダ、イツサカル、ゼブルンを、ラケルの仕女ビルハはダン、ナフタリを、レアの仕女ジルパはガド、アセルを産んだ。彼らと牛や羊や騾馬の群を引きつれてヤコブは帰路を辿り、ヨルダンの東ヤボクの流れの渡しで、彼らを夜陰に対岸に渡して、ヤコブ独り残っていた。すると見知らぬ影が現われて彼と相撲をとることになった。ヤコブは横綱の実力があったと見えて相手をなやまし抜いた。すると相手は霊力を使ってヤコブの髀の枢骨をはずした。夜が明け初めたので相手は去ろうとした。するとヤコブは「汝我を祝せずば去らしめず」と言ってしがみついた。相手は神か人か、単数か複数か。とにかく相手は宣言した。もう汝はヤコブではない、イスラエルが汝の名だ、神と人を相手に戦って勝ったからだ、と。「イスラーエール」は「神と取っ組む者」、神に負けて、神の勝利を賜った者の意である。イスラエルは正に神の戦を戦う使命を荷う民族となった。



（創32：22［23］―［33］）ヤコブはヤボクの渡し場で神の使いと相撲をとり、イスラエルの名を賜る

1月15日

ヨセフの生涯
（創世記37—50）

私を此処に遣わしたのは君たちではない、神である。（創四五・八）

創世記の最後の劇はヨセフの生涯である。第三七章から第五〇章まで。これは誰が読んでも感激しないでは居られない記録である。是非読んで下さい。

ヤコブ（イスラエル）の十二名の男児のうちラケルが産んだ宝の子ヨセフはヤコブに特愛された。長男ルベンの他の兄たちは彼を妬んだ。ヨセフはふしぎな夢を見る子で、而もその夢の啓示を知る霊的素質をもっていた。兄どもに棄てられ穴に投げ入れられた。アブラハムとその侍婢なるエジプト人ハガルの間の子イシマエルの隊商が通りかかったので兄どもは彼を銀二十枚で売った。ヨセフはエジプト王（通称パロ）の侍衛長ポテパルに買われ、やがて近侍にされた。ポテパルの美貌の妻の誘惑を斥けたが偽訴されて投獄。しかし獄中でも神共に在まし、パロの夢の解明で彼は認められ、牢から出される。「神の霊の宿れる此の如き人を見出だし得んや」とはパロの感嘆の言葉であった。七年の大豊作、七年の大凶作の預言もその通り。カナンも飢饉に襲われ、ヤコブがヨセフの兄どもをエジプトへ救を求めて遣わすこと再度。彼らに売り飛ばされたヨセフは彼らを露恨まず、遂に自分がヨセフだと名乗る。兄たちの驚愕！　しかしヨセフは言った。私を此処に遣わしたのは神様で、皆さんを救うためだったと！

1月16日

モーセの生い立ち
（出エジプト2）

彼女その名をモーセ（援出）と名づけて言った、「水の中から私が彼を援き出したからよ。」（出二・一〇）

ヨセフの族を中心としたイスラエル民族の一部はその後三百年ほどエジプト王朝の配下で半奴隷状態の苦役に従事していた。紀元前十三世紀のラメセス二世の頃レビ族の女にある男児が生れた。美事な赤児であった。ヘブル人の勢力が増大してきたので生れる男児は殺される指令がでていた。母親は葦の箱に瀝青を塗ってその中にこの子を入れ、河辺の蘆の茂みの中に浮べ匿した。これをパロの王女が河で躬を洗うとき発見した。が王女は王命に反してこの男児を憐み、育てさせて遂に養子として受け入れた。河辺から援き出したという意味でモーシェー（援出）と名づけた。モーセは宮殿生活でエジプト文化の粋を習得し（行伝七・二二）、指導者たるの内実が備わって来た。彼もヤコブの如く剛健な体力を有っていた。若者どもの喧嘩の二件に関わってエジプトに居る身の危険を感じ、ある日姿を晦まし長駆してシナイ半島の東の対岸ミデアンの地に亡命した。

このミデアンの祭司リウエル（エテロ）の七人の娘たちを助けて羊群に水を飲ませてやった。これが契機となって彼自身牧羊者とされて暮らしていた。その娘たちの一人チッポラと結婚する。男子が生れる。これが生い立ちのあらましだが、特にエジプト王女の特別な憐みによってモーセが殺されなかったことは、全く神の加護と大きな歴史的摂理に因るものであった。

1月17日

モーセの召命と神名
（出エジプト3：1―15）

神モーセに曰ひ給ひけるは「我は在りて在らしむる者なり」（出三・一四）

モーセは羊群を牧して曠野を西へ南へ、そして遂にシナイ半島の神の山ホレブ（シナイ）に至り着いた。ふと見ると茨の灌木が燃えている。更に驚いたことには神の使者がその中に現われた。彼は近づいてみた。するとその霊火の中から声がした「モーセよ、モーセよ、」「ハイ！」更に神の声「此処に近よる勿れ、汝の足よりサンダルを脱ぐべし。汝が立つ処は聖地なれば」。更に神の声、「我は汝が父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」。イスラエルをおのが選民として導く歴史の神の顕現である。この神はエジプトに於けるイスラエル民族の苦しみの号呼を聞いて彼らを助け出さんとてモーセに現われたわけである。そして彼に救出の大命を下した。モーセは自分には出来ないと答えた。神は「我れ汝と共に在り」と実力の裏付けを宣した。モーセは、では参ります。彼ら同胞があなたの御名を問うたら何と答えますか。これに対して神は「我は在りて在らしむる者なり」と称えよと。原語の一般の訳は「我は在りて在る者」とか「我は在りという者なり」である。私が敢て提題の如く訳したのはある夏の夕、陽光が雲間を貫いて指しかかった瞬間「ああ太陽が在るので地球が在らしめられているのだ！」と地球がニュートンの林檎と化った。それでモーセへの神の名の奥義は、神の存在が一切を在らしめている名と悟ったからである。

1月18日

過越（すぎこし）

（出エジプト11：4—12：51）

その血汝らのため汝らが其処（そこ）なる家に居る徴となりて、我れその血を見るとき汝らを過ぎ越さん（出一二・一三）

ヨセフ族中心のイスラエルの子孫は埃及（エジプト）王朝の専政のもとで和泥（どろこね）、煉瓦造り、田畠耕作、灌漑工作、要塞工築等の苦役に従事し、是れに耐え、人口も増大するので、産婆にヘブル産婦の男児を殺せとの指令が下る。併し産婦らは憐んで殺さなかったので、庶民に男の乳児を溺死させよとの下命。それで多くの男児の生命が絶たれた。

一方エホバはモーセを通して霊的な徴を次々と示して埃及を驚異と戦慄に捲き込んだ（出七—十章参照）。時機満ちて神はモーセに出エジプトを命じ給う。その際、無疵の当歳の牡の羔（こひつじ）を選んで夕にこれを屠（ほふ）り、その血を家の門口（かどぐち）の両傍（わき）の柱と鴨居に塗り、肉は火で炙（や）いて酵（たね）なしのパンも焼いて、「腰をひきからげて足に鞋（くつ）を穿（は）き、手に杖を執（と）って」急いで食べて出エジプトの旅に出でよ、というのであった。その間、神の使者が血染めでない家は埃及人の家だからその長子を殺した。これはエホバの復讐であった。イスラエルの家の前を神の使者は過ぎ越して彼らを助けた。

この歴史的救済を伝承して過越節（すぎこしのいわい）（パサハ）がアビブの月（今の三月）の半に行われる。福音の世界では神の羔、キリストの贖罪の血のゆえに、罪びと我らは過越されて救われた！

1月19日

出エジプト（上）
（出エジプト12：29—14：14）

「汝ら懼（おそ）るる勿れ、立ちあがれ、エホバが今日汝らのために為（な）し給ふ救を見よ。……エホバ汝らのために戦ひ給ふ、汝らは静まりて在れ！（出一四・一三、一四）

モーセがイスラエルの民に過越（すぎこし）の恵みを受けさせている一方、エジプトの民の長子（ちょうし）は尽（ことごと）く神の使者の手で滅された。モーセを総指揮者とする選民はナイル河の大三角洲の東方ゴセンの地を出て出エジプトの旅にのぼった。羊牛なども引き伴れた大群衆である。エホバは日中は雲の柱をもって彼らを導き、夜陰には火の柱をもって彼らを照らし、昼夜兼行で前進せしめ給うた。ゴセンの地が空虚になったのを知ったエジプトの王パロは戦車六百輛を先陣として大軍を以てモーセの大群を追跡させた。神の民は蘆の海の西岸ピハヒロテで幕屋を張ったが、追跡軍の迫り来るを見て、モーセに、曠野で死ぬよりエジプト人に仕えている方がよかったのに、と咬（つよ）きわめいた。

これに対してモーセは「懼れるな！　エホバが今日なし給う救を見よ！　……エホバが汝らの為に戦い給う、静かにして居れ！」と。この静かにして、は黙って深く祈って居れの意である。

渡るべき橋も、乗るべき船もない海を前面にしている絶望的窮地に在って、モーセの神信頼は神の本願の霊力に懸けられていた。「我汝と偕に在り」の神の現在に包まれていた。全身が神に抱かれていた。神在まして我無き白熱の現実であった。

1月20日

出エジプト（下）
（出エジプト14：15—15：21）

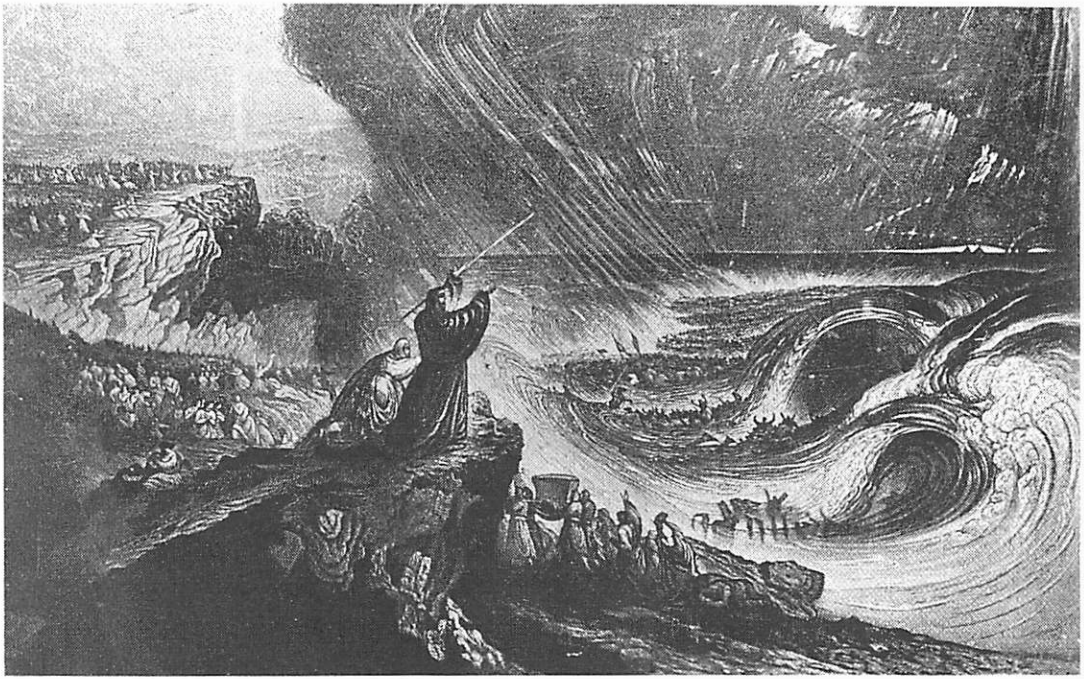
実存主（エホバ）こそはわが力、わが歌なり、彼はわが救となり給へり（出一五・二）

イスラエルの陣営を導いていた雲の柱は、陣営の後に立ってエジプトの陣営の前途に立ちはだかったからエジプト軍は進むに進めなくなり夜を迎えた。その間モーセは神命により手を海の上に伸べると烈しい東風が吹き始め、海の波を左右に分けて海水の壁を形作って海底をあらわした。それで神の民は海底を通って対岸に渉った。勿論この地点は蘆の海の比較的浅いところであったにちがいない。夜明けの頃、また神命によりモーセが海の上に手を伸べると水の壁が風向きの変化と共に崩れてエジプトの軍勢は海水に呑まれて戦車や軍馬諸共潰滅した。

この勝利に感激してモーセとイスラエルの民は声高らかに神を讃美した（出一五・一一八）。

「エホバこそはわが力、わが歌なり、彼はわが救となり給へり。エホバよ神の中に誰が汝に如く者あらんや。汝はその贖ひし民を恩恵をもて導き汝の力をもて彼らを汝の聖所に導き給ふ。」

モーセによる出エジプトはイスラエル民族をその隷属の苦境から解放して自由を与えた歴史的恩恵の事実であった。アブラハムの出ハランは旧き伝統因習からの解放であり進展であった。個人の人生でも、伝統を乗り越え、苦境を突破して、進展し創造してゆくには、神・キリストの力の中に出我し投身することを要する。福音はこの力にある。



（出14；15）モーセによるイスラエルの民の出エジプト：「わが力、わが歌はエホバなり、彼はわが救いとなり給えり」

1月21日

十言（上）

（出20：2—12）

序言　我は汝が神実存主（エホバ）汝をエジプトの地その僕（しもべ）たる家より導き出せし神なり（出二〇・二）

第一言　汝にはわが面の前他神（あだしかみ）在らじ（出二〇・三）

第二言　汝汝（な）がため偶像を彫るまじ（出二〇・四）

第三言　汝が神実存主（エホバ）の名を空しくは言挙（ことあ）げすまじ（出二〇・七）

第四言　汝安息日を憶えてこれを聖とせよ（出二〇・八）

第五言　汝（な）が父を汝が母を敬へ（出二〇・一二）

所謂（いわゆる）「モーセの十戒」であるが、原語では神からモーセへの「十言」である。（申命記四・一三）。十ヶ条の断言命法で、その精神は神とイスラエルの人格的信愛関係を基（もと）とした十言である。人格関係に於ける契約の保証として与えられた。しかもこの十言の裏付けは、モーセをして出エジプトの大業を果たさしめた神の霊的な恩恵の業（わざ）であった。正に「元始（はじめ）に業（わざ）ありき」で言は業の霊的実力から発したものであるから正に「わが言は霊なり生命なり」（ヨハネ六・六三）である。神はイスラエルの民を愛し信じて語っているので、本来道徳的な律法的な誡ではない。モーセの律法の根本精神は隠れた福音である。それを所謂律法にしてしまったところに歴史的な誤りがある。

1月22日

十言（下）
（出20：13—17）

第六言　汝殺人せじ（出二〇・一三）
第七言　汝姦淫せじ（出二〇・一四）
第八言　汝盗まじ（出二〇・一五）
第九言　汝その隣人に偽りの証を立てじ（出二〇・一六）
第十言　汝その隣人の家を貪らじ（出二〇・一七）

モーセへのこの十言はシナイ山が雷鳴雷光に全山鳴動する中でモーセに授けられた神の啓示である（出第十九章）。十言の前半は神との縦の関係、後半は人間の横の関係のもの。

第一言、神とイスラエルとの一対一の人格関係、拝一神教である。第二言、神実存主は霊神、無相の相であるから偶像彫刻はできない。第三言、これを遵ってユダヤ人は経典を読むとき神名を読まないで「主」と読む。第四言、安息日を厳守して仕事も煮炊も運転もすべてやらない。専らシナゴーグで経典中心の礼拝をする。第五言、人間界の縦の関係で父母に対する敬愛関係は宗教と道徳を結ぶ要の如き関係である。日本に於て孝道は見直されねばならない。第六言、人間関係の最大の罪殺人、第七言、姦淫、第八言、盗み、第九言、偽り、第十言、貪り。これらは我れ神の前で犯すことなかるべしとの信愛の宣言である。神の信愛を裏ぎっているのが人間である。罪の罪は神との関係が切れていることである。魂があるとは万人宗教人であること。自覚せられよ。

1月23日

偶像礼拝
（出エジプト32）

実存主エホバモーセに言ひ給ふ「我れこの民を観たり、視よ是は項の強き民なり」（出三二・九）モーセ、エホバに帰りて言ふ「噫、この民は大いなる罪を罪せり。即ち彼らはおのれがため黄金の神を作れり」（出三二・三一）

モーセがシナイ山に登ったまま、なかなか下山して来ないので、モーセの兄アロンに民は、我らを導く神を作ってくれと願う。アロンは民の身につけている金の耳環を採り外させて金の犢を鋳作し、これを神として拝ませ、これに犠牲を献じて、これが我々をエジプトから導きのぼって来た神だと宣言した。

神はこれを見てモーセに、何と「項の強い民だ」と歎いた。モーセは彼らの営に近づくと金の犢の偶像を中心にして乱舞しているありさまを見て怒り、十言の律法の二枚の板を擲って砕いてしまった。この偶像礼拝のため三千人が処罰されて滅びた。モーセは山に立ち帰って神に民の罪のため謝罪して、もしお赦しなくば、神の書の中から自分の名を抹殺して下さいと祈った。モーセはその後、民の背神の罪を負って、約束の地を眼前にしながら、ヨルダンを渡ることができず、ピスガの山頂で死を賜る（申命記四・二一―二四）。厳かな「十言」のゆえに、キリストの贖罪死の前兆を律法のモーセが身証したわけであった。我々現代人は果してこの「金の偶像」を笑い得るか。個人も社会も世界も金の偶像その他諸々の偶像、要するに慾心の偶像の奴隷ではないのか。

1月24日

幕屋（上）

（出エジプト33：7—11）

モーセ幕屋を採りて是を営の外に張り、営の遙かに離れしめ、是れを会合の幕屋と名づけたり。（出三三・七）

父祖アブラハム以来、イスラエルの民は遊牧民族であるから天幕（幕屋）を張って旅をしていた。しかも彼らは神を牧者とする羊群の意識をもっていた（詩篇二三）。

出エジプト以来約束の地カナンへの幾年かの曠野の旅において、特にシナイ山で「十言」（律法）を啓示されてからは神との深い祈りの会合の場としての幕屋が必要となって来たので、モーセは一般の幕屋的な営の外に、離れた然るべき場所に幕屋を張った。そしてそれを「会合（集会）の幕屋」（幕屋会合の）と名づけた。これはやがて神殿的な幕屋構造に展開してゆくが、また他面ではシナゴーグ（ユダヤ教の礼拝の場）の源とも考えられる。それはまたキリスト教に変転したときエクレシヤ（教会、文字通りには〔神に〕召された者の団体、即ち召団）の場となった。大切なことは神との出会いであって、祈りなきところに「会合の幕屋」も「神殿」も「シナゴーグ」も「教会」も「召団」もない。そして幕屋は動的な旅の相であるところに神の歴史の歩みがある。「我はイスラエルの子らをエジプトより導き出せし時より今日に至るまで家（神殿）に住みしことなし。ただ幕屋と奥幕屋の中に歩み居たり」（サムエル後書七・六）。

1月25日

幕屋（下）

（出エジプト25：1—31：17；35—40）P

三 汝贖罪所（カッポレト）を櫃（アーローン）の上に据え、わが汝に与ふる律法（エードゥート）を櫃の中に蔵むべし。三 其処にて我汝に会ひ贖罪所の上より律法の櫃の上なる二箇のケルビームの間より我れイスラエルの子らの為にわが汝に命ぜんとするすべての事を汝に告げん（出二五・二二、二三P資料）

宗教の歴史を見ると東西古今概して動的状況から静的状態を固定化し、単純な形相から複雑な構造へと移行してゆく。幕屋を張りながら霊的な神と一如的な在り方で旅をしていたアブラハムの無相の相的なすがたが本當は一番すばらしい霊的生命的なものであった。

ところがモーセの時代となると民衆の数も増え、神を特に礼拝せんとする会合（集会）の幕屋を作ることになったことは既述の如くである。その幕屋が聖所となり、柱、幕、器具、献物等の様式が後代には規定されるに至った（出二五・一—一五P資料）。律法が櫃に蔵められ、純金の贖罪所がその契約の櫃の上に設けられ、贖罪所の両側にケルーブ（神の臨在を示す天使的相形）を置き、相対して翼を伸べ贖罪所を掩い、ケルビーム（複数形）の顔は贖罪所を見るように構成した。神はそのケルビームの間からモーセに語ってイスラエルの子ら（子々孫々）に伝えるというのである。

しかし右の構造の内的な意義は深い。即ち律法を犯した罪は贖われねばならない。その預言的啓示はキリストの十字架で成就された。贖罪所が律法の櫃の上にあることは、旧約の宗教が新約の宗教によって成就される姿で、幕屋の聖所がこれを啓示していたわけである。

1月26日

シナイ契約
（出エジプト19―24）

五 今や若し確かとわが声を聴き、わが契約を遵らば、諸国民に優りてわが宝たるべし。全地はわが有なればなり。六 汝らは我にとり祭司の国、聖き民たらん。是らの言をイスラエルの子らに告ぐべし。
（出一九・五、六）

イスラエル民族は契約の民（BUNDES VOLK）と謂われる程に、契約の神を存在の主体としている。ノアの洪水のときも、洪水のあとの虹が契約の徴であった（創九・一三）神がアブラムと契約を結んだときアブラハム（「衆多の父」の意）という名を賜うた。契約の徴として、男子は生れて八日目に陽皮を割くという割礼を施されることとなった。

今ここに主題となっているのはシナイ契約で「わが声」とは、神の言、シナイ山でモーセに啓示された十言とこれにつづく「契約の書」（出二〇・二二―二三・三三）とに関っている。契約の保証たる事態は神の言を遵守することで、それが契約を守る内実なのである。神の意志の表現である神の言は成文律として律法であるが、要するに神意を遵奉すること、体現することがイスラエル人の実存であるから、彼らは宗教倫理的な民である。

これに比すると仏教は概して悟りの哲理であるから宗教哲理的である。日本の武士道は主従関係のもので主君の意志を絶対的なものとするからイスラエル的実存と相通ずる。かの有名な「生魂には生魂を、目には目を与える……」報復律もこの契約の書の中にある。

1月27日

血の贖罪力
（レビ記17）

げに肉の生魂（ネフェシュ）は血にこそあれ。我れこれを祭壇の上にて汝らの生魂を贖はんがために汝らに与ふ。そは血こそは生魂のために贖ひをなすものなればなり（レビ一七・一一）

ノアの大洪水のあとで神はノア一族を祝福して「生めよ（ペルー）増殖よ（レブー）満たせよ（ミレウー）大地を」と勧め、且つ警告を発した。即ち肉をその生魂なる血のまま食べるべきでない、生魂なる血を流す者は人であれ動物であれ神はこれを討す、血は血で復讐される、しかもこの生魂に神の相がある、ということを（創九・一―六）。血がこのように重んぜられているから、殺人は最大の罪となる。「生魂には生魂を」であるから、殺人者は死刑となる。現代の刑法は概してゆるいようだ。無辜の少女や少年を誘拐・殺害しても死刑にならない場合が多いようだ。被害者も親もこれでは浮かばれない。「生魂には生魂を」が鉄則ではないか（出二一・二三）。

さて肉と血は現実には渾然一如の構造だ。『ヴェニスの商人』でシャイロックが参ったのはそのためだった。キリストは最後の晩餐で、わが血、わが肉といって葡萄酒とパンを且つ飲ませ且つ喰わせたのは霊的生命（血肉渾然の生命）の徴であった。

血に贖罪の力がある消息の預言はイザヤ書第五十三章の「彼は我らの罪の為に傷つけられ、我らの不義の為に砕かれた」（イザヤ五三・五前半）である。この預言を身証したのが自ら羔となったキリストの十字架の血の贖罪である。

1月28日

聖潔法
（レビ記19）

汝らは聖し、そは我エホバ汝らの神は聖ければなり（レビ一九・二）
汝おのれの如く隣人を愛す、我はエホバなり（レビ一九・一八下）

レビ記は第十七章から第二十六章までが聖潔法の一連であるが、特に第十九章に於て聖潔法の各条項の結びに「我はエホバなり」の一句が腰を据えているのが目立つ。禁令でも命令でもない。むしろ断言的な令法である。その最も基本的な二句をここに掲げたわけである。

「お前たちは聖いのだ、我エホバお前たちの神は聖いからだ」。霊的人格的連繋乃至因果関係をズバリと宣言している。こう宣言されたら文句はない。ああそうだ聖いのだとその本質に気がつかされる。あとは聖なる神に全身を投入する行為あるのみ。これは超道徳の世界である。聖くされざるを得なくなるのである。活ける神殿なる神の前に平伏す。

次は「お前は自分を愛するように隣人を愛しているね、我はエホバだよ」という語調。人間の自己愛は本能的な事実である。その本能愛を隣人に投じて愛せざるを得なくするとは、どういう消息か。神が圧倒的に愛しているから、その愛の力が自分の中にみなぎり溢れて、自己愛が消えて隣人を愛せざるを得なくする。キリストは十字架の贖罪愛でわが自己愛を根底に於て贖い給うた。相対的人間小池は罪びとだ、しかしこの罪びとの中から、キリストのみ霊の力の愛が隣人を愛せざるを得なくする。それを体現しなくては生きていられない絶対恩恵の愛である。

1月29日

ヨベルの年
（レビ記25）

汝ら第五十年を聖め、国土のすべての住民に自由を宣言せよ。是れは汝らにとりヨーベールである。だから汝ら各々その所与に帰り各々その家庭に帰れよ。（レビ二五・一〇）

エホバはシナイでモーセにかの「十言」を啓示したが、その第四言、七日目毎の安息日の遵守と連関して七年目毎の「安息年」を設けて、田畠を休ませることを定めた。そしてその安息年の第七回目の翌年の五十年目をヨベルの年として聖別した。「ヨーベール」とは「牡羊の角」のことで、牡羊の角笛を七月十日、即ちニサンの月から七月目、ティシュリーの月、太陽暦の九月十日の交が新年で、この正月の十日に角笛を全国に吹き鳴らして、国土のすべての民に自由（デロール）を告げ知らせよ、という神命である。

すべてのものは神有である、という大前提をいかなる所有も権限も本質的に犯してはならない、という発想から来ている。不当な私有、貧富の格差の是正される年である。種々の土地、田畠の所有貸借関係、資本と労働の顧用関係の自由解放の年である。要するに神の下における人間としての自由平等の精神の復帰である。ヨベルは「自由の歓呼」を意味する言葉となった。ドイツ語のユーベルが正にそれである。ユビレウム（Jubilæum）は記念祝祭を意味する（特に五十年、百年の）。ともあれ、安息日には行事一切を休み、七年目毎に趣味や研究の自由を各個人に与えることを日本の社会は確かと設定すべきである。

1月30日

一房の葡萄の谷
（民数紀略13：14）

イスラエルの子らは其処から葡萄の房を伐り採って来たので、その処を「一房の葡萄の谷」（ナハル・エシュコール）と称えた（民一三・二四）。

カナンの地、今のイスラエル国のパレスティナに侵入する時が近づいて来た。それでモーセは十二支族即ちルベン、シメオン、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、エフライム、ベニヤミン、ガド、アセル、ダン、ナフタリの各支族の牧伯一人づつを撰んで斥候とした。十二支族が一団となって往く団結力養成のためでもあったろう。

彼らは南部チンの曠野から、北部レホブにまで及ぶ諸方面を探索した。エルサレムから三十余粁南方のヘブロンは一際目立つ都であったが、その南方のとある谷間で見事な葡萄の一房を枝ごと伐りとってこれを杠に懸けて二人相前後して担いで帰って来た。イスラエルの子らはその処をナハル・エシコル（葡萄房の谷）と称っている。葡萄はカナンの極めて重要な樹、その汁は血の徴である。これを採って来たことはカナン征服の前兆と見て可い。

ユダ族の斥候カレブとエフライム族のホセア（改名してヨシュア）の二人は勝利を信じたが、他の者たちはカナン先住諸民族を怖れた。モーセは勿論神の導きと力を信じて突き進んだ。この信、不信の劇的な問答とその結末が第十四章にある。神の外何ものも懼れない者は勝つ！　モーセと、彼の後を継いだヨシュアは神を力として生涯を貫いた信仰の勇者であった。



（民13：1—29）カナンの地への斥候二人、葡萄の房を担って帰る：エシコルの谷。

1月31日

逃れの町

（民数紀略35：9—33）
（ヨシュア記20：1—9）

汝らのために町を撰んで逃れの町となし、誤って人を殺した者を其処に逃れしめよ。（民三五・一一）

過失致死罪の人が、血の報復を逃れるために設けられた法の一つである。故殺人（意志的な殺人犯人）は当然、生魂には生魂で死刑であるが、過失で結果が殺人となった過失致死罪の人は特定の町に逃れて身を保つことのできる赦しの法である。（申一九参照）

それには六つの町がイスラエルの子ら（「子ら」とは人々、市民などの意）と他国人及びその中の寄寓者にとって逃れの場と決められた。逃れの町はどれも裁判官たるレビ人の町である。逃亡者がそれらのどの町にも一日路で逃れ入れる距離に配備されていた。

キリスト教の世界では、身の危険を避ける場合、教会堂の中に修道院の中に身を隠すことができる。法律上の処置はともかく、宗教的な見地からは、逃れの場として、罪のゆるしという恵みの角度から、逃れの町、教会堂があるわけである。

純粋に宗教的な信仰の生活に於ては詩篇四六・一の有名な句が逃れの場である。「神はわれらの避け所また力なり、なやめるときの最と近き助けなり」キリスト者に於ては、キリストが避け所である。十字架の贖罪を以て具体的にいかなる危険に対しても、犯罪に対してもキリストは十字架を以て無条件に包み込み、抱き入れて下さる。いかなる人も十字架のキリストにゆるされ包まれている者を審くことは出来ない。全き逃れの懐である。

2月1日

モーセの祈り
（申命記3：23―28）

「エホバ汝らの故に私を怒り私に聴き給はない。……」（申三・二六）

モーセは紀前一二八〇年頃出エジプト以来、幕屋を張りながら、エホバの導きのもとに曠野の旅をつづけて来た。民らは乏しき食糧のためエジプトの鍋を想い出しては何でこんな旅をしなければならないのかと咳いたり、偶像を作って宗教的姦淫の行為に陥ったりした。モーセはホレブの召命以来、神の僕として聖意に従い、み力に与って来た。「天にも地にもいづれの神か能く汝の如き業をなし、汝の如き力を有たんや」（申三・二四）と平伏し讃美している。そして彼は神の御力を体現し身証して来たのである。

ヨルダン川の塩の湖に注ぐ地帯の東方モアブのネボ山地に辿り着いたモーセは、「願わくは我をして渉り往かしめヨルダンの彼岸なる美き地美き山にてレバノン山を望ましめ給え」（三・二五）と祈ったが、民らの不信の罪を神は怒ってこの願を聴き給わないので、モーセはピスガの山頂で贖罪的な死を死なねばならなかった。このことはしかしモーセは覚悟していた（出三二・三〇―三五、申四・二一―二四参照）彼は神の言の如くネバ山の西方ピスガの山嶺で西、北、南、東を望み、イスラエルの将来を予見して魂は天に昇った。

2月2日　妬む神（エール・カンナー）

（申命記4：15—31）

汝の神実存主（エホバ）は喰い尽くす火、妬む神である。（申四・二四）

申命記四・三一を読むと、神をなぜ「妬む神」などというかがわかる。ホレブでモーセに火の中から呼びかけた神は、霊神であり、イスラエルの苦しみを深く顧み給う歴史の神であった。またシナイ山で十言を啓示し給うた神は、「我は汝の神、汝はわが民」との契約を結び給うた人格神であった。人格関係は一対一である。神と人との人格関係は拝一神の絶対性をもったものである。であるから日月星辰を拝んだら、それは拝一神の信仰的人格関係を乱すことになる（申四・一九）。また自ら造った偶像を拝むに於ては霊神を侮る宗教的な罪である（四・一六—一八）。他の民族の他神を拝んだら、それは宗教的姦淫となる。出エジプトの旅で偶像礼拝をやったので、神の怒りを招き、モーセはその罪を負わされてヨルダンを渡らずに死なねばならなかった（四・二二）。要するに他神や偶像や被造物や悪霊にイスラエルの民が心を動かし不信を犯すと神は妬むほどにイスラエルの民を愛惜する。

神の熱愛は義の故に喰い尽す火であるので、預言者たちが「神に立ち帰れ！」と叫んだがイスラエル民族国家はその不信のためにやがて神の審きを受けて滅ぼされたが、それでも神は愛の故にこれを贖う道を拓いた。神の慈悲、契約を棄てない信愛がこの「妬む神」の深い心であった（四・三一）。

2月3日「聴けイスラエルよ！」(シェマハ・イスラエール！)

(申命記6：4—9)

四 聴けイスラエルよ！ 実存主(エホバ)我らの神は唯一の実存主(エホバ)なり。
五 されば汝はエホバ汝の神を愛するなり、全心全魂全力をもて！
六 されば今日我が汝に命ずるこれらの言を汝の心に在らしめよ。
七 汝の子らに繰り返し語り、而(しか)も家に坐する時も道を往く時も寝る時も起きる時もこれを語れ。
八 汝また之を手に結びて徴とし、汝の眼の間に結びつけ標識(おぼえ)となし
九 また汝の家の柱と汝の門に書き記せ。(申六・四—九)

出エジプト記第二十章と申命記第五章にモーセの「十言」が記されてあるが、これに加えて諸々の誡命が告げられてあるのをよく憶えよ、よく遵れよとの諭である。イスラエル民族は幼年時代から、律法を暗誦させられている。この「聴けイスラエルよ！」の数節はその序言である。イスラエルにとって唯一の神エホバは実力を以て出エジプトをなさしめた力ある恩恵の神、救贖の神であるから、全心全魂全力を以て神を愛せざるを得ないのである。「神を愛すべし」という従来の訳に対して「神を愛するなり」と断言的に表現するのが本当だと思う。神と人との信愛関係の世界は、汝と我との現在的断言的現実である。それが霊的現実であるならば、何も小箱に聖句の紙片を入れて手や額に結びつけなくてよいはずである。

2月4日

神の撰び
（申命記7：6—11）

実存主（エホバ）が汝らを愛し汝らを撰（えら）び給うたのは、
汝らが萬（よろず）の民よりも僅少（わずか）きものだからである。（申七・七）

実存し給う主なる神は歴史的にアブラハム、イサク、ヤコブ（イスラエル）、ヨセフ、モーセに自らを啓示しつつ愛し顧みて来た。ここに用いられている「愛する」（ハーシャック）という語は「に愛着する」という粘着性の強い内容をもった語である。なぜそんなに愛し撰び給うたかといえば万民の中で最も「僅少き民」であるからだという。それればかりでない「項の強き民」（申九・一三）頑固な厄介者だからでもあったからである。僅少で頑固な民を鍛えるのが撰びの理由であった。それには神の遠大な目的があった。人類の救済である。まづイスラエル民族を神属、神族的な「聖き民」（申七・六）「宝の民」（申七・六）とすべく、エジプトでの苦難から救贖した（申七・八）。これは父祖たちへの約束に基いた（申七・八）

モーセへの聖なる「十言」を基とした律法を示し、これを遵守すべきことを命じた（申七・一一）神はイスラエルに対して「信実の神」であるから審判と恩恵、義と愛を判然と実証し給うという（申七・九、一〇）。さてこの頑固な民は果して歴史的にこの神の撰びと愛に直線的に応え得たか。それは惨憺たるものであった。それは実は人類のすがたを代表するものであった。神の独子の出現を絶対に必要とする所以はそこにあった。

2月5日

神の霊言と大自然の食物
（申命記8：1—5）

**人はパンだけで生きるのではない。
人はエホバの口から発するすべてのもので生きるのである**（申八・三）

——イエスはこの聖句を以て悪魔に応え給うた（マタイ四・四参照）——

出エジプト以来、所謂曠野四十年の旅路に於けるイスラエル民族の苦難はその食生活にあったに相違ない。その缺乏を補う不思議な天来の糧はマナ（マーン）であった。これは莞の実の如きもので色はブドラクの色に似て、味は蜜の甘さをもった油菓子といったところである（出一六・三一—三五、民一一・四—九を参照）。シナイ半島の西部の産で西風に乗って天から降って来た。五、六月の交が最も豊かであった。彼らは躍き喜んで「何だ」（マンナー）と叫んだのがその果の名となったという。肉体にとって食物は不可欠であるから、キリストの「主の祈り」にも「我らの日用の糧を今日も与え給え」という句がある（マタイ六・一一）。しかし魂の糧を忘れたら人間は単なる動物になってしまう。魂の糧は「神の口から発するもの」にある。直訳すると「エホバの口の噴出物のすべて」である。それは神の霊気であり霊言である。普通の人間の言は意味の内容の伝達であるが、神の人イエスは「わが言は霊なり生命なり」（ヨハネ六・六三）と言ったように、神の口からの霊気、霊言は我らを活かす（ヨブ三三・四参照）。万物を創造する（詩篇三三・六参照）。大自然とその糧も実は神の霊気、霊言に由った。霊肉渾然たる人間は正に神の霊気、霊言と大自然の供する糧によって健全なる生命を生き、存在そのものが神の栄光体であるのだ。

2月6日

心の割礼
（申命記30：1—20）

汝の神エホバ汝の心と汝の子らの心に割礼を施し、汝をして全心全魂を以て汝の神エホバを愛せしめ、斯くして汝に生命を得させ給ふ。（申三〇・六）

この申命記第三十章は重厚な内容をもつ注目すべき章である。「神に立ち帰る」ということが、捕囚から故国の土地への帰還の預言と神へ民の心魂が立ち帰るという両面が語られている（三〇・三、五と三〇・二）。しかもそれは神の恵みの力による。その恵みの力は内的には「心の割礼を施す」というのである。割礼が何であるかは創一七・九—一四、出一二・四〇—四九、出四・二五レビ一二・三等を参照のこと。要するに契約の徴として男子の陽皮を切る祭儀である。

心の割礼は心を裂くことになる。「心を裂きてエホバに帰れ」と預言者ヨエルも叫んでいる（ヨエル二・一三）。自己や他人や偶像に捕われている心を裂いて神に帰る。それは「全心全魂を以て」全存在を以て神に回帰することである。神の義に打たれ、神の愛に圧倒されると、この回帰ができる。そうすると全心全魂全存在で神を愛し、律法を遵るようになる。それが「生命と福祉」の現実を齎す（三〇・一五）。「心の割礼」を受けず、神に回帰せず、神を愛せず、律法を遵らず、となればそれは必然「死と災禍」に陥る（三〇・一五）。神に回帰するか否か、それは「今日」決せよ、と迫られている。信仰は正に「今」「此処に」の現実問題である。信仰は信行であり、信交である。信即行一如である。

2月7日

モーセの歌
（申命記32：1—43）

一〇下 実存主（エホバ）はこれを確（し）かと囲み、深く顧み、おのが瞳（ひとみ）の如くこれを護り給うた。
一一 鷲がその巣を看守り、その雛の上を飛びめぐり、
その羽を拡げてこれを攫（とら）へ、その翼に載せてこれを荷（にな）いあげる如く！（申三二・一〇下、一一）

申命記第三十二章一—四三節は、モーセにその名が帰せられている作者不明の名歌。出エジプト後の曠野の旅の恵みと約束の地に於ける恩沢にも拘らず、神に叛（そむ）いて他神、偶像を拝した民の不信不義への審判も歌われている。この詩はイスラエルの相（すがた）であると共に個人及び人類の在り方への警告の預言である。上掲の句の他に重要な句を訳出しておく。

一 天よ、耳傾けよ、我れ語らんとす。
地よ聴くべし、我が口の言葉を。
二 わが教へ雨の如く降り
わが言葉霧の如く零（こぼ）れん、
若草の上にかかる霧雨（きりさめ）の如く、
青草の上に濺（むらさめ）ぐ白雨の如し。
六 汝ら実存主（エホバ）に斯く報いんとするや、
愚かにして智慧なき民よ！
彼こそは汝の父にして汝を贖ひ、
彼こそは汝を作り汝を礎え給ひしに非ずや！
一八 汝を生みし巌を汝は疎んじ、
汝を転（まろ）び出だせし神を汝忘れたり。
三九 汝ら今ぞ見よ、我れ、我れこそは彼なり、
わが傍らに神は無し！
我れは殺し、また活かす、撃ちまた我は癒す、
わが手より奪ひ去り得る者有らず。

2月7日　（詩）わが人生

作詞1984.1.10

歌調一高寮歌「暁寄する新潮の」

――1904年のこの日に生を享けたので、自己紹介的告白をさせていただく――

1.

明治は三十七の年　日露開戦その前夜
如月の星閃めければ　彌生が岡に産声(うぶごえ)を
あげて生(あ)れにし吾れなるか

2.

幼き時に父は去り　母は五人の遺児抱(かか)え
お茶の水なる女子校に　教育の道励みつつ
われらをよくぞ育てたる

3.

我は弱虫泣虫の　寔(まこと)「づくなき」児なりけり
さはれ真善美に対し　感激性の浅からぬ
夢ゆたかなる少年よ

4.

同心町の二階屋に　舎兄政美と暮しける
附中時代の生きざまが　髣髴として目交(まなかい)に
現前するかな感無量！

5.

長兄北京に仆れたり　母は船路に失明す
次兄の忍苦いかばかり　わが青春の暴風雨(あらし)なり
天地晦冥どん底よ！

6.

水戸高校の時にして　大手町なる内村の
聖書の講義胸をうち　光を浴びて信ぜしは
二十歳(はたち)に満たぬ時なりし

2月7日

（詩）わが人生

作詞1984.1.10

7.

病の波に襲はれて　惨憺たりし四年間
聖書とルッター、ヒルティーを　灯火(ともしび)として辿りける
孤独(ひとり)旅路を忘れめや

8.

東大独文学窓は　古典の粋たるゲーテ、シラー、
ダンテとミルトン、欧米の　詩歌の世界に憧憬(あこがれ)て
日に夜を継いで読み耽る

9.

藤井の門下五星霜　主の日遵りて貫きぬ
噫、千九百三十年　内村、藤井仆れたり
み空に點(とも)る巨星(ほし)二つ

10.

阿蘇の深(み)山の瀧見荘　聖霊降臨、新生よ！
使徒らの次元築はしや　十字架・聖霊(みたま)の現実を
生涯(いのち)を賭けて生き貫(ぬ)かん

11.

大道無門キリストの　無者たる実存賜りて
左顧右眄なくわれは往く　万人(すべて)を抱くキリストの
無尽の愛ぞ力なる

12.

八十路の峠を迎へたり　無尽の涙を霊泉(いづみ)とし
漲る血潮を霊火とし　吹き捲く聖霊(みたま)を台風(あらし)とし
一大詩篇は成りゆかん！

2月7日

（詩）使徒らの昔を慕いて

作調1979.12.9
歌詞ｓ.359「夕陽はかくれて」

1.
使徒らの昔を　慕いて我は
聖書に読み入り　祈りてあれば
《おりかえし》
み霊の我が主は　わが身を抱き
十字架に耐え得る　力を賜う

2.
聖書の現実は　次元の高き
み霊のたばしる　生命の世界

3.
主の日を遵りて　戦いあれば
聖霊も呻きて　執り成し給う

4.
聖旨のままにまに　わが業をなし
主に在る生きざま　貫き往かん

5.
わが世の旅路も　日暮を迎え
夕の鐘の音　暮韻嫋々

6.
終末の峠を　踏み越え進み
星のしるべにて　嶮路を往かん

7.
常世の晨の　明くるときには
天使天降りて　昇らせ給え！

2月8日

我汝と共に
（ヨシュア記1：1—9）

我れモーセと共に在りし如く汝と共に在らん。
我れ汝を離れず汝を棄てじ、雄々しかれ、勇敢なれ！
（ヨシュア一・五下、六上）

「エホバの僕」モーセは、ピスガの山巓から昇天する前に、忠実なる後継者ヨシュア（エホバは救なりの意、新約の「イエス」の語源）に按手をして神霊のバプテスマを施した。モーセは預言者（広義）の最大なる者であった（申三四・一〇）。エジプトの王の面前での不思議な業、出エジプトの大業、シナイ山上の「十言」の下賜、曠野の旅を「エホバの幕屋」と共に貫いたこと、等の実存を見れば、モーセが大預言者たることはまちがいない。

またエフライム支族のヨシュアはユダ支族のカルブと共に曠野の旅でモーセに忠信を貫いた。一般の民の如く咳いたり妬んだり諍ったりしなかった（民一四・六、三〇、三八）。カナン浸入の期を前にして斥候をした群にこの二人はいた。エシコル（一房の葡萄）の谷を渉るとき、杠に葡萄の房を通して二人で担いだことであろう（民一三・二三、二四、一四・三〇、三八）。モーセに按手され、神から「我れ汝と共に……」の右掲の聖言をいただいたヨシュアは雄々しからざるを得ず、勇敢ならざるを得なかった。

私事で恐縮だが、二十七歳を一期として北京で仆れた舎兄政美の死は私に決定的なものとなった。爾来この天童の生涯は福音のための弔合戦である。キリスト直結の使徒的信仰（行）を賜ったので、使命のかぎり、十字架・聖霊の絶対恩寵の現実を身証し貫かんのみである。

2月9日

エリコ城下町の遊女ラハブ

（ヨシュア記2：1—24；6：15—24）

妾らこれを聞くと心は溶け、人霊は消えちやいました！それは、エホバあなた方の神様、あのお方は天上天下の神様だからです。（ヨシュア二・一一）

ヨシュアはエリコ攻略に先だち二人の間者を遣わした。二人は遊女ラハブの家に忍び込んだ。これを探知してエリコ王の使者がやって来た。ラハブは家には居ないから急いで追跡しなさいと答えた。斥候の二人は屋上の麻束の中に囲われていたのであった。ラハブは既に行商人たちから、出エジプト以来のエホバ神のみ業、み力、モーセのことなど聞き及んで驚嘆驚倒していたのである。右掲のラハブの言はその告白である。彼女はエホバがこの「約束の地」をイスラエル民族のものにすることを信じていたので、二人を囲まったのである。時を見はからって二人を縄で窓から縋おろして遁れさせた。生命には生命で、二人との間にラハブ一門の者たちを救ってもらう約束はしてあった。二人は無事帰還して詳しくヨシュアに報告した。

ヨシュアはやがてヨルダンを渡り、かの有名なエリコ城壁七巡り、ヨベルの角笛の吹き鳴らし、地響きのする脚波と関の声で城壁の崩壊というエリコ攻略は成った（ヨシュア第六章）。

遊女（ヘブル語「ゾーナー」ギリシヤ語「ポルネー」）ラーハーブ（「広大な」の意）はやがてサルモンと結婚。これがイエスの祖先だからラハブは選ばれた女であった。問題はしかし生れがどうの職柄がどうのではない。神信交の人に化したかどうかだけである。「遊女は汝らより先に天国だ」とキリストは言い給うた。



（ヨシ２：1—18）エリコの遊女ラハブはヨシュアの斥候二人を縄で窓から縋りおろし、遁れしめて救った

2月10日

ヨルダンを渉る
（ヨシュア記３：４）

エホバの契約の櫃を舁いだ祭司等ヨルダンの中の乾いた地に堅く立つて居てイスラエル人みな乾いた地を渉りゆき、遂に民悉くヨルダンを渉りつくした（ヨシュア三・一七）。

ヨルダンと塩の湖を越えて西の方カナンの地を諦念と希望の念いを以てうち眺め、神の約束を信じてモーセはヨシュアに按手をなし、一切を彼に託してその魂は天に昇った。ヨシュアはモーセを通して神のみ霊の力を受け、勇み立ってヨルダンに向った。神エホバの「契約の櫃」（アローン・ベリート）を祭司等に舁がせて先頭に往かしめた。彼らの足の蹠がヨルダンの水の中に踏みとどまるとヨルダンの流れが止まった。そこでイスラエルの民は乾いた川底を徒ち渉り尽した（三・一七）。十二支族から一人づつ選ばれた十二名の者が、祭司たちの足もとから石十二個を拾って各々肩に負って記念の十二石とした。

出エジプトの際に蘆の海の水が二つに分れてイスラエルの民はそこを渉った。此度もヨルダンの流れが止って民が渉った。「出エジプト」が歴史的な救贖であったように、「ヨルダンを渉る」は歴史的な聖地入りの第一歩である。それはシーザーがルビコンを渡った時の決戦への進撃に優る内容のものであった。今私は「聖地入り」と言った。ヨシュアは約束の地を神の民のものにするまで幾つも戦を勝ちとらねばならなかった。その後この約束の地は多くの悲劇的歴史を経て、千余年後に預言者たちの悲願に応えて聖国を地上に体現した人が現はれた。新約のヨシュア（イエス）であった。

2月11日

実存主か他神か
（ヨシュア24；1—28）

「汝ら若し実存主に仕ふることを悪しとせば、汝らの先祖が河の彼岸にて仕へし神々にもあれ、または汝らが今居る地のアモリ人の神々にもあれ、汝らの仕ふべき者を今日選べ。但だ我とわが家とは実存主に仕ふ。」（ヨシュア二四・一五）

モーセに従って出エジプトをしたイスラエルの民はヤコブ・ラケルの子ヨセフ支族を中心としたもので、彼らはヨシュアを主領としてカナン進入をなし征服を遂げた。ところがヤコブ・レアの六支族ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンを中心としたものはカナンを中心とした諸地方にも居たようだが、サマリア地方のシケムを聖所としていたのであろう。彼らの神はヤコブの賜ったイスラエール（神戦い給う、統治し給う等の意）の名の起因たるエール（力ある者の意）神であった。ヨシュアはカナンを征服し、全十二支族の統合、連合の期が熟したので、先づ信仰上の決断を問う必要を感じて、上掲の如く忌憚ない心根を尋ねたのである。これに対して諸族は挙って「我らはエホバを棄て他神に仕ふることは断じてせじ」と答へた（二四・一六）。

かくて十二支族の「宗教聯合」（Amphiktyionie）が成り、シケムが依然として聖所となった。これによって見るも他の諸支族がモーセに由来するヤハウェ神とヤコブに由来するエール神とは呼名は異っても神そのものは全く同一であることがわかる。我々に於ては実存主は正に主イエス、贖主キリストである。而も彼は全世界的、宇宙的実存、聖霊として遍在、内在し給う。

2月12日

ギデオン（上）：平安の神「エホバ（ヤハウエ）シャーローム！」

（士師記6：1―24）

エホバ彼に言ひ給ふ「平安汝に在れ！　怖るな、汝死せず」、かくてギデオン彼処にエホバに祭壇を築き、之をエホバ・シャーローム（平安の神）（平安「在らしめ給う者」）と名づけたり。（士六・二三、二四）

ヨシュアによって約束の地カナンは一応イスラエル民族の勢力下に入ったが政治的統一の段階ではない。彼の歿後、士師時代（一二〇〇年頃―一〇二〇年）が続く。士師とは審判者等のこと。彼らは「エホバの霊これに臨む」ことによって神に撰ばれたカリスマ（霊賜）的、指導者で智恵と力のある人物で非成文律的な民事審判をした。彼らの中の著しい二人を挙げればギデオンとサムソンである。

イスラエル民族は信仰の民ではあるが脚どりがどうも蹉跌たるもので「エホバの前に悪をなした」。そのため東方の遊牧民ミデアン人によって神罰を受けた（六・一、二）。しかし目がさめて「神に祈り呼ばはると神は応へて下った」（六・七）。人間はこういったものだ。大切な一事は神に立ち帰ること！

かくて神に撰ばれた士師がマナセ族のギデオンであった。神の使者が現はれて「剛気な勇士よ、エホバ汝と共に在ます」と確言する（六・一二）。だからミデアン人を征服せよと激励される。彼は自分はそれに価しないという（六・一五）。神様が力を下さると言われるなら証拠を見せて下さいと迫る。ギデオンは神の霊顕に接したので畏れた。そこで神は右掲の如く言った。それで彼は平安を与へ給う神をからだで知った。神と平安関係に入ると限りなきみ力に与かる！　平安！　シャーローム！　はイスラエル人の日常の挨拶の言で、その歴史的な由来はこのギデオンへの神の言である。



（士6：16—24）ギデオンの召命：エホバの天使現れて不思議な火の徴を見せる。エホバの声：心安かれ怖るな汝は死なじ。ギデオン祭壇を築きエホバ・シャローム（平安の神）と名づけた

2月13日

ギデオン（下）
精鋭三百
（士師記 6 ；33—8 ；35）

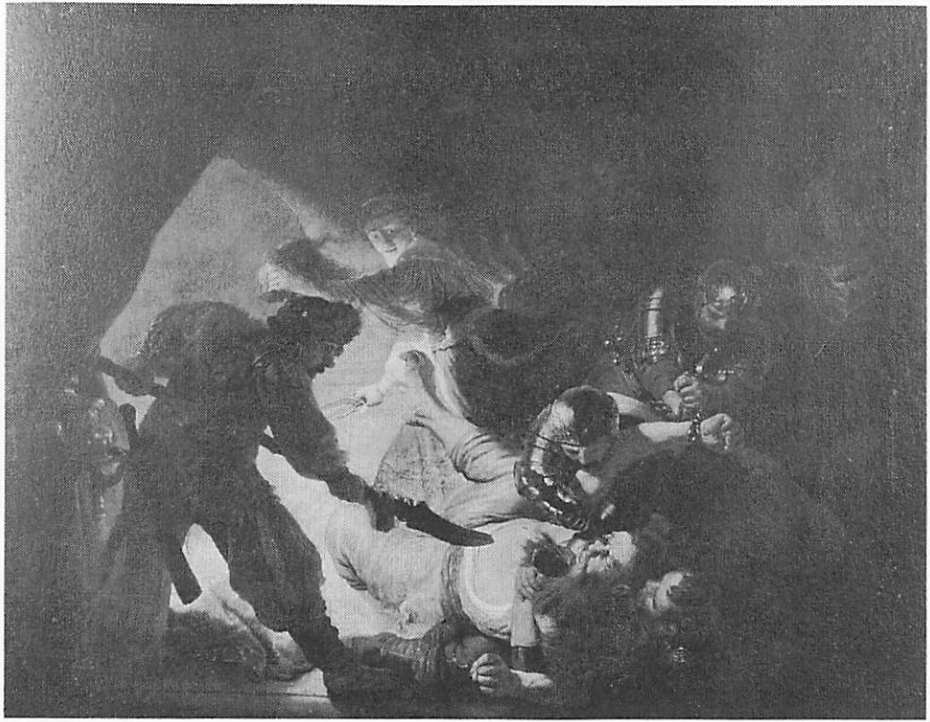
三隊の兵隊ども角笛を吹き、壺をうち砕き、弓手に燈火を執り馬手に角笛を持ってこれを吹き、「エホバの剣、ギデオンの剣なるぞ！」と叫んだ。（士七・二〇）

エホバの力ある平安を賜ったギデオンは油然たる神気を以て偶像教と戦う。即ち領内にある男神バアルの祭壇をこぼち、その傍らの女神アシラの像を斫り倒した。

ギデオンは東方のミデアン主力軍と戦うべくエズレルの谷の東南東ハロデの泉のほとりに陣を布いた。その総勢三万余名。エホバは彼に精鋭のみにすべき旨を告げ給う。即ち凡そ戦意なき者を故里に帰らしめたが尚一万名が残った。エホバは彼らに谷川の水を飲ませ、犬の如く呑む者は不可なりと宣げ給うた。手に水を掬して飲んだ者は僅か三百名であった。ギデオンはこの三百の精鋭と共に戦うこととなった。百名に一人の厳選となった。

古来、戦は奇襲に如かずで、三百名を三隊に分け、夜襲する戦法となった。普通は一隊に角笛一個であるが、各人が角笛と燈火をかくした壺を持ち、夜半敵の寝込みに乗じて、「エホバの剣、ギデオンの剣なるぞ！」と関の声諸共に各兵が角笛を高らかに吹き鳴らし、壺を打ち砕き燈火を掲げて躍り入った。敵は眼が眩み、同士撃ちの大混乱となり、大敗北を喫した。これこそ空手戦法の勝利である。

さて我々福音戦の角笛は何か、神言漲る讃美歌の高唱ではないか！　燈火は何か、胸に点る聖霊の火ではないか！　砕かれた壺は何か、献身の我そのものではないか。かくて主の精鋭たらん。



（士16：18—21）デリラに頭髪を切り落とされて力失せたサムソン、捕らえられて両眼をえぐり取られる（レンブラント）

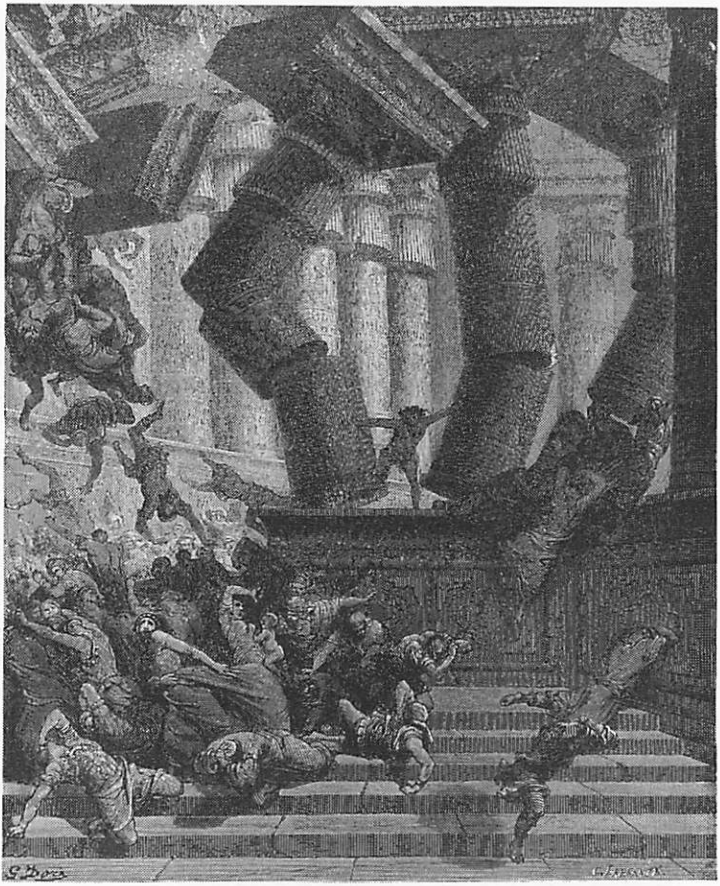
2月14日

サムソン（上）
ナザレ人サムソン
（士師記13―15）

「視よ、汝は孕んで子を産む、その頭には剃刀を当てるな、その児は胎を出てから神のナザレ人（献身者）なるぞ」（士一三・五）

イスラエルの民は例の如く「エホバの前に悪を行った」のでペリシテ人の掌中に陥った。ダンの族のマノアの妻にエホバの使者が現われて、お前は石婦だが今に孕んで子が産れるから、酒をつつしみなさい云々と右掲の如く告げた（士一三・五、七）。この逞しい天使が再現したとき、マノアはその名を訊ねた。すると「私は不思議という名だ」と答えた（一三・一八）。彼はマノアとその妻の備えた祭壇の火を通って天に昇ってしまった。何か天的な使命のある人物の生誕のときは、よく母親に不思議な異象や天来の告示が臨むものである。このサムソンもそのようにして出現した児で、「死に至るまで」ナザレ人であると告知されたのである（一三・七）。原語は「ナーズィール」で、神の使命により専ら神に「献身的に仕える者」の意である。

剛力のサムソンはペリシテの女との結婚問題を契機として相次ぐ事件に於て「エホバの霊」のみ力によってものすごい怪力を揮う。即ち若獅子を小山羊の裂く如く裂いてしまったり（一四・五―九）、その獅子の屍の蜂蜜の一件から三十人を殺したり（一四・一〇―一九）、山犬三百を捉えて二匹づつ尾を結び火炬を点じて麦畠を焼き払ったり（一五・一―八）、驢馬の腮骨で一千人のペリシテ人を撃ち殺したりした（一五・一四―一九）。サムソンは原語ではシムショーン（太陽児）で、エホバの光を浴びていた。



（士16：25—30）ペリシテ人の神ダゴンの祭りに際して大殿堂の柱を倒し、身を以て復讐を遂げたサムソン（ドレー）

2月15日

サムソン（下）
盲者サムソン
（士師記16）

噫主ヤハウェーよ！　我を覚え給へ。噫神よ、此度こそは我を強めて、わが両眼の一つの為にもペリシテ人に仇を返さしめ給へ！（士一六・二八）

サムソンはペリシテのペンタポリス（五市）の一つガザに出かけて、そこの遊女と交ったが彼を捕へんとした者に怪力を示して唖然たらしめた。その後ペリシテの艶麗の女デリラと交った。彼を捕へんとした敵の三度びの縄縛も彼は難なく断ち切った。群伯の金に動いたデリラは彼の怪力の由来を遂に彼から聴き知り、彼を酔わせ、膝枕で眠らせ、彼の頭髪七綟を斬り落させた。力失せたサムソンは捕はれて残酷にも両眼を摘抉され、脚は銅の鏈に繋がれて囚獄で挽磨の労に服せしめられた。頭髪は再生！

ペリシテの群伯はその偶像神ダゴンの祭を催し、大殿堂の演技場でサムソンに演技をさせて侮辱の喝采を浴せていた。サムソンは大円柱二基に身を寄せるや満身の神の力で両柱をひしめき倒した。大桟敷の三千余名の観客は時ならぬ霊震のため墜落死や圧死で失せた。その最後の瞬間に絶叫したのが右掲の祈りであった。彼は実に死を以て復讐を果した。盲者サムソンは正に神の猛者としてナザレ人の本質を証した。噫惰熱の人サムソンよ！

「総ては最善、縦ひ時に疑ふとも、至高の知慧の測り知れぬ配剤はいや果てにはつねに最善なりき」（私訳）失明の大詩人ミルトンの劇詩『サムソン闘技者』のこの句はサムソンと合体した詩人自身の血と涙を突破した告白である。

2月16日

モアブの女ルツ
（ルツ記1－4）

ルツは言った「私は貴方が往かれる処へ往きます、貴方が宿られる処に宿ります。貴方の民は私の民、あなたの神様は私の神様でございます」（ルツ一・一六）

士師サムソンの治下、紀元前一一〇〇年前後にユダの高原地帯に饑饉があった。ユダ族のエリメレクはその妻ナオミと二人の息子マロンとキリオンを伴れてベツレヘムを立ち出て死海の東に浜するモアブの地、歴史的にはユダ族とは折合のおもしろからぬ地に寄寓した。マロンはオルパを、キリオンはルツを娶った。いづれもモアブ族の女である。十年の結婚生活は恵まれず、いづれの夫も子なくして死んだ。先にナオミは夫に死に別れたので悲歎やるせなく帰国の途に着いた。姑ナオミは二人の嫁に夫々実家に帰って新家庭をつくるように勧めた。しかし二人の嫁は離別の接吻に慟哭してお返しをしなかった。更に懇切に諭されたので、オルパは再度の接吻に応え涙をふるって立ち去ったが、ルツは涙の下から右掲の如く真情を吐露した。更に彼女は姑の霊場に自分も葬られたい、死別でなくて、自分が別れたら、エホバの神様がどのように自分を処罰なさっても可いですと告白した。姑と嫁との何たる相互の美しい思い遣りと熱い信愛であるか！　二人は大麦の収穫時の頃ベツレヘムに帰り着いた。同じくユダ族であの遊女ラハブの夫サルモンの子ボアズの篤い好意に巡りあって、ルツは竟にこのボアズと結婚した。ルツはダビデの曽祖母となった霊しき摂理よ。モアブの女ルツの愛と信仰よ！

2月17日

ハンナの讃歌
（サムエル前書1：1－2：10）

エホバの如く聖き者無し、実に汝の他には何ものも無し、我らの神の如き巌は無し（サム前二・二）

十二支族の一つヨセフ族の出身エフライム族の名に因る山地、レビ族のエルカナにハンナ（恵みの意）とペニンナの二人の妻がいた（アブラハムやヤコブのように）。後者には子女が与えられたが、前者ハンナは石女であった。ハンナはシロの聖所へしばしば出かけて切願した。「万軍のエホバよ、もし誠に婢の悩みを顧み、婢を憶い、婢を忘れないで婢に男の児をお与え下さいましたら、その子を生涯エホバに捧げ、剃髪刀をその頭髪に当てません」と誓った（一・一一）。ある時、彼女は深く祈り込んで異言状態になった。祭司エリも彼女のため執り成しの祈を捧げた（一・一二－一八）。終に男児が与えられたので、その名をサムエル（シェムーエール「神に聴かれたり」の意）と名づけた。イスラエルでは石女は非常な恥とされていたが、そのような女がしばしば反対に魂の純な敬虔な女性であった。父祖ヤコブのラケルもそうであった。さて「ハンナの讃歌」は内容の深い讃歌で、自分の個人的体験から、エホバとイスラエル民族の霊的、人格的、劇的関係が謳われている。単なる誕生の感謝ではない。右掲の「実に汝の他には何ものも無し」の一言の如きは、エホバが一切であると叫んで、全幅の信頼、神との一如的境地を表現している。また結句第十節はメシヤ預言をおのづから含んでいる。そしてこの「ハンナの讃歌」（二・一－一〇）にはイエスの降誕のあとの「マリヤの讃歌」が照応している（ルカ一・四六－五五）。

2月18日

天童サムエル
（サムエル前書3）

神の燈火なほ消えやらず、サムエル、エホバの神殿に臥し居れり、そこは神の櫃の場なりき。かくてエホバ、サムエルを呼び給ふ。彼答ふ「見給へ我也」。（サム前三・三、四）

天童サムエルは乳離れたので、母ハンナが神に誓った如く神殿奉仕の生活に入った。彼は神の契約の櫃が安置されている傍に臥して寝るのであった。神火が点っている、夜は更けてゆく。「サムエルよ！」声がする。彼は起きあがって祭司エリの処へ飛んで行った。「私呼びはしないよ、行って寝なさい」。こんなことが三度あった。そこで祭司エリは神さまが彼を呼び給うと知り、こんど呼ばれたら、「語り給へ、僕聴く」と答へなさい、と教へてやった。果然四度目のみ声である、「サムエルよ、サムエルよ！」「語り給へ、汝が僕聴きまつるなれば」。（サム前三・一〇）

エホバは祭司エリ家衰亡に関はる預言をサムエルに語り給うた。サムエルはこれを悉くエリに語った。エリは既に老衰で眼も霞んでいた。天童サムエルはぐんぐん成長した。神は恒に彼と共に在り給い、神の一言隻句も空しく地には隕ちず、サムエルの腹に蔵まった。

北はダンから南はベエルシバまで、全イスラエルに、サムエルがエホバの預言者たることは自明のこととなった。エホバの聖言はシロの聖所でサムエルに啓示され全イスラエルに伝へられるのであった。この天童サムエルに似た少年が日本の何処かに居る。

2月19日

エベネゼル（助けの石）

（サムエル前書4－7）

サムエルは石を一つ採ってミヅパとシェンの間に据え、其の石をエベネゼル（助けの石）と呼び、これまでエホバは我らを助けてくださった、と言った。（サム前七・一二）

不倶戴天的な敵ペリシテとイスラエルの戦がまた始まった。両軍の布陣はエルサレムの北方地帯であった。イスラエル軍がエフライムの聖所シロから神の契約の櫃を舁ぎ出して来たので陣営は喊声にどよめいた。ペ陣は逆に猛勇を振ってイ軍を撃破した。而も神の櫃を奪って祭司エリの二子を殺害した。その報に接してエリは驚愕して墜死した。

さてペ軍が奪った神の櫃はアシドドに運ばれ偶像神ダゴンの傍に置かれた。そのためダゴン像は再度地に倒れ毀れてしまった。而もアシドドの人々に腫物が生じ苦んだ。神の櫃はそこでガテに移され、更にエクロンに移されたが、次々と同様な神の櫃の祟りになやまされた。竟にペリシテの五市（即ち北から菱形に並んでいるエクロン、ガテ、ガザ、アシケロン、アシドド）が相議ってエホバに過祭、燔祭を以て供養した。神の櫃は遂にエルサレムの西方キリアテヤリムの山上アビナダブの家に安置された（七・一）。サムエルはイスラエル全家に信仰復興を促がした（七・三）。更にミズパに参集させて断食を以て祈りを捧げた。ペ軍がまた攻めて来たが、天来の雷撃のもとイ軍はこれを撃退した。この決定的勝利を記念してサムエルは記念石を建てて「助けの石」（原語はエベン・ハーアーゼル）と呼んだ。その後サムエルの生涯の間イスラエルは護られた。我々にとっての助けの石は生ける石、活かす石なるキリストで在り給う。

2月20日

驢馬を捜して王と成る
（サムエル前書9；10）

6 神の御霊汝に臨み入りて彼らと共に預言し、変りて別人と成らん。
7 是らの徴汝が身に起らば手当り次第に事を為すべし、神汝と共に在ませばなり。（サム前一〇・六、七）

ベニヤミン支族の豪傑キシの息子サウルは美しい巨人であった。父キシ驢馬の一群を見失い、サウルと一人の従僕を驢馬捜しに遣わした。さがしあぐんでサウルは帰ろうとしたが、従僕はこの町に神の人がいるから探ねて教へてもらおうと言って、昔の先見者（ナービー）当時の預言者サムエルを尋ねた。サムエルはその前日既に神から示されて、サウルの現在、将来の預言を賜っていた。丁度新約のサウル（後の使徒パウロ）のことが聖霊の人アナニヤに示されたように（行伝九・一一―一九参照）。サウルは驢馬の行方（ゆくえ）を聴きはしたが、自分は最も小さいベニヤミン族のまた最も小さい家族の息子であるのにイスラエルの王にされるとはとんでもない話だと思った。しかしサムエルは神の啓示の如く祈りを以てサウルの頭に橄欖（オリーブ）の油（あぶら）を注ぎ神の霊を授け、接吻を以て祝福した。かくてサウルは右掲のサムエルの言の如く別人となった。サムエルはミヅパに民を参集せしめ、神の前でサウルを王として紹介した。民は異口同音に「王の生命長かれ！」（万歳！）と叫んだ。神霊が臨むと確かに本質的に別人、第二の我、新人に成る。新約でキリストの聖霊が臨んで使徒たちはあのように別人と成ったのである。現在も同じである。故に預言者や使徒の次元に還らんと私も叫んでいるのである。

2月21日

祭儀か信従か
（サムエル前書13—15）

サムエル言へり、「エホバ燔祭と犠牲を嘉し給ふこと聖声に聴き従うに如かんや。それ順ふことは犠牲に優り、聴くことは牡羊の脂に優るに非ずや」。（サム前一五・二二）

エレサレムの北方ベニヤミンのギベヤ生れのサウルはサムエルに膏灌がれて、神の霊を主体とする別人となり、やがて民の願いとサムエルの執成しによってエフライムのギルガルで人生の三十路の峠を迎へた頃単立王朝初代の王となった。それは紀前一〇二〇年頃であった。サウルはエホバの命令に従って動き、アンモン、アマレク、ペリシテ等の近隣の敵と戦を次から次へとやり、勝ちはしたが、神命に必ずしも全的に従わず、戦利品を取ったり、エホバに燔祭や犠牲の祭儀などを行じたりした。それでサムエルに、神命を全的に遵っていないから遠からず王位を退かねばならなくなると預言される（一三・一三）。またアマレク討伐のあとでも右掲の注目すべき言を以てサムエルに責められた。サウルはその後如何なる悲劇的運命を辿って仆れるか！

本当の宗教は祭儀ではない、神命信従、聖意体現にあることを言明したサムエルは誠に先覚的預言者であった。我々個人の人生に於て、神命第一を主眼とし、導きの星光として歩むことである。躓いても転んでも滑っても、その心根で歩むことである。そのことを可能ならしめるものは聖霊の力である。キリストに祈入してみ霊の力にあづかって進むに如かず。どの道、人生はドラマである。神命神意第一を以て貫かん。

2月22日

ダビデの召命
（サムエル前書16；1―13）

神（エホバ）サムエルに言ひ給ふ「人の見るところは不可なり、人は眼を見る、されど、神（エホバ）は心を見るなり」（サム前一六・七下）

アダムが神命に反（そむ）いて禁断の果を喰って楽園喪失の悲運を喰ったように、サウルは神命に反する行為のために神霊から離れた。そこで神はサムエルに告げ給う、「我汝をベツレヘムの人エサイの許に遣わす。そは我れその子らの中に一人の王者を訊ね得たればなり」（一六・一）。サムエルは神命により、犢（こうし）を犠牲として捧げるエルサレムにエサイとその子らを招いた。サムエルは長男エリアブを見てこれが択ばれた王者かと思った。さすがのサムエルもその外貌に捕われた。そのときエホバは右掲の聖言を発した。「人は目を見る」とは外貌のこと。或はこの原語は「目で見る」とも解し得る。「心を見る」も「心で見る」とも謂えよう。次男、三男と七男まで見たが神の声が臨まない。サムエルはこれでみんなか、と尋ねたら末っ子が居る由。それは羊を牧（か）っているというので呼んで来た。これを見てエホバは「これに膏（あぶら）を濺げ、是れ其の人なり」（一六・一二）と言い給うた。サムエルは膏の角（つの）を持って来て膏を濺いだ。（原語マーシャハ。その名詞がマーシアハ、メシヤ、ギリシヤ語のクリストス、「膏濺がれたる者」、受霊者）。この少年こそダビデであった。ダビデは眉目秀麗、容姿端麗の美少年であったが、心は更に情感豊かな好男児であった。

2月23日

ダビデの立琴
（サムエル前書16；14—23）

神〔から〕の〔悪〕霊サウルに臨みけり。かくてダビデ立琴（キンノール）を執りその手もて弾きければ、サウル慰めを得、快くなり、悪霊彼より離れ去りたり（サム前一六・二三）

エホバのみ霊がサウルから離れ去ったら、エホバから悪霊が臨んで彼を悩ました（一六・一四）という。それは一種の神罰で、悪霊が直接に神から来るわけはない。神のゆるしのもとに悪霊がはたらくのである。サウルはこの悪霊に憑かれた苦しみから遁れたく、立琴を弾く名手を求めた。すると或る若者が、ベツレヘム人エサイの子ダビデは巧みに立琴を弾くし、彼は豪気能弁の美男児で、エホバが彼と共に在ます選びの器だ、と言った（一六・一八）。そこでサウル王はエサイにダビデを牧場から呼ぶようにたのんだ。サウルはダビデを愛し、王の武器を執る者即ち侍従武官に起用した（一六・二一）。

ともあれ、ダビデが神霊に満ちて即興自作の讃美歌を歌いつつ立琴（キンノール）を奏（かな）でると、サウルは感動して、悪霊が彼から追い出された。しかしサウルが神に全存在を以て立ち帰らぬ限り、悪霊は妖雲の如く去来するのであった。このキンノールは「ダビデの立琴（ハープ）」とも称はれる重要な絃楽器で、カインの後裔ユバルを元祖とする（創四・二一）。

宗教改革者ルターはサタンが襲ってくると、自作の讃美歌を自ら琵琶（ツイター）（ギリシヤ語、キタラ立琴）伴奏で歌って退散させるのであった。み霊に満ちて神・キリストを讃美するとサタンは必ず退散する。「サタンは音楽がきらいだ」とはルターの言である。

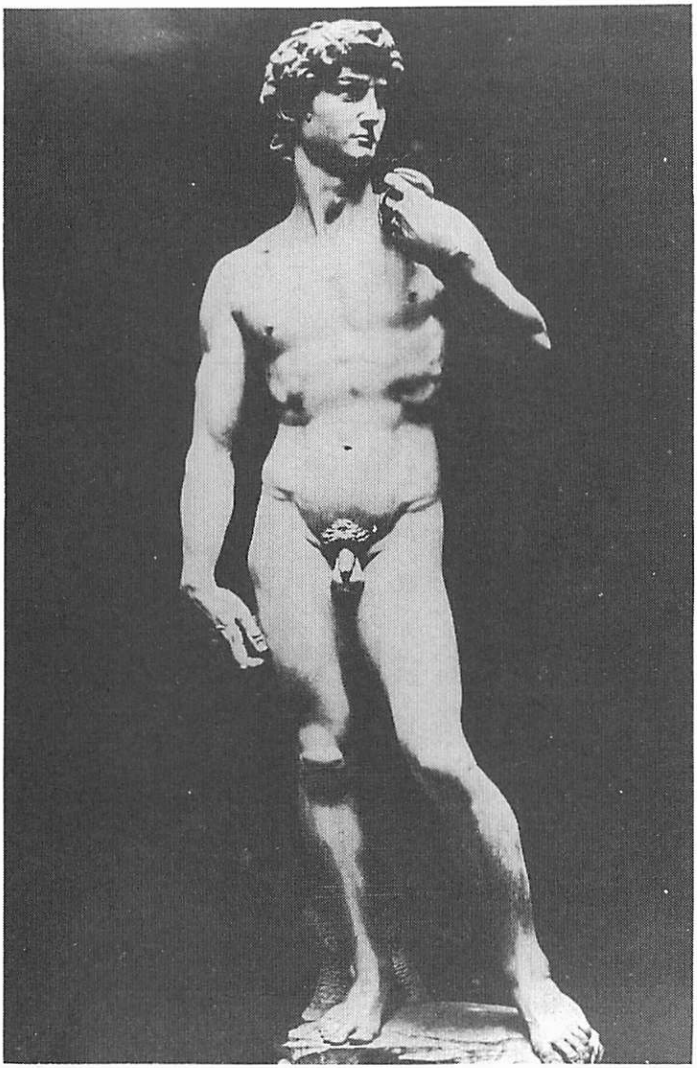
2月24日

ダビデとゴリアテ
（サムエル前書17）

ダビデ「汝は剣と槍と矛をもて我に来たる。
されど我は万軍のエホバの名をもて汝に来たれり」。（サム前一七・四五）

イスラエル軍の宿敵ペリシテ軍との関ヶ原的な決戦をペリシテの巨漢ゴリアテの挑戦によって、而もそれは一騎打ちで決せんというのであった。身長六キュビト半即ち三・二五米のゴリアテは銅の兜、その重さ五千シケル即ち八十瓩の鱗綴の鎧を身にまとい、重い鋒をもった槍と長剣を携えている。正に怪物的な体軀である。サウル王もイスラエル全軍もこの挑戦に驚き懼れた。両軍はベツレヘムの西方のエラの谷間の東西の岡に相対して布陣していたのである。

父エサイに呼ばれてダビデは牧場から馳せつけて、サウル王に面接した。ダビデは王に、何も落胆することはない、僕が彼と一騎打ちをする旨を言上した。サウルはお前のような少年があの戦士に勝てるか、と。ダビデは羊を護って獅子や熊を殺した武勇を語った。サウルはそれでは往け、エホバ汝と共に在ませと言って激励した（一七・三四―三七）。ダビデは鎧も兜も要らない。手に杖と谿間の石ころ五個と投石索を持って立ち向った。ダビデとゴリアテの言ひ合いが面白い（一七・四三―四七）。互に近づいた。距離は好しと見たダビデは電光石火の一石を投じた。ゴリアテの前額眉間に突き入った。彼は地響きを以て仆れた。正にダビデの神技は、動く金的を射抜いた。右掲の一言の如く、「エホバの聖名」と霊然一如の彼の戦であった。無者ダビデよ！



（サム前17：31—54）ゴリアテに向かうダビデ

2月25日　ダビデとヨナタンの刎頸の交
（サムエル前書18—20）

ヨナタンがダビデに言った、「往けよ！　安心して。我ら二人はエホバの名に在って『エホバいつまでも私と君の間に在まし、私の子孫と君の子孫の間に在ませ！』と言って誓ったのだからね！」（サム前二〇・四二）

サウル王の子「ヨナタンの心ダビデの心に結びついてヨナタンは自分の生命のようにダビデを愛した。」二人は生命賭けの契約をした。ダビデは敗北を知らぬ勇士たることを実証するのでサウルは彼を隊長にした。ペリシテ軍を惨敗させて凱旋してくると邑々の婦女どもが歌えや舞えやで歓迎して「サウルは千をうち殺し、ダビデは万をうち殺す」（一八・七）などと謳歌するのでサウルはダビデを恨み妬みこの日から、彼を折あらば無き者にせんとたくらみ始めた。ところがサウルの娘ミカルがダビデを愛してやまないので、サウルは一つの難題としてペリシテ人の陽皮百をもたらせと命じた。ダビデは難なく二百の陽皮を採って来た。今に王位を簒奪すると邪推したからである。頼朝が義経を恐れたのも同類である。

悪霊に憑かれているサウルは折角慰めようとして立琴を弾くダビデを投槍で射し殺そうとしたこと再三。ミカルはダビデをある晩、窗から縋り降ろして逃がしたり、ヨナタンは月朔の宴会を避けたダビデを「エゼル」（「離別」の意）の石のほとりに隠し、矢の射程距離如何で危険を報せ、相抱き接吻し哭いて離れた。その時ヨナタンは右掲の熱い言を吐露した。

2月26日

流浪のダビデ(上)

(サムエル前書21—23：14)

アヒメレク、王に応答す、「汝の臣僕凡てのうち、誰かダビデの如く忠信なる！」(サム前二二・一四上)

ヨルダン下流の西方十五哩の山里ギベアはサウル王の居所だが、その南方三哩ほどのノブにダビデは先ず逃れた。ノブの祭司長アヒメレクはエリの曽孫であるが、サウル王の婿が単身で現われたのを訝った。祭壇の聖きパンを聖餐の如く食べて飢えを凌いだ。空手のダビデはアヒメレクからあのゴリアテの剣をもらって夢かとばかり喜んだ。ところがこの祭司の邑にサウルの牧者長エドム人ドエグというどす黒い人物がいるのでダビデは危険を感じ、はるか西方のペリシテのガテの王アキシのところへ亡命した。だが町の人にダビデたることを見破られることを懸念して狂人的なふるまいをして、すぐ此処を立ち去った。あのゴリアテとの一騎打ちをやった東方エラの谷の一角アドラムの洞穴に隠れた。ダビデの一族がサウルの悪政になやむ人たちと共に此処へ来て四百人ほどの群となった。彼はこんどは東方へ長駆して塩の湖の東岸モアブのミズパに遁れた。が再びユダの地に帰った。サウルはアヒメレクを責めた。そのとき彼は右掲の如くダビデを弁護した。これがサウルの気にさわり、例の黒幕ドエグに命じてアヒメレクを始め八十五名の繻衣エポデを纏う祭司、町民、家畜に至るまで鏖殺させた。何たるサタンサウルぞ！　唯だ一人祭司長の子アビヤタ難を遁れてダビデの許に走る。ダビデはケイラの民をペリシテから救ったが、裏切られ、六百人を伴れ流れ流れてヘブロンの東南ジフの山野に屯する。

2月27日

流浪のダビデ(下)

(サムエル前書23：15—24：22)

「イスラエルの王は誰を追はんとて出でたるや。：死にたる犬か、一匹の蚤か。」(二四・一四)

(二四・一七)

「汝我よりも義し。我汝に悪を為せしに、汝善をもて報いたり。」

ダビデを心に懸けてやまぬヨナタンは、竟にジフの野にダビデの安否を訪ねに来た。しかし彼は信じ疑わないのでダビデに言った、「懼れるなよ、わが父サウルの手は君に触れ得ない。君はイスラエルの王となる……」(二三・一七)。ジフでの離別は竟に生き別れとなった。

ダビデとヨナタン、その深い熱い友情は真に刎頸の交りで、かの中国戦国時代の趙の名将廉破と名臣藺相如の友誼を連想させられる。ダビデはジフからその南方マオンの野に移った。サウルの従者たちは速くもダビデの従者どもを包囲する態勢となった。この危機に当り、ペリシテの来襲の報せあり、サウルは急拠囲みを解いてペリシテ反撃に転じた。そこでそこの岩を「セラ・マレコテ」(離分の岩)と称えた。

ダビデは東方塩の湖に臨むエンゲデの要害に籠る。サウルは精鋭三千を率いて、山羊の巌たる嶮処を尋ね、洞穴に入った。その奥には実はダビデと従者がいた。ダビデに敵は本能寺の心はなかった。エホバに容注がれたる者に手をかけないダビデであった。洞穴から出て往ったサウルに「我主、王よ！」と呼びかけてダビデは地に平伏し合掌した。かく叫んで、切った裾片を見せ、寸毫も殺意なきを示し、こんな死んだ犬や一匹の蚤のような私を何故追跡なさるか、と言った。その恭順な相を見、忠誠な言を聞いてサウルは右掲の言を放って「声をあげて哭いた。」

2月28日

「弓」の歌（前半）
（サムエル前書31―後書1）

鳴呼益荒男（ますらを）は仆れたる哉！（サム後一・一九）

一九 イスラエル①の栄光（さかえ）は汝（な）が高陵（たかおか）に屠（ほふ）られぬ
鳴呼②益荒男は仆れたる哉！

二〇 これをガテに伝ふる勿れ、アシケロン④の街（まち）に報（しら）する勿れ。
然かせばペリシテ人の娘ら歓ぶならん。
割礼なき者の娘ら有頂天とならん。

二一 ギルボアの山々よ、汝らの上に露置く勿れ、雨降る勿れ、
また供物⑥の畠も在らざれ。
勇士らの盾は汚され、サウルの盾は油を塗られ得ざれば。
噴射貫（ぬ）きし者の血を呑まで⑦ヨナタンの弓は退かざりき、

二二 強者（つわもの）の脂喰（あぶらくら）はではサウルの剣徒らに帰らざりけり。

二三 サウルとヨナタン相愛⑧し、歓び合ひて
生くるも死ぬるも離れざり、
鷲より速く獅子（しし）より剛（つよ）き彼らなりしぞ。

①栄光の人物二人
②即ちサウルとヨナタン
③④ペリシテの市（まち）
⑤サウル、ヨナタンの戦死した戦場
⑥戦敗で無要となった、この句を省く説あり
⑦ヨナタンは弓の名手、ダビデにとってはヨナタンが弓か、弓がヨナタンかであった。
⑧ヨナタンとダビデの関係はこの23節以上であった

2月28日

「弓」の歌（前半）

（サムエル前書31―後書1）

この弓の歌は士師記第五章の「デボラの歌」と共にヘブライ最古の名歌。ダビデはその後、なほサウルを避けてペリシテに亡命した（サム前二七章）。ペリシテの王アキシは北上してイッサカルのシュネムに陣を布いた。これに対してサウルはエズレルの谷を隔てた南方ギルボア山に対陣した。サムエルの霊現われてサウルに「エホバ汝を離れて汝の敵となり給う」という決定的な預言をした。（二八章）

2月29日

「弓」の歌（後半）
（サムエル前書31―後書1）

汝が愛は我に霊妙しく婦女の愛に優りたり（サム後一・二六下）

二四 イスラエルの乙女らよ、サウルのために泪せよ、
彼は⑨華美けき緋の衣を汝らに着せ、
⑨黄金の装飾を汝れらの衣裳に着けし人なり。

二五 嗚呼益荒男は戦のさなかに仆れたる哉！
ヨナタンよ、汝は高陵に屠られぬ、

二六 兄弟ヨナタンよ、噫汝はわが悲嘆そのものぞ！
汝は我れに大いなる⑩悦楽なりしに。
汝が愛は我に霊妙しく婦女の愛に優りたり。

二七 嗚呼益荒男は仆れたる哉、戦闘の⑪器は失せたる哉！

⑨は戦利品にも関わると解せられよう

⑩ダビデはヨナタンの友情に助けられて生命びろいをした。ダビデも深い情熱の人であった。

⑪勿論人物のことである。

ギルボア山の決戦の記事サム前第三十一章を読者は是非読んで下さい。

この戦でサウルの子ヨナタンは戦死した。サウルはペリシテ軍に殺されるを非として自害した。サウルの侍従もその後を追って自殺した。その間ダビデはアマレク軍を撃破したのであったが、使者からサウル、ヨナタンの戦死を聞き、衣を裂いて悲しみ断食した。ダビデは挽歌をもってこの両者を弔った。それがこの「弓」の歌である。ヨナタン、彼の莫逆刎頸の友は弓の名手であったので、「弓」と題したに相違ない。自分を殺さんと追跡してやまなかったサウルに対して終始「敵は本能寺」を夢思はなかったダビデ！　この「弓」の悲歌は千古の名歌である。

3月1日

剱の問題
（サムエル後書2－4）

「剱永遠に滅ぼし得んや、汝知らずや竟には怨恨たらんのみ」（サム後二・二六上）

サウルとヨナタンがギルボワの山で仆れたので、ダビデの上に新しい歴史的使命がいよいよ臨んできた。サウルの執拗な追跡を避けてペリシテのガザ市のアキシ王のもとに家臣の如く身を寄せていたダビデは、エホバに伺いを立てた。「ヘブロンへ上れ！」との聖旨により遙か東方の山地、祖国ユダのヘブロンを城市とした。しかしそれでペリシテの支配圏からぬけきれたわけではない。また北方サウル家には愚鈍なイシボセテが主将アブネルの力によって北方諸部族の王として君臨していた。それで北のイスラエルの宿将アブネルと南ユダの勇将ヨアブとがエルサレムの北西ギベオンに於て対陣し、やがて白兵戦となる。勝利はヨアブの側にあったが、アブネルはヨアブに呼びかけて、「剱で永遠に滅せようか。貴台は知らないのか、結局怨恨が残る」と言った。この一言は余韻がある。戦は悪循環で尽くるところを知らない。これが要するに世界戦争史の実相である。世の終末はかくしていつか来る。人類は自ら神の大審判を招く。「剱は剱で亡びる」とはキリストの言であった。

アブネルは北イスラエル諸族がダビデの治下に入るを善しと視て、ダビデにその旨申入れた。アブネルは帰途、ヨアブの部下に殺害された。アブネルの死を知ったダビデは深く悲しみ、篤く彼を葬った。人情の熱いダビデの人間性はここにも現われた。

3月2日

神の櫃と踊るダビデ

（サムエル後書5－6）

ダビデは力を尽してエホバの御前に踊った（サム後六・一四上）

ダビデはさきにヘブロンに於て苛遇がれ、ユダ部族の王になったが、北方のイスラエル諸部族が彼を訪ねて、「視よ我らは汝の骨肉なり」（五・一）と言って彼に苛を灑いでイスラエルの王にもした。かくてダビデはユダ・イスラエル全部族の王となった。時に若年三十歳。

ダビデはヘブロン王城に七年半、いよいよエルサレム先住民エブス人と一戦交えねばならない。エルサレム・シオンは難攻であるので、エブス人はダビデに「汝は此処に入ること能はじ、反て盲者跛者汝を追い払はん」と侮辱した。勇将ダビデはこれを見事に攻略した。さてこのダビデの都に迎へるべきものは何か。神の櫃である。西方山地のキリアテヤリム（バアレユダ）に祭司エリの時以来何十年と放置されていた神の櫃をとり出してわが国のお神輿の如く運び出したときダビデとイスラエル全家は種々の楽器を奏して力を尽して歌いエホバの面前（神の櫃に臨在する）で踊った。しかし、神の櫃はペリシテのガテ人の所に三ヶ月ほど預けた。かつてのペリシテの恩義を感じたからである。いよいよダビデの都に入るやダビデはまた力を尽して神のみ前に踊った。それをダビデの旧き妻ミカルが見て、遊蕩者のように臣僕婢女の前で肉を露出して躍るとは、といって侮した。ダビデはこれに対して、自分は遊蕩者や遊女より賤しい者だ。ただエホバをお迎へできる歓喜で我を忘れて躍ったのだと答えた。ダビデの天真爛漫な全身的な歓呼を神は嘉し給うた。

3月3日　実存主（エホバ）は幕屋，ダビデは王宮
（サムエル後書7）

「私はイスラエルの子らをエジプトから導き出した時から今日に至るまで、家に住んだことなく、ただ天幕と幕屋に宿りながら歩んで来たばかり。」（七・六）

エルサレムの名は紀前十四世紀の頃アマルナ文書にウルサリム即ち平安の都という名称で出現している。シオンの丘を東部にもった都で、東にはキデロンの谿谷（ワディー）が流れ、西から南にかけてヒンノムの谿谷が流れて南で合流している。しかもギホン（乙女の泉）（王上一・三三）、後に「ベテスダの池」（ヨハネ五・二）と謂われた間歇泉あり、エンロゲル（ヨブの井泉）あり（王上一・九）で、まことに自然の要塞を形成している。ダビデが此処に遷都し、永遠の都たらんとの大願をもったのは、歴史的摂理であった。香柏の宮殿には多くの妻妾をかかえたことは東西古昔の帝王らしいことでもあった。

さてしかしエホバ神の柩（はこ）を如何にすべきか。これを時の預言者ナタンにダビデは訊ねた。ナタンはその夜エホバの御言を聴いた。それが右掲の神の言であった。即ちイスラエル民族の神は歴史を導きつつ歩んでやまない神で幕屋を張っては畳み、畳んでは張って動きゆく生ける神であるとのこと。であるから幕屋で結構だという神意である。ダビデはこの神意を承って、この動的な生ける神に切々と祈っている（七・一七―二九）。とかく宗教が神殿化し寺院化して固定するところに形骸化の弊がある。このエホバ神の言に新約の黙示録は更に絶対次元的な質を以て応えている。神の都の中には宮がなく、神と羔（キリスト）がその宮であると（黙示録二一・二二）。

3月4日

ダビデとバテシバ
（サムエル後書11）

黄昏にダビデ、王宮の屋上を歩いていたが、一人の婦人が水浴しているのを見た。その婦人の容姿は極めて美しかった。（サム後一一・二）

ダビデはペリシテ、アマレク、エドム、モアブ、スリヤ等四隣をことごとく征服して今やヨルダンの東の方アンモン討伐にかかっていたが、これは宿将ヨアブに任せて、自分はエルサレムの宮殿にいた。するとある夕暮のこと屋上から艶麗な人影が水浴しているのを見てしまった。それはエリアムの娘バテシバで先住民ヘテ人にして部将たるウリヤの妻であった。帝王や大名によくある如く、ダビデも彼女を呼び入れて寝てしまった。彼女は家に帰ったが、子を孕んだ旨をダビデに告げた。

ダビデは戦地の将軍ヨアブにウリヤを一時返すように命じた。ダビデはウリヤに家で休養をとることを命じた。しかしウリヤは戦時中とて王域の一角に二夜を明かした。三日目の朝ダビデはヨアブへの親書を持たせてウリヤを戦場に返した。その親書の内容はウリヤを激戦の前線に向わせて彼を戦死させろ、というのである。ことはその通りになった。夫君の戦死を悲んだ妻バテシバは一定の期間喪に服し、ダビデに召し入れられ妻の一人となった。「ダビデ、ウリヤの妻たりし女によってソロモンを生み」と、キリストの系譜にある如く（マタイ一・六）、ダビデの大きな姦淫の罪を通してすら、多くの妻妾の中の撰びの女性となった。ウリヤの犠牲に於て！

3月5日

ダビデと預言者ナタン
（サムエル後書12）

ナタン、ダビデに言ふ「汝はその人なり！」（サム後一二・七）ダビデ「我れエホバに罪を犯したり」。ナタン「エホバまた汝の罪を除き給へり」（一二・一三）

エホバ知り給う。預言者ナタン神から遣わされ、ダビデに言うにはある富者が多くの羊や牛を有っていた。ある貧者は牝羔一頭しかなかったが、これを自分の娘のように愛して育てた。ある旅人がその富者を訪ねて食を求めた。富者はその貧者の牝羔を奪い取ってこれを旅人の為に烹て喰わせたと。ダビデはこれを聞いて、「エホバ生き給う〔呪の表現〕、まことにそんなことをした男は死の子〔死に価するの意〕である！」（一二・五、六参照）。言下にナタンはダビデに言った「貴殿こそその人だ！」（原語では「汝、其人！」アッター、ハー・イーシュ！）（一二・七上）〔詩篇五一参照〕

ナタンはこの言のあとでなお神の厳粛な言を切々と語っている（サム後一二・七下―一二）。これを聴いてダビデは心臓を刺される想いであった。それでナタンに平伏して告白した、「私はエホバに対して罪を犯しました」。その懺悔の相を見てナタンは言った、「エホバまた貴殿の罪を除き給うた。貴殿は死なずに済む。だが貴殿に生れる子は死を死ぬ〔必ず死ぬの意〕」と。その子が生れてから、ダビデは断食して六日間地に臥して祈った。しかし七日目にその子は預言の如く死んだ。ダビデは起きて身を潔め衣を更えてエホバの幕屋に入って謝罪の祈りをした。子はダビデの死罪（レビ二〇・一〇）の贖いをしたわけであった。この次に生れたのがソロモン〔シェローモー「平安」の意〕で、エホバはこの子を愛し給うたのでその別名イェデデヤ（「神の愛する者」）と称われた。

3月6日

ダビデとアブサロム
（サムエル後書13—18）

民いふ「汝は出づべからず、彼らは我らに心をとめじ。されど汝は我らの一万に等し」（一八・三）。王、門の樓上にて慟哭せり「我子アブサロムよ、噫我汝に代りて死にたらんものを」（一八・三三）。

美しい妹タマルの為に異母弟アムノンを殺害して父ダビデの目を避けていたアブサロムには既に或る野心が萌していた。眉目秀麗才気無雙の御曹子アブサロムは藍より出でて藍より紺き王子であった。人心は彼に服し、父王の議官アヒトペルは既に薬籠の中にあった。彼は期を謀って父を詐り、その間密偵を遍くイスラエルの支派に遣わした。子を信じて、「安然かに往け」と祝したダビデであった。ときならぬ角笛の響きはヘブロンの空に戦雲を捲き起した。乱臣賊子のため無比の勇王ダビデも今は都を落ちゆく敗者となった。

アブサロムとは「父は平安なり」との意なるに愛の絆は反逆を以て断たれつつある。反逆の嘲笑が皮肉にも古き罪業の疵痕と現実の流落の身を喰むとは。けれどもダビデの神信頼は暗雲を貫いて臨む神の聖手を体感するのである。牧場の牧童時代から波瀾重畳絢爛多彩の生涯を今まで導き給うた力強き愛の神にダビデは詩篇第三篇の祈りを捧げた。

流浪の王に忠臣が現われた。ガテのイッタイである（一五・二一）。その心は「海ゆかば水つく屍、山ゆかば草むす屍」のそれである。アヒトペルの計策は神これを愚かならしめた（一七・一四）。戦運逆転、アブサロムは遂に戦死する。かつて追跡者サウルの戦死を悲んだダビデは今や反逆児アブサロムの戦死を愛惜する。敵を愛せしダビデよ！

3月7日

ダビデ辞世の歌
（サムエル後書23）

一　是らはダビデの最後の言。エサイの子、ヤコブの神に膏灑がれし者（メシヤ）、イスラエルの美しき絃歌人の辞なり。

二　エホバのみ霊わが中に在りて語り給ふ　彼のみ言わが舌の上に在り。

三　イスラエルの神語り給ふ　イスラエルの岩我れに宣給ふ。
人を美しく治むる者　神を畏れて治むる者は

四　陽の照る晨の光の如く　雲なき晨に
雨後の燿きにより　地より萠え出ずる若草の如し。

五　げにわが家は神と共に此の如くならずや。
げに彼は永遠の契約を万事整へ定めて我と結び給へり。
さればまたわが救と願ひをすべて叶へ給いしに非ずや。

六　されど邪悪なる者は荊棘の如く　すべて投げ棄てられん。
手にて採り得ざるものなればなり。

七　彼らに触るる者は鐵と槍の柄にて武装せよ。
彼らは遂には火にてその場に全く燃え尽きん。

ダビデは紀前九七〇年の頃生れ、三十歳で王位につき、ヘブロンを都として七年間、エルサレムに遷都して三十三年間、外征内治、縦横無尽の活躍をなし、紀前九〇〇年頃に召天した。彼は英雄にして詩人、楽人、政治家にして王者。イスラエルの象徴と謂わん。ダビデは実に人間性の豊かな人物。波瀾万丈の生涯を、勇猛果敢な行動、烈しい情熱、深い思慮篤い思い遣り、矛盾をもった調和となし、一貫した神信頼に生きた。

3月8日

ソロモンの智慧
（列王記略上3；4：29—34）

「我汝に賢明にして叡知なる心を与ふれば、（王上四・二九—三四参照）
汝の先には汝の如き者なく、汝の後にも汝の如き者興らざるべし」
（王上三・一二）

第一代のサウロ王（一〇二〇—一〇一二）、第二代のダビデ王（一〇一二—九七二年）の後継者たるソロモン王（九七二—九三二）は、美妃バテシバがダビデに生んだ子であったが、ソロモンはイスラエルの黄金時代を現じた。

ソロモン、エルサレムの北西ギベオンで燔祭をした。ある夜エホバが夢に現われて、ソロモンに何を求めるかと訊ねると、ソロモンは民が夥しく多いから、善悪を弁別する智慧が賜りたい旨を申した。神はソロモンが長寿も富有も戦勝も求めないで、民を治める智慧を要めたのを嘉して、望みを叶えてやる旨を告げた。これは正に霊夢であった。

早速ある裁判をすることになった。それはこういう事件だ。二人の娼婦があった。そのA女とB女は同棲していたが娶方に子が生れた。両者は枕を並べて寝ていたが、B女が夜自分の子の上に臥してこれを圧死させた。するとこのB女はA女の胸の子と自分の死んだ子をすりかへた。そのことにA女は気づかなかった。朝起きて乳をのませようとしたら、その子は死んでいるではないか。よく見ると自分の子でなくB女の子なのだ。王の前でこの二人は活きている子が自分のだといって争う。王は家来に劍を持って来させて、その活きた子を二つに斬って頒てと宣した。A女は叫んで、そんなことはしないで下さい。Bに与えて下さいといった。Bはどっちのものにもしないで斬って下さいといった。王はこの活ける子はAの子だ、と判定した。神の智慧の顕現だ！。全イスラエルは王を畏敬した。



（王上3：16—28）ソロモンの知恵：二人の娼妓の例（ドレー）

3月9日

ソロモンの神殿
（王上5－8）

「視よ、天も諸々の天も汝を容れるに足らず。況んやわが建てたる此の家（神殿）をや。エホバよ、願はくは僕と汝の民イスラエルが、此処に向ひて祈る時に、汝は汝の居処なる天に於て聴き、聴きて赦し給へ。（王上八・二七…三〇）

ソロモンは太平の世を迎えたので、ダビデの味方であったツロの王ヒラムの好意により、レバノンの香柏や松の木材を以て神殿建設に協力してもらった。木材伐採その他のための徴募人三万、荷負人七万、石切人八万、等々どえらい数の労働者である。

エホバの家、神殿の境内は広く、大庭、内庭（宮殿の）、内庭（神殿の）、レバノン森の家、柱廊、審判の廓、宮殿、後宮、神殿、祭壇といった構成である。ソロモンはエホバの契約の櫃をダビデの城たるシオンから移して神殿の幕屋の至聖所に安置した。その上に贖罪所があって、その左右から向い合って翼を上に伸ばしたケルビム（単数ケルブ「祈る者」の意）は橄欖の木で造った。

ソロモンは、神がサムエルやダビデに告げられたこと、即ち神エホバが契約の櫃を臨在所として幕屋の中に、聖名に在って霊在する動的な在り方の神であることは知っていた。であるから神殿は作ったが、霊として生ける神の本質を自覚して祈った。そのことは右掲の祈りの言が瞭かに表している。王上第八章にいろいろな場合と内容の祈りが書かれてあるが、必ず「汝天に於て聴き給へ」と言っている。超在と臨在の神秘の現実である。

3月10日

ソロモンの背神
（王上10：11）

エホバ、ソロモンを怒り給へり。そは彼の心イスラエルの神エホバより反れたればなり。（王上一一・九）

ソロモンは智慧と富有に於て天下の諸々の王より大であった。まことに栄耀栄華を極めたのであった。アラビヤの南部シバの女王がその名声を聞いて豪華な賜物を積んで彼を訪ねた。さすがの女王も豫想を越えたソロモンの智慧と財富に気を奪はれた（一〇・五）。

ところが彼の魂を奪ったものこそ、この現世の財宝と、東西の帝王によくあった妻妾である。彼は即ちモアブ、アンモン、エドム、シドン、ヘテ等四隣勢力下の多くの美女を後宮に容れ、寵愛した（一一・一）。彼の妃女は七百、嬪女は三百。外国の女に魂が奪はれると、その次に結果するものは何か。それらの女の拝む神々に魂がゆらいで行くことである。ソロモンの智慧も蝕ってしまった。シドン人の性愛の女神アシタロテ、アンモン人の偶像モロク、モアブ人の偶像ケモシ等のいやらしい神々に心が移り、エルサレムの東オリーブの山に偶像を立てる崇き壇を築いた。ソロモンの魂のかかる堕落転落はエホバ神の怒を招いた。

「それでエホバはエドム人ハダテを興してソロモンの敵（サタンという語）となした」（一一・一四）。ハダテはダビデの勇将ヨアブにエドム軍が全滅的にやられたとき、辛うじて遁れてエジプト王の許に囲はれていたが、王妃の姉と結婚していた。一方ソロモンの臣僕ヤラベアム叛旗を翻し北なるイスラエル王朝第一代の王となった。他方ソロモンの子レハベアムは後を継いで南なるユダ王朝第一代の王となった。ソロモンが仆れたのは紀前九三二年であった。

3月11日　エリヤと鴉，エリヤと寡婦（王上17）

○鴉が朝にパンと肉を、夕にもパンと肉を彼の許に運んだ（王上一七・六）。
○其の桶の麦粉は竭きず、其の壺の油は絶えない（王上一七・一六）。
○「エホバわが神よ、この子の魂を衷に帰して下さい」（一七・二一、二二）。

ヨルダンの中流東部の山地ギレアデの山村テシベの出身エリヤ（原語エーリヤーフーわが神ヤハウェー）は預言者の召命を受け、北王朝アハブ王（八七五―八五四）に言った「イスラエルの神エホバは生く（旨の言）、わが言なき時は数年（三年半）露も雨もあらざるべし」と。彼は神命によってヨルダンの東側の支流ケリテ川のほとりに身を匿し、川の水を飲み鴉が運んでくれるパンと肉で露命をつないでいたが、旱魃のため川も渇れた。すると神は地中海沿岸シドンの南のザレパテへ往かしめ、異邦フェニキヤ人の寡婦のところへ彼を導いた。彼女は一握の麦粉と壺の中に少量のオリーヴ油しかもっていない。彼女は自分も子供も餓死寸前だと言う。エリヤは「懼れるなよ」。雨が降るまで麦粉も油もなくならないよ、と言った。その通りであった。神のふしぎな恵みの力なのであった。それをエリヤは愛の祈りで体現したのである。

その後その子供が重病に罹った。そして気息が絶えた。すると寡婦は言った。「神の人よ、あなたは私の罪を憶い出させ、子を死なせるために来たのですか」。エリヤはその子を楼上の自分の床に寝かせ、神に祈って三度び身を子供の上に重ね、霊気を吹き入れた。そして右掲の祈りをした。子供は甦った。エリヤは驚くべき神の人だ。この寡婦の魂も甦ったにちがいない。

3月12日

カルメル山上の霊戦
（王上18）

「アブラハム、イサク、イスラエルの神エホバよ、今日こそ知らしめ給へ、汝のイスラエルにおいて神なること、我が汝の僕にして汝のみ言に在って是等すべての事をなせることを。我に答へ給へ、エホバよ、我に答へ給へ。此の民をして汝エホバは神なること、及び汝が彼らの心を再び翻へすことを知らしめ給へ」（王上一八・三六、三七）。

北イスラエル国第六代の王アハブは、フェニキアの王でバアル礼拝の祭司エテバアルの娘イゼベルを妃にした。イゼベルは気の強い女でアハブはバアル礼拝に変へられてしまった。エリヤは神の人の権威を以てアハブに面接し、「イスラエルに禍を招く者は我に非ず、エホバの神命を棄ててバアルに従ひたる汝と汝の父祖なり。」と逆襲し、バアルの預言者四百五十人とアシラ女神の預言者四百人をカルメル山上に招集するように要求した。エリヤは動揺している民衆にエホバかバアルか決断せよと促がした。エホバの預言者エリヤ一人に対してバアルの預言者四百五十人の信仰の決戦がカルメル山上で展開された。牡牛一頭づつを截り剖いて夫々の薪の上に載せて、神に呼はり、火を以て応える神を神とする、というのである。バアル側は朝から午まで祈ったり、叫んだり、躍ったりしたがダメである。エリヤは嘲って、バアルは考えているのか、どこかへ行っているのか、眠っているのか等と言い放った。ついに日が暮れてもバアルは何の徴も見せない。そこで神の人エリヤは右掲の如く祈り叫んだ。俄然天来の火が降って燃えた。民衆は連呼して叫んだ「エホバは神なり！」文字通りのハレルヤ「（汝らエホバを讃め称へよ」の意）であった。

3月13日

エリヤの遁避行
（王上19）

○彼金雀花の下に伏して眠りしが、天使彼に捫り「起きて喰へよ」。
○火の後に細き囁きの声あり、「汝何ぞ此処に居るエリヤよ」（この二節 王上一九・五、及び一二、一三）

アハブの王妃イゼベルは、カルメル山上の霊戦の敗北をアハブ王から聞かされて、サタン的な彼女はエリヤを殺害せんと謀る。エリヤは速かにカルメル山を降り、南に向って遁走した。カナンの南端ベエルシバのあたりまで来た。曠野の中を更に一日路を歩いたら金雀花の灌木があったのでその陰で憩うた。疲労困憊である。人間の弱さをそのまま「エホバよ、足れり、今わが生命を取り給へ」と言った。しかしこの告白の中には、カルメル山上で神の降臨を身証して目的を達したから、いつ死んでも可いのだ、という平安もふくまれていたにちがいない。天使が彼を助けに来た。彼を揺り動かして「いざ起きて食へ。」見ると焼きパンと一瓶の水！　何たる美味ぞ。しかしまた眠った。また天使が彼を覚ました。また食べ且つ飲んだ。こんどはすっかり元気を回復して、南下して神の山ホレブまで歩いた。

ホレブの山に烈風、そのあとで地震、そのあとで火。しかし神の臨在がない。そのあとで細き囁きの声が聞えた。耳を欹てると「汝何ぞ此処に居るエリヤよ」との声である。「我は万軍の神エホバの為に熱心熱誠なり。其はイスラエルの子ら汝の契約を棄て、汝の壇を毀ち、剣をもて汝の預言者らを殺したればなり。唯我一人残れるに彼らわが生命を取らんことを求む」と彼は答へた（王上一九・一四）。神は彼にダマスコへ往けと命じた。



（王上19：5，6）天使とエリヤ

3月14日

ナボテの葡萄園
（王上21）

「わが父祖の世襲地を汝に譲渡するは、エホバより我を離反せしむることなり（二一・三）

北王国イスラエルの北部イッサカルの要害の地エズレルの人ナボテが葡萄園を有っていた。アハブ王の離宮に近いので、王は譲ってくれと言う。ナボテは右掲のように断った。土地は本来神の有である、というのがユダヤ法の精神である（レビ二五・二三）。相手が王であってもナボテははっきり断った。すると黒幕のイゼベルが、ラハブにエズレルの長老に宛てて親書を書かせ、エズレルに罪業のための断食を宣伝させ、ナボテを民衆の前に坐せしめ、邪悪な二人の偽証人を立てて「汝、神と王を詛ひたり」と言はしめ（出二二・二八、レビ二四・一四）、彼を曳き出だし、石でぶち殺せと、悪辣な奸策を実演させた。ナボテはこの悪女の犠牲となった。

ホレブ山上でエホバから力強く命ぜられてダマスコへ帰って、その後の預言者としての活動をしていたエリヤに神の言が臨んだので、彼はイスラエル人の都サマリヤのアハブに面接し、エホバの審きの言を伝えた、曰く「犬ナボテの血を舐めし処にて犬汝の身の血を舐むべし。汝エホバの面前にて悪をなす事に身を委ねしに由り、我れ災害を汝に降し」云々と。アハブはスリヤとの戦で戦死し、車の中に流れた血を犬が舐めた（王上二二・三八）。その後奸女イゼベルは第八代の王となるエヒウ（八四二―八一五）の言により、窓から投げ落され、惨澹たる屍となった（王下九・三〇―三七）。エリヤの預言の通りであった。神は遂にこの悪女を鋭く審き給うた。

土地は神有にして国有たるべし。日本に於ける地価暴騰の現状を深く嘆かざるを得ない。

3月15日

エリヤの昇天
（王下1；1－2；12）

11 彼ら進みながら語っていた時、見よ火の戦車と火の軍馬と現はれて両者を隔てた。かくてエリヤは龍巻に乗って天に昇った。
12 エリシャ看て叫んで言った。「我が父、我が父、イスラエルの戦車よ、其騎兵よ！」けれども再た彼を見なかった。（王下二・一一、一二）

アハブの後に立ったアハジア王が高楼の欄杆から転落して負傷したとき、使者たちをサマリヤから遙か南西のエクロンの神バアルゼブブ（「羽虫の主」）に遣はして癒えるか否かを伺はせて下山せよと告げた。エリヤは「我れ若し神の人ならば……」といって、天から霊火を降して彼らを焼死させた。王は再た遣はしたが同じく五十名の使者が焼かれた。王はその不信のために遂に死んだ。

エリヤは正に火の預言者である。門弟エリシャと共にヨルダンの河口近いギルガルから出かけてベテルへ向った。途中で待っていろといってもエリシャは「エホバは活く、汝の魂は活く（誓いの表現）、我は汝を離れじ」といってどこまでも従いて往った。更にヨルダンに近いエリコに戻って、最後にヨルダン川の河原に来た。エリヤは外套を脱いでこれを巻き、水を打った。水は彼岸と此岸に分れた。二人はその中を渉った。エリヤは問うた、自分は今神に取られるが、何をしてもらいたいかと。エリシャは答えた。あなたのみ霊の二人分（実際は彼一人だから頒たれる全部）を私に遺して下さいと。そうか、しっかり受けとれ、とエリヤは遺言した。なほ進んで往くと右掲の如き驚くべきことが起きた。死を見ず姿を消したのは旧約のエノクとエリヤだけであるとは！



（王下2：7—14）エリヤの昇天（ドレー）

3月16日

エリヤの衣鉢エリシャ
（王下２；13—18）

○「エリヤの神エホバ！　何処に！」「エリヤの霊エリシャの上に留まる」（王下二・一四、一五）原語エーリヤーフーは「わが神はエホバなり」原語エーリシャーは「わが神は救ひなり」

エリヤの身から落ちた外套を謂はば衣鉢のようにとりあげ、ヨルダンの岸に立ってエリヤの如くその衣で水を打った。と同時に「エリヤの神エホバ！　何処に！」と叫んだ。すると水は彼岸と此岸に分れた。彼はそこを渉った。これを見ていた対岸の預言者の徒輩が、「エリヤの霊エリシャに留った」と異口同音に叫んだ。そしてエリシャの許に来て平伏してこう言った。貴下の主エリヤはエホバの霊にひきあげられてどこかの山か谷に放たれたと思うから、自分らの僕どもを探がしに遣らせて下さいと。何を馬鹿なことを言うか、とばかり拒んだが、余り執拗なのでなすにまかせた。三日間探ねたが見当らなかった。エリシャの処に帰って来て、ダメでした、という。エリシャはエリヤが火の如く霊化して昇天した事実を信じていたのだ。

この記事を読んで私は深く感動した。先づエリシャが受けとったエリヤの外套には神霊を受けたエリヤの霊がこもっていたこと。彼が「エリヤの神エホバ何処に」と叫んだ時、実は、神はエリシャの身を霊を以て抱いておられたこと。であるから、エリヤの場合と同じことが起きた。それで民間の預言者どもが、エリヤの霊がエリシャに留まった、と驚いて事実を告白した。

エリシャはエリヤの衣鉢そのものの如き存在となった。この師弟関係ほど深いものはない。エリシャは爾後神霊によるカリスマ（霊賜）的な能きをしてやまなかった。

3月17日

エリシャの無尽の油
（王下２；19―４；７）

「往ってその油を売って、その負債をつぐのい、貴女とあなたのお子達はその余分で生活しなさい」（王下四・七）。

○ヨルダン下流沿いの世界最低の位置たるエリコ（別名棕梠の町）附近の水が悪いので流産を起こすということをエリシャは聞き及び、水源に塩を投げ入れながら「エホバかく言い給う、我れこの水を癒す」と。爾後流産はなくなった。

○モアブの王メシヤがイスラエルの王ヨラム及びユダの王ヨシャパテと対立し戦争となった。そのときエリシャが相談を受けたが、彼はヨラムに、汝エホバ信仰なきに由り、我れ汝と何の関はりあらんやと断乎つっぱねた。ヨシャパテは信仰熱き王だから彼のためなら応ずるといった。彼は楽人に神讃美の音楽を奏でさせて聖言を聴き、策を与え、神の力で勝たしめた。

○エリシャの門弟の一人が死んだ。するとその婦人がエリシャに、債主が自分の二人の子供を奴僕にひきとろうとしている、といって救を求めた。そこで彼は、家の中に何があるかと尋ねた。彼女は僅かばかりの油だけですと答える。では空の器を隣近所から沢山借りて来て、家に子らと閉ぢこもり、それらの器に油を少量づつ滴らしなさい、と彼は告げた。この言に従って油を滴らしたら、見よ、すべての器に油が満々と湛えた！　驚き喜んで、女はこの神の人に告げた。するとエリシャは右掲の如く語った。キリストのカナの婚宴のときの神の愛の力を連想せざるを得ない。橄欖の油は聖霊の徴である。我らも聖霊を体受すると無尽の事態を体験する。

3月18日

エリシャとシュネムの石女

（王下４；８―37）

その子は死んで、自分の臥床に臥していたので、エリシャは戸を閉ぢてエホバに祈り、子の上に伏し、自分の口をその口に、自分の目をその目に、自分の手をその手に当て、身体でその子を掩ったら、子の身体が次第に温もった。このように七度びやると、目を開いたので、エリシャは「汝の子をつれてゆきなさい」と言った。彼女は入ってエリシャの足下に伏し、地に身を屈め其子を取りあげて出て行った。（王下四・三二…三七）

エリシャはヨルダン下流のギルガルとエリヤの本城の如きカルメルの間をときに往き帰りしていたが、その途中のシュネムに富裕の老夫婦がいたが、婦人は石女でこの神の人を懇ろに遇し、別室を備えて自由に宿らせた。子なきをエリシャは憐み、彼女にいきなり、「来年の今頃貴女は子を抱くよ」と言った。彼女は「ひとを欺いてはいけませんよ」と応えた。ところが神の人の言の通りになった。その子は少年になった。刈穫時に炎天下で手伝っていたら、「頭が、頭が」と叫んだ。母の膝に抱かれたまま少年は死んだ。婦人は神の人の臥床に少年を寝かせた。彼女は驢馬に乗って神の人の許に馳せた。エリシャの脚に抱きついて、「エホバは活く汝の魂は活く、我は汝を離れじ」とのひたむきの信頼を告白した。彼女の体あたり的信仰を見てエリシャは一緒に彼女の家へ往った。そして右掲の如く、自分の室に唯一人で入って、神に祈り入って、少年を甦らせた。驚くべきあわれみの力である。婦人は感謝感激で言も出ない。足下に伏して少年を抱いて室から出た。

3月19日

癩病者ナアマンの信仰
（王下4；38―5；26）

○「かれら食うて尚あまりあらん」（王下四・四三）
○「汝ゆきて身をヨルダンの中にて七度洗へ、さらば汝の肉元来に帰りて汝清くなるべし」（王下五・一〇）

○ギルガルの北西、バアルシャリシャから来た人たちが、初穂の食物として大麦のパン二十と畠の初物一袋の食物をエリシャのところにもって来た。そこにいる百人の人たちに食はせることは無理な話であるのに、神の人はこう言った、「エホバかく言い給う『かれら食うて尚あまりあらん』と」。正にその通りであった。キリストが五千人に五個のパンと二匹の魚から頒ち与えてなほ余りが十二の筐を満たしたという驚くべき創造の業の先駆的なものであった（王下四・四二―四四）。

○スリヤ王の武将ナアマンが癩病に犯された。敵国イスラエルのある少女がエリシャのことを語った。これが起因となって、ナアマンはエリシャのところへ駆せ参じた。神の人は使者をして右掲の如く言はしめた。ナアマンは神の人が按手して祈ってくれるかと思ったので、これを聞いて一度は怒ったものの、思い改めて、神の人の言の如くしたら、「嬰児の肉の如く清くなった」。ナアマンは感激してエリシャの許に帰って来て、面前で、「我れ今イスラエルの他は全地に神なしと知る」と信仰告白をした（王下五・一五）。エリシャが全く神の言を霊とし生命として、ただそれを全身で伝えている無的な在り方に信仰の奥義を見る。また武人ナアマンが、斯く鮮かに偶像教から活ける聖なる神に平伏したことは、あのローマの百卒長の信仰を連想させる（王下五・一―二六）。

3月20日

神の人の武士道
（王下6；8—23）

「エホバ彼の眼を開きて見させ給へ」とエリシャ祈れば、エホバその若者の眼を開き給ふ。彼見るに火の軍馬と火の戦車山に満ちてエリシャの四面に在り。（六・一七）

エリシャ答へけるは「撃ち殺すべからず、汝剣と弓をもて捕虜にせる者等を撃ち殺し得んや。パンと水を彼らの前に備へて且つ食ひ且つ飲ましめてその主君に往かしめよ！」（王下六・二二）。

アラム（スリア）とイスラエルの戦が起きた。アラム王は評議して伏兵を置く地点を定めた。すると神の人エリシャはその事態を霊知してイスラエルの王にその地点を警告した。事の失敗を知ったアラム王は敵と内通する者あらんと思った。すると臣僕の一人が、さに非ず、預言者エリシャはこちらの密議を霊知する力をもっていると。そこでアラム王はエリシャの所在を探知させて大軍を遣ってその町を包囲させた。これを知った一人の若者が怯えてエリシャに告げた。彼は言った、懼れるな、こちらの方がもっと大軍だよと。神の人には天の万軍が味方するのが見えている。その霊的現実が右掲の如き「火の軍馬と火の戦車」なのである。そこで彼はエホバに祈って、敵軍の目を昏ました。エリシャは彼らに、汝らの道は此処ではない、城も此処ではない。私が導いてやる、といってサマリヤ、イスラエルの都に伴れて行った。彼らの目が開けられるとこんどは逆に敵中にあるのを彼らは見た。イスラエルの王は「わが父よ、撃ち殺さんか」と訊ねた。神の人は右掲の如く答えて、敵を憐れんだ。王は大いに盛宴を開いて彼らをアラムに返した。何たる愛敵ぞ！

3月21日

浮かぶ斧，死骨の力

（王下6：1－7；13：20，21）

○斧水に落ちたり。神の人枝を切りて其処に投げ入れ、その斧を浮かばしためたり（六・六）。

○その人をエリシャの墓に投げ入れて去れり。然るにその人エリシャの骨に触るるや甦りて起ちあがれり（王下一三・二一）。

エリシャの門弟たちがエリシャを中心として住む家を建設しようとして、ヨルダンのほとりに出かけた。そしてヨルダンの岸で材木伐採にとりかかったが、ある男がふと大切な斧をヨルダン川に落した。さあ大変、みつからないのでエリシャにたのんだ。エリシャは落した場所を聞くや一つの枝を切りおとして、霊的透視を以て水中の見えない斧を目がけて力強く投げ入れた。次の瞬間、斧は枝に喰いついて浮びあがった。

生涯、大小許多のカリスマ的な神の業を成し遂げ、栄光をエホバの神に帰し貫いたエリシャ。エリヤの衣鉢を継いで藍より出でて藍より紺きエリシャであった。預言者は結局孤独である。本当の生命賭けの後継者だけが預言者を知るのみ。後継者は非連続的である。エリヤ、エリシャはむしろ例外的だ。

ところでエリシャも終に死して葬られた。ある人が葬られようとした。そのとき賊党が見えたので、その人はひそかにエリシャの墓に投げ入れられた。その投げ入れられた死者は、エリシャの死骨に触れるや、甦って起ちあがった！　何たる霊骨ぞや！　エリシャは死して猶人を助けてやまざる神の人であった。然り、預言者たちも使徒たちも、聖霊のキリスト者たちも今もなほ神・キリストを身証してやまず。旺なる哉、神の国！

3月22日

神とサタンとヨブ（上）

（ヨブ記1：1－9）

サタン曰く「ヨブ豈求むるところなくして神を畏れんや」（ヨブ一・九）

カナンの南東エドムの北の方にウヅの地があったが、ヨブという名のイスラエル人ではないセム人がいた。彼はその人と為り完く且つ正しくして神を畏れる人物であった。男子七名、女子三名、合せて十名の子らがあった。羊、駱駝、牛、牝驢馬をたくさん有っている所謂資産家カピタリスト（即ち畜群の頭数を夥しく所有する者の意）であって、多くの下僕も雇用していた。ヨブの生きていた時代は詳かでないが、族長時代と思はれる。但しヨブ記の書かれたのは、所謂智慧文学に属するので、文書預言者たち輩出の後期以降であろう。

さてある日、神の前に天使たちとサタンが侍って対談をした。エホバはサタンに、「汝心をもちひてわが僕ヨブを観しや」と問いかけ、ヨブの上述の人がらを神自ら述べ給うた。するとサタンは「ヨブ豈求むることなくして神を畏れんや」と応えた。このサタンの「求むることなくして」が重大な問題を孕んでいる言葉である。ヨブが信仰深く間然するところない立派な実存というが、何か神様から応報を求めているんですよ。とサタンは言う。即ち人間はエゴイストだから、信仰といっても何か御利益を、幸福を、名誉を、財宝を、権勢を、地位を求めての信仰だというのである。サタンは人間のかくれた根本衝動を衝いて神に抗弁している。実はそのエゴイズムの首魁はサタン自身であることをゲーテも『ファウスト』の中で指摘している（一六五一－三行）。

3月23日

神とサタンとヨブ（中）

（ヨブ記1：10—22）

「我裸体にて母の胎を出でたり。また裸体にて彼処〔母なる大地の下〕に帰らん。エホバ与へ、エホバ取り給ふ。エホバの御名は讃むべき哉！」（ヨブ一・二一）

サタンはヨブを妬んで更にこう言った。貴神は彼とその家や所有物の周囲に籬を施して護ったり、することなすことをみんな成就させたりして居られますね。だけど、手を伸べて所有物をうち滅ぼせばきっとあなたの面前で貴方を詛いますよと。これに対してエホバは、では彼のすべての所有物をお前の手に任せる。たゞヨブの身体には手を触れるな、と。

サタンはみ前を離れて、破壊の仕事にとりかかった。初めはアラビヤのシバ人を唆かして牛、牝驢馬を飼養者諸共に奪ったり殺したりした。次には神の雷火が降って羊とその飼養者を焼き滅ぼすように（神のゆるしの許に）サタンが手を下した。次にはカルデヤ人の荒武者が駱駝を略奪して飼養人を殺すようにした。最後には、長男のところで兄弟姉妹が宴会を開いていると、忽然と暴風が荒野から吹いて来て、家をうち倒し、みんな下敷きとなって死んでしまう、というひどいことをやらかした。以上の四段構えの悪業をやって、それぞれ禍害をまぬがれしめた使者をヨブの許へ一人また一人と遣はして報告させた。これを聞いたヨブは起ちあがり、外衣を裂き髪を斬り、地に伏して、右掲の如く告白して聖名を讃えた。決してサタンが言ったように「求むるところあって」の信仰ではないことをこの一言で美事証した。サタンの負けである。

3月24日

神とサタンとヨブ（下）

（ヨブ記２：１―10）

「実に我ら神より善福を受くるなれば、悪禍をも受けざらんや」（ヨブ二・一〇下）

サタンは神のゆるしのもとに、ヨブの子らと所有物をヨブからもぎとってしまった。特に十人の子らを失ったヨブの悲嘆は想像を絶するものである。にも拘らず、「エホバ与へ、エホバ取り給ふ、エホバの聖名は讃むべき哉」とは、どういうことか。かくまで、神を神のゆえに、神のなし給ふことは、何故と問はず、全的にアーメンと言えることは、単なる信仰の域を絶した絶信の信である。

かくして完敗したサタンは更に難問を神に申込んだ。それはヨブ自身を苦しめるに在りというわけで、神にこうたのんだ。「汝の御手を伸べて彼の骨と肉とを撃ち給へ。さらば必ず汝の面に向ひて汝を詛はん」と。神はこれに対して「彼を汝の手に任す、ただ彼の生命は護り置けと。サタンはみ前から退き、ヨブを撃って全身に悪性の腫物を噴き出させた。ヨブは瓦のかけらで身を掻き、灰の中に坐った。妻がこのありさまを見て、神を詛って死んだ方が優しだと放言した。するとヨブは、右掲の言葉で応えた。ヨブは神一切に生きている。神のなし給うことは人間一切の判断を超えたもの。「最悪も勇者には最善なり」とブラウニングは叫んだが、神を全的に然りとし、おのれを全的に否とし、無としているこのヨブこそ本当の無者で、そこには天来の光が臨む。天来の力がくる。苦しみのどん底で莞爾として微笑むことができる。力まない真の勇者なのである。今回もサタンは敗けた。

3月25日

ヨブおのが生誕を詛う
（ヨブ記3）

○わが生れし日亡び失せよ、男子懐妊れりと言ひし夜も（ヨブ三・三）。
○何ぞ我れ胎より死して出でざりし、何ぞ我れ胎より出でて気息絶えざりし（三・一一）。
○如何なれば膝ありて我を受けしや、如何なれば乳房ありて我に吸はしめし（三・一二）。
○如何なれば苦しむ者に光与へられ、魂の悩める者に生命臨むや（三・二〇）。

ヨブ記第一、第二章は、神とサタンの問答の末、ヨブが故なきに苦しめられることとなったが、ヨブはその苦難に対してただ神を義とし信じ貫いて聖名を讃えた。ヨブは徹底的に神を神のゆえに信じている告白をした。

しかし第二章の終りで、ヨブの災禍を聞いた三人の友が彼を訪ねる。一人はテマン人エリバズ、次はシュヒ人ビルダテ、第三はナアマ人ゾパルでこの三人ともエドムに近親の種族の人と思はれる。ヨブの変り果てた容貌を見て声をあげて泣いた。外衣を裂き塵を頭の上に撒き散らした。七日七夜ヨブと共に坐して一言も発言しなかったが、遂に問答が交される。問答はヨブ対三人のひとりびとりと一巡、二巡、三巡するが、三巡目にはゾパルの代りにエリフというのが現はれる（三二―三七章）。しかし三人の友人の言は全部省き、ヨブの言だけを若干とりあげて考えることとするが、読者は勿論ヨブ記そのものを全部読まれたし。右掲の如く第三章全体は一、二章とは全く異なり、おのが生誕を呪う。生れながらの人間ヨブと信仰のヨブとの絶対矛盾の自己同一を見るべきである。

3月26日

ヨブの自己省察
（ヨブ記6；7；9；10）

○それ人の地に在るは戦ならずや（ヨブ七・一上）。
○縦ひわれ義しかるともわが口我を罪し、全かるとも我を邪悪とせん（九・二〇）
○わが魂はわが生命を厭ふ、わが苦衷を自らに曝けだし、わが魂の辛酸を語らん（一〇・一）

ここではヨブ記の劇的な対話に於ける主人公の言を中心にして、考えてゆく。彼は理由なくして苦しみに遭ったこと、身内や家畜類を失ったことは何としても懊恨に堪えない。また懊悩は身を蝕む。それのみならず癩のような皮膚の状態はどうしたことか。神がわが生命を絶っていただきたい（六・九）。頑健であった肉体も銅ではない（六・一二）。地上は平和が続かず、個人的には何も恨みがないのに、民族、国家となると戦争が始まる。人生が兵役や戦役のようだ（七・一上）。生命も気息のように儚い。幸福もあてにならない（七・七）。しかし魂の眼を神に向けると、神は畏るべき存在だ。論諍してみたところで千に一つも返答することができない（九・三）。だから縦い自分は義しいと思っても、罪びとたることを告白せざるを得ない（九・二〇）。こんな生命が何だ。とにかく苦衷を正直に曝け出して、わが魂の辛酸を語ろう（一〇・一）。木石ではないから苦難の意味が知りたい、とヨブは呻く。しかし意味がわかってどうなる。問題の問題は何ぞ。人生の究極は何ぞ。

3月27日

「わが証者は天に在り」
（ヨブ記12；13；14；16；17）

○あらゆる生物の生魂（ネフエシュ）、すべての肉なる人の霊生（ルーアハ）は彼の御手の中に在り（ヨブ一二・一〇）
○智慧（ホクマー）と権能（グブラー）は神に在り、深慮（エーツアー）と超悟（テブーナー）も神の属なり（ヨブ一二・一三）。
○見よ、彼神我を殺さん、我しがみつかざらんや！　げにわが道を面前に弁ぜん（ヨブ一三・一五）。
○それ、木には希望（のぞみ）あり、仮令斫らるるとも再た芽吹きしてその枝絶えず（ヨブ一四・七）
○視よ、今にてもわが証者は天に在り、わが立証者高き処に在り（ヨブ一六・一九）。
○わが朋友らはわれを嘲笑者なれど、神に向ひてわが眼は涙を濺ぐ（ヨブ一六・二〇）。
○彼れ人〔我〕のため神と論じ、人の子その友〔即ち我〕の為に弁護せんことを（ヨブ一六・二一）。
○げに幾許の年来たりなば、不帰の旅路に我れ往かん（ヨブ一六・二二）。

3月27日

「わが証者は天に在り」

（ヨブ記12；13；14；16；17）

ヨブとの問答は、往きつ戻りつであり、混沌であり、空転である。人生の根本問題は談議ではない、論諍でもない。研究でもなく、話し合いでもない。反対者は友の中に、味方の中にも居る。血縁の中、自分自身の中にもいる。何たるドラマぞ！　本当の人間は嘲笑、排斥の的となる。かくてヨブも眼を自然界に、そして天に向けた。あらゆる生物の生死は聖手の中にあるを見た。草木は枯れたと思へば、根があって春と共に芽を吹き復活する。人間はどうなるのか。神は生殺与奪の権を持つ。しかし我れはしがみつくとヨブは叫んでいる。深慮、超悟なる神に信頼せん。ヨブは終に「わが証者は天に在り」と叫んだ。「彼れ、人の子、仲保者（キリスト）」が神と語り、執り成して下さる、と驚くべき消息を預言した。先見した！　帰らぬ旅路のその前夜ヨブはいかなる霊幻を見たか。

3月28日　「われ知る，われを贖う者は活く」（ヨブ記19）

○われ知る我を贖ふ者は活く。遂には彼れ土泥（つちひぢ）の上に立ち給はん（二九・二五）。

○彼らわが皮膚（はだ）を腐食せしめ、わが肉の離れし後に我れ神を見ん（二九・二六）。

○我れ彼をわが身近かに見ん。我見るに他人（よそびと）ならじ、わが腎（むらと）わが腹（はら）底（そこ）に絶え入るばかり也（一九・二七）。

第十六章の終りで、「わが証者は天に在り」、と叫び、仲保者なる「人の子」（メシヤ）を霊視して、魂は確信と希望に燃えたヨブではあったが、第十七章ではその肉体は旧約の一般的限界を出でず、肉体を腐らすものを父と称い、蛆（うじ）を母などと呼ぶヨブであった（一七・一四）。しかし、また第十八章の終りでは、自分の魂の苦闘、弱き者ながら魂のどん底には不変の善意が宿り、底なしの神信頼のあることを右掲の如く不滅の文字として岩盤に刻まれんことを願っている。そういう心ある人が何処かにいないか、誰かいないかと呻いている。このヨブ記の記者こそその人である。肉体は消え失せようが肉を離れても神を見る、という凄絶な叫びは旧約の限界を突破した！「われ知る我を贖ふ者は活き給ふ」は正に旧約的次元の突破である。地に立ち給う「人の子」メシヤ、キリストを霊視している。「人の子」を慕い焦がれて彼の「腎は絶え入るばかり」なのである。

3月29日

ヨブの今昔の感
（ヨブ記21；23；24；26—31）

○見よ、我前進すれど彼在まさず、後退せしも我れ彼れを認め得ず。左すれどもみ業の彼に目見えず、彼れ右に曲り給へるか、されど見えざりき。（二三・八、九）

○彼は即一なり、誰か彼を変へ得んや。彼のみ魂欲すれば即ち為し給う。（二三・一三）

○二 神は活く、わが義審を取り去り、全能者わが魂を辛苦め給う。
三 実にわが衷にわが気息があり、神の霊息わが鼻の中にある限り、
四 わが唇は不義を何ぞ語らん、何ぞ偽りを述べんや。（ヨブ二七・二—四）

三月二五日以来今日で主人公ヨブの語っている章の序数は全部掲げ終った。さて右掲数句の内容に簡単に触れよう。二三・八、九の前進後退、左右は現行文語訳では東西南北とある。四方を見廻しても神は見えないという。「極楽は東にあらず西に無し、来た（北）道さがせみんな身（南）にあり」という道歌があるが、神はわが身に在りで、キリストの「天国は汝らの内にあり」と同軌。此の如き即身成仏、神我一如に信仰の極意がある。二三・一三で神を即一不変、聖意必現と喝破している。次の「神は活く」とは誓いの表現。ヨブが如何に神の義に即し、誠意を尽して生きたかの叫びである。彼の魂は正直神気を呼吸していた。

3月30日

エリフの執り成し
（ヨブ記32―37）

○実に夫れ人の中に霊あり、全能力の気息聡明を与ふ。（ヨブ三二・八）
○神の霊われを造り、全能者の気息われを活かしむ。（ヨブ三三・四）
○深き睡眠人に臨む夜の夢幻の中にて、また寝床の睡みの時、
彼は人の耳を開き彼らの教えられしものを封印す。（ヨブ三三・一五、一六）
○三 その魂墓穴に近づき、その生命死を斎らす者に近づく折しも、
三 彼のため天使ありて千に唯一なる執り成す者となり、正道を人に示さば、
四 彼憐みて言ひ給はん、彼を救ひて墓穴に降らしめざれ、
我れ贖ひ代を得たればなりと。（ヨブ三三・二二―二四）

ここに新たにエリフというヨブと近親の部族の者が登場する。さきの三友人のヨブとの弁論を傍聴していたが、若輩であるので自ら控えていたという（三二・六、七）。

三者の伝統的な罪過と苦難の応報思想を越えて、右掲の如く、神霊の奇しさ創造の力や霊生を強調したり、霊夢の啓示のことを語ったり、神の超越性を謳ったり（三五章）、神讃美を促がしたり（三六章）、神の自然界を通しての威力を語ったり（三七章）しているが、千に一つの仲保的な天使が現はれて、神の憐みが、不可解な苦難のヨブを救贖する消息を告げている右掲の一くだりは注目に価する。これは「我が義は天に在り」と叫んだヨブに照応するもので、エリフは神の出現の先駆として、正に洗礼のヨハネの役割り。



（ヨブ32, 33）エリフの執り成し（ブレイク）

3月31日

神の天地万物
（ヨブ記38—41）

○何の上にその基礎を、また誰か隅の首石を置きしや。（ヨブ三八・六）
○時に晨の星々歓び歌ひ、神の子ら歓呼の声を揚げたり。（三八・七）
○汝昴星の鏈を結び得るや、参星の綱を解き得るや。（三八・三一）
○汝十二宮をその季節に曳き出だし得るや。（三八・三二）
○小烏共が神に鳴き叫び、食も無くさ迷うときに鴉に餌を与うるは誰ぞや。（三八・四一）

ヨブは神が第一、第二章で認めて居給うように確かに義人であり、縦横無尽の論談を見ても、才気煥発、頭脳明晰、敬虔にして情け深い男でもある。しかし絶大なる神に対して何か大穴がないか。優秀なる者が陥り易いものは何か。知的高慢である。

終に神自ら顕はれ給うて大風の中からヨブに畳みかけて問いならざる問いをかけた。大地の基礎は何か、隅の首石は誰が置いたか。そのとき晨の星も神の子らも歓呼した。「隅の首石」はキリストの愛したもので、彼自身が人間界の隅の首石と成り給うたからである。スバルもオリオンも大宇宙の創造と神秘な構成の一端を代表しているのだが、スバルは例の七ツ星プレイアデスであり、参星は冬空に輝くオリオン座。十二宮は黄道十二星座（白羊、金牛、双子、巨蟹、獅子、處女、天秤、天蝎、人馬、磨羯、宝瓶、双魚）。神は海中、地上のさまざまな動植物や、自然現象にまで言及して、造化の妙の大芸術家たる神の絶大さが表現されている。

4月1日

ヨブの見神
（ヨブ記42：1－6）

一 ヨブ実存主（エホバ）に答へて曰く、「我れ知る、汝一切を為し能ふ、意企にして達せざる無し。
五 我汝のことを耳聞（みみ）にて聞き居りしが、今や汝をわが眼にて見奉る。
六 故に我れ自らを卑（いや）しみ、塵と灰の中にて悔ゆ。（ヨブ四二・一、二、五、六）

今やヨブは、測り知れぬ神の霊知霊能と底知れぬ深慮と思いやりを知った。それは神自身の聖言に接し、霊光の中に神を霊視し奉ったからであった。ひとからいかほど神について聞こうとも、そういう間接的なもので魂は撃たれない。神自らの中から発する言は全身にひびく。神自らの霊姿を一瞬見ただけで平伏す、ぶっ倒れる。ダマスコ途上のサウロは復活のキリストに接して完全にぶっ倒された。これが聖霊のバプテスマとなった。

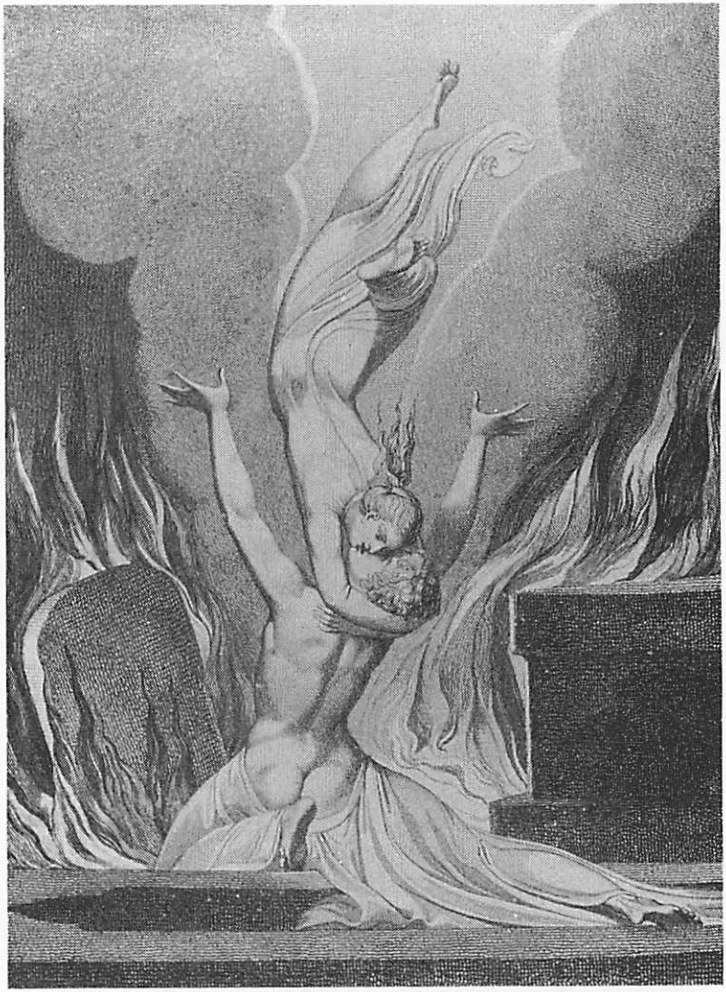
ヨブも、最早論議の沙汰でないことをからだ（・・）で知った。あたまの世界に神は現われない。知識や判断や推論や議論ではない。ヨブの苦難の説明でも解決でもない。苦難のどん底のヨブが神の言を聴き、神を直（じか）に見奉ったから、もう問題は乗り越えられた。理（ことわり）なき苦難を以て験し給うた神の深い願みが身に泌みた。論議を塵芥の如く彼は棄てた。パウロがキリストに出遇った時正にそうなったように（ピリピ三・八）。地獄が天国に化した。聖前に平伏したヨブの姿を神はこよなく愛し給うた。人生は不可解である。人の世は矛盾と混沌と不義不公平に充ちている。しかし神知り給う、神見給う。いつの日か大逆転が来て、神・キリストから内的霊的変貌を賜る！　かくて次元が変り、神・キリストを生き、生命を献げた人が天界で輝く、永遠に。

4月2日

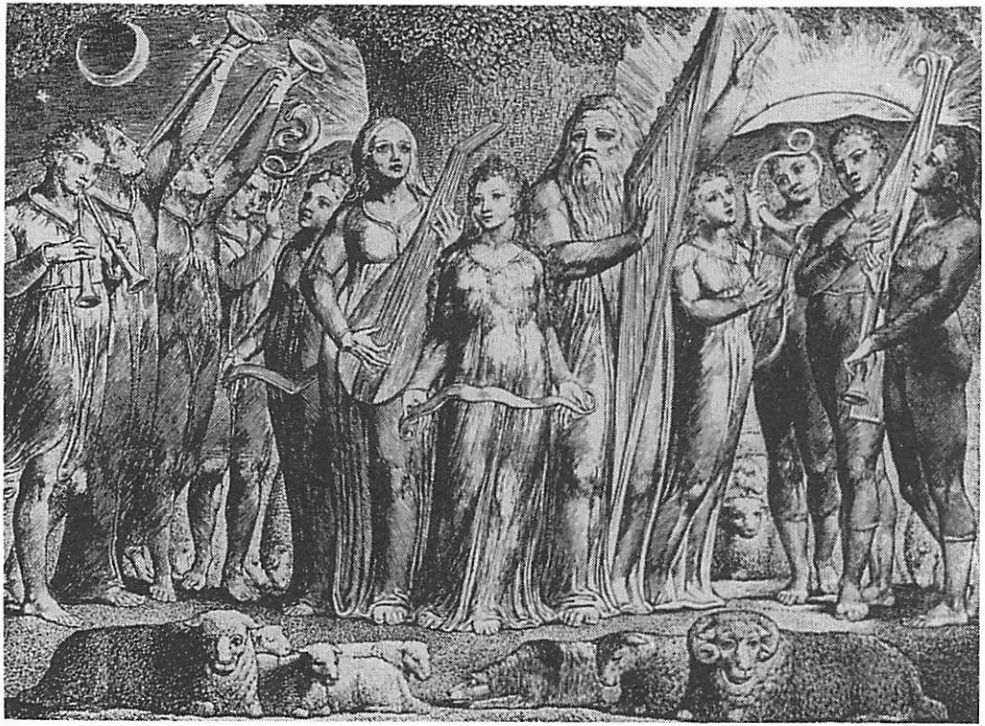
ヨブの祝福
（ヨブ記42：7—17）

○わが僕ヨブ汝らのために祈ろう。（ヨブ四二・八より）
○ヨブその友らのために祈った時、エホバ、ヨブの苦難を転じ、そしてエホバ、ヨブの所有物を二倍に増し加え給うた。（ヨブ四二・一〇）
このようにエホバ、ヨブに対し始めよりも終りを祝福し給うた。（ヨブ四二・一二上）
○全国の中にヨブの娘たちほど美しい婦人は見当らなかった。（ヨブ四二・一五）
○この後ヨブは百四十年生き存らえて、その子らまたその子らとその子と四代までを見た。（四二・一六）

生ける屍のような状態のヨブが、神のみ前に平伏して懺悔し、神に回帰し、且つ彼は議論をした三人の友らのために祈った。神に夫々審かれた三人は神命によって燔祭を献げたのであったが、ヨブの祈りによって罰せられずにすんだ。神に捉えられた者の告白と祈りが人を動かす。またエホバは、友のため執り成しの祈りをしたヨブをその苦難から転じて旧状に倍した境遇に入れた。ヨブは別人の如く瑞々しく復活した。すべての所有物が倍増され、七人の息子も三人の娘も復活して立ち帰った。しかも娘たちは大変な美人となった。ヨブはなほ百四十年生きたという。かくてサタンは完全に負けたわけである。この第四十二章は第一、第二章と大きなコントラスト（対照）をなして輝いている。しかし地上でかくも祝福されているヨブの相は、実は天上の相の投影ではないか。



（ヨブ42：10）ヨブの子らの復活の象徴：魂（女性の相）が肉体（男性の相）に帰る（ブレイク）



（ヨブ42：7—17）ヨブの全家が祝福される（ブレイク）

4月3日

シュラミの女の愛の言
（雅歌1：1―2：7）

彼れその口の接吻（くちづけ）をもて我に接吻せんことを！　げに汝の愛は酒に優り、汝の香膏（にほひあぶら）はその芳香（かおり）妙（た）へに馨（かん）はしく、汝の名は濺がれたる香膏の如し。（雅歌一・二、三上）

我れはシャロンの野花、谷の百合（ゆり）なり。（二・一）

わが愛する者の男子（ものこ）らの中にあるは森の樹の中に林檎のあるが如し、我はその蔭に坐るを欣ぶ、その実はわが顎（あぎと）に甘ければなり。（二・三）

彼の左手はわが頭の下にあり、その右手をもて我を抱く。（二・六）

「雅歌」は原語では「歌の歌」で、諸々の歌の中の最も優れた歌の意。ゲーテが聖書を「書中の書」といったように。ゲーテはこの雅歌を愛読し試訳もした。この雅歌はしかし、その作者、構造、諸説紛々。ルターは王上四・三二のゆえにソロモンの作としている。王者ソロモンが多くの美女を宮殿に抱（かか）えたわけでその一人にこの田園の乙女、シュラミ（タボル山の南西の村落、ナザレの南方）の女も抱えこまれた。しかし彼女の恋仲の牧人（ぼくじん）との愛は逆に深められる。牧人の言はむしろ少ないが、彼女の愛の告白は寄せては返す満潮の波のようにいよいよ迫ってくる。権勢も財富も饗宴も地位も、純なる愛を、シュラミの女と牧人の愛を破ることはできない。愛は最大の力である。恋愛、生命賭けの恋愛はどんな悲劇に終るとも、永遠性を有っている。聖書の中にこのような恋愛歌があることはむしろ当然で、人間性のゆたかな肯定である。詩篇やヨブ記同様、無名の作者！

4月4日

春が来た！
（雅歌 2：8—14）

八 聴け！ わが恋人なり。視よ！ 彼来たる。山を跳び越え、岡を躍り越えて。九 わが恋人は羚羊の如く、牡き小鹿の如し。視よ、彼はわれらの壁の後ろに立ち、窓より覗き、格子より窺ふ。一〇 わが恋人われに語りて言ふ「わが伴侶よ、わが美女よ、起ちて出で来たれ。一一 視よ、冬すでに過ぎ、雨もやみてはや去りぬ。一二 諸々の花は地に現はれ、鳥の囀ずる時すでに至れり。山鳩の声われらの地に聞こゆ。一三 無花果の樹はその青き果を赤らめ、葡萄の樹は花咲きてその馨はしき香気を放つ。わが伴侶よ、わが美女よ起きて出で来たれ。一四 磐間に居り、断崖の匿場に居るわが鴿よ、われに汝の面を見させよ。汝の声を聞かしめよ。汝の声は愛らしく、汝の面は美し。」

シュラミの女はソロモンの幕屋の中に閉じこめられているのだが、もう心は陽春の万物復活のすがたに躍っている。愛人を待つ心は一日たりとも眠ったことがない。

この右掲の一くだりは相思相愛の心の歌としてまことに美しい。恋人を鳩という表現は古今おのづから同軌同調である。はやくそんなところからぬけでて、大自然が春を謳歌しているところへ出て来なさいと牧人は窓越しに呼びかけている。

キリストは「ソロモンの栄華もこの花の一つにも及ばない」といって野の花を指して語った。「われはシャロンの野花、谷の百合」といったこの田舎娘の純情の美よ！

4月5日

彼我一如
（雅歌 2：16, 17）

一六 わが愛する者はわが有、我は彼の有なり。彼は百合の中にてその群を牧ふ。
一七 日の涼しくなるまで。また日影のかたぶくまでに、わが愛人よ、帰り来たれよ。隔ての山々を越えて羚羊の如く、また壮き牝鹿の如くに。（二・一六、一七）

神は愛なり、という。愛そのもので在り給う。愛は愛せられる対象を要する。神の創造のわざは愛のわざである。それ以前に神の分身たる霊界のキリストが即ち独子として神の愛の無比の相手であった。それが地上に降誕したのがイエスであった。神からすべての愛が生ずる。それが恋愛であろうが、親子、兄弟、姉妹、師弟、朋友その他あらゆる人間関係における愛は本来神からのものである。この本源意識を失って、神なきが如くしているところに、愛から生ずるさまざまな問題が発生して、世の末までも混沌として渦巻く。「わが愛人はわが有、我は彼の有」。本当の愛人関係はこのような一如的なもので、我と汝との関係が二にして一なるもの。愛で結ばれた夫婦関係が本来そういうものである。本当の愛は相手のためなら生命を棄てるという棄身の愛である。この田舎娘と牧人の相愛関係はそういう美しい心情、生命賭けの心情から発している。

ベートヴェンは「不滅の恋人」を心の中に有っていた。しかしその恋愛は地上では結ばれずに終った。その手紙の終りに「わが生命、わが一切、お元気で、愛しつづけて！　あなたの愛人の極めて信実な心を見損わぬように。永遠に貴女の、永遠にお互の」と書いた。

4月6日

女性美
（雅歌4：1－5）

一 ああ汝美しきかな、わが佳伴よ。ああ汝美しきかな、汝の瞳は面帕の奥より覗きて鴿の如し。汝の髪はギレアデの山より馳せ降る山羊の群にさも似たり。二 汝の歯は羊の群の如し、三 汝の唇は紅の組糸の如く、その口は美し。汝の頬は柘榴の半片に似たり。四 汝の頸項はダビデの楼の如し。五 汝の両乳房は百合の中に草喰む牝鹿の雙子なる児鹿にさも似たり。（四・一－五より）

恋人の美を牧人は右のように讃嘆している。鴿の眼のような丸い明朗な瞳。ヨルダン川の東方ギレアデ高原の山羊の毛は光沢のある黒色で、この女の長い黒髪を語っている。歯は純白の羊毛のように白く光沢がある、というのである。唇は健康な紅色で、所謂口紅によるものではない。頬は陽光を浴びた美しいざくろの半分のようだという。頸項即ち女の頸が弱々しくなく、健康美をもったものであるのをダビデの楼のようだという。第七番目に乳房をあげているのは、第一番目の瞳と相照応する女性美の象徴としてであろう。

ここで感ずることは天然自然の中で育った女の美を語るのに自然界の美しい動植物を比喩に用いることで、人間の健康美はどこまでも自然と一如の生活にありということである。この両乳房のくだりを援用して、ゲーテは『ファウスト』の三三三二行から三三四二行で、男女の愛と、これを取り持って結婚させる崇高な役割を神様がなさるといったことを謳っている。

4月7日

愛は最大の力
（雅歌 7：11—8：14）

六 われを汝の心におきて印の如くし、汝の腕におきて印の如くせよ。愛は強くして死の如く、熱情は烈しくして陰府にひとし。その焔は火の焔の如く、エホバの焔なり。

七 愛は大水も消すこと能はず、洪水も溺らすこと能はざるべし。人その家の一切の物を悉く与へて愛に換へんとするともいやしめらるべし。（雅歌八・六、七）

これはシュラミの女の詩的な言だ。印、原語ホータームはギリシャ語のカラクテールに当る語で、刻み込まれたものの意で、生れながらの性格をキャラクターというのはそこから由来している。恋人であり新郎を約束されているあなたの心に不滅の印として下さい、と新婦を約束されている乙女が切に願っている。腕に印するとは日本なら文身だろうが、これは腕輪か指輪のことである（エレミヤ二二・二四）。

ただあなたに一身を献げている愛は死を覚悟したもの、熱情は本来嫉妬という語で、旧約では神の愛を「妬みの愛」とも謂う。サタンに奪われては大変という神の熱愛だからである。ここでも「エホバの焔」といっているところに決定的な強さがある。旧約では死ぬと陰府にゆくというのが常識で、死も陰府も同じ表現。右掲、乙女の一連の告白は愛の極限的表現。ソロモンの権勢も誘惑も、この牧人と田舎娘の純愛を動かすことができなかった。雅歌は驚くべく美しい劇的構造の愛の歌である。

4月7日　われはシヤロンの野バラ（雅歌のこころ）

作詞1979・12・20
（歌詞：「カチューシャ可愛や」中山晋平作曲）



1
「われはシャロンに　花咲く野バラ
わが牧人　馳せ来たれ！
我を抱きて　接吻(くちづけ)たもれ。」（f.）

2
「汝れの鳩胸　み霊にみちて
汝れの息吹きは　天つ風
汝れが唇　滴る蜜よ。」（m.）

3
「神にわが魂　一如(いっにょ)となれり
われらもまこと　一つなり
いざや野山の牧場に往かん。」（m.）

4
「われをみ胸に　印(しるし)となせよ
愛の契(ちぎ)りは　とこしへに
死をも突きぬけ　焔と燃ゆる！」（f.）

4月8日

萬象流転
（伝道之書 1：2－7）

招集者（コーヘレス）曰く、空の空、空の空なる哉、都て空なり。（伝一・二－七）

日の下に人の労して作す諸々の労作はその身に何の益かあらん。世は去り世は来たる、地は永久に存つなり。日は出で日は入り、またその出でし処に喘ぎゆくなり。風は南に行き北に旋り、旋りに旋りゆきて、風その旋る処に帰りゆくなり。河はみな海に流れ入る、海は盈つることなし。河はその流れゆく処を指して復流れゆくなり。

これは「伝道之書」の冒頭の句。本書は原典では「コーヘレスの諸言」と謂う。コーヘレスとは「カーハール」集会を司る者、即ち招集者で、司会者、説教者である。ギリシャ語のエクレシアステース、ラテン語のコンキオナトール。この書の場合コーヘレスは特定の人で固有名詞的。

この冒頭言を読んで、連想するのは、あの方丈記の一節「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水に非ず、淀みに浮ぶ泡沫はかつ消えかつ結びて、久しく止まることなし……」の有名なひとくだり、及び平家物語の開巻第一節「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす。驕れる人も久しからず、唯春の夜の夢の如し。猛き者も遂には滅びぬ。偏に風前の塵に同じ。……」である。

自然界も人間界も巡り旋って、諸行無常、盛者必滅、会者常離。萬象萬事流転する。ギリシャの哲人ヘラクレイトスも「パンタ・レイ」萬象は流転する、と言った。儚いという文字が表わしているように、夢の如く消え去る諸行無常を「空の空」といったのは至言。

4月9日

「日の下に新しきもの無し」
（伝道之書 1：8－18）

一・八 萬の言用い尽されて、人なほ言い尽す能はず。目は見るに飽くことなく、耳は聞くに充つることなし。先に有りしものはまた後にあるべし、先に成りし事はまた後に成るべし。日の下に新しきものなし。見よ、是は新しきものなりと指して言うべきものあるや。一四 我れ日の下の諸行を見たり。嗚呼皆空にして風を捕うるが如し。一七 我れ心を尽して智慧と知識、迷妄と無知を知らんとしたりしが、是も亦風を捕うるが如くなるを暁れり。夫れ智慧多ければ忿懣多し、智識を増すときは憂患を増す。（伝一・八、九、一〇、一四、一七、一八）

歴史的事象は一回的なもので全く同じことが繰り返されることはない。これが人間の自由意思の存在する所以である。それでも類型的なこと、類似な現象はいくらでもある。コーヘレスが感じているのはこの観点から歴史の世界と人生を見ているから、萬事は流転して、日の下に新しいものはないと言っている。生起しては消滅してゆく。生れては死んでゆく。問題の鍵は死にある。生活の上の智的判断が増せば社会的不公平に対する憤激が起きるし、知識が増大すれば心配ごとも増えてくる。また疑問だらけ、不可解だらけ。迷妄と無知を悟ろうとしても空莫として風をつかむように空しい。要するに、死の限界をもつ有限界と人間相互の相対界では人生は夢のような空しいものだ。しかし「紀元」を劃する「日の下に新しきこと」が竟に起きた、キリスト・イエスの出現である！

4月10日

萬事に時期あり
（伝道之書 3：1―15）

◎天が下の萬の事に時期あり。萬の業に時期あり。（伝三・一―八）
○生るるに時あり、死ぬるに時あり。
○殺すに時あり、医すに時あり。毀つに時あり、建つるに時あり。
○泣くに時あり、笑ふに時あり。悲しみの時あり、舞踊の時あり。
○石を擲つに時あり、石を集むるに時あり。
○求むるに時あり、失ふに時あり。保つに時あり棄つるに時あり。
○裂くに時あり、縫ふに時あり、黙すに時あり、語るに時あり。
○愛するに時あり、憎むに時あり。戦争の時あり、平和の時あり。

人生万事、夫々の然るべき時期があるとはまことに至言である。それはある時点を意味したり、ある期間を意味したりする。それも個人の性格、資質や、運命、環境によって、その人らしき時点や時期というものがある。それを知る道は、神に祈り求めること、神の啓示にあずかることである。要するに神本位、神主体の生活態度であることが基調となると、おのずから、然るべき時点、時期を直覚するようになってくる。第十一節に「神の為し給うところは皆その時期に適して美しかり」とある通りで、神の声、神の業に即し、従ってゆくときに、大切な瞬間をつかみ、それに処してゆくようになる。具体的相手はキリストであり、聖書を身読していると、ひらめきが来て、時点、時期を知るようになる。

4月11日

畏神遵法
（伝道之書11：12）

○汝の糧食を水の上に投げよ。多くの日の後に汝ふたたびこれを得ん。（伝一一・一）

◎汝の若き日に汝の創造主を記えよ。（一二・一上）

○塵はもとの如く土に還り、霊はこれを賦けし神に還るべし（一二・七）

○事のすべての帰する究極を我ら聴かん、神を畏れ、その誡命を遵れ。これは萬人の本分なり。（一二・一三）

○糧食は人間生活の具体的な必要欠くべからざるものである。そのパンを水の上に投げよ、とは何を意味するのか。それを飲んで食べるのは鳥か魚か。とにかくおのれの生命の糧を恵んでやれ、と端的に解する。神の言は霊の糧である。この霊の糧なる神の言、聖書の生きた聖言を大いに人々に伝えよと伝道をここでコーヘレスが唱道していると見る。なかなか人々はこれを受けとらない。無駄が多いのだが、倦まず、撓まずやれ、という。その霊の糧の果たる天国的集団が生じよう。それが報いである。

○天地万物の創造主を魂の源泉として憶えて、創造主の力で創造的な人となれ。

○肉体は塵の如く土に還っても、霊魂は神に還る、しかも霊体を衣せられる。

○コーヘレスは、人間の相対界は要するにそれ自体としては空の空だといっている。これが伝道の書の基調だが、この基調に次元のちがった変調がひびく。それは神を畏れ、神に平伏し、聖言、霊法に遵うという天来の変調で、これですべてが空でなくなる。ハレルヤとなる！

4月12日

宗教・道徳・学問
（箴言1－7）

◎実存主を畏るるは知識の本源なり。（箴一・七上）
○わが警告に従ひて回帰せよ！視よわが霊を汝らに濺ぐ。（一・二三）
○慈愛と信実とを汝より離さざれ。これを汝の心碑に記せ。（三・三）
○汝心を尽して実存主に信頼せよ、おのが明智に倚る勿れ。（三・五）
○神は嘲笑者をあざけり、謙る者に恩恵を与え給う。（三・三四）
○右にも左にも偏る勿れ、汝の足を悪より逸れしめよ。（四・二七）
○それ誡命は燈火、律法は光、教訓の懲治は生命の道なり。（六・二三）

日本の教育では、よく徳育、智育、体育といったことを言う。しかしイスラエル民族の教育の根本は宗教である。キリスト教国もそうである。日本の教育一般の弱点は宗教心を養うことを欠いている所にある。私は東大教養学部に於て聖書を読まなければ西欧の文化の根本精神はつかめないことを力説した。独協学園に於ては「敬天愛人」を教育の第一項に掲げて貫いた。道徳と学問の根柢は畏神愛神の宗教にあることを銘記せよ、である。

この「箴言」という智慧文学に於て、畏神が知識、学問の本源であることを明言している。ユダヤ系の人に秀れた学者が輩出しているのも、こういう魂の構造から来ている。右掲の諸句を見てもその自明の理がうなずける。「慈愛」（愛）と「信実」（義）は神の本質として捉えられている。これは新約聖書まで貫いている。

4月13日

畏神に天道あり
（箴言 8－15）

○実存主を畏るるは悪を憎むことなり。我は傲慢と驕奢、悪道と虚偽の口を憎む。（八・一三）
○実存主を畏るるは智慧の根源、聖者（神）を知るは聡明なり。（九・一〇）
◎怨恨は争闘を起こし、愛はすべての罪過を掩ふ。（一〇・一二）
○実存主の道は直き者の城にして、悪を行ふ者の滅亡なり。（一〇・二九）
○真実の唇は永遠に保つ、されど虚偽の舌は瞬間たるのみ。（一二・一九）
○智慧者の教法は生命の泉なり、死の罠を脱れしむ。（一三・一四）
○実存主を畏るるは生命の泉なり、死の罠を脱れしむ。（一四・二七）

箴言集は一般に処世の道を説く智慧文学とされているが、その処世の道が天道に即するところにねらいがある。いかなる民族も個人も、この天道に反しては滅びる。その天道は畏神の道である。傍若無神的な歩き方生き方をしている現代文明文化人は心を虚しうして、時に魂の在り方を自らに問うべきである。自主の、自由の、というところに傲慢、身勝手がのさばる。民主主義は社会の理念としては結構だが、個人の魂の在り方が畏神を根抵としていないと、自由が我欲我執の温床となる。愛も義も自由もすべて神からくる、神の愛、神の義、神の自由に託身するところに、人を愛し義を生き、自由の法を行ずる源泉がある。然り神の「愛はすべての罪過を掩ふ」。

4月14日

七転八起
（箴16—25）

◎驕傲（たかぶり）は滅亡（ほろび）に先だち、霊の誇りは蹉跌（つまづき）に先だつ。（一六・一八）
○己が霊を治むる者は城を攻め取るに優る。（一六・三二）
○愛の追求者は人の過誤（あやまち）を蔽ふ、（一七・九）
○貧者を憐む者は神に貸すなり。その施（ほどこ）しは神償ひ給ふ。（一九・一七）
○父母を罵（ののし）る者は、その燈火暗闇（ともしびやみ）の中に消ゆべし。（二〇・二〇）
○人の魂は神の燈火なり。五臓六腑を洞察する。（二〇・二七）
○義人は七度び倒るるも起き上がる。（二四・一六）
○おのが霊に抑制無き人は城壁なき破れたる城なり。（二五・二八）

○驕慢が滅亡の前ぶれであることは歴史が証明している、個人でも国家でも。
○自己との戦いは最難の戦、自己に勝つ事は最大の勝利、とは哲人カントの言であった。
○愛を愛する人は深いゆるしの心をもっている。
○困窮の人を具体的に助ける愛は神に祝福されるのである。
○モーゼの十誡（言）にある如く、父母を敬愛しないと、自分が地獄の人になる。
○魂は神の燈火！　キリストが「汝は世の光なり」と。キリストを体受して神の光たらん！
○七転八起！　顕いても転んでも滑っても、神の力で必ず起き上って前進あるのみ。
○人格の中心たる霊よ神のみ前に平伏せ、然らばみ力によって霊法を歩み得む。

4月15日

神秘と栄光
（箴言26—30）

○わが奇すしとすもの三あり、否四あり、わが識らざるものなり。
即ち、空を飛ぶ鷲の路、磐の上を這ふ蛇の路、海の真中を往く舟の路、男の女に逢ふの路是れなり。（三〇・一八・一九）
○艶麗はいつわりなり、美色は気息の如し、唯だ神を畏るる女は讃むべき哉。（三一・三〇）

○不思議と思われるものは、無數にある。大宇宙から小宇宙に至るまで、むしろ不思議でないものはない。神は絶大な芸術家であり給う。その創造のみ業はたびたび驚嘆のほかはない。箴言の作者はここに面白い現象を挙げたものである。たしかにソロモンの原作も多々あろう。特に男が女と逢い引きする路は神秘的だという。それは祝福されて結婚にゴール・インするであろう。恋路は神秘である。運命から、環境から、それが悲劇になることがむしろ多い。偉大な芸術の花が咲く。ダンテ然り、ゲーテ然り、ベートベヴェン然り、ロダン然りである。しかし恋路を踏み越えた神秘の路が一つ残されてある！
○生まれながらの自然のすがたに女性美はある。神を畏れ、キリストに愛されて、神的な愛にあふれている女性は美しい。美しき魂を映し出している眼眸が美しい。霊肉渾然たる美である。神の栄光である。神の栄光はキリストに、キリストの栄光は男に、男の栄光は女に現われるとパウロがいみじくも道破した。（コリ前一一・三・七）

4月16日

自己不定の道
（詩篇第1篇）

一　恵まれたる哉、この人！　この人は悪の徒の謀略に歩まず、
二　罪びとの途にも立たず、嘲者の座にも坐らず、
三　反って、神の法にこそ、その歓喜があり、
四　聖法をば憶う昼も夜も。
五　その存在は木にぞ似る、
　　水の流く辺に植えられて、
　　その期到らばその実を結び、
　　その葉もまた凋落むなき。
六　かるが故そのなすところ皆栄えゆく。
　　然かはあらず、かの悪の徒は。
　　むしろ似る、風の吹き出る籾殻に。
　　されば悪の徒は審判に立ち得ず、
　　また罪びとは義人の集いに。
　　宜べ、神は義人の道を知り給う。
　　されど、悪の徒の途は亡びる。

自然界には物理的法則がはたらいている。人間界には道徳の法則がある。これを実践するのが善であり、これに反くのが悪である。人間の実際生活には善悪が錯綜している。この悩みの次元を突破させるのが宗教の力である。神の法とその力によって生きる道である。神の法は具体的には神の意志である。神の意志を祈りで聴き自己の意志を否定する。信仰とは神に然りと告白し、自己を否とすることである。この詩篇の奥義は、かくて神の意志なる霊法を歓んで神の力に在って生きる道である。

4月17日

求神の道
（詩篇第14篇）

一　愚者が心の中で言った「神は無い」と。
二　彼らは腐れ果てて、悪行をなす。善を行う者は絶えて無い。
三　神は天から人の子らを瞰下して、
若しや求神の賢者ありやと見給うに、
どれもこれも背いて、悉く堕落している。
善を行う者は絶えて無い、一人だに無い。

（詩篇一四・一―三）

茲に言う「神は無い」とは、所謂無神論の如き智的な判断ではなく、実践的に神の存在を無視することで、それが愚者なのである。権力者から庶民に至るまで、世は不信不義の国家社会で、預言者らが神に立ち帰ることを叫んでも空しい国家滅亡に近き頃の状況。

求神の者が愚者に対する賢者であるが、神が天から瞰下し給うにそういう求神の者が一人もいない。形式的な或は観念的な信者はいるであろう。併し真の求神者、真の善行者が一人だに見当らないという。相対的な意味では賢者も義人もいるだろう。併し真の神意体現者たる義人は一人もいない。使徒パウロが新約の世界で、キリストの他に義人は一人もいない、と告白したとき、この詩篇を引用した。我々はいづこに求神をするか。神意を完全に体現したイエス・キリストに於てこそ求神ができるので、福音書のイエスに於て神を見るのでなければいづこにも神は見えない。「我を見し者は父（神）を見しなり」とはイエス自身の言である。彼だけが絶対次元的義人である。

4月18日

至福
（詩篇第16篇）

五　神こそはわが嗣業、わが酒杯の分前である。
あなたはわが運命を支えて在り給う。
六　準縄はわがために楽しき地におちた。
げに嗣業はわが上に善福となった。
七　わがため謀り給う神を讃めまつる。
夜な夜なわが腎はそのことを諭す。
八　絶えず私はエホバをわが前に在らしめる。
彼わが右に在ます故私は断じて動かされない。（詩・一六・五―八）

契約の櫃を中心としての神事、祭事が祭司アロンの一門及びレビの支派の天職であった。イスラエル十二支派（族）の他の支派の如く彼らには所領がなかった。祭司は什一の献物にあづかる特殊恩恵に生きていた。しかし真の祭司精神は、執成の祈りを以て人々を神の恵みにあづからさせることにある。そのためには、彼自身が神と一如の祈りの人でなければならない。そのとき彼は「神こそはわが嗣業、わが酒杯の分前である」、と告白する境地、即ち神はわが有わが酒杯に溢るる葡萄酒である、といって、神の生命に全的にあずかることになる。新約的にはキリストが酒杯であり、酒は聖霊である。

この詩の作者は祭司の本質を謳いつつ、自分が祭司の境地に入っている。ルターの唱えた、すべての基督者は祭司であって、職業的祭司は不要だという消息を謳っている。

4月19日

天然の神秘
（詩篇第19篇前半）

一　諸々の天は神の壮厳をあらわし、
二　蒼穹は聖手の業を示している。
三　昼は昼に秘語を注ぎ、
　夜は夜に秘智を告げる。
四　弁なく、言なく、
　声こそ聞こえね、
五　その絃音は全地にゆきわたり、
　そのことばは地の極にまで。
　陽のために彼は幕屋を設け給うた。
六　陽は新郎の如くその天幕を立ち出で、
　勇士の如く欣然と馳場を駈けてゆく。
　諸天の極みから彼は現われ、
　その極にまで巡りゆく。
　その暖熱から隠れあるものとてはない。
（詩一九・一―六）
〔原文は一九・二―七〕

詩篇第十九篇は前半に於て神の天然を謳い、後半に於て神の霊法を告白している自然界も人間界も神中心であって、神の創造の業と、神の霊道を讃えてやまない。

諸々の天が神の壮厳なる創造の業とその栄光を現わしている、この神秘極りない大宇宙を、神に圧倒されて讃嘆している。

しかもこの大自然を通して神語が注がれ、神知が告げられている。言なき言、声なき声を詩人は聴く。

そして太陽に於て新郎の英姿を連想し、太陽の光熱に於て神の愛と生命的な恵みを体感して讃美している。

4月19日

（詩）最大の芸術家

（詩19：1－6）
作詩：1983.9.6
歌調：一高寮歌（大平洋の波の穂に」
（沢村寅二郎原曲）

最大の芸術家

1
涯しも知れぬ大宇宙
　銀河の数は何億か
何億光年走るとも
　極まりなけれその時空
夜空を仰ぎ言なし
　神のみわざの神秘さよ

2
太陽系のこの地球
　その天然のゆたかさよ
春夏秋冬めぐりゆき
　花咲き匂う野山あり
小鳥は舞いて昆虫すだく
　神のみ園の美しさ

3
椿に梅と桃の花　海棠、連翹、山桜
朝顔、菫、百合、桔梗、尾花よ、萩よ、藤袴
撫子、葛よ、花郎花、宇宙の影かコスモスよ

4
創造のわざ萬象の　いやはての傑作そは何ぞ
神の映像人の影　文明文化極まりて
芸文の華咲き香る　芸術の源は神と知れ

5
大自然には国境なし　幼児らにも国境なし
いずれの国も神の属　自国の使命自覚して
大指揮者たる神に拠り　交響楽を奏でずや

読者は本巻の「詩篇」の諸篇を読まれるときに、「小池辰雄著作集」第四巻『詩篇珠玉集』を御参照されますように。ここに御助言しておきます。

4月20日

人生の歌
（詩篇第23篇）

一　神こそはわが牧人、私は何も困らない。
二　若草の野に彼は私を臥させ、
憩いの水汀に伴れゆき給う。
三　わが魂を彼は甦らせ、
義しき道に導き給う、聖名のゆえに。
四　縦い死の蔭の谷を渉るとも
私は禍害を恐れない、汝が共に在ますから。
汝が苔、汝が杖、それが私を慰める。
五　汝はわが眼のあたりに筵を備え給う。
わが諸々の敵前で。
汝はわが首に油をゆたかに注ぎ給う。
ああわが酒杯は溢れた。
六　誠に善福と恩恵とが私に追い迫る、
わが生命の日の限り。
かくて私は神の家に住む、
日に日が続き果てるまで。

詩篇全百五十篇の代表的な詩篇で「ダビデの絃歌」と題してある。原作はダビデであろう。

イスラエル人の生活は牧人に導かれている羊群の如くであったから、この起句は正に民族の歴史及び個人の生涯をズバリ告白している。第二、第三節は天国的現実。第四節は地獄的現実も神の親しい力強い護りで突破できる消息である。第五節、第六節は煉獄的現実に於て、神が諸々の敵前で聖霊の油を注ぎ、我という全身的酒杯が神の生命力で溢れる。だから地上にあって天的な恵福に追跡されつつ前進し、神の幕屋たる家に生涯住んで神の国に凱旋する。ハレルヤ！

4月20日　（詩）人生の歌（詩23に因みて）

主はわが教人　作詞：1979．12．27　歌調：S．239「さまよう人々」

主はわが道伴れ　作詞：1976．2．21　歌調：S．527「わが欲び」

1わが主キリストは　わが牧人
若草の野辺に　われを臥させ
憩いの水汀に　伴れゆき給う
これこそ聖国の　すがたなれや

2たとい死の陰の　谷を往くも
我れに恐れなし　汝れは我れと
共に在まし給う　汝れの情け
汝がみ霊こそは　わが生命ぞ

3わが主はわがため　仇敵の前に
み霊の油を　そそぎ給う
敵をも愛する　心こそは
聖霊より出づる　力なれや

4恩恵と真理は　聖霊なれば
我らの中にぞ　入り来たれる
これぞ永遠の　生命なれば
われらは聖霊の　幕屋たれや

1わが道伴れ　わが情け
わが旅路の主よ
なやみにも　苦しみにも
わが力の主よ！

2わが道伴れ　わが情け
わが天路の主よ
山を越え　谷を渡り
偕に進み給う！

3　わが道伴れ　わが情け
世の救いの主よ
わが身をも　わが魂をも
捧げつつ進まん！

4わが道伴れ　わが情け
旅路の峠を
いくたびも　越えに越えん
天翔ける日まで

4月21日

神はわが光
（詩篇第27篇）

一 神（エホバ）はわが光、わが救！　私は誰をか怖れよう。（詩二七・一・五・一四）
五 神はわが生命（いのち）の力、私は誰をか恐（こわ）がろう。
げに彼は災禍の日に、その幕屋の中に私を潜（ひそ）ませ
その幕屋の奥に私を匿（かく）し、私を岩上に登らせ給う。
一四 神（エホバ）を待望め、雄々しかれ、汝（な）が心を堅うせよ、神（エホバ）を待望め！

詩篇第二七篇から三節を掲げた。波瀾萬丈の生涯をおくったダビデの絃歌と見るにふさわしい内容の詩である。読者は是非この詩全体を読んでいただきたい。神はわが光、わが救！」どんな暗雲が鎖（とざ）そうとも、それを照破して臨むのが神の光である。「わが敵人（あだびと）よ、我につきて喜ぶなかれ。我れ仆（くつがえ）るれば起きあがる。暗（くらき）に居れば、エホバわが光となり給ふ」とは預言者ミカの証言（ミカ七・八）。神の光を光とした驚くべき人がいた。キリストである。「諸々の人を照らす真（まこと）の光ありて世に来たれり」（ヨハネ一・九）と。その光なるキリストが、「汝らは世の光なり」（マタイ五・一四）と宣言している。その現実は何か、キリストという光体をわが衷に宿すときの現実である。それがまた救の現実である。そこには怖れがない。怖れどころか、ひとに光を頒つことが可能となる。敵をも救う生命の力が溢れるのである。旧約の言は新約のキリストの光を投じて読み入るとき、真に聖句が現実となってくる。幕屋も岩上もみなキリストである。「言（ロゴス）は肉となって我らの中に幕屋を張った」（ヨハネ一・一四）とある通りだ。「神を待ち望む」とは、未来を現在化して信頼することである。現前のキリストに在って雄々しからざるを得ない。



（詩27その他）ダビデ王：絃歌の詩人

4月22日

罪のゆるし
（詩篇第32篇）

一　恵福れたる哉、過をゆるされ、罪を蔽われた者！
二　恵福れたる哉、神これに不義を負わせず、その魂にいつわり無き人！
五　わが罪を汝に告げ、わが過を匿さなかった。
　私は言った「わが過を神に告げよう」と。
　それで汝は赦して下さった、わが罪なる不義を。

この詩篇第三二は、ルターの謂う「悔改の七つの詩篇」即ち六、三二、三八、五一、一〇六、一三〇、一四三の中の一つである。

恵福なのは、神がわが罪過を無条件にゆるして下さる一事である。万人は罪びとである。万人は我執者だからである。神がわが不義即ち神に対する信愛関係を破る罪を私に負わせず、自らこれを負ってゆるして下さる。何たるゆるしの恵みであるか。人間は自己を弁護し、弁解しようとする。そこに「いつわり」がある。「いつわり」とはそれゆえ、自分が我執者であること罪びとであることを全的に自認し告白しないことなのである。単なる虚言のことではない。あるがままのおのれを神のみ前に告白する人が「いつわり無き人」なのである。そのような砕けたる魂を神は無条件にゆるし給う。それは具体的にはキリストの十字架の贖罪によってである。アウグスティヌスは死の床の壁にこの詩の第一、第二節を掲げて感謝の熱涙を流した由である。ダンテは「浄罪篇」第二九歌の劈頭、レーテの岸辺でこの詩の第一句「恵まれたる哉、罪の蔽われたる者！」と歌う美女の声を聞いた。

4月23日

信仰の凱歌
（詩篇第46篇）

一 神は我らの避所（さけどころ）また力、
なやみの時の強き助けぞ。
二 されば我らは怖れない、地は変り
山々は海の最中（もなか）に揺（ゆる）ぎ落つとも。
三 その大水轟（とどろ）きて激（たぎ）らば激（たぎ）れ。
その漲（みなぎ）りにより山々は震（ふる）はば震へ。
四 河ありてその諸流（ながれ）神の都を、
主高者（いとたかきもの）の聖き住居（すまい）を喜ばす。
五 民らは騒ぎ、国々は動いた。
神その声を出だすや、地は崩れた。
六 万軍の神（エホバ）は我らと共に在る。
ヤコブの神（エロヒーム）は我らの高き巌（いわを）である。
七 来りて見よ！　神の聖業（みわざ）を。
エホバ
彼は地に驚くべきみ業をなした。
八 「汝鎮まれ！　我れの神たるを知れ。
我は国々にまた全地に崇められん。
一〇

東方の猛禽アッシリヤが西方の巨鰐エジプトと雌雄を争わんとした時、ア王センナケリブの大軍がエルサレムを攻囲したが、預言者イザヤの神信頼とヒゼキヤ王の熱禱を嘉し給うたエホバはア王の陣営に一夜にして殲滅的打撃を与えて敗退せしめた（列王下一八、一九。イザヤ三六、三七参照）。このような史的背景はこの詩に最も相応しい。しかもこの詩句はイザヤ書の詩句と相照応するので、作者はイザヤかと思われる。

またこの詩篇に基づいたルターの "Ein' feste Burg ist unser Gott."「われらの神は堅き城なり」。讃美歌二六七「神はわが櫓」参照。またアイザック・ワッツの "God is the Refuge" 讃美歌二八六参照。

4月24日

砕かれた霊魂
（詩篇第51篇）

一 神よ、汝が愛によって私を憐み
　汝が豊なる憐みにてわが罪を消し給へ。
九 み顔をわが罪から隠し
　わが不義のすべてを消し給へ。
一〇 ああ神よ、清浄心をわが為に創造り
　不動霊わが衷に新たに起し給へ。
一一 私をみ前から棄て給うな、
　汝が聖き霊を私から取り去り給うな。
一二 さらば自由の霊は私を支え給う。
　汝が救いの喜びを私に回復し給へ
一三 過誤を犯した者に汝が道を私は教えたい。
　さらば罪人は汝に立ち帰る。
一七 神への犠牲は砕かれた霊魂！
　砕かれた、破れた心を
　神よ、汝は軽しめないで下さい！

本篇の詞書には「楽長に托したダビデの絃歌。ダビデがバテシバと通じた頃、預言者ナタンが彼の許に来た時に」とある。サムエル後書第十一、第十二章参照。正にこのような不倫の事件を背景にしたダビデの神の前に砕けた心から神に祈り求めた証しの詩としてふさわしいものである。

イエスは女を見て色情を起こしたら、姦淫したも同然だと言った。どの男がこの言に堪え得るか。姦淫の女にイエスは、「私も汝を罪しない」といってゆるしてやった。「放蕩息子」のはなしで、さんざん悪いことをした揚句心砕けて父のもとに回帰して来たぼろぼろの弟息子を無条件にゆるした父の心はイエスの心であった。

4月25日

神に飢え渇く
（詩篇63篇）

一 ああ神（エロヒーム）よ、あなたはわが神（エール）！
私は切にあなたを求める。
わが魂はあなたに渇く。
わが身もあなたを恋い慕う。
水なき乾（か）れた痩（や）せ地のように。
三 汝（な）が愛は生命にもまさるので、
わが唇はあなたを讃美する。
五 わが魂が髄と脂（あぶら）で満たされる如く、
歓喜の唇でわが口は讃える。
六 わが床の上であなた（こ）を想い起こす、
夜（よ）を護（も）るなべに汝（あなた）を冥想する時に。
七 そは汝がわが助けで在り給うたので、
汝（な）がみ翼の蔭で私は歓呼する。
八 わが魂はあなたに追（し）いすがる、
汝（な）が右の手は私を確かと支えた。

（詩六三・一、三、五、六、七、八）

原文の第一節は「ダビデの紘歌、ユダの曠野にいた時の。」とあるので、ダビデがサウル王に追跡されてエンゲデの原野にあった頃の背景にふさわしい詩である。

ダビデは神に愛された選びの人であった。深い憎と烈々たる意志と豊かな智慧を兼備した全人的な人物であった。鹿が渓川の水を慕い喘ぐように神を慕った。この第一節（原文第二節）はよくその身心渾然たる求めを表はしている。我らはキリストをこのように慕はないではいられないのが本当の信仰否信交なのである。人間の文化文明で心がみたされていると思っている人には、この愛慕は出て来ない。愛慕の源は、キリストの十字架・復活・聖霊の絶対的な愛に圧倒される事態である。キリストの愛のみ翼の蔭であり、神・キリストの力強い聖手を通して生命が流れ入るから疲れを知らぬことになる。

4月26日

「ただあなただけ！」
（詩篇第73篇）

一 神は恵み深い哉！
　イスラエルに、心の清き者に対って。
二 だが私は、わが脚は躓めくばかり、
　わが歩みは滑って転ぶも同然。
三 そは私は驕る者を妬んだり、
　悪者の平安を見たりするから。
四 彼らは嘯く、「神がどうして知ろう、
　至高者に悟りがあるか」と。
五 終に私は神の聖所に住って
　彼らの終末を究めんとした。
六 彼らはいたく破れよう、瞬く間に。
　彼らは絶え果てよう、畏懼の為に。
七 天上天下誰をか慕おう。
　ただあなただけ！
八 わが身わが心は衰えるとも、
　神は絶えずわが心の磐石、わが嗣業。

高慢なる者、貪欲なる者、強暴なる者、そういった連中がわが代の春とのさばる世の中である。彼らは傲然と声を放って言う、「神がどうして知ろう、」と。一切の幸福は彼らの掴にするところのようである。そのためにわが魂は蝕まれ、わが雙脚は蹉跌たらしめられる。こうなるとこの現実にうち勝つためには次元のちがった処へ身心を投げ入れるに如かずと思った。「あなた！」と全存在を以て呼びかけ得る唯一者が在る。「わが磐石、わが嗣業」は「あなた」である。この世がどんなに矛盾と不合理とに満ちても、然り「私」がどうなっても、なほ希望を托し得る者は、「天上天下、あなたを措いて私の慕う者はない！」この私にとっての「あなた」はキリストである。読者よ、「私もそうです」ですか。そんなら嬉しいです。

4月27日

葡萄樹
（詩篇第80篇）

一 イスラエルの牧者よ、傾聴し給へ、
羊群の如くヨセフを導く者よ、
ケルビムの上に坐する者よ、
光を放ち給へ。
二 神よ、我らを還し給へ、
み顔を輝かし給へ、
さらば我ら救はれん。
八 葡萄樹をエジプトから汝は移し、
諸国人を追いのけてこれを植え給うた。
九 汝は樹の前を整え、その根を根づかせ、
一〇 これを国内に蔓延らせ給うた。
山々はその蔭に蔽われ、
一一 神の香柏はその蔓枝にからまれた。
一二 その樹はその枝を海にまで伸べ、
その若枝を河にまで伸ばした。
一八 さらば我らは汝から離れ去らず。

アブラハム、イサク、ヤコブ（イスラエル）、ヨセフという父祖たちの名は即民族の名でもある。遊牧の民イスラエルの神は牧者に比えられている。ケルビムは契約の櫃の両側から羽を伸ばして櫃を被っている天使で、神の御座の象徴である。「神よ光を放ち給へ」と叫んでいる。

「我らを還し給へ」、この祈りは、神の本願にすがる祈りである。運命、環境をひるがえして神に還帰せしめ給え、であって、み力に全托するこの祈りは聴かれる。ドイツの詩人ヘルダーが「全世界がある一人の子を退けても、母はその子に全世界となる」といったが、キリストの救はこのような救だ。

葡萄樹はイスラエル民族のこと。イザヤ書第五章とヨハネ福音書第十五章を是非参考して下さい。

4月28日

力より力へ
（詩篇第84篇）

一 いかに愛すべき哉、汝が帷帳は！
二 万軍のエホバよ！
わが魂は絶えいるばかりに
エホバの大庭を慕い、
わが心わが身は活ける神に叫ぶ。
五 その力あなたに在り
その心シオンの大路にある者は
さいわいなる哉！
六 彼らはバーカーの谷を過ぎるときも、
そこに泉を湧きたたせ、
また前の雨は
恵みをもって之を被った。
七 彼らは力より力へ進み
遂におのおのシオンに達って
神にまみえる。

この詩は巡礼の歌で、神殿はバビロニヤ捕囚からエルサレムに帰還して、五一五年に再建された第二神殿のこと。帷帳とは神殿の中の幕屋のこと。第二節は、わが魂、わが心、わが身が、即ち全存在が活ける神を慕ってやまない、という実に切々たる宗教的情熱で、神殿に臨在する神、否実に神御自身が活ける神殿という現実。シオンはエルサレムの丘、神の都の大路は天国の徴。

「バーカーの谷」とはベカの樹の生えている水のない谷のことで、涙の如く樹脂が滴るので語呂からも「涙の谷」と訓みかえたりする。苦難の人生路に沿って泉を湧き立たせる神の恵みを茲に謳っている。天来の力から力へと人生路を前進して、天のシオンを目指して歩き貫く帰天の旅こそ人生。

4月29日

戦闘の幕屋
（詩篇第91篇）

一「至高者（エルヨーン）の隠れ場に坐する者こそ
　全能者（シャッダイ）の蔭に宿るなれ。」
二わが避所（さけどころ）わが城わが依頼むわが神よ。
四「その翼をもて汝（なんぢ）を被い給うから
　彼の翼（エメツ）の下に汝は隠れる。
一〇彼の信実は小盾、大盾。
　悪しきこと汝に至らず。
一一禍害（わざわい）汝が幕屋に近づかじ。
一二そは御使たちに命じて
　彼は汝が道（な）すべてに於て
　汝（なんぢ）を護らせるから。」
一四「彼れ我を愛慕したので我は彼を救はう。
　彼れわが名を知るがゆえに
　我れは彼を高きに揚げよう。
一六長寿をもて彼を満ち足らわせ、
　わが救済（すくい）を彼に証示（しめ）そう。」

この詩篇九一は詩篇四六の姉妹篇と見て好い。上掲の二節は詩人の言。一、四、一〇、一一は天使の言、一四、一六は神の言。

天使の言は何とたのもしい執成しではないか。宗教の奥義は、神を隠れ場とし、その翼の蔭に宿り、神の中に自分を置くことにある。地上の幕屋に在りながら、幕屋が神の翼となるのである。そこには神の力がかかっているから敵から護られる。敵は勿論サタン的勢力である。神・キリストは絶大なる力をもって護り給う。

神・キリストを愛慕してやまず。聖名は直ちに力である。み翼に乗せて高きに揚げ給う。使命のある限り長寿を与え、聖名の、福音の証者たらしめ給う。救済は聖名のためであり、伝道のためである！

4月30日

旧約の福音
（詩篇103篇）

一 わが魂よ、神（エホバ）を讃めまつれ。
わが五臓六腑よ、聖名を讃美せよ。
二 彼は汝（な）が不義のすべてをゆるし、
汝が病患（やまい）のすべてを癒し給う。
三 神（エホバ）は憐みと恵みに溢れ、
怒ることおそく、慈（いつく）しみ豊かである。
一〇 彼は我らの罪なりに我らをあしらわず、
我らの不義なりに我らに報い給わない。
一一 東が西から遠く隔（へだ）たるように、
彼は我らの罪過を我らから遠ざけた。
一三 父が（エホバ）その子らを憐れむように、
神（エホバ）は彼を畏れる者を憐れみ給う。
一七 神（エホバ）の愛は永遠から永遠に畏神者の上に、
その義は子らの子らに及ぼう。
二一 神（エホバ）を讃美せよ、その万軍よ、
その聖意を行う奉仕者よ！

この詩篇第一〇三は、ある意味で詩篇全一五〇篇中の最大なるものとも言い得るほど福音的である。地獄的なやみの第一〇二に対してこの詩篇は天国的である。それはイザヤ書第三四と第三五章の闇と光の如くロマ書第七と第八章の死の苦しみと生の歓喜の対比の如くである。

神の讃美は心魂と五臓六腑、即ち全身的なものであれ。神は一切の不義を無条件にゆるし、どんな病患も根源的に癒し給う。それは全身を神・キリストの中に投入するときに！　驚くべき聖霊のはたらきを体験させられる！

神・キリストの愛は不滅！　キリストの義を与えて下さる。そのめぐみを身証して子らにつたえよ。天の万軍が味方だ、聖意を体現せん、贖れた無者として。

5月1日

出エジプト
（詩篇114篇）

一 イスラエルがエジプトを出で、
ヤコブの家が他言（あだし）の民を離れた時、
二 ユダはその聖所となり、
イスラエルはその所領となった。
三 海は見て、逃げ去り、
四 ヨルダンは後（うしろ）に退いた。
山々は牡羊の如く躍る、
丘陵は羔の如く。
五 海よ、何でおまえは逃げ去るか。
ヨルダンよ、何で後に退くか。
六 山々よ、何で牡羊の如く躍るのか、
丘陵よ、何で羔の如く。
七 地よ、主のみ前に、
ヤコブの神のみ前に震えよ。
八 彼は岩を源泉に、
小石を水源に化し給うた。

信仰の英雄モーセによる出エジプトはイスラエルの歴史上劃期的な出来ごとであった。紅海をあのようにして渡った。そして曠野の旅ではマナの糧で飢えを凌いだ。岩からは泉が流れた。ヨシュアによるヨルダン渡河も不思議な渡り方となった。神の力で曠野の旅をした揚句カナン入りをした事実を全身躍るが如き心境で一気に詠っている。だから山々が躍って見えた。

出エジプトは、我々にとっては出我である。我を立ち出でて神・キリストに祈入する。そのとき神の「聖所」となる。聖霊の幕屋となる。その転換の焦点はキリストの十字架である。出我させる力は聖霊である。全的に脱我している根源現実である。

5月2日

私は愛する
（詩篇116：1，8，16上）

一 私は愛する！　まことに神（エホバ）は聴いて下さる、わが声を、わが願いを。
八 寔にあなたはわが魂を死から、わが眼を涙から、わが足を転倒（たおれ）から救い給うた。
一六上 私は願う、神（エホバ）よ！　私があなたの僕たることを！

この詩の冒頭は、ただ「私は愛する！（アーハブティー）」と力強く叫んでいるだけだ。珍らしい断言だ。「神は愛なり」と謂う。神の愛、キリストの愛に圧倒されると、その愛が全身に漲って「私は愛である」となる。即ち「私は愛する」となる。こういう無条件の愛は絶対の恩恵に因る告白である。神の愛の内容は同節後半と第八節である。

キリストは贖罪愛と復活の生命愛と聖霊愛を以て私たちを圧倒し給う。「わが愛に居れ」と言い給うたキリストの中に投身せざるを得ない。愛の火花だ。かくて我々も「私は愛だ」と告白できるようになる。愛は最大の力だ。この詩篇の冒頭のこの一言がこの詩篇の全体である。ところで私もこの第八節のような体験をした。

一九二一年の秋、舎兄政美が北京で仆れた。看病も空しかった母と次兄が遺骨を抱いて黄海を渡った。その船上で多年の過労と悲歎のため母は失明した。遺骨を抱いて帰って来た失明の母を迎えて、わが魂は死に面し、わが眼の涙は涸れ、私は畳に平伏した。天地晦冥！　その後キリストは私を抱き給うた。私はキリストの僕となった。爾来六十七年！　この母とこの兄のゆえに、福音のため地上にある限り弔合戦をせざるを得ない。

5月3日　神はわが力，わが歌，わが救
（詩篇118：1—18前半）

神（エホバ）に感謝せよ、恵福深くその愛は永遠なればなり。（一一八・一）
神はわが方に在ます、我は怖れず、ひと我に何をなし得んや。（六）
神に依り頼むは人にたよるよりも勝りて善い哉。（八）
神はわが力わが絃歌にしてわが救となり給へり。（一四）
歓喜と救済の声は義人の幕屋にあり、神の右手は強き業を為し給ふ。（一五）
我死なずして生き存へ、神のみ業を語り伝へん。（一七）
神はいたく我を懲らしめ給ひしが、死には渡し給はざりき。（一八）

本詩第一節は最後の第二九節と同じで、神の愛が永遠不変であることを高らかに讃美している。旧約のこのヘセド（HESED）愛という語はツェデク（ZEDEQ）義と共に重要な語である。神の愛の相は時と場合に応じて千様万態であるが、愛であることに於ては永遠不変で、神は愛に価しない惨憺たる人間私を愛し貫いて下さっている。その神の愛の体現者はキリストで、彼の愛も義も無条件に賜はる。それが恵である。かかる神、キリストに立ち帰ってやまぬ人間の在り方が信仰、信行、信交である。これが神を愛するということだ。

このような愛の神が第十四節の「わが力」、「わが歌」、「わが救」である。第十七節はルターがコーブルク城幽居の際に貼紙をして祈った聖句で私はこの眼で見て来た。

5月4日

隅の首石

（詩篇第118：19—29後半）

我に義の門開け、我その中に入りて神に感謝せん。（一一八・一九）
是は神の門なり、義人はその中に入るべし。（二〇）
建築師らの棄てたる石は隅の首石となれり。（二二）
是は神に由ることにして我らの眼に奇異とするところなり。（二三）
神よ、願はくは今救ひ給へ、神よ願はくは今栄えしめ給へ。（二五）
神は神なり、彼は我らに光を与へ給へり。（二七）
汝はわが神なり我汝に感謝す。わが神よ、我汝を崇めまつらん。
神に感謝せよ、恵福深く、その愛は永遠なればなり。（二九）

我々にとって義の門とは何か。「我は門」なりと言ったキリストこそ、義の門である。神の義人キリストの門を平伏して通れば、彼の義が与えられる。

さて専門的宗教人たる教法師や祭司やパリサイ人に排斥され、大衆にも裏ぎられ、弟子供にも理解されず、棄てられた石（マタイ二一・四二、ルカ二〇・一七、行伝四・一一、ロマ九・三二、一〇・一一、エペソ二・二〇、ペテロ前二・六—八）となったキリストは家の礎石として最も大切な隅の首石となった。即ちキリストは人間界の精神的、宗教界の霊的中心となった。イザヤが「試煉を経た石、貴き隅石」と預言したのはキリストであった（イザヤ二八・一六）。実存主は力の神であり、キリストは永遠の愛たる救主である。

5月5日

神の護り
（詩篇第121篇）

一 私は眼をあげる、あの山山に。
　どこから来るかわが救助。
二 わが救助は神（エホバ）からだ、
　天地の創造主なる。」
三 「彼は汝が脚を蹌踉に棄ておかじ、
　汝が守護者は微睡給はじ、
四 見よ！　微睡まず、熟睡り給はず。
五 イスラエルの守護者は。
　神（エホバ）は汝が守護者、
六 汝が右手を掩う翳。
　昼は陽が、夜は月も
七 汝れを撃たず。
　神（エホバ）は汝を護り総ての禍害を免れしめ、
八 汝が魂身を護り給う。
　神（エホバ）は汝が出入りを護り給う、
　今から永遠に！」

この詩は巡礼の歌の一つである。人生巡礼の目指す青山は何だ。霊界のパラダイスに聳え立つ霊峰ではないか。霊峰富士を想はせるような山ではないか。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。日々旅にして、旅を栖とす。」と言った漂泊の俳聖芭蕉はまことに人生の旅人であった。

我々も好むと好まざるに拘らず劇的な悲喜の渦巻く旅路を誰しも辿らされている。「我れ想う故に我在り」でもなく、「考へる葦」でも収まらない人生である。

天つ方ふりさけ仰いで白雲の彼方、光の里に在ます神、超在し、遍在し、貫在し、内在し給う霊なる神、愛なる神、力強き神・キリストに気がついたら、もう大丈夫。彼にそはこの詩人の謳っている「守護者」である。日射病、月射病、諸々の被害から二六時中護って下さる。

5月6日

涙の種子，歓びの禾束
（詩篇126篇）

一 神がシオンの命数を転えた時、
　我らは夢みる者の如くであった。
二 その時の笑声は我らの口に満ち、
　歓声は舌にあふれた。
　その時諸国の民が言った、
三 「神は彼らに大いなる業を作した」と。
神我らに大いなる業を作し給うたので、
　我らは歓喜の人となった。
四 神よ、我らの命数を転え給え、
　南方の諸々の川の如くに。
五 涙と共に播く人は
　歓声と共に刈り穫る。
六 彼は涙しながら出て往った、
　種子袋をたづさえて。
　彼は歓呼して帰って来る、
　おのが禾束をたづさえて！

この詩は、南王国ユダの都エルサレムがバビロニア軍に占領されて都の主な住民がバビロンに捕囚の運命となった（紀前五八七―五三八）、その捕囚の命数をエルサレム帰還に転じた神の歴史的転換の恵みを夢かとばかり歓んだ際の歌である。

シオンとは原語ツィオーンで「要害」を意味する語で、ダビデがエルサレムのこの要害の丘を中心に都を建てた（サム後五・七）、シオンは終末的な神の都をも意味する。

出エジプトは苦難からの解放であったが出バビロンは不信の罪に由来するバビロン捕囚という服役からの解放であって、神の恵みの現実への帰入である。

我々の生涯でも涙の種子を撒かしめられて、幾十年かあとで歓びの禾束を刈りとった時には！

5月7日

深渕・待晨
（詩篇第130篇）

一 神（エホバ）よ、汝（あなた）をこの深渕から私は呼ぶ。
二 主よ、わが声を聴き給え、
わが願いの声に汝が耳を傾け給え。
三 神（エホバ）よ、汝がもし不義に眼をとめたら、
主よ、誰が立ち得ましょう。
四 だが汝のみ許には赦しがある。
それ故汝は畏（かしこ）まれ給う。
五 私は神（エホバ）を待ち望む、わが魂は待ち望む。
私は聖言に望みを抱く。
六 わが魂の主を待つや、
衛士が晨を待つにも優る。
七 イスラエルよ、神（エホバ）に望（のぞ）みを抱け。
そは神の許に恩恵があり、
救贖（あがない）は彼の許に豊かにあるから。
八 彼こそはイスラエルを贖う、
その不義のすべてから。

呼ぶ者は深渕にいる。呼ばれる神は天界に在ます。天は高い、渕は深い。最も隔っているが、実は天空は渕の面に接している。絶対界の神も相対界の人間にそのように接し給う。至高至上にして永遠に在し給う聖者たる神は心砕けた謙る者と共に住み、その霊を活かし、その心を活かす、と第三イザヤは語る（イザヤ五七・一五）。

人間は誰でも惨憺たる者だ、どんなに立派そうに見えても天国と地獄の、光と闇の交錯の中にいる。だから偉大な宗教家はこれを正直に認め、自己と戦って、救済の道を切り拓いた、否救済されたのであった。救を要しない人は一人もいない。永遠の晨を待っている、個人も人類も。その天国待晨の曙光は何処にあるか。我らの胸の中に臨んでくる。キリストの贖罪と復活と聖霊の恩寵が天国をわが胸の中に創造した。

5月8日

思慕の魂
（詩篇第137篇）

一 バベルの河辺、とある所に我らは坐り、
つらつらシオンを偲びつつ泪した。
二 柳のさなかにわれらは立琴を懸けた。
そは我らを捕えた者らが歌詞を求め、
我らを苦しめた者らが楽しみを求めて、
「我らの為にシオンの歌を歌え」
四 と言ったから。
どうして我らは神の歌を
異境の地で歌えようか。
五 エルサレムよ、もし私が汝れを忘れたら、
わが右手は……忘れる。
六 もし私が汝れを想はないなら、
わが舌はあぎとについてしまう。
もし私がエルサレムを
わが歓喜の首に戴かないなら。

この詩篇はバビロン捕囚からエルサレムに帰還して間もない時に、書かれたものであろう。エルサレムのシオンの丘は神殿のある聖山で、礼拝の本山であるから、ユダヤ教徒にとっては魂の思慕してやまない神の都である。捕囚中は勿論ソロモンの神殿は破壊されて存在してはいなかったにも拘らず慕はしくてならないから、心の中では小さな立琴を弾いて神を讃えていたのであった。国亡びて山河ありではなく、国亡ぶとも経典あり、讃歌（詩篇）あり、しかもそれは暗誦されているから魂の中に記されてある。自分自身が生ける経典、生ける楽器、生ける讃歌である。異邦人のなぐさみに聞かせる楽器も声もない。ひたすら神を讃美するためである。この詩篇の作者の如き魂の在り方こそ本当の讃歌的存在である。

5月9日

汝知り給う
（詩篇第139篇）

一 汝は知り給う我が座るをも立つをも、
汝は弁え給う遠くからわが想いをも。
四 げにわが舌に一言もないのに、
見よ、神よ、汝はその総てを知り給う。
五 後べより前方より汝は私を包み、
しかも私に按手し給うた。
六 霊すしき哉、到底是に如くべくもない。
高き哉、及びもつかぬ知なる哉、
七 私は何処へ往って汝がみ霊を離れようや、
何処へ遁れて汝がみ顔を離れようや。
八 たとい天に昇るとも、そこにあなたが！
わが床を陰府に布くとも、見よ汝が。
一三 誠に汝はわが五臓をつくり、
わが母の胎に私を組み成し給うた。
一七 神よ、私に汝が思念は如何に貴き哉！
その総体は如何に雄大なる哉！

神なる汝と人なる我との一対一の深い関係を「知る」という言葉で徹底的に告白している特異な詩篇である。男と女の深い人格関係並びに肉体関係もイスラエル人はこの「知る」という語で表わす。であるから、神が知り給うというときは、霊的な知であり、深い愛を以ての全人的な「知る」である。よく時代劇などで「お天道さんは知ってござる」などというように、「汝知り給う」は深い慰めであり、力である。

禅道では「声前の一言千聖不伝」というが、第四節の如く神は霊知し給う。祈らぬ前に祈りの内容を先知し給う。神は知るのみでなく手を按いて護り給う。力を与え給う。他人にどんなに誤解されようと迫害されようと、「汝知り給う」！　そこに大平安がある。神の大愛の知に全托せん哉。

5月10日

汝を隠蓑とする
（詩篇第143篇）

一 神よ、わが祈りを聴き、
わが願いに耳を傾け、
汝が信実と汝が義に在って
答え給え。
二 汝が僕の審判に関わり給うな。
そは、生者は誰もみ前に義とされず。
五 私は昔の日を思い出し、
汝が業のすべてを思いめぐらし、
汝が手の業を考える。
六 汝に向ってわが手を拡げ、
わが魂は乾地の如く汝に喘ぐ。
九 仇敵から私を救って下さい、実存主よ、
あなたを私は隠蓑とする。
二 実存主よ、聖名のゆえに私を生かし、
汝が義に在ってわが魂を患難から
引き出だし給え。

我々の祈りや願いは全身的な投入の相が本当だ。これに対して神さまの応答は、「信実と義に在って」という。信実は「アーメン」という語と同根、不変一貫の「然り」で裏切らない肯定の心で、相手を信じ抜いて救う心である。義も大切な語でツェデクと同根、天地を貫く義で、神意一貫の救の意志である。神の信義はキリストが体現した。神・キリストの信義はこれを与え給うことによって我々を救う。（ロマ一・一七）。

「昔の日」！　私も恩寵を回顧して想い出されるのは長兄政美の実存だ。彼在っての今日の私だ！

隠蓑！　然り、我々はキリストを唯一の隠蓑とする。これは何ものも害することのできない金城鉄壁以上のものだ。キリストの力強い愛にまさるものはない。

5月11日

大愛大能の神
（詩篇第145篇）

三 実存主は偉大なり大に讃べき哉
　彼の偉大さは探ぬるべくも無し。
四 代は代に汝がみ業を讃め、
　汝が大能の力を宣べつたえん。
八 実存主は恵みと憐情に深く、
　怒ることおそく、愛は大いなり。
四 実存主はすべて倒るる者を支へ、
　すべて屈する者を起きあがらしむ。
七 実存主はすべての道に於て義しく、
　そのすべての業に於て愛深し。
八 実存主はすべて彼を呼ぶ者、
　信実をもて彼を呼ぶ者に近し。
一九 彼を畏るる者の楽しみを彼は成し、
　彼らの叫びを聴きて救ひ給ふ。
二〇 彼を愛する者総てを実存主は護り、
　悪しき者総てを滅ぼし給ふ。

この詩篇は所謂イロハ歌の一つで、各節の第一語がＡＢＣ順の頭字になっている。

実存の神、万物万民の主たる神は偉大である。否絶大である。到底端倪すべからざる神である。然り、我々に理解できる神があるなら、そんなのは神ではない。絶対界の神が相対界に自現して驚くべき業を成して証し給う。しかも根源現実は深く隠されている。人間の側がどうであろうと、神の愛は底知れぬものだ。だから信ぜざるを得ない。投身せざるを得ない。第十七節は何たる福音ぞや！

「彼を愛する者」とは何ぞ、神・キリストの愛に圧倒されるから、愛せざるを得ないまでのはなしだ。「悪しき者」とは何ぞ、善悪の悪ではない。神の深い愛を拒む者だ、サタンに与する者だ。

5月12日

万象の讃美
（詩篇第148篇）

一 讃美せよ（ハレルーヤー）汝ら神を！
実存主（エホバ）を讃美せよ、諸々の天から。
二 彼を讃美せよ、諸々の高所（たかみ）で。
彼を讃美せよ、すべての天使よ。
三 彼を讃美せよ、すべての天軍よ。
彼を讃美せよ、陽と月よ。
四 彼を讃美せよ、すべて輝く星辰よ。
五 実存主（エホバ）を讃美せよ、大地から。
六 龍とすべての深淵（うち）よ。
七 火炎と霰（あられ）よ、雪と霧（ほのぼの）よ、
八 み言を行う暴風（あらし）よ。
九 若者たちよ、また乙女らよ、
老いたるも若きも共に。
一〇 彼は一つの角（つの）をみ民のために揚（あ）げ給うた。
彼の恵信者（ハシディー）すべての、
これは彼を讃美する権化ぞ！
イスラエルの子らの讃美の権化ぞ！

詩篇第一四六―一五〇は皆「ハレルヤ讃歌」で、この第一四八がその最たるもの。自然界及び人間界の万象に向って神讃美を称揚している。詩篇第一〇四篇参照。

この詩で注目すべきは第十四節の「一つの角（ケレン）」である。「角」は神の威力の象徴で受苻者の力である。メシヤは福音の角度からはキリストである。キリスト預言として詩第八九・三、四、一七、一八、第一三二・一七、一八を参照。メシヤの預言的存在はダビデ（マタイ一・一）。

この詩篇に応じてアッシジのフランチェスコの「被造物の頌歌」、別名「太陽の讃歌」がある。天地相応えて、神を讃美する相は正に宇宙的パラダイスである。

5月13日

エステル
（エステル書）

○茲にシュシャン（スサ、ペルシャの都）の城に一人のユダヤ人あり、その名をモルデカイと曰ひ、ベニヤミン人なり。彼はバビロン王ネブカデネザルが携へゆきしユダ王エコニヤと共に拠（とら）はれ往ける俘囚（とりこ）の中にありてエルサレムより移されたる者なり。彼その叔父の娘ハダッサ（「桃金嬢（てんにんそう）」へブライ語）即ちエステル（「星」の意ペルシャ語スタラ）を養ひ育てたり。この乙女、顔貌（かほかたち）優美なりけり。○王すべての処女に超えてエステルを愛しければ、エステルは凡ての処女に優りて王の前に恩寵と情愛を得たり。（二・五…七、一七、一八）

学問的な問題は茲に取り扱はないが、物語によるとペルシャ王アハシュエロス（クセルクセス）の重臣ハマンが王を殺さんとのたくらみを抱いていたが、それを知らぬ王はハマンに対して「ハイル・ハマン」的な拝跪を一般に命じた。これをモルデカイは拒んだ。ハマンはモルデカイのみかすべての在住のユダヤ人殺害の陰謀を企てた。王はその間ハマンの王への反逆心を知るや、ハマンはモルデカイを磔刑にせんとした柱で自分が殺されることになる。エステルは終始モルデカイの味方となって王に執り成し、神の名を一言も挙げずして、聖名に在って生きぬき、モルデカイとエステルは多くのユダヤ人の生命を安泰ならしめた。アダルの月（十二月）十四、十五日をプリムの祭としてイスラエルではエステル書を読んで感謝している（九・二一、二二）。美しき星（エステル）の栄光かな。

5月14日

我唯だ汝らのみを知る
（アモス書1－3）

○ユダの三の罪、四の罪に対して我これを棄ておかじ。彼らはエホバの律法を拒みその誡を遵らず。我諸殿を焚かん。（二・四、五）

○イスラエルの三の罪、四の罪に対して、我これを棄ておかじ。彼らは義しき人を銀のために売り、貧者を鞋一足のために売る。男もその父も一人の乙女に行きてわが聖き名を汚す。（二・六、七）

◎他のすべての種族の中にて唯汝らのみを知れり。されば我汝らの総ての罪を汝らに糾さん。（三・二）

南王国ユダの南方山地の東部にテコアという山村がある。その曠野で牧養をしていた男があった。彼は桑の木も栽培していた（七・一四）。しかし彼はアッシリヤとエジプトの二大国の板ばさみになっている北イスラエル、南ユダ両国の運命と不信と罪過甚だしき国状に想いを致す憂国の士であった。頃は紀前八世紀半、ユダの王ウジヤ、イスラエルの王ヤラベアムの治世、地震の二年前に突如エホバの召命を受け、預言者として立たしめられた。危機迫れる北イスラエル国の首都サマリヤに赴き、「獅子吼ゆ、誰か懼れざらんや、主エホバもの言ひ給ふ、誰か預言せざらんや」（三・八）と叫んだ。神は当時の四隣の諸種族の罪過を先づ列挙して、終りにユダとイスラエルの罪を右掲の如く（これは一端に過ぎない）言挙げし、しかも、「我唯汝らのみを知る！」と宣うた。神が如何にイスラエル・ユダを深く顧みているかの深遠な言なのである。

5月15日

公道・正義の本流
（アモス書4－6）

○我汝らの総ての町にて汝らの歯を清からしめ、汝らの総ての処にて汝らの食を乏しからしめたり。然るに汝らは我に帰らず、と神（エホバ）言ひ給ふ。（四・六）

○これは挽歌なり、処女（をとめ）イスラエルは仆（たふ）れて復た起きず、彼女はおのが地にうち倒さる。扶（たす）け起こす者なし。前に千人出でし町は百人、前に百人出でし町はたゞ十人のみ残らん。（五・一、二、三）

◎公道を水の如くに正義を尽きざる河の如くに流れしめよ！（五・二四）

北イスラエル国の神エホバに対する不信とそれに由来する社会的腐敗紊乱には言語道断（ごん）なるものあり。国が栄えて驕慢の風潮が蔓延すると栄枯盛衰の歴史的法則をまぬがれず、衰退してゆく。北イスラエル国は没落寸前の爛熟期に来ている。エホバの神はアモスを通して神との関係を立て直すために、しきりに「我に帰れ」と促して来たが「然るに汝らは我に帰らなかった」と歎き且つ怒り給う。「歯を清からしめた」とは自然界に飢饉を招いて食糧難を来らせ、民に警告を発した婉曲的表現である。神に「帰る（シューブ）」という言葉はどの預言者も波の音の如く響かせている。アモスは神からの義の要求に応じて「公道」や「正義」を叫んだが、民が神に立ち帰って神との義の関係に入らなかったから、社会に義の実践的な果を結ぶわけにゆかなかったのである。

5月16日

「汝何を見るや」
（アモス書7－9）

◎エホバ我に向ひて、アモス汝何を見るや、と。我れ準縄を見る、と主再た言ひ給はく、我再び彼らを見過ごしにせじ。（アモス七・八）

◎エホバ我に向ひて、アモス汝何を見るや、と。我れ熟したる果物一籠を見る、と答へしに、エホバ我に言ひ給はく、わが民イスラエルの終末到れり、我再び彼らを見過ごしにせじ。（アモス八・二）

○主エホバ言ひ給ふ、視よ、日至らんとす、その時われ饑饉をこの国に送らん。是はパンの乏しきに非ず、水に渇くに非ず、神の言を聴くことの饑饉なり。（アモス八・一一）

預言者はよく神から「汝何を見るや」と訊ねられる。預言者は人間界や自然界の諸事象、諸現象に於て神の啓示を察知するからである。牧場の荒蕪に於て神の厳きを、山林の枯葉に於て神の怒りをアモスは見た（一・二）。ここでは準縄に於て神の厳しい審判を見る（七・八）。また爛熟した一籠の果物に於てイスラエルの滅亡の徴を見ている（八・二）。我らもそのような眼や耳を有たん。

食物の饑饉もさることながら、神の言にさっぱり耳を傾けない国民のたましいの飢饉こそ最も憂うべきことだと警告している。このことは現にわが国に対してアモスが警告しているわけである（八・一一）。神の審判が徹底的に臨むことをアモスは第九章一―六節に於て畳みかけて警鐘乱打の如く語っている。アモスの使命は実に義の神を示すにあった。

5月17日

ホセアの悲劇的結婚
（ホセア書1－2）

○神ホセアに宣はく、汝生きて淫行の女を娶り、淫行の子等を取れ。そはこの地神より離反して淫行また淫行なればなり。（ホセア一・二）

○汝らの母と論諍へ、論諍へ、彼女はわが妻に非ず。我は彼女の夫に非ざるなり。汝らその乳房の間より姦淫を去らしめよ。（二・二〔四〕）

◎我汝を娶りて永遠に到らん、義と公平と愛と憐憫とをもて汝を娶り、信実をもて汝を娶るべし、かくて汝神を知るに到るべし（二・一九、二〇）。

アモスと時期を殆ど同じうし、彼に継いで北王国滅亡の夕暮に現はれたのが、この預言者ホセア（「神は救い給う」の意）であった。彼はアモスが神の審判の義を叫んだのに対して、神の赦しの愛を、彼自身の悲劇的結婚生活を以て象徴的に伝えるという神の召命を受けたのであった。即ち売春婦の如き女（多分神殿を汚す聖娼）を娶った。併し彼女は相変らずの淫行で、二人の男子と一人の女子を生んだ（一・四、六、九）。恋人たちをもつこの不貞の女は、バールの神々を拝んで宗教的姦淫を犯している北イスラエル国民の象徴の如き女である。淫行の果である子らがこの母親を論難しても実は無効である。

神はこの不信の民を顧みて、曠野に伴れ出し、懇ろに語り、葡萄園を与え、患難の谷で希望の門を開き、いつの日か全世界から戦争を止めさせ、神の義を与え、神の愛を与えてイスラエル民族を妻として愛し、永遠に到るとホセアに啓示した（二・一四―二三参照）。

5月18日

神の深き顧みの愛
（ホセア書3）

一 神（エホバ）我に宣（のたま）はく、汝再び往きて妻を愛せよ、他人（ひと）と相愛し姦淫をなし居る彼女を。そは恰もイスラエルの子ら他神（あだしかみ）々に転向し〔バアルへの供物なる〕乾葡萄の菓子を愛好し居る彼らを我が愛するが如くにせよ。かくて我銀十五シェケルと大麦一ホメル半を払いて彼女を獲たり。

二 我れ彼女に言ひけるは、汝多くの日わが許（もと）に留（とど）まりて姦淫する勿れ、他の男の許（もと）に居（お）る勿れ。我もまた汝に対して然かせん！（三・一、二、三）

ホセア第三章はホセア書の焦点！　神意に由り淫婦を娶ったが相変らず姦淫（ボルネー）を犯す彼女である。神命を受けてホセアは彼女を奴隷一人を贖う身代金で購（か）い戻した。想へ！　これはユダがキリストを売った金額である（マタイ二六・一五）。もう姦淫はやめだよ。私の許にずっと居なさい。私もお前にそうするから。ホセアは自分をどん底の彼女の境地に落して彼女を抱いたのである。これはイエスが姦淫の女に「我も汝を罪せじ」といってその心身を救い揚げた、あのキリストの愛の実存的預言である（ヨハネ八・二―一一参照）。エホバ神の深い顧みの愛。

5月19日

わが歓喜は愛にあり
（ホセア 6—10）

○来たれ、我ら神に帰るべし。そは神我らを抓裂きたれどもまた醫し給ひ、我らを打ちたれどもまた繃帯をなし給へばなり。（ホセア六・一）
◎わが歓喜は愛にあり、犠牲に非ず。神を知るを悦ぶこと燔祭に優る。（六・六）
○エフライムは異邦人に入り交る。彼は裏返さざる煎餅となれり。
○刑罰の日来り、応報の日到れり、イスラエルは知れ、預言者は愚直なる者、霊の人は狂へる者なり。これ汝の罪悪多くして汝の怨恨大いなるに因る。（以上七・八、九・七）

国家の滅亡の危機に際してホセアはどこまでもエホバへの信仰的復帰を促してやまない。民族の興亡は国家の政治的興亡とは次元が異う。預言者に導かれているイスラエル民族の根強さはエホバ神とその経典を有っているところにある。神の生殺与奪は信仰的実存の有無に関はる。しかも神は究極的には民族を救はんとする本願をもっている。だからそういう神を知れと叫ぶ。神に帰らない民は火に焙って裏返しをしない煎餅の如く、やがて戦火に焼かれてしまう。祭儀的宗教が信仰ではない。神の愛を体現するのが生きた信仰である（六・六）。預言者は神の言をそのまま伝えるから世人にはバカに見える。狂人の如くである。しかしどちらが狂っているのか。太陽は何と見てござるか。傍若無神の民は遂に国の滅亡を刈り獲る運命を自ら招くのである。

5月20日

神の愛の綱
（ホセア書11—13）

◎イスラエルの幼年期に我これを愛し、エジプトよりわが子として呼び出せり。我れ人の綱たる愛の綱もて彼らを索けり。（一一・一、四上）

○エフライムよ、我いかで汝を渡さんや、イスラエルよ、我いかで汝を譲らんや。わが心わが衷に飜へり、わが憐ことごとく燃え起これり。（一一・八）

○陰府の手より我彼らを贖はん。死より彼らを救ひ出ださん。死よ汝の疫病は何処にありや、陰府よ汝の業病は何処にありや。（一三・一四）

預言者ホセアは熱い愛の人である。それだけにまたイスラエル国の不義淪落の相に歎きと憤りを感じ、命旦夕に迫っている滅亡——それは紀前七二一年、アッシリヤのサルゴン王軍の残虐な劒による首都サマリヤの陥落——を深く悲んでいた。それゆえ、ホセア書は悲歎と憤激と愛憐の渦を巻いた劇的な文字である。しかしその中で愛憐の文字が最も強く神の救済を約束している。右掲の諸句はその著しき表現の二、三である。

第十三章第十四節は、パウロがコリント前書第十五章でキリストの復活の告白を展開している際その第五五節で引用している有名な句である。新約聖書で旧約の聖句が引用される場合キリストの福音の光で変光される。

5月21日

選民への終末的希望
（ホセア書13：15—14：9〔10〕）

一四・二 立ち帰れ噫イスラエル汝が神実存主に。
四 そは汝汝が不義のため仆れたればなり。
二 我は彼らの離反を医し快く彼らを愛せん
五 わが怒り彼より去りたればなり。
我れ露に如かんイスラエルには。
彼百合の如く花咲かん。
六 彼その根をばうち張らんレバノンの如。
その枝は伸びゆきてその美麗さ
橄欖に比ふべし
七 その芳香さレバノンの如き哉。
彼ら帰り来てわが蔭に住まはん。
穀の如く（実り）、葡萄の如く花咲き、
八 その馨香レバノンの酒の如き乎。
エフライム（曰く）、最早我に偶像は何ぞ。
我（之に）応へ顧るなり。我は蒼翠の
樅の如し、汝我より汝が果を得べし。

神への不信不義のため遂にアッシリヤに紀前七二一年に亡ぼされた絶望的なイスラエルに対しても神は希望を棄て給はない。その内容は終末的希望である。第四節は慰め深い言である。第五節以降の詩句はまことに美しい。神は自らを露に譬えてなぐさめるあたり、いかにもホセアへの神の言である。またイスラエルの美しい自然の代表たるレバノンの香柏、橄欖、樅、葡萄の如き貴重な樹木、シャロンの百合などを列挙してパラダイスを想はしめている。しかも注目すべきはこれらの自然はわが諸相であると。まことにホセアらしき情感ゆたかな表現である。国の興亡如何に拘らず民族の選びは不変というところにエホバの神の不変の愛がある。

5月22日

終末的平和の祈求
（ミカ書1－4）

○然れども我は神（エホバ）の御霊の許、力に満ち、公義と勇気に溢れてあれば、ヤコブにその不義を宣し、イスラエルにその罪を告げん。
○末の日到らば、神の殿の山は諸々の山の巓に礎えられ、諸々の峰より高く聳え、諸々の民はこれに流れ帰せん。神は多くの民の間を審判き、遠隔に到るまで列強の仲裁をなし給はん。斯くて彼らはその剣をうち変えて鋤となし、その槍を変えて鎌となさん。五国は国に向ひて剣を挙げず、最早戦争のことを攻究せざるべし。まことにすべての国民は夫々その神の名に在って歩まん。されど我らは我らの神エホバの名に在って永遠に歩まん。（ミカ三・八、四・一、三、五）

預言者ミカ（語意「誰か如かん」「エホバに」）は預言者イザヤと同時代、ユダの王、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの代即ち紀前八世紀後半の頃、カナン西南部の山陵地帯の村モレシテ出身の剛直な田舎人である。彼もアモスの如く、ユダ・イスラエルの神に対する不義、社会的権力者の罪を指摘し神の審判を力強く語っている（一―三章）。神霊を体受している預言者は何者も憚れないからである。「末の日」とは歴史的終末の日のことで高い次元の内容が啓示されている。右掲の詩句がそれで、二十世紀の今日は、凡そこの預言とは正反対の現実である。内村鑑三が一九〇七年に見た『初夢』「恩恵の露、富士山頂に降り、滴りてその麓を霑し、溢れて東西の二流となり云々」というキリストの世界平和を連想する。

5月23日

神と共に歩む
（ミカ書5－6）

○汝エフラタのベツレヘムユダの氏族中にていと小さき存在(もの)よ！汝の中よりわがためイスラエルの君主(きみ)と成る者現はれん。彼の出現は永遠の古昔(むかし)からの事なり。（五・二）

◎彼汝に告げ給へり、人よ、善きことの何なるか、神(エホバ)の汝に求め給うことの何なるかを。公義(ただしき)を行じ、愛憐(あわれみ)を愛し、遜(へりくだ)り汝の神と共に歩むことに他(ほか)ならずや。（六・八）

まことに不思議な預言がミカに啓示された。即ちベツレヘム（語意「パンの家」）に数百年後救主キリストが出現したことに冥合している。選民イスラエル民族の中に神の国のため震はれずして遺(のこ)される少数者がいる。天来の恵みの存在を露や雨に譬えたり、草木に譬えたりするところを見るとイスラエル人は自然を人間存在の不可欠のものとして深く愛している消息がわかる。現代ほど自然をそこねている時代は未曽有であろう。ゲーテは自然を勝手に利用したらそのうちに人類は困るときが来ると言った。その徴候は歴然としている。神の求め給う善とは、平伏して神意に従いつつ神と共に歩むことなり、とのミカの福音は、アモスの神の義、ホセアの神の愛に継いで、神との共在に展開して来た。神と二にして一如的な実存となれば、神の義に生き、神の愛に生きる現実が生じてくる。これを完璧に体現したのがベツレヘムの星の下に出現したナザレ人イエスであった。

5月24日

誰か汝の如き神在らんや！
（ミカ書7）

○我神（エホバ）を仰ぎ瞻（み）る。我はわが救の神を待ち望む。わが神は我に聽き給ふ。わが敵（八）よ我につきて喜ぶ勿れ、我仆（たほ）るれば起きあがる。幽暗（くらき）に坐すれば神（エホバ）わが光となり給ふ。（ミカ七・七、八）

◎誰か汝の如き神あらんや！　罪を赦し、その嗣業（ゆづり）の遺（いつく）しみ（一九）れる者の不義を見過ごし給ふ者。永劫に御怒りを保ち給はず、愛憐を深く念とし給う者。彼は再び我らを憐み、我らの不義を踏みつけ、我らの罪を海の底に投げ入れ給うなり。（ミカ七・一八、一九）

まことの預言者は民の罪過を忌憚なく糾断するが、同時に彼は民の罪をおのが罪として痛むのである。ひとの罪過を糾断するばかりなら、それはパリサイ根性でキリストの最も非とされた根性である。即ちおのれを義とし、他を見くだす高慢であってサタン的となる。ミカは決してそのような似而非（えせ）預言者ではない。彼は闇の中でも神の光に照されて身辺に光を流すような存在である。遺れる者、選びの器にも失敗はある。平伏して神の審判にゆだねまつる。そのような魂を神は責め給はない。神の赦しは碎けた魂に臨む、無条件的である。第十九節の如き言は何たる慰めぞ。神の仁慈（あわれみ）はまことの立ち帰りを促すものである。不義を踏みつけ、罪を海の底に投げ入れる！　とは何たる熱き愛、深きみゆるしぞ！　人の誹謗も非難も誤解も問題でない。

5月25日

嫉妬の火・神の隠蓑
（ゼパニヤ書）

○彼らの銀も金も神の激怒の日には彼らを救ふこと能はず。全地はその嫉妬の火にて烏有に帰せん。実に彼は地に住む総てのものを破滅と速かなる終末に到らしめん。（一・一八）

◎汝ら神を求めよ！　公義を行ふ地の謙る者よ、義を求め謙遜を求めよ、神の怒りの日に恐らく汝は隠されん。（二・三）（三・一二、一三、一七、参考）

北王国イスラエルがアッシリヤに滅ぼされて七二一年から正に一世紀あとの六二一年に、南王国ユダのヨシヤ王（六四〇―六〇九）が発見した申命記法に基づいて宗教改革がなされたのだが、それ以前からこのユダ国で活躍していた大預言者はエレミヤであるが、彼と同時代に同じく愛国の至情に燃えて預言していた一人がゼパニヤ（原語ツェファニヤー、原意ヤハ〔ヤハウェ＝エホバ〕は隠し給ふ）である。不信による偶像礼拝と社会悪を見て国家の危機を感じて、神の激怒の下に滅びると預言している。そんな時に金銀財宝が何になるか。今こそ平伏して神に立ち帰れよ、神が自ら隠蓑になってやろうと語った。日本も第二次大戦の末期国民は金やダイヤの献納を強いられたが、大きな見当ちがいをした為政者と軍部のため国民が犠牲となった。「嫉妬の火」とはエホバ神が妬む程にイスラエル・ユダの神への愛を求めている神の愛を表現する言である。信義を裏切る民族国家を滅ぼしても、なほ愛してやまないのがこの実存神であるが、その愛がどのような相で現はれるかは、預言の歴史が次第に啓示してゆく。

5月26日

戦乱と淫乱
（ナホム書）

○エホバは嫉妬の神（エール）にして復讐者、憤怒の主。（ナホム一・二上）
○禍いなる哉、流血の都市、虚偽に満ち、横領に溢れ、掠奪止むところを知らず。一鞭打の音、車輪の轟、躍り趨る軍馬、二躍進する戦車。三突進する騎兵、刀剣は煌き、槍は閃く。屠られし者夥しく、死屍の数知れず。死体は無尽、人々是等の死骸に躓く。四而もこれは艶麗にして誘惑に巧けたる遊女のさわなる淫行のゆえに、諸国をその淫行によりて惑はし、諸族をその魔手によりて晦ましぬ。（ナホム三・一―四）

預言者ナホム（原語ナフーム、原意「慰安」。ナホムはアッシリヤに亡ぼされたイスラエル（七二一年）の捕囚の民の子らの一人かも知れない。エホバによるアッシリヤ国に対する復讐は、イスラエルの罪を越えたア国の残虐に対する神の「慰め」の聖意と思はれる。ア国王アシュルバニパル歿後（六二五年）、ア国は衰退し、国内は紊乱を極めてゆく。首都ニネベはやがて新興のカルデヤ（新バビロニヤ）に紀前六一二年に壊滅されるが、そのニネベの滅びに関わる預言をナホムは啓示されたわけである。ア国は鷲や獅子に譬えられる獰猛残虐な種族で、而もまた淫婦の魔手を以て国の内外を乱したことも右掲の諸句で瞭かである。

さて二十世紀末の今日、淫行の恐るべき魔手はエーズに現はれた。癌よりも怖るべきサタンの魔手となって来た。人類の末路果して如何。神を畏れよ、平伏して祈るのみ。

5月27日

観望塔

（ハバクク書1：2－2：3）

○エホバよ、いつまで我れ援助を叫びて、汝なほ聴き給はざるや。我れ汝に「暴逆」娑汰を叫び訴ふれども汝救ひ給はず。（ハバクク一・二）

○我れわが観望所に立ち、観望塔に登りて覗ひ、彼が我に何を語り給うかを視、わが訴へに対して我れ何を受くるかを視ん。エホバ我に答へて言ひ給へり、「この啓示を書くべし、板に明記し、其を走りつつも読み得るようにせよ。その啓示は尚来るべき時機に向ひ終局を急ぎあるなり。これは虚しからず、遅れなば待て、必ず起こり、滞りはせじ。（ハバクク二・一―三）

アッシリヤが暴逆と淫乱で、国内も分裂を来たし、紀前六一二年にナボポラッセルがニネベを占領し、カルデヤ（新バビロニヤ）を建てたが、これまたア国に勝る暴逆の相をその子ネブカドネザル二世時代（六〇四―五六一）には呈して来た。ユダ国の存亡の危機が迫って来た。ナホムのあとを継ぐかの如く現はれたハバククは愛国の情ひとしほ深い。東にはバビロニヤ、西にはエジプトの二大強国、国内は社会的混乱。彼は観望塔に立って、天を仰ぎ、地を望観し、神に世は如何にして此くあるか。神は何を啓示し語らんとし給うかを視たいのである。神は板に明記せよ、民衆が走っても読み得るようにせよと宣うた。神はバビロニヤの暴虐の相も視て居られる。しかしユダ国民の不信の相は更に深く憂ひと怒りの内実なのである。ハバククは果して何を書かしめられるのか。

5月28日

義人生信（ざじんしょうしん）
（ハバクク2：4）

見よ、彼の魂は驕りて直からず、その衷（うち）は義に非ず。
されど義人はその信に在りて生く。（ハバクク二・四）

エホバ神はハバククに命じて板に明記せよ、と。その天来の啓示は、右の一句であった。これが観望塔で天を仰いで聴き且つ観た文字であった。

前段は即ちカルデヤが野獣の如く強く驕って、神に対して直き関係にない。衷なる心は不信不義である。バビロン（カルデヤ）を以てサタン的な魂の相の代名詞としているのは黙示録である。暴虐と淫乱は人類の歴史の暗黒面である。

後段は、「されど義人はその信に在りて生く」。原語では僅か三語。それで漢文調で義人生信と表現した。信仰に在って生きている者が義人であって、義人はむしろ述語である。そのような義人の祖はアブラハムであった（創一五・六）。大預言者イザヤが正にかかる信仰の唱道者にして身証者であった（イザヤ七・九、二八・一六、三〇・一五）。そして新約のパウロが正にこのハバククの言を大きくとりあげた（ロマ一・一七、特にガラテヤ第三章）。ギリシヤ語七十人訳では「義人はわが信実（ピスティス）によりて生く」とある。即ち神の本願の言で、神の不変の信実（エーナー）を体受、信受して生きる者が義人だというのである。本願に裏づけられてこそ、人間の側の信が本ものとなる。本願の正信の主体たる全キリストを全存在で体受して生きるのが本当の信仰者で、義人である。

5月29日

因果応報
（オバデヤ3，4）

三 汝が心の高慢汝を欺瞞せり。岩の狹間に捷みその居高所に在りてその心の中にて言ふ、誰か汝を地に曳き降さんや、と。
四 たとひ汝鷲の如く高く挙るとも、たとひ汝が巣を星の間に設くとも、
五 我汝を其処より引卸さん、神の言也。
げに近し神の日各民族の上に。汝のなせる如く汝にせらるべし、汝が応報汝が首に帰り来らん。

オバデヤ（原意ヤハ〔ヤハウェ＝エホバ〕の僕）。彼は幻像をもって啓示乃至預言を受けた。預言は専ら「汝」なるエドムに関はるもので、エドムはヤコブ（イスラエル）の兄エサウ（創三六・一）の子孫が住んでいた死海南方の高原地帯で、天然の岩の要塞がある。ユダ国とエドムは歴史的に必ずしもよい仲ではなかったが、ユダ国がバビロンのネブカドネザルに滅ぼされる頃は既に友交を裏切ってバビロンに左袒していた。この預言はユダ国人のバビロン捕囚（紀前五八七年）以降のものと判断されている。

ともあれ、エドムの高慢と裏切りが実は自分を欺くことになって、今に「神の日」の審判に遭って亡びる、という預言内容である。「世界歴史は世界審判史である」とドイツの詩人シラーが謳っているように、民族も国家もその興亡の跡を辿ると霊的なまた道徳的な法則がはたらいている。個人の人生も亦然りで、「神の日」は随時臨む。そして悪因悪果、隠徳陽報が現はれる。決定的な終末的な「神の日」は黙示録に預言されているように来るであろう。ともかく、審判は神にゆだね、自らは神を畏れて生きんのみ。

5月30日

第二神殿建造の預言
（ハガイ書）

二・五 汝らが出エジプトをせし時、わが汝らに約せし言及びわが霊は汝らのただ中に留まりてあり。恐るる勿れ！ 六 げに万軍のエホバ斯く宣へり、いま一度暫らくせば我れ天と地と海と陸とを震動はん。七 我また万国民を震撼せん。さらば万国民の願はしきもの来たるべし。かくて我れこの神殿を栄光をもて満たさん。（二・五、六、七）

バビロニヤ王ネブカドネザルが南王国を亡ぼして、第二回バビロニヤ捕囚を行ったのが紀前五八七年、爾後半世紀ほど捕囚期が続いたが、新興のペルシヤ王クロスによってバビロンが崩壊したので、捕囚の民は、クロスの勅命によって紀前五三八年にエルサレム帰還となった。出エジプトはイスラエルの民のエジプトに於ける奴隷的苦役からの解放で艱難からのあがないであったが、そのときモーセを通してエホバ神はイスラエルと神と民との契約が結ばれた（二・五）。エホバの神霊は彼らと曠野の旅をして幕屋を神殿として臨在していた。それは動的な相であった。

此度の出バビロンは、神への不信の罪による捕囚からの解放で、罪のあがないの意味をもつものである。帰還したら、何はさて措き、神殿建造が成さるべきなのに民はこれを怠っていたので、神は預言者ハガイを通してこれを責めた（ハガイ一・七―一一）。神は霊震を以て天地と諸民を震い畏れしめ、神殿建造のため「願はしきもの」を献納させると宣うている（二・六、七）。ソロモンの第一神殿に優るほどの第二神殿への預言が四回に亘ってなされているのがハガイ書の内容である。爾後神殿宗教に固定したのが所謂ユダヤ教。

5月31日

相互帰入
（ゼカリヤ1－8）

○万軍のエホバ欺く言ふ「汝ら我に帰れ。我も汝らに帰らん」（一・三）
○我と語る天使我に言ひけるは「汝呼ばはりて言へ。万軍のエホバかく言ふ、我れエルサレムの愛に甚だしく心篤く、妬みを覚え、安閑たる諸々の国民を大いに怒るそは我少しく怒りしに彼ら力まかせにこれに加害したればなり。エホバかく言ふこの故に我れ憐憫をもてエルサレムに帰る」と。（ゼカ一・一四―一六）

出バビロン後、紀前五二〇年二月にハガイと同じく彼に引き続き預言に与かった集団的性格の預言者がこのゼカリヤであるが、ゼカリヤ書一―八章が五一九年二月のある夜ゼカリヤに示された八個の霊幻を主題としている黙示的預言である。ハガイもゼカリヤも神殿構築の立役者ゼルバベルをメシヤと見做したことは、いかに神意によって単独的に召命される預言者と次元と性格が違うかがわかる。神殿宗教へ向っている点に於てやはり祭司的。

それはとも角、右掲の諸句には真の預言の閃きを見る。「汝ら我に立ち帰れ！」神に立ち帰ることが信仰の真の相で、而も神自らの「我も汝らに帰らん」との親しい愛の迫りの言を聞いては全く参ってしまう。アッシリヤ、バビロニヤが神意の限度を越えて北イスラエル、南ユダに残虐をなしたことに対して、神のあはれみが深く語られていることは注目すべきである。両国は不信のために滅亡したが、国亡びて民族は亡びず。神の愛の追求は、イスラエルの真の預言者らを通して、そして遂にイエスという超預言者を通して神の全人類への救の道が開かれたのである。

6月1日

メシヤ王国の預言
（ゼカリヤ書9―11）

九 シオンの乙女よ大いに喜べ、エルサレムの娘よ呼ばはれ。見よ汝が王汝に来たる。彼は義にして救、柔和にして驢馬に騎る者。牝驢馬の仔なる駒に騎るなり。一〇「我れエフライムより戦車を絶ち、エルサレムより軍馬を絶たん。戦争の弓も絶たるべし」かくて彼は平和を国々の民に諭さん。その統治は海より海に及び、河より地の極にまで亘らん。（九・九、一〇）

ゼカリヤ書九―一四章の無名の預言者は第二イザヤのように第二ゼカリヤとも呼ばれる。極めて黙示文学的なものでメシヤ預言が光を放っている。「シオンの乙女」も「エルサレムの娘」もシオンの城下町住民のこと。ダビデの市とも謂はれる。ダビデ王の存在自身が全地に君臨して神の意志を体現するメシヤ（救主）の預言であるので、そのようなメシヤ的な王を待望する預言の文字である。義にして救という観念は第二イザヤ（イザヤ五一・五、六、八）にはっきり出てくるが、サウルの父キシが捜し求めさせたのが驢馬で、驢は謂はばダビデの徴の如くで、メシヤ、キリストが驢馬に乗ってエルサレムに入城したのが冥合のようだ。柔和な心の人キリストの預言としてまことにふさはしい。エフライムは北王国イスラエルの中心部でイスラエルを意味する。人類の歴史上に戦争が絶たれる預言だから全く終末的預言である。キリストの来臨と世の終末に関はる驚くべき預言である。

6月2日

メシヤとエホバ
（ゼカリヤ書12—14）

○我れダビデの（王）家及びエルサレムの住民の上に恩恵と感恩の霊を濺がん。彼らはその刺したりし我を仰ぎ瞻、独子のために嗟歎し、長子のために悲歎する如く彼のために哀歎せん。その日にはエルサレムに大いなる悲歎あらん。（一二・一〇、一二上）

○その日罪過と汚穢を潔むる泉ダビデの家とエルサレムの住民の為に開かれん（一三・一）

○その日にはエルサレムの前方東なる橄欖山の上に彼の脚立たん。（一四・四上）

○一つの日あらんエホバ之を知る。夕暮時に光あらん。（一四・七）

○斯くて実存主全地の王。その日には独り実存主の名のみ。（一四・九）

ゼカリヤ書一二・一〇の「その刺したりし我」なる驚くべき啓示の預言。正に十字架上のキリストの言かとあやしむばかりの言。「恩恵と感恩」と訳した原語は同語異形で、神の本願のめぐみに対する悲願的切願で、霊恵と霊賜の霊と新約的に申して可い。この一節は十字架と聖霊の消息の驚くべき預言。第一三節の贖罪の泉は十字架の血である。キリストが橄欖山のゲッセマネを思はしめる第一四節。「一つの日」も「その日」と同じこと、「夕暮時に光あらん」とは昼夜の時の流れの中で、憧憬の念をそそる夕暮に永遠的な光がさしてくるとは希望の何たる美しき実現かな。実存者が全天全地の王となるの預言は天地に自在に遍在し給う実存主なるキリスト。（一二—一四章は第三ゼカリヤとも称う。）

6月3日

義の陽（マラキ書）

○一万軍のエホバ言ひ給ふ、視よ！　炉の如く焼くる日来らん。すべて驕ぶる者と悪を行ふ者は藁の如くにならん。二その日来らば彼らを焼き尽して根も枝も残らざらしめん。されどわが名を畏るる汝らには義の陽出でて昇らん、その翼には医す能力あり。（四・一、二）

○見よ、実存主の大いなる畏るべき日の来る前に、われ預言者エリヤを汝らに遣はさん。彼れ父の心をその子らに、子らの心をその父に立ち帰らしめん。（四・五原典三・二四）

日本の旧約聖書の最終巻はマラキ書。マラキとは「わが使者」の意で普通名詞だが、それがこの場合固有名詞化されて一預言者の名の如く扱はれている。内容を見ると祭司的性格の預言者である。第二神殿（五一五年）のことが書かれてあるから、それ以後のものである。驕慢な権勢者は東西の政治史に於ける歴然たる現象であるが、神の審判の「その日」にはそのような存在は根こそぎにされ、地獄の劫火に焼かれる。神の名を畏れる者たちには、「義の陽」たるキリストが出現して、その「翼」即ち太陽光線の如き愛の霊光が身心の病を癒す力をもっている。

父と子らの相互帰入！　そういう親子の信愛関係の回復こそ二十世紀末の火急の課題である。民主主義の偏破な理解のために親子、神人の相互帰入の信愛関係が崩れたら神の撃破が来るという最終預言、畏るべし、立ち帰るべしである。

6月4日

心を裂いて立ち帰らん
（ヨエル書）

○二エホバ宣ふ「今にてもなほ汝ら断食と悲涙と非歎とをなし、心を
尽して我に帰れ！」三汝ら衣を裂くに非ず、心を裂きて汝らの神エホ
バに帰れ。彼は恩恵あり、愛憐あり、怒ることゆるやかにして愛ゆ
たかなれば災害をなすことを悔い給ふなり。（ヨエル二・一二、一三）
◎その後、我れわが霊をすべての現身に灑がん。汝らの青年、乙女
は預言せん、汝らの老人は夢を夢み、汝らの壮年は異象を見ん。そ
の日我れまたわが霊を僕婢に灑がん。（ヨエル二・二八、二九。原典三・一、二）

ヨエルとは「ヤハウェ（エホバ）は神なり」の意。イスラエル民族に自現した神ヤハウェ、実存主は全世界の神である。イタリアの大詩人ダンテの『神曲』はイタリヤの文学であると同時に世界文学である。そのように真乎の個、特殊は普遍性、永遠性をもつ。ヨエル書一・一五に「噫その日は禍なる哉、エホバの日迫れり、あらしの如く全能者より来らん」とある。ヨエル書の書かれた背景は、旱魃に連関して蝗虫の四回に亘る大来襲のため、大荒廃を喫した時で、ヨエルは右掲の如く、「断食、悲涙、悲歎を以て全心で我に帰れ」との聖言を聴いたので、「心を裂いて」神に立ち帰らんと血の叫びを以て勧告している。正直に立ち帰る者を神は無条件にゆるし迎へ愛して下さる。この人災（罪から来る現象）や天災の終末的現実でヨエルに啓示されたのは神の御霊の万人への灑ぎかかりであった。このヨエルの預言はキリストの復活後の五旬節の日に俄然聖霊の降臨となって実現した（使徒行伝第二章参照）。

6月5日

瓢の徴
（ヨナ書1；3）

○ヨナ一・一二は彼らに言った「私を担ぎあげて海の中に投げ込んで下さい。海はあなた達のために凪となりますよ。私は知っているんです、この大時化が貴方達にやって来たのは私の因なんです」。
○さてエホバはすでに大きな魚を備えておいてヨナを呑ましめ給うた。ヨナは三日三夜魚の腹の中に居ました。（一・一七）
○エホバの言再びヨナに臨んだ、「起って大なる府ニネベに往き、私がお前に命ずることを宣べよ！」（三・一、二）
○エホバ神瓢を備へ、これを発生させ、「ヨナの」頭上を覆はしめた。これはヨナの頭のために日蔭をつくって、その憂いを慰めるためであった。ヨナはこの瓢の木で非常に喜んだ。けれども神はその翌日の夜明に虫を備えてその瓢を噛ませたので瓢は枯れた。（四・六、七）

今日で十二小預言書が終る。ヨナ（原語の意味は「鳩」）は列王紀下一四・二五に記されてある預言者で、北王国イスラエルの爛熟期ヤラベアム二世（紀前八世紀末）治下の人で、預言者アモスが南王国ユダに現はれた頃である。当時の大国アッシリヤの首都ニネベに対する神の審判の警告、ニネベの悔改め、神の憐憫の消息を語った宗教物語で、こういう事実はないのだが、筆者はずっと後代の無名の預言者である。（解説的告白は六月六日に。）

6月6日

神の本願
（ヨナ書4：10，11）

エホバは宣うた「お前は労せず育てもしないこの一夜で生えて一夜で枯れた瓢をさえ惜んだ。まして十二万余の右も左もわからない〔幼い〕者とたくさんの家畜のいるこの大都会ニネベを私が惜しまないことがあろうか。」（ヨナ四・一〇、一一）

ヨナ書の物語を辿りつつ、所感を告白しよう。アッシリヤの大都市ニネベは、古今東西の大都市によくあるように、罪悪が甚だしくなって来た。それでエホバがヨナに神の審判の言を告げるように命ぜられたが彼はこれを拒んで当時の西の極なるタルシシへ向う船に乗って逃げた。暴風となった。乗船者たちが、この難航は誰かの因だといって籤引きをした。ヨナに当った。ヨナは自分がヘブル人たることの信仰告白をした。そして船が難航しないためには自分を海に投げ込めと犠牲の申し出でをした。連想するのは弟橘姫が相模灘で投身して海を鎮めた故事である。ヨナはエホバが彼の知らぬ間に備え給うた大魚の腹の中に三日三夜を宿った。キリストはこの故事を御自身の復活前の死に譬え給うた（マタイ一二・四〇）。ヨナは陸に吐き出されてからはエホバの命に従ってニネベで神の審判の予告をした。ニネベの王を始め都民が悔改めた。これはこの無名の預言者の終末的悲願で、二十世紀の今日、ニューヨーク、モスクワ、そして東京がこの物語のニネベの如くあらんことを！　ヨナは之に対してパリサイ根性で怒った。それでエホバは瓢の徴を以てヨナを諭した。神は全人類の各個人が神に立ち帰らんことをのみ本願としておられる、合掌。

6月7日

幕屋より幕屋に
（歴代志略上）

「我はイスラエルを導き上りし日より今日にいたるまで、家に住みしこと無くして、ただ幕屋より幕屋に、天幕より天幕に移り住まへり。」（歴代志略上一七・五）

ダビデが千軍万馬の戦を終えて、エルサレムを都として、王者らしく名木レバノンの香柏を以て宮殿を建てそこに腰を据え、多くの妻妾をかかえる栄華な生活に入る。しかし彼はエホバ神の契約の匿がなほ幕屋の中にあるのを気にして、預言者ナタンに神殿の件を問うた。ナタンは、一応ダビデに心のままにしたら宜しいと応へはしたが、その夜、ナタンはエホバの聖言を聞いたので、ダビデに伝えた。それが右掲の聖言であった。

「それ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり、而して浮世は夢の如し」とは李白の名句であるが、天地自然を旅人の宿屋となし、時間を百千代の旅人に曙えているように、我々は歴史の中を歩いている旅人であり、天地到るところが宿屋である。永遠界から時空界に降臨したのがエホバの神である。この神は見えざる旅人としてアブラハム以来イスラエル民族と共に旅をなさった。今日の幕屋から明日の幕屋へと臨在し、民に語りかけて旅路を導き、天幕から天幕へと宿って親しく旅を共にした。これが神の在り方であるから、神殿は要らない。

6月8日

ソロモンの神殿
（歴代志略下１－９）

五 わが建つる家は大なり、我らの神は諸々の神よりも大なれば也。六 然れど天も諸天の天も彼を容るる能はざれば誰か彼の為に家を建つるを得ん。我何人なれば、彼の為に家を建てんとするや。唯彼の前に香を焚かんのみ。（二・五、六。原文は一、四、五）

ダビデは王宮を建てたが神殿は幕屋の神のゆえに建てなかった。ダビデがパテシバなる特愛の王妃によって得たるソロモンは魂も智慧も秀れた王であっただけに、ダビデの心はよくわかっていたが、驚くべき人員を動員し、驚くべき工費と資材を用いて二十年の歳月を以て大神殿を建てた。その内容は歴代志略下の一―九章に亙って詳かに記してある。その大神殿建設の精神は正に右掲の一言にあふれているのではないか。エホバ（ヤハウェ）なる神は絶大なる神、全世界はおろか諸天の天も彼を容れることのできない霊神である。その神の為に神殿を造る自分は何たる愚者ぞと平伏している。大神殿も香を焚き祈らんためのみという心である。そして幕屋を神殿の中央に置いて、その至聖所に契約の匣が安置されたわけである。彼ソロモンの祈りが第六章に記されてあるがまことに砕けたる平伏しの魂の祈りである。祈り終ると、天から火が降って燔祭と犠牲とを焚き、エホバの栄光が神殿に充ち祭司も入れなかった。霊火の降臨をイスラエルの子らは見て敷石の上で俯伏して、神を讃美し「善恵なる哉エホバ、その恩恵は永遠なり」と叫んだ（七・一―三）。形ありて形なきソロモンの神殿！　その後の第二神殿も遂に活ける第三神殿キリストに帰する。

6月9日

ペルシヤ王クロスの詔勅
（エズラ書1）

一 ペルシヤ王クロスの元年に当り、エホバ嘗てエレミヤの口によりて伝へ給ひしその聖言を果さんとて、ペルシヤ王クロスの心を感動し給ひければ、王即ち勅命を伝へ、詔書を出して遍く国中に告示して曰く、『二ペルシヤ王クロスかく言ふ、天の神エホバ、地上の諸国を我に賜へり。その家（神殿）をユダのエルサレムに建つることを我に命ず。……（エズラ一・一、二）

エズラは大祭司アロンを祖先に有つ祭司系の出身で、バビロン捕囚からペルシヤ王クロスの捕囚解放により、捕囚の民を千余名も導いて帰還した一方の指導者である。

さてクロス王の元年は、バビロンが攻略された年、即ち紀前五三八年である。エルサレムのために熱涙を流して祈ったエレミヤが賜った預言は、エレミヤ二九・一〇に「バビロンに於て七十年満ちなばわれ汝らを顧み、わが嘉言を汝らに与えて汝らをこの処に帰らしめん」というのであった。ペルシヤ王クロスの心はエホバに捕えられて、エレミヤの預言成就のことが起きた。クロスがエホバを神として拝するに到ったとは。

この度第一神殿たるソロモンの神殿が破壊消滅したので、第二神殿はユダヤ民族の魂の拠り所として建てることを神の命令として受けとっている。エズラとネヘミヤがこの神殿再建の大任を承ったわけである。当時の外国の世界的君主が捕囚民を解放しその民のために神殿を建てるとは、歴史上稀有なことである。イスラエル民族は諸々の苦難を通して全世界に歴史と全世界を導く神を伝える超民族的使命を負はされている。

6月10日

ネヘミヤの祈り
（ネヘミヤ記1）

「願はくはエホバ、天の神、偉大にして畏るべき神よ、[七]我らは汝に対して大いに悪行をなしたり。[八]汝の僕モーセに汝の命ぜし誡命をも法度をも規定をも守らざりき。[九]汝の僕モーセに命じ給ひし言を憶ひ給へ。其の言に曰く、『汝ら若し罪を犯さば、我汝らを国々に散らさん。然れども汝ら若し我に立ち帰り、わが誡命を守りてこれを行はば、仮令逐はれゆきて天の涯に居るとも、我そこより汝らを集め、我が名を住まはせんとて選びし処に来たらしめん』と。[十]げにや是らの者は汝が大なる力と強き手をもて贖ひ給ひし汝の僕ら、汝の民なり。」（一・五…一〇）

ネヘミヤ（語意「神は慰め」）はペルシャ王アルタクセルクセス（在位紀前四六五―四二四）の配膳頭であったが、エルサレム城壁改築に力を尽した当時は総督の地位にあった。その先任者はゼルバベルであった。エズラは主として内面的な信仰復興に貢献したが、ネヘミヤは内政面で活躍したわけである。しかし、右掲の祈りの如く、彼も五一五年に落成した第二神殿の神殿宗教を外形的なものたらしめない預言者の精神を継いだ魂であることを知る。彼らの城は神殿である。しかし神殿より不滅の城は彼らに啓示された聖言の城即ち聖典である。しかもその聖典の骨格は律法、生命の血は預言者（書）である。

6月11日

権力者の傍若無神の相
（イザヤ書1）

二 天よ聴け、地よ耳を傾けよ。エホバ語り給ふ『我れ子らを養ひ育てしに彼ら我に反けり。三 牛はその飼主を知り驢馬はその主の厩を知る。然るにイスラエルは識らず。わが民は悟らざるなり』。

二 忠信なりしこの都いかにして遊女とはなれる。昔は公平にて満ち、正義そのなかに宿りしに、今は殺人の巷と化しぬ。汝の長者たちは叛きて盗人の徒輩となり、各々賄賂を悦び、贈物を追求し、孤児のため正しき審判を行はず、寡婦の訟訴は彼らにまで到らざるなり。

（以上、イザヤ一・二、三、二一、二三）

イザヤ書全六十六章は、旧新約聖書全六十六巻（旧約三九巻、新約二七巻）の縮図の如き大預言書で、第一イザヤ（一―三九章）、第二イザヤ（四〇―五五章）、第三イザヤ（五六―六六章）の三部作から成っている。第一イザヤ書は大預言者イザヤのもの。第二、第三イザヤ書はいづれも無名の預言者のもの、時代的に捕囚期前、捕囚期直後、及第二神殿初期と見なされる。イザヤはユダ国王ウジヤの歿年紀前七四六年からヨタム、アハズ、ヒゼキヤの三代に亙ってイスラエル・ユダに対して預言活動をした。ミカやエレミヤとある時期を同じうしている。右掲のエホバの嘆きと預言者の社会批判的預言の内容は、人類の歴史に於て、傍若無神の権力者たちが繰返し犯して来た罪業である。

6月12日

軍備全廃の預言
（イザヤ書2）

◎神（エホバ）は諸々の国の間を審（さば）き多くの民を譴（せ）め給はん。斯（か）くて彼らはその劒をうち替へて鋤となし、その槍をうち替へて鎌となし、国民は国民に向ひて劒を挙げず、戦のことを最早学ばざるべし。（二・四）

○その日には目をあげて高ぶる者は卑（ひく）くせられ、驕る人屈（かが）められ、唯神（エホバ）のみ高く揚げられ給はん。（二・一一、一七）

右掲二・四の聖句の内容は現実には考えられない終末的な世界平和の実現を祈り心で預言しているわけである。軍備全廃である。劒が鋤にうち替えられ、槍が鎌にうち替えられる、とはまことに美しい言である。全世界の権力者、軍部が、神の前に平伏して大量殺人たる戦争全廃となることは考えられないが、それには、実は万人の一人一人が本当に「汝殺すなかれ」否、「汝は殺人はしない」との神からの信頼の聖言を体受することが現実とならねばならない。それは「敵を愛する」愛、キリストの愛、釈迦の慈悲が身についてこそ可能である。預言者イザヤやミカ（四・三）がこのような預言をするところに、実は神の本願がかかっている。そしてそういう歴史的終末に神の国を望むところに預言者の祈りがある。そのような時期を預言者たちは「その日」とか「末の日」とかいう言葉で指さしている。二十世紀末の今日、世界の政治家たちは旧約の預言者たちの終末的希望の烈々たる火の言、深刻な涙の言に新たに耳を傾けるべきである。

チャップリンが「独裁者」の最後の台詞でこう叫んだ「思いやりがないと暴力だけが残る。神の国は人間の中にある。貪欲と憎悪を追放しよう。」

6月13日

葡萄園の歌
（イザヤ書5：1－7）

五・一 われわれが愛する者のために愛する者の歌、即ち彼の葡萄園のことを謳はん。わが愛する者は肥沃の山地に葡萄園を有てり。彼その園を鋤き返し、石を採り除き、好き葡萄を植え、その中に望楼を建て、酒榨を掘りて好き葡萄の結ぶを望み待てり。然るに結びたるものは野葡萄なりき。それ万軍のエホバの葡萄園はイスラエルの家なり。その喜び給ふ植物はユダの人なり。これに公平を望み給ひしに反りて血を流し、これに正義を望み給ひしに反りて泣き号びあり。

預言者イザヤは、ユダの首都エルサレム出身の都会人、しかも宮廷に出入する高貴な家柄の人、所謂智識階級の人、而も政治に関与することの出来る知名人であったと思われる。しかしそれらの資格と彼が預言者であるということとは次元がちがう。彼は正に信仰の人であった。信仰の人の中で特に祈深い人が神から直接撰ばれて預言者にされる。預言者は単独者である。神の啓示の言は波状的に臨む。預言者はおのづから詩人である。

この「葡萄園の歌」は原文では勿論詩である。（僅か七節の詩是非お読み下さい）。「愛する者」とはエホバのこと。「イスラエルの家」も「ユダの人」も要するにエルサレムを中心としたイスラエル民族のこと。心を尽して愛し導いたこの民が神意に叛いて謂はば野葡萄になったから、外敵の荒らすにまかせると三―六節で神の怒が爆発している。葡萄は血に譬えられ生命の象徴。神の生命を賜っているイスラエル民族への深い哀歌。

6月14日

イザヤの召命（其一）

（イザヤ書6：1－5）

一ウジヤ王の歿年に我れ見たり、主の高御座に坐して高く揚げられ給ひ、その裳裾神殿に満ち拡がれるを。二熾天使らその上に立つ、彼に六翼此に六翼、その二つもて面を掩ひその二つもて脚を掩ひその二つもて飛び翔り、三彼此相呼ばはりて言ふ、『聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉万軍のエホバ！　その栄光は全地に満つ』。四閾の基揺り動きたり斯く呼ばはる者の声により。而も神殿煙に満ちぬ。五この時我言へり、「禍ひなる哉我れ破滅せん、我は穢れたる唇の者、穢れたる唇の民の真中に我は住み、万軍のエホバなる王をわが眼見奉りたればなり」。（六・一―五）

南王国ユダのウジヤ王は紀前七四六年頃に歿したが、その年にイザヤはこのような召命に遭った。霊的高揚の境地に於ける霊幻である。神殿で祈っていたときである。二つの熾天使らがおそらく向い合って舞いながら、「聖なる哉」（カードーシュ）を三呼して天の万軍の神を讃美した。イザヤが神をしばしば「聖者」と呼んでいるのはこの讃美による。

神殿が煙に満ち、震動したとは、モーセのシナイ山に於ける啓示の場合を連想させる霊煙霊震である。罪ある人間が聖なるものに面接するとそこに文字通り倒される。パウロの回心の場合がその著しい例であった。彼は自ら畏れ平伏した。モーセに対して「我れエホバ汝らの神は聖なり」（レビ一九・二）と宣うた。我執なき無我者、無者が聖である。

6月15日

イザヤの召命（其2）

（イザヤ書6：6—10）

六 時しも我に飛び来れるはかの熾天使の一者、その手には焼石を携へて。そは祭壇より火箸にて挟み採りしものぞ。七 そをわが口に触れしめて言へり。「見よ。この焼石汝の唇に触れたれば、汝の不義は除かれ汝の罪は掩はれたり」。その時我は主のみ声を聞けり、曰く、「我れ誰を遣はさん、誰か我らの為に行く者ぞ」。その時我言へり「我此処に在り、我を遣はし給へ」。九 彼言ひ給ふ「往きてこの民に語れ、『汝ら聴きて聴け、されど悟らざれ、見て見よ、されど知らざれ』。

国民の罪をおのが罪とし、神のみ前に平伏したイザヤに「聖なる哉」を三唱した熾天使の一者が祭壇から火箸で挟んできた焼けた石をイザヤの唇に触れさせた。勿論霊的異象である。そして天使は言った。「お前の不義も罪も消えたぞ」と。絶対恩恵の贖罪の徴である。すると「誰を遣はそうか」とのみ声である。イザヤは別の次元に救いあげられていたので、憚ることなく、「ハイ、どうぞお遣はし下さい」と返答した。神は不思議な聖言をイザヤに託された。民がどんなに聴こうが、見ようが、心が頑なで預言者の言を受けず亡びる。だから逆語的な神の言である。唯だ少数の「聖き裔」が残って後の代の根幹的存在となろう（六・一三）との希望が与えられた。

6月16日

信仰不動
（イザヤ書7）

もし汝ら信ぜずば、断じて持ち堪えじ。（イザヤ七・九下）

預言者イザヤは、彼の召命の体験によって万軍のエホバの神を特にイスラエルの聖者（五・二三、一二・六）と称えている。この神への信仰は不動であった。だからイザヤはまた特に信仰の預言者ということができる。それは新約のパウロに於て受け継がれている。右掲の七・九下のイザヤの言はその面目を端的に表はしている。この「信ずる」と「持ち堪える」の二語は実は同語「アーメン」を語根としている。神を信ずることは神に自分を全托して信入すること。信仰はもともと神の力に圧倒されて信ぜざるを得ないのが本当であるから、信は不動ならざるを得ない。ありがたき哉信仰は不動なりである。

イザヤは南王国ユダの王アハズとその民が、アラム（スリヤ）の王レヂンと北王国イスラエルの王ペカの反アッシリヤ同盟軍に攻められたとき（紀前七三五―四年）神の啓示を受け、スリヤ・イスラエルの力は「二つの焼え残りの煙った薪木のようなものだから懼れる勿れ」（七・四）「若し信じないなら持ち堪えないぞ！」（七・九）と喝破したのである。果然、スリヤは七三二年に、イスラエルは七二一年にアッシリヤに亡ぼされた。

この聖句と相照応する聖句を記載しよう。「主エホバ、イスラエルの聖者かく曰う、「汝ら立ち帰りて静かにせば救を得、穏かにして信頼せば力を得ん」（イザヤ三〇・一五）。この聖句はルター特愛のものであった。



予言者イザヤ（ミケランジェロ）

6月17日

インマヌエル
（イザヤ書7）

この故に主自ら汝らに一つの徴を賜はん。視よ、若き女孕みて子を産まん。彼女はその名をインマヌエル（「神我らと偕に」）と称えん。（イザヤ七・一四）

イザヤは北イスラエル国の亡びに継いで南ユダ国もやがて同じ運命になることは予感していた。不信に対するエホバの審判である。しかし義の審判のあとに義を与える恩恵の義のおとづれも予感していたであろう。それ故に「遺れる者」という言葉がしばしば出てくる。信仰を貫く選びの民である。聖なる神に信服、信従するこのような遺れる者はやはり「聖」と謂われる。聖徒という概念はイザヤに由来するというべきである（イザヤ四・三）。聖は冷たい潔さではなく、光と義と愛のあふれた内実である。イザヤは自分の子に「シェアール・ヤーシーブ」という名をつけた。「遺れる者帰り来らん」という意味である（七・三）。エホバのみ許に帰り来たる相が本当の前進である。

南ユダの王アハズにイザヤは神の重大な啓示を告げた。それは国運の如何に関らず不変の終末的現在を生きよとの啓示である。即ち「若き女」が子を産む。その子は「インマヌエール」即ち「神我らと偕に」の名を母親から賜はるのだという。この名がイエスの降誕のとき、預言として名づけられた（マタイ一・二三、ルカ一・三一等）。この「若き女」は「処女」ではない。しかしイエスの母マリヤの場合は処女であり、聖霊に因る。国の栄枯盛衰に拘らず、「神我らと偕に」を日夜の祈りとし、不断の現実とする人々は神の「遺れる民」である。

6月18日

躓きの石
（イザヤ書8）

一三 汝らは万軍の神（エホバ）なる彼を聖とし畏（かしこ）み彼をおそるべし。一四 然らば神（エホバ）は聖き避所となるべし。然れどイスラエルの両家には躓きの石と妨げの磐とならん。エルサレムの民には網となり罠とならん。（イザヤ八・一三、一四）

国際間の敵味方のごたごたは昔も今も同じこと。要するに人間がエゴイズムの捕虜（とりこ）となっている限り、歴史の終末まで、天候に雨や風や雪や曇天や暴風雨や晴天が千変万化しているのと同じことだ。東方にアッシリヤ西方にエジプトという二大国があった頃のユダの国は、その他にアラム（シリヤ）エフライム（イスラエル）等がいてユダとの間がおもしろくない。イザヤはエホバに信頼してこう三度び叫んだ「汝ら砕かるべし」と（八・九）。アッシリヤを怖れてこれに依存しているアハズとその臣下たちはイザヤのことを叛逆者と見做した（八・一二）。イザヤは飽くまでも神を「聖き避所（たとい）」としている（八・一三）。神の中に走り入って避所とすると力を得る。不滅の力だから、仮令仆れても死なない。国は破れても民は亡びない。

そのような神信頼のイザヤは誤解や迫害の的（まと）である。だから叛逆者呼ばはりをされる。日露戦争の前、非戦論を唱えた内村鑑三は国賊呼ばはりをされた。イザヤは国民の「躓きの石」とされた。キリストは地上に永遠の王国を建てるメシヤと思はれて民衆にかつがれたが、彼は「わが国はこの世の属（もの）に非ず」と言ったので躓きの石となった。弟子たちもイエスに躓いた。キリストの原始福音は一般のキリスト教徒の躓きの石となっている。

6月19日

遺れる者
（イザヤ書10：20—23）

一〇：二〇 その日イスラエルの遺れる者とヤコブの家の遁れたる者は最早おのれを撃ちし者に頼らず、誠意をもてイスラエルの聖者エホバに信頼せん。二 遺れる者、ヤコブの遺れる者は大能の神に帰らん。噫イスラエルよ、汝の民は海の砂の如しと雖も、その中の遺れる者のみ帰り来らん。そは滅亡はすでに定まり、義は満ち流れたり。三 そは主なる万軍のエホバは定め給へる滅亡を全土に行ひ給へばなり。

北王国イスラエルのアッシリヤによる滅亡の預言である。為政者の責任は重大で、方針をあやまれば国を滅亡に陥れる。日本も第二次大戦で遂に無条件降伏を強ひられたのであった。善良なる、有能なる、壮年青年がどれほどその犠牲になったか。このイスラエルの場合は為政者の神への不信や一般市民の権力者たちの横暴がアッシリヤによる神の義の審判の下に滅亡、捕囚の悲劇をもたらした。

しかしその中に遺れる者が少数ながらいた。遺れる者とは神信頼を貫き通す者の意で信仰不変のゆえに神に遺された者である。そういう人たちは神の許に帰りゆく。遺れる者は神に帰るという表現の奥は、実は神に不断に帰り往き帰入する者こそ遺れる者となるのである。イザヤがその消息を繰り返し告げているが、自分の子に、「シェアール・ヤーシューブ」即ち「遺れる者・帰り来らん」という名をつけたのは正に彼のこの信仰告白なのである。

常に帰神の態勢で生活すれば、天来のみ力で勝ち、遂に地を去って帰天するのである。

6月20日

霊的人格メシヤ
（イザヤ書11：1－5）

一 エッサイの株より一つの芽出でその根より一つの若芽生えん。二 その上に神（エホバ）の霊とどまらん。これ智慧と明察の霊、深慮と能力（ちから）の霊、また神（エホバ）を知り且つ畏るるの霊也。三 彼は畏神をもて歓楽（たのしみ）となす。（イザヤ一一・一―三上）

ダビデの父エッサイの株から一つの芽がでて、その根から一つの若芽が生じてやがて霊妙な実を結ぶという不思議な預言である。これは「ダビデの子」（マタイ一・一）と謂はれるメシヤ（キリスト）預言である。彼の上に神の霊が止まる。イザヤ六一・一―三の預言へと展開する。このメシヤは智慧・明察の霊、深慮・能力の霊、知神・畏神の霊で霊的人格をこのように畳みかけて宣べているところは類例がない。而も彼は神を畏れるのが歓楽であるという。畏れるとはこわがることではなく、信頼深く平伏するのである。そういう平伏しには深い祈りがある。かかる祈りの相を神は愛し給う。神の愛を受けるから歓びとなり楽しみとなる。「畏れをもて接吻をする」という表現がやはりメシヤ預言の詩第二篇第十一節にある。敬愛の宗教的心境である。

このような霊的人格たるメシヤはその審判を眼や耳に由らず、内なる霊心を以てやる。卑賤な人々のために、神の義を以てふとどきな権勢を振り廻す奴らを審判し、「口の杖」を以て国土をたたき、「唇の霊気」で悪人を倒すという驚くべき言霊の力をもった神人、霊人である。しかもこれ以上の深い心をもったキリストがやがて出現した。

6月21日

第二の楽園
（イザヤ書11：6－9）

六 狼は羔と共にやどり、
豹は小山羊と共に伏し、
小牛と牡獅子は共に草食み、
七 小さき童兒にみちびかれ、
牝牛と熊とは牧場を歩き、
その仔らは相むつみ伏し、
八 獅子は牛の如く藁を喰ひ
乳兒は毒蛇の洞にたはむれ、
九 乳離れの兒は手を蝮の穴に入れん。
斯くわが聖山何処にも害傷なし。
そは水の海に遍きが如く
神を知るの知地に満つるが故なり。
（イザヤ一一・六－九）

驚くべき霊的人格メシヤが出現すると、自然界の弱肉強食が動物の世界に於て歇んでしまう。そこではイソップ物語のような狐も、グリム噺話のような狼も、クレオパトラが乳房を咬ませたような蝮もみな変質変貌して害わない。

このような夢のような愛の世界が啓示されるところに神の本願、預言書の、しかもイザヤ書の栄光がある。ルーベンスの名画もなほ描ききれないパラダイスである。イザヤ書第三十五章がこの動物界に照応する植物界と人間界の楽園である。

その理由は即ち神を知るの知が全地に満ち溢れるからであると謂う。イスラエル人にとって神を知るという知の深さを注目しなければならない。彼らの「知」は対象を霊的に深い愛を以て全存在的に体認することである。そのような知をイエスは身証した。

6月22日

終末的和合
（イザヤ書19）

二四その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと共に三一を成し、
地の真中にて祝福と成らん。
二五萬軍のエホバこれを祝して宣はく、「恵福なる哉わが民なるエジ
プト、わが手の業なるアッシリヤ、わが嗣業なるイスラエル」と。
（イザヤ一九・二四―二五）

この驚くべき祝福の三敵国和合の預言は学問の限界ではイザヤのものとは認められていない。しかし啓示の次元は超学問ということを忘れてはならない。第十三章以降諸国の審判の預言が記されてある。

この第十九章は専らエジプトに関する預言である。しかもこの章の終りに、互に不倶戴天の敵たるエジプトもアッシリヤも向きを転じて神エホバに対する信仰を起こすという霹天の霹靂的事態となる。かくてイスラエルと共に三一的和合が成り立つ。第十九章第二五節は全く驚くべき神の祝福である。現実に不可能と思はれることなればこそ、イザヤが啓示を受けたとすれば、イザヤの深い悲願霊願に神が應え給うたわけではないか。

現代のソ連、アメリカ、日本がキリストに回帰し、武力全廃を全世界に呼びかけて、あの中国の戦国時代の戦闘的合従連衡ではなく、南北、東西の和合的合従連衡が円現するとき世界は天国、極楽となる。それはいつか！　歴史の終末の此方でありたし！

6月23日

終末的救済と栄光
（イザヤ書24—27）

◎地の極よりぞ歌の聞ゆる、栄光は義しき者に！（イザヤ二四・一六）
○地は砕けに砕け、地は破れに破れ、地は揺れに揺れたり（二四・一九）。
◎実存主は永遠に死を呑み、総ての面より涙を拭ひ給ふ（二五・八）。
○わが心夜汝を慕ひ、わが内なる霊晨に汝を求む（二六・九上）
○汝の死者は生き、わが民の屍は起きん。
塵に伏す者よ、醒めて歌ふべし。
汝の露は草木を潤す露の如く、地の亡き魂を出だされん（二六・一九）
○後に到らばヤコブ根を張り、イスラエル芽を出だし
花咲き出でてその実世界の面に満ちん（二七・六）

イザヤ書の預言は特にその審判と救済のコントラストが際立っている。第二四—二七章の中から右掲の如き著しい聖句を採り出してみた。二四・一六の如く義者はどう人にあしらわれようとも究極的に栄光が帰せられる。二四・一九の如く全世界の諸相はこのような様相を呈して来た。二六・九の如く夜床上でキリストを慕い祈り入りみ懐の中に眠り入る。晨には内なる霊キリストを求め、キリストその者を得て一日を走り抜くのである。これが終末的現実を生きるというものだ。二五・八、二六・一九の如く死に勝ち、涙は歓びに替り、復活の生命に漲る。二七・六の如くヤコブ・イスラエルを象徴とする神に救はれた人々は夫々の特色を以て、根を張り芽を咲き花咲き実を結んで神の栄光は世界に現ずる！

6月24日

貴き隅石
（イザヤ書28）

「視よ、我れシオンに一つの石を据えてその基となせり。これは試煉を経たる石、貴き隅石、堅く据えたる石なり。これを信ずる者はたじろぐことなし。」（イザヤ二八・一六）

驕慢で傍若無神の権力者がエルサレム住民を塗炭の苦しみに遭はせ、しかも彼らは見たアッシリヤを恐れてエジプトを頼りにしているのである。イザヤはこれを見て、彼らは恰も「死と契約を立て、陰府と契りを結んでいる」も同然である。まことに彼らは「虚偽を避所とし、詐欺を以て身を隠している」不埒な奴らである、となした。

島国で徳川幕府が独専の時代、虎の威を衣て虚偽と詐欺の術数を以て奸商と結託し、暴漢を手足として専横を極め、逸楽に耽っていた地方の権力者どもの相を「水戸黄門」の時代劇が描いているが、東西の歴代の閻に葬られた善良な庶民の血と涙が徒らでなかった日がどうしても到来しなければならない。

このイザヤの社会批判に応えて神が終末的な救の石、象徴的な石を啓示し給うた。詩篇一一八・二二に「建築師の棄てたる石は隅の首石となれり」がこれに照応している。この首石を外すと建物が崩解すると同様に人間の社会と歴史からこの人物を外したらどうにもならない。その人を十字架に懸けて棄てた。そのように「棄てられた石」がキリストであった。だからキリストは葡萄園の譬話で御自分がその石だと喝破した（マタイ二一・三三―四六）。その「隅石」なるキリストに平伏してしがみつくのみ。

6月25日

天道地路
（イザヤ書30）

◎実に主エホバ、イスラエルの聖者かく言ひ給へり、「汝ら立ち帰りて不動ならば、救を得、静もりて信頼せば力を得べし」。（イザヤ三〇・一五）――ルター特愛の聖句

○汝その耳に汝が後辺より語るを聞かん「是れぞ道なる、是れを往け！」汝右せんとするとき、汝左せんとするときに。（三〇・二一）

右掲の第一言北のイスラエルにせよ、南のユダにせよ、東にはアッシリヤやがてはバビロニア、西にはエジプトという大国があった。それは今の日本にソ連、アメリカ、中国が北、東、西にあるように。日本は何を頼みとするのか、その工業技術力か、経済力か、我らには「立ち帰るべき」宇宙を創造し、歴史を支配する神は在まさぬのか。「信頼すべき」大愛の神は要らないのか。愛こそは最大の力であることを体現しようとしないのか。単なる非戦論とか平和運動ではない。具体的に他を益する善隣友交の愛である。

第二言、人は人生に於て種々の岐路に出遭う。右せんか左せんかと迷う。そのとき神の声「是れぞ道なる、是れを往け」という第三の道とは何か。人間的な打算や分別を越えたものが神の天道である。祈りを以て天道に即せんとするところにその人の地路が示されてくる。それはどういう秘義か。「我れこそは道なれ！」と喝破したキリストを体受して自分が地路即天道となることだ。その境地はおのれが無路なのである。そのとき自由自在に即時的にのつびきならぬ地路を開拓しゆくのである。

6月26日

畏神は国宝
（イザヤ書31—33）

○エジプト人は人にして神に非ず、その馬は肉にして霊に非ず。エホバその手を伸ばし給はば、助くる者も蹟き、助けらるる者も倒れて、皆齊しく亡びん。（三一・三）

○神を畏るるはシオンの宝なり。（三三・六下）

○エジプトに頼ろうとしていた為政者に対してイザヤが預言した言葉である。信頼すべき神をぬきにして、大国の蔭に立とうとする愚を詰ったのである。肉なる人や軍馬ではたのみ甲斐なし。神にして霊なる実在者に依り頼めよ。そうでなければ、助けるエジプトも蹟き、助けられるイスラエルも倒れて、共に亡びるぞとの警告である。

個人の在り方の問題にしても、全く同様である。生殺与奪の権威と愛を有つ神のみ手の中に在ってこそ、助け合いが美しい行為となるので、神との縦の関係が無いところではついには、ゆきつまりとなり、亡びを刈りとることになる。

○神を畏れるのはシオンの宝である。とは好い言葉ではないか。シオンはイスラエル民族の城たる名である。首都エルサレムのことでもある。首都の名はしばしばその国家の代名詞でもある。ロンドン、パリー、ベルリン、ローマ、ニューヨーク、モスコー、東京、北京が夫々の国を表はすように。これらの首都が神を畏れるなら、そのことが国の宝となる。ところが首都が肉的な繁栄を誇ったらそれは滅亡の兆である。「我々ドイツ人は神を畏れる。その他世界の何ものをも畏れない」とビスマルクは叫んだ。グラッドストーン、リンカン等も同じ次元の魂であった。神を畏れる首相もまた国の宝である。

6月27日

世界の破滅
（イザヤ書34）

一 諸々の国よ、近づきて聴け、
諸々の民よ、耳を傾けよ。
聴け、全地とその中に満つるもの、
世界とその上に生ゆるものは皆！
二 げにエホバは万国に対して怒り、
その万軍に向ひて憤り、
彼らをことごとく潰滅し、
三 殺されし者らは投げ棄てられ、
その死屍ゆ悪臭たちのぼり、
四 山々はその血潮にて融かされん。
天の萬象は消え失せ、
諸天は巻物の如く巻き去られん。
葡萄の樹より葉は落ち、
無花果より朽葉の散る如く
万象は枯れ落つるなり。（三四・一―四）

諸々の国も諸々の民も、その中の政治力、軍事力、工業力、経済力等の力を有つ人々が闘争を競う。しかも虚偽、奸策、殺戮の父たるサタン（ヨハネ八・四四）の魔手の下、遂には戦乱を巻き起す。これはみな人間の中に巣喰う慾心の爆発に他ならない（ヤコブ四・一）。人類は自ら自滅の道を辿りつつ、戦争史を連綿として血と涙で綴っている。

神の愛を無みして逆に神の義の現はれたる審判を自ら招くのである。このイザヤは当時の世界状勢を大観して上掲の如く、神の世界審判を眼前に見る如く謳った。世界は壊滅する。天地が大変動を来たす。第三四章の大半はイスラエルの宿敵エドムに降る審判の天剣の預言であるが、要するに人間の悪業は神の世界審判を招く。しかし義と愛のため血と涙を流した人々を神が救済する時がくる。

6月28日

楽園回復
（イザヤ書35）

一 曠野と渇ける地とは楽しめよ、
砂漠は歓びてサフランの如く花咲け！
二 花咲き匂ひて歓べよ、喜び謳へ！
レバノンの栄光は彼女に与へられ、
カルメルとシャロンの壮美も彼女に。
彼らこそは実存主の栄光を観
我らの神の壮美を観ん。
五 その時しも盲者の目は開き、
聾者の耳は聞こゆべし。
六 その時しも跛者は鹿の如く跳び走り
唖者の舌は歓び歌はん。
三 実存主に贖ひ救はれし者帰り来らん、
彼らは歓び謳いてシオンに到り、
その首には永遠の歓喜あらん。
歓楽と歓喜とを彼らは勝ち得、
悲哀と悲歎とは逃げ去るべし。

イザヤ書第三四章がヤコブ（イスラエル）の兄エサウ（エドム）を代表とした神の人類審判、世界の壊滅を預言する地獄篇とするなら、この第三五章はイスラエル全土とその都シオンを代表とした神の救済、楽園回復の天国篇。

預言者は大方詩人で、この詩は特に素晴らしい。第一イザヤと第二イザヤのいづれにも通ずる無名の詩人であろう。戦乱のため国は亡び自然は荒廃したが、神の来臨と共に自然界の樹木も草花も復活して楽園を現じた。人間界、特に身体障害者たちが神のみ霊の力で皆癒されて輝かしい相貌となる。実存主に贖い救はれた者たちが皆シオンに帰ってくる。

このような終末的楽土天国を現じた神の人がこの預言の如く来臨した。ナザレのイエスである。

聖歌六二三、「いつかは知らねど」は正にこの第三五章を謳った名歌である。

6月28日

（詩）サフランの歌（イザヤ34，35）
作詞1983.2.1.
歌調「ああ玉杯に」（一高寮歌，楠正一作曲）

サフランの歌

1
曠野の如き　人の世や
文化はあれど　虚偽の
平和の蔭に　軍備あり
妖星走る　空の下
西も東も　平安からず
いつまでかくて　あるべきや

2
天つ御神は　国々の
軍に向ひ　聖怒を
あらはし給ふ　鬩ぎ合ふ
戦争起れり　み審判の
天の剣は　血を浴びぬ
万象消えて　いと暗し
わが腸は　沸えたぎり
胸も掻き　裂けんとす
聞け爆音の　雷霆を
見よ爆弾の　炸裂を
原爆大戦　捲き起こり
全地は今や　生き地獄

3
敗滅の報道　空を飛び
混沌と淆乱の　地に化しぬ
幕屋はいづこ　見えわかず
刺草・薊　焼けただれ
狼・梟　影見えず
莫々たりや　全世界

4
時は移りて　時期を呼び
壊滅の夜は　明け初めて
朝霧罩む　地の面に
朝日の光　指しそえば
小草の芽生　現はれぬ
ああ復活の　春は来ぬ
見よ曠野には　紅白の
サフランの花　咲き薫り
見渡すかぎり　楽園に
復活りたり　あな不思議

5
いざ平伏して　聖名を呼び
声高らかに　讃美せん
レバノンの栄光　男の児らに
サフランの美は　女の子らに

6月28日

（詩）サフランの歌（イザヤ34，35）

作詞1983.2.1.

歌調「ああ玉杯に」（一高寮歌，楠正一作曲）

8

輝き出でん　あな嬉し
歌ひて舞えよ　乙女子よ
主の栄光を　身に浴びて
花サフランの　精の如

「遁れる民よ　汝らは
曠野の中に　恵まれぬ
わが窮り無き　愛により
救はれたるは　十字架の

砕けの愛の人々よ
民族の差別　絶えてなし」
時期は来れり　人よ聞け
盲者の眼　開かれぬ

聾者の耳　聞えたり
跛者の脚　立ちあがり
唖者の舌は　もの言へり
主イエスのみ業　玆に成る

9

曠野に泉水　たばしりて
砂漠の中に　川流る
涸れたる丘は　緑して
羊の群が　牧はる

10

猛き獣の　影失せぬ
小鳥や蝶が　飛び交うよ
イエス・キリストに　救はれし
民らは今や　復活の

大地の人よ　歓びて
おのが天職　はげみつつ
交響楽を　編み成さん
神の聖旨の　成るままに

噫これ夢か　幻か
全地は今や　神仏に
伏しておろがみ　立ち帰り
かたみにゆるし　相抱き

愛の世界を　体現せよ
聖書の預言　畏るべし

11

12

6月29日

ヒゼキヤの祈り
（イザヤ書38）

七 視よ、平安のためなりし、
我に苦難また苦難の来れるは。
汝わが魂を愛で滅びの穴より出だし、
げにや汝が後べにわが罪を
ことごとく投げ棄て給へり。
八 陰府は汝に感謝せず、
死は汝を讃美せず、
墓に逝く者は汝が信実を望まざり。
九 生ける者こそ汝に感謝するなれ、
今日の我れの如くに！
一〇 父はその子らに知らしむ、汝の信実を。
神は我にとりて救なり。
我ら奏でんわが絃歌を
我らが生命の日の限り、
み神の家に向ひて。

（イザヤ三八・一七―二〇）

ユダの王ヒゼキヤは始め信仰揺ぎ、アッシリヤ王センナケリブを恐れて貢物を贈ったりしたが、イザヤに責められてエホバへの信仰に立ち帰った。その著しい祈は三七章一六―二〇節に記されてある。

エホバはイザヤの信仰に応えてセンナケリブのエレサレム包囲の大軍を一夜にして潰滅せしめ給うた。それは紀前七〇一年（イザヤ三七・三六―三八）。

ここに掲げたヒゼキヤの祈りは三八章に記された彼の病後のもの。

この祈りを聴いて感ずるのは、どんな時にも神は自分を愛し給うこと、すべての罪過を投げ棄てて下さること、死も陰府も我らに関はりなきこと、我らはキリストに在っては死んでも死なぬこと、人生は聖名の讃美で貫くべきことである。

6月29日

（詩）イザヤの預言（イザヤ1—33, 36—39）
作詞：1983.6.23
歌詞：S.214「北の極なる氷の山」

イザヤの預言

1
「いとも聖なる　万軍の主
その栄光は　全地に満つ」
セラビム舞いて　かくぞ歌ふ
神殿もために　霊に震ふ

2
霊に感じて　イザヤ叫ぶ、
「禍いなるぞ　われは亡ぶ
万軍の主を　けがれし我れ
見まつりたれば　われは亡ぶ」

3
「セラビム我れに　飛び来たりて
わが唇を　火にて焼けり
主のみ声あり、「誰を遣（や）らん」
「遣はし給へ　我れはここに！」

4
「愛の愛なる葡萄園よ！
酒槽、望楼　備へせしに
結びしは是れ　野葡萄なり

5
棘、荊の　荒野とならん

神の審判と　神の義とを
求めてそこに　生きて在れよ
シオン審判かれ　あがなはれぬ
帰る者らも　神の義にぞ

6
神の徴は　いつ出づるや
運命の危機ぞ　祈り待てよ
徴は何ぞ「インマヌエル」
乙女の子なり　メシヤ予言

7
主は避け所　躓く石
妨ぐる磐　民らの網
罠ともなりて　救の主なり
万軍の主の　愛は是れぞ

8
センナケリブの　雲霞とまがふ
大軍来たり　エルサレムを
包囲せしかど　何か恐れん

6月29日

（詩）イザヤの預言（イザヤ1—33，36—39）

作調：1983.6.23
歌詞：S.214「北の極なる氷の山」

エホバにイザヤ　祈り入れり

9
イザヤの熱き　祈りに応へ
主のみ力は　現はれたり
アッシリヤ軍　一夜にして
壊滅したり　神の力

10
エッサイの根ゆ　芽出でぬ
エホバのみ霊　これに宿り
智慧と明悟と　能力に満ち
腰に義の帯　身には信実

11
「わがエジプトよ　わが手のわざ
アッシリヤ国　イスラエルと
相携へて　我に帰らん
その日世界は　平和と成らん」

12
狼、羊、豹と小山羊
牧の牡獅子　牝牛と熊
乳児と蛇　相助くる

愛のあふるる　聖国来たれ！

6月30日

エレミヤの召命
（エレミヤ記1）

一・四 エホバ神の言我に臨みて言ふ 五「我れ汝を腹に創らざりし先に汝を知り、汝が胎を出でざりし先に、汝を聖別し、汝を立てて万国の預言者となせり。」 六 我応へけるは「噫主エホバよ、視よ、われは語ることを知らず、そは我は若輩なればなり。」 七 エホバ我に言ひ給ふ「汝、われは若輩と言ふ勿れ。すべて我が汝を遣はす所に往き、我が汝に命ずることをみな語るべし。 八 汝彼らの顔を恐るる勿れ。そはわれ汝と偕に在りて汝を救ふべければなり。」と。 九 エホバそのみ手を伸べてわが口につけ、我に言ふ「視よ、我れわが言を汝の口に入れたり。」

南王国ユダ没落の夕暮に国の運命を荷ってその滅亡を共にした預言者エレミヤは、深い涙の人で、北王国イスラエルの没落時に同じく悲涙を滴らした預言者ホセアの霊統を継ぐ偉大な心の預言者である。彼は専王マセナ時代の六四六年頃祭司ヒルキヤの子としてエルサレムの東北方のアナトテという丘陵地帯の町に生れた。エレミヤとは「エホバは射る」の意で、神の言を矢の如く発する彼の使命を表はしている。彼は右掲の如く、生れぬ先から聖別され万国の預言者と定められていた。若輩の彼に召命が降ったので、モーセと同様自分を見て神にお断りを言ったが、年歯など問題に非ず、といって神は聖手を彼の口につけてわが言を腹に入れたぞ、と。而も「我汝と偕に在り」、わが権威ある言を伝へよ、怖れるな、と。

7月1日

生命の水の源
（エレミヤ記２：12,13）

「諸々の天よ、このことに驚け、慄け、いたく恐れよ、」とエホバ言ひ給ふ、「そはわが民は二つの悪事を犯せり。即ち生命の水の源なる我を棄て、自ら水溜を掘れり。即ち崩れたる水溜にして水を保ち得ざるなり」。（エレミヤ二・一二、一三）

預言者たちがしばしば民を責め、警告を発しているのは偶像礼拝という背信行為とそれに関連した他国依存であった。民族のそしてそれは同時に世界、万物の創造神たる実存主信仰と自由独立の気魄に生き且つそのことを叫んでやまないのが預言者たちであった。大気なくして呼吸は不可能。清水なくして体は保たない。だから生命の水の源は神であるとの表現は極めて自然である。特に水の乏しい沙漠地帯の多いカナン・イスラエルの地にあってはこの表現は切実なものであった。（エレ一七・一三、詩三六・九参照）。キリストがサマリヤを旅しておられたときサマリヤの女とヤコブの井泉のほとりで語られた言に「すべてこの水を飲む者はまた渇かん。然れどわが与ふる水を飲む者は永遠に渇くことなし。わが与ふる水はその者の中にて泉となり、永遠の生命の水湧き出づべし」（ヨハネ四・一三、一四）と。これこそ諸々の天よ驚けと叫びたい聖言である。エレミヤへのエホバの言の根源現実をキリストはもっていた。即ち彼は生命の源泉そのものであった。今も無論のこと、永遠の生命を与え得る霊界の人である。この水は即ち聖霊である。この水なくして人にまことの生命なしである。

7月2日

我に帰れ！
（エレミヤ記3）

背向ける子らよ、我に向き直れ。我れ汝の背向きを直さん。（ホセア一四・四参照）
視よ、我ら汝に来れり。実に汝は我らの神エホバなり。（三・二二）

エレミヤはこの第三章でしきりに神の本願たる「我に帰れ」の消息を伝えている。エレミヤの悲願「神に帰れ」もしばしば叫ばれている。そしてイスラエル、ユダの滅亡時のすべての預言者の祈りの焦点は「エホバに帰れ」であった。

然り、個人の、民族の、そして全世界の最大の問題は、神に、創造主に、絶対者に帰れに帰一する。絶対の一者の名を何と呼ぼうとそれは民族によってさまざまでよい。そしてその絶対者の性が、本質が愛である限り、世界は平和に向う。歓喜と讃美の世界となってゆく。帰神を念願として生きない限り、妬み争いは絶えず、戦争は絶えず、遂には世界破滅となる。宗教とは何か。「我に帰れ」のみ声に全存在を以て回帰してゆくことである。

さてこの「背向ける」というヘブライ原語と「向き直れ」の原語は同根である。向き方が神に対して背向きか、真向きかで、百八十度の差で、神に向き入る帰入となるか、神に背向く離叛となるかで、天国か地獄か、救いか滅びかになる。原語は「シューブ」という。「向く」という語。神に向きゆくから帰るとなる。新約の「悔改める」という語、これも実は神に向って「向きを転ずる」ことで「回帰する」である。神・キリストに回帰すること、而も帰入すること、祈入することが魂と存在の本当の相とならんことのみ。

7月3日

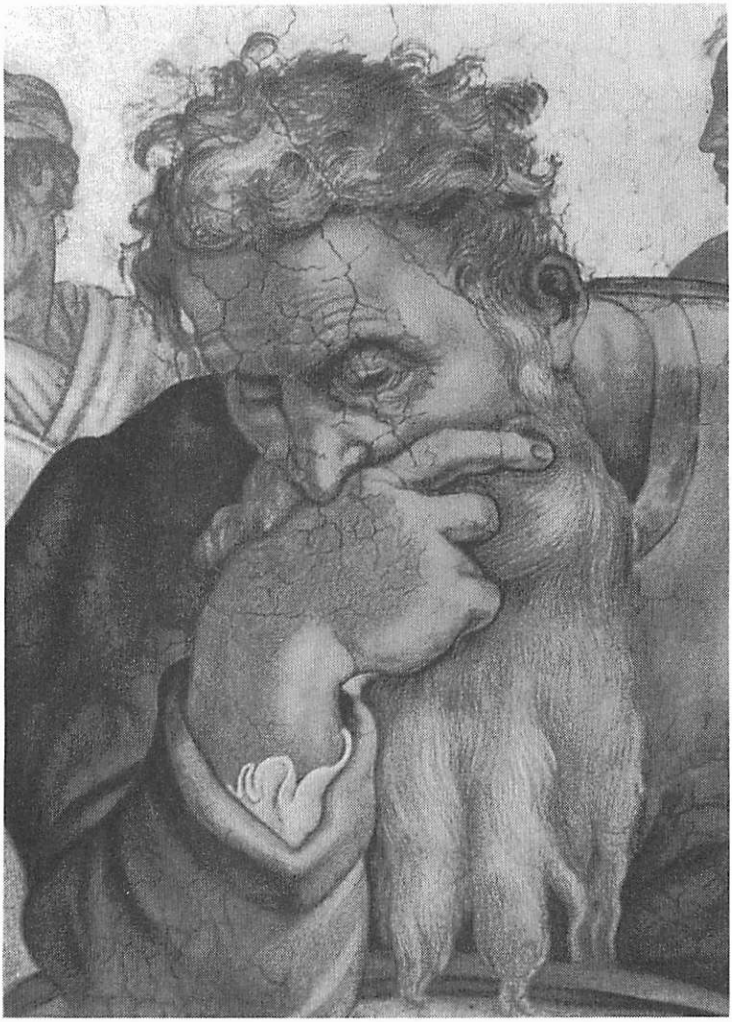
わが腸よ，わが腸よ！

メーアイ，メーアイ！
（エレミヤ記4）

一九 わが腸よ、わが腸よ！　我れ苦しみもだゆ。
心臓の壁よ、心の奥に呻きあり、慎まらず。
二〇 角笛の響き、戦の鬨の声をわが魂は聞く。
二一 潰滅に潰滅が迫り、此地は凡て荒れ果てぬ。
二二 わが幕屋遽かに破れ、わが天幕も瞬く間なり。
三 いつまで軍旗を見、角笛の響を聞くならん。
三 「愚かなる哉わが民、彼らは我を露知らず。
彼らは愚鈍の子らぞ、解らず屋ばかりなり。
三 彼ら悪業に智慧あれど、善行には無知なるぞ」
二三 地を見れば形失せ空莫、天を仰げば光なし。
二四 我れ山を見れば皆震ひ、丘もみな揺ぎたり。
二五 我れ見るに、見よ！　人影ぞ無き。
二六 空の鳥もみな飛び去れり。
我れ見るに、見よ！　沃地は荒地と変り果て、
すべての市邑エホバのみ前に毀たれぬ、
み怒りの炎を正面に浴びて。（エレミヤ四・一九―二六）

エレミヤはこの第四章で、神への立ち帰りを更に伝へ、形の割礼ではなく心の割礼をせよ！　そうでないと神の怒りが臨み、北方からの戦禍に襲はれると警告している。彼は武装を問題としない。預言者エレミヤはどこまでも心の在り方を問題としている。

彼はある日、ユダ国滅亡の幻影を見た。それが上掲の詩句である。第二二節は神からの言。言々句々、断腸の念いの迸りである。



予言者エレミヤ（ミケランジェロ）

7月4日

一者の存在
（エレミヤ5：1）

「汝らエルサレムの街路を走り廻り、その広場にて視よや、知れよや、尋ねよや。もしや一者を見出だし得るやを。〔即ち〕もしや一人の公義を行じ、信実を求むる者あらば、我（エホバ）この市（エルサレム）を赦すべし。」（エレミヤ五・一）

エホバ神がかく問いかけ給うた。この問いに応え得る一者（口語的に言えば、一人の人）は実はエレミヤであったにちがいない。しかしエレミヤはアナトテというエルサレム北方の寒村の出身である。一人の義人があれば全エルサレムを赦すという聖言がかかったということは、如何にエレミヤが個人の存在の貴さを開示する使命を帯びた預言者であったかを知る。これはイエスの宗教への指標である。「人全世界を得るともおのが生命（魂）を失はば何の益あらん。」と喝破したのはキリストであった。地球を右の皿に乗せ、一者を左の皿に乗せて天秤に懸けると左の方が重くて右があがる、という逆理である。人一人の魂の貴さは無比なものだということである。一人の人格は代用が効かぬということである。失はれた一人の子供は親にとって全世界とも代えられないというのである。迷える羊一匹をとり戻すためには九十九匹を問題にしないでさがし求める神の心なのである。

それゆえ、一人の義人あらば、それは全エルサレムを赦して可なる貴さがあるとの神の心である。その極限の消息が、神の子イエスに於て証しせられた。即ち完璧な義人キリストの十字架の贖罪死は彼を信受する如何なる人の罪をも贖う力をもっている。合掌のみ。

7月5日

獅子と狼と豹
（エレミヤ記5）

この故に林よりいづる獅子は彼らを殺し、
曠野の狼は彼らを滅ぼし、
豹はその市邑を狙ふ。
其処より脱出する者は皆裂かるべし。
そは彼らの罪は夥しく
その背叛は甚だしければなり。（五・六）

神は聖憤のあまり、エレミヤに「我汝の口の中にてわが言を火となし、此の民を薪となさん。その火彼らを焼き尽すべし」（五・一四）と叫び給うた。右掲の預言の冒頭の「この故に」とは、要するに不信、不義、偶像崇拝の民の在り方の故に、というわけである。獅子や豹や狼の如き野獣は預言書にしばしば現はれてくる。この場合、剽悍な北方のスクテヤ人や獰猛な東方のバビロニヤ軍などが暗に意味されてもいる。また実際これらの野獣にやられることもあろう。要するに神の審判の具である。

ところでイタリヤの大詩人ダンテの『神曲』地獄篇第一歌を見ると、彼が太陽の輝く山に登るべく坂道にさしかかったら、まづ豹が現はれ、次には獅子が立ち塞ぎ、遂には狼が立ちはだかったので、彼は登ることを断念せざるを得なかった。それはダンテが豹に於て肉慾を、獅子に於て高慢を、狼に於て慾心を象徴せしめ、人間は肉慾、自己主張の自我心、諸々の物慾に、要するに自我心に勝てない罪びとであることを詩的に表現した。それはこのエレミヤ五・六を契機としたに相違ない。聖霊で内的変貌を賜るとこの三獣に勝つ。

7月6日

預言者の宗教
（エレミヤ記7：1－7）

「[四]これはエホバの宮なり、エホバの宮なり、エホバの宮なり、といふ虚偽の言を汝ら頼みとする勿れ。[五]汝らもし全く汝らの道と行を改め、人とその隣人との間の審判を正しく為し、[六]異邦人と孤児と寡婦を虐げず、[七]辜無き者の血をこの処に流さず、他神々に従ひて禍害を招かずば、我汝らをわが汝らの先祖に与へしこの地に永遠より永遠まで住まはしむべし。」（エレミヤ七・四－七）

預言者エレミヤに臨んだこのエホバの言に、預言者の宗教の本質がよく現はれている。神との美しい深い実存関係が立っていて、他の神々と関はりのないことが大前提である。この拝一神が真に実存的であるところは即ち唯一神の現実に突き貫ける。それは大らかなまたゆたかな愛の実存の実を結ぶ。決して他の神々を拝する者を排斥しない。大きく包擁する。それゆえ「異邦人を虐げず」という広さを有つ。昨今のイラン、イラクや近東諸国の角逐は何たることか。「孤児と寡婦を虐げず、無辜者の血を流さず」という、弱者への愛を預言者はまた繰り返し叫んでいる。これは単なる道徳ではない。神との深い霊的人格的交りから来る力ある愛の花であり実である。

神殿礼拝の宗教行事をこととして、日常生活に於て神の義の証者として正しき審判をなし、愛の証者として弱者、貧者、不幸な人たちを助けなかったら、「エホバの宮」のお題目は空虚であり、虚偽である。

7月7日

泪の泉

（エレミヤ8：18〔19〕――9：1〔8：23〕）

ああわが首水（こうべ）となり、わが眼泪の泉とならんことを！　わが民の乙女の屠（ほふ）られたる者のため昼も夜も泣きてん。（エレミヤ九・一、原文では八・二三）

南王国ユダが滅亡に瀕した頃、偶像崇拝と社会的紊乱でエルサレム市民の生活が極度に頽廃的となっているのを見て、エレミヤは深く嘆いていた。外敵バビロニアの軍がエルサレム及びその周辺に襲いかかって来た。ユダの国民が殺害される悲惨なありさまを見ては、暗涙に咽ぶのであった。右掲の詩句はそのまま預言者エレミヤの熱泉のような涙であった。

わが国が自ら招いた第二次大戦で惨怛たる敗戦を喫し、日本全土のめぼしい都市が爆弾、焼夷弾の猛撃の餌食に供せられたときの惨状は言語に絶するものであった。況んや広島、長崎の原爆に至っては目もあてられぬ地獄そのものであった。無量の血が流れる遑もなく炎に化し、無量の涙が一瞬にして乾（ひ）た。肉はただれ、骨が散らばった。

戦争！　歴史は戦争史か。人間の最も人間らしからぬ姿であると同時に、人間の最も露骨な姿である。人間の極限的曝露の相である。

「人の世はどうしてこうであるのか」詩人ダンテの顔はこのような憤りの表現だとカーライルがその「ダンテ論」の中で書いている。ダンテはまた泪の詩人であった、「多くの人々及びさまざまなる傷（いたで）はわが眼をいたくも酔はしめ、目はとどまりて泣かんことを願へり」（長江訳）。

沖縄の惨劇「白百合の乙女ら」が今宵天界にて夫々牽牛的青年と相抱かんことを！

7月7日

(詩) 戦尽きせぬ人の世や

作詞1980.10.16
歌詞「荒城の月」滝廉太郎作曲

戦尽きせぬ人の世や

1
戦尽きせぬ　人の世や
そのみなもとは　我慾なり
有無相通ひ　あたへなば
楽しき平和　来るものを

2
闘争絶えぬ　人の世や
幾千年の　血の叫び
野にも山にも　余韻あり
神の審判を　祈り待つ

3
妬み争ふ　人の世や
神のみ前に　平伏して
主の十字架の　贖罪と
愛のみ霊に　あづかれよ

4
世紀末なる　人の世や
武器を投げすて　鍬を執れ！
かたみにゆるし　愛せずば
世界はやがて　自滅せん

5
あなおろかしき　人の世や
救いがたきは　人の罪
宜ベキリストの　十字架は
世の終末まで　現実なり

6
十字架の下　相つどひ
深く祈れば　必ずや
み霊くだりて　甦へり
歓びに満ち　聖名讃ふ

7
ここにはじめて　平安の
神の国こそ　臨むなれ
み霊の力　身に満ちて
道を伝へん　いつまでも

7月8日

唯だ神を誇る
（エレミヤ記9：23,24）
〔原文9：22,23〕

三 エホバかく言ひ給ふ『智慧ある者はその智慧に誇る勿れ。力ある者は其の力に誇る勿れ。富者はその富に誇ること勿れ。四 誇る者はこれをもて誇るべし。即ち明哲にして我れを知る事と、わがエホバにして地に仁恵（愛）と公正（審判）と公義（義）とを行ふ者なるを知る事是れなり。我れ是らを悦ぶなり』（エレミヤ九・二三、二四。原文は九・二二、二三）

道徳の世界では矜持というプライドを持つ心根が大切であろう。それは自信や自重の観念とも通じる。しかし宗教の世界に来ると神・キリストを実存の根柢とするから、矜持といった気持が止揚されて、次元の高次な神・キリストを誇る心根となってくる。「誇る」の原語は「讃美する」と同語である。使徒パウロは、律法を実践して、律法を行ずる義に就いては責むべきところなしとまでおのが義を誇り、矜持の念が強かったが、キリストの福音の義に出遭って、けたちがいなことを知り、「律法の義」を塵芥の如く棄てて、「キリストの義」福音の義を誇りとするに至った。パウロほど美事な質的変革を体現した人物はないといってよかろう。

エレミヤは旧約の世界で既にそれを体現していた。それはエホバに捉えられ、その言に於て行為に於て神意を伝え、神意を行ぜしめられて神を知ったからである。エレミヤはエホバ、実存主を誇るほか何もなかった。だから人間の側の何ものをも誇るな、それらの根源は皆神から来ている恩恵ではないか、恩恵を私する勿れ、というわけであった。

7月9日

義しきかな神は！
（エレミヤ記12：1）

義しきかな汝エホバは！　我が汝と諍ふときに。惟だ汝が審判のことを我れ汝ともの言はん。何故に邪悪なる者の道の栄ゆるや、悖れる者すべて安泰なるは何故ぞや。（エレ一二・一）

東西古今、いついづこに於ても人間社会では、暴力、悪だくみ、悪智慧のある奴らがのさばり、栄える。道に外れた連中が巧智があって安泰である、という現象が多く見られる。正直者は馬鹿を見る。弱い者らは推し除けられる。エレミヤは特に心の預言者であったから、こういう現象を見て、心を痛め、深く悲しみ、烈しく憤った。「彼らは口では、神様、あなたに近づいているように言巧みに言いますが、心はあなたから遠かっているのです」（一二・二）。とエレミヤは更に訴えた。さて我々は眼を転じて獣類その他一般動物界を見、或は植物界を眺めてみても大体同じことが言えはしまいか。強食弱肉であり、雑草跋扈である。どんなにこの世は不公平であり、予盾だらけであろうとも、「世界の審判」は必ず来る。そのとき不公平、不義の行はれた社会、国家の諸々の悪現象が根源現実では審判されていることが顕現される時が来る。虐げられている人々は、それでも「神は義しい」と信じ抜き、耐え貫くに如かず。不義を以て栄えた人々は次の世界で必ず神から地獄に落される。エレミヤの抗議に対して神の答はなくて可い。神の審判は現象界の奥の世界でなされつつある。然り、神は大乗的な義を以て審いておられる。

7月10日

麻帯
（エレミヤ記13）

エホバかく言ひ給ふ「汝往きて麻の帯を買ひ、汝の腰に結べ、水に浸す勿れ。」（一三・一）

エレミヤは一つの具体的な行為を以て預言することを命ぜられた。麻の帯を着けることは祭司の相を表はす（出二八・三九―四二）。エレミヤが祭司の家柄であったからであろう。神はこの麻帯を着けてペラート（多分エレミヤの故里アナトテの北東にある谷間）へ行き、そこの洞窟にその帯を隠すように命じた。彼はその如くした。かなりの月日が経つと、また神命によりその帯を取り出したところ、もう朽ちて役に立たぬ有様となっていた。すると神は宣うた。「我此の如くユダの驕慢と都エルサレムの大いなる驕慢を破る」と。民は剛愎で偶像を拝しエホバから離反している者が多かった。エホバは更に宣うた「帯の人の腰に着くが如く、我れイスラエル及ユダのすべての家を我に着かしめ、これをわが民となし、名となし、誉となし、栄となさんとせり。然るに彼らは聴かざりき」（一三・一一）。

この故事に倣ってアッシジのフランチェスコは托鉢僧として麻帯を結んでいた。彼はキリストの真相の一証者となった。麻帯は魂の相が無的謙虚な徴である。我々は存在そのものがキリストの麻帯となって、キリストに密着して歩きたいものである。パウロは「信真実を帯として」（エペソ六・一四）と言っている。ヘブライ語で言えばエメツ、エムナー、アーメン、本然的全諾で、神という真を信受している相を帯とすることである。かくて神・キリストという真を現ずる証者たらんことである。

7月11日

エレミヤの執成しの祈り
（エレミヤ記14：7－9）

縦ひ我らの罪我らに対して證をなすとも噫エホバよ、汝の聖名のために処し給へ！
まことに我らの離叛の業は多々あり。汝に対して我ら罪を犯したり。
おおイスラエルの希望主よ。患難の時の救主よ！
如何なれば汝この地の異邦人の如くし、寄宿する旅人の如くし給ふや。
如何なれば汝茫然たる人の如くし、救ふこと能はざる勇者の如くし給ふや。
噫エホバよ、されど汝は我らの真中に在ます。
汝の御名の称揚はわれらの頭上にあり。
汝見棄て給ふ勿れわれらを！（一四・七―九）

預言者エレミヤにとってエホバは存在のアルパでありオメガであった。その聖名は何ものによっても害を受けない実力であった。

エレミヤがイスラエル民族を思うことは聖名のゆえ、聖名のためであった。真の愛国とは此の如き神主体の意識である。しかもエレミヤにとってイスラエルは自分と一つであった。彼らの罪はわが罪であった。民の罪を怒ると同時に民の罪を自ら負う愛の心であった。執成しの祈りといってもそのようなずれのない連帯意識であった。

神は聖名のゆえに民の罪を、一人の義人エレミヤの執成しによってゆるし給ふ。神は罪びとの真中に臨在する、民は神の聖名を以て称えられている聖名ゆえの民である。義の故に投げ棄てながら、愛の故にこれを抱き揚げる。個人も民族もそういう神に在ってこそ。

7月12日

鷓鴣の族
（エレミヤ記15—17）

○「汝卑俗を棄てて高邁を出ださば、我が口の如くならん。彼らをして汝に帰らしめよ、されど汝は彼らに帰る勿れ。……我汝と偕にありて汝を助け汝を救へばなり。」（一五・一九下、二〇下）
○「汝此処にて妻を娶る勿れ。また子女を得る勿れ」（一六・二）
○心は何物よりも偽るものにして度し難し、誰か知るを得ん（一七・九）
○鷓鴣の己が産まざる卵を抱くが如く不義をもて財を獲る者あり、其の人は生涯の半にて之に離れその終末は愚者とならん（一七・一一）。

エレミヤ一五—一七章の中の著しい句をひろって見た。○大衆、庶民に阿って卑俗な雑本や漫画、テレビ、ビデオが横行跋扈している現代日本の精神文化は何処にあるのかと神は、このエレミヤへの言を発してあり給う。むしろ民衆のレヴェル・アップのために高邁なる内容のものを投じて、彼らを高次な世界へ帰入せしめよと。
○北王国イスラエルの如く、南王国ユダが将に亡びなんという夕暮時、エレミヤは家庭をもつことを断念させられた。ハートの深いエレミヤにとってこれは悲涙の事態であった。しかしエレミヤは民衆の心を愛した愛国の預言者。彼は国を妻とし子女としたのであった。○噫、人の心は究め難い。済渡し難い。「偽」は自他への、そして神への裏切りであって最も質の悪い罪である。○所謂土地転がしもこの鷓鴣のようなものだ。土地は神有である。故に土地は国有となし、国民は国から借りて使うべし。政治が弱い、悪い。

7月13日

陶工と陶器
（エレミヤ記18：1―12）

「汝起ちて、陶人の家にくだれ。我彼処にてわが言を汝に聞かしめん」。我れ即ち陶人の家にくだりて視れば、轆轤をもて物を造りおりしが、その陶土をもて造れる陶器陶人の手のうちにそこねたれば、彼思うがままにこれをもて別の陶器を創作せり。（一八・一―四）

神はエレミヤに国家存亡の事態を啓示せんとて、彼を陶人の現場に導き給うた。エレミヤは、轆轤を脚で廻転しながら陶土から陶器を創作する陶工の技術を、じーっと見ていた。すると折角の陶器製作の途中で出来そこないとなった。それで陶工はそれをこわして新しく陶器の造り直しをして別な陶器を仕上げた。

この陶工と陶器の事態の如く。どの民族も神の聖手の中にある。その民族が陶工たる神の意向に反してできそこないとなったら、即ちその民の実存が神に叛く方向に向ったら、陶工たる神は、その民が懺悔しない限り、これをぶっ壊して別な民族を起す。即ち救済の神の根源的な意志に常に新たに立ち帰ることが救はれる角度であるが、立ち帰らないならば自ら滅亡を刈りとることになる。

イスラエルの民は、選民でありながら、預言者たちの警告を無視したのが大方で彼らは竟に滅亡を刈り獲った。そのできそこないの中から併しナザレ人イエスが出現した。ところがイエスはできそこないの民によって十字架に懸けられた。このイエスという陶器は神の絶品であった。この絶品に圧倒されてできた逸品が使徒たちであった。

7月14日

聖言は火の如し
（エレミヤ記20：7－18）

七 エホバよ、汝我をたぶらかし給ひ、げに我はたぶらかされたり。汝は強し、我に勝ち給へり。われは日ねもす人の笑ひ草となり、人みな我を嘲る。われ口を開く毎に「暴逆」と叫び、「掠奪」と呼ばはる。エホバの言はわが身の恥辱となり、日ねもす嘲弄となるなり。九 我れ「彼のことを口にすまじ、御名に在りて語らじ」と言はば、わが胸の中に燃ゆる火の如きものありてわが骨の中に閉ぢこもり、忍ぶに疲れて抑ふるに耐えざるなり」

（エレミヤ二〇・七－九）

エレミヤは神の言をまともに受け、そのまま民に伝えていた。その結果はつねに嘲笑や迫害や誤解や恥辱となってわが身に返って来た。これでは神にたぶらかされたも同然だ。それでもう聖名に在って語るまじ、叫ぶまじと思うが、胸の中に神のみ霊が燃える火の如くで、しかも骨の中にそれが閉ぢこもるので到底これを抑えることができないと告白した。彼はまたこうも告白している。「エホバとその聖言のためにわれは酔える人の如く、酒に勝たるる人の如し」と（二三・九）。

神霊、キリストの霊、聖霊に圧倒され、漲り溢れていると、聖言が、神の思想が泉の如く湧き出で、火の如く燃え立つので、舌端に迸り、筆端に走るのである。そういう聖言は人の魂にひびく、人の身に浸透してくる。聖書はそういう聖言の波の聖霊の風の疾風怒濤の書である。

7月15日

佳き無花果
（エレミヤ記24：1－7）

五 イスラエルの神エホバかくいふ、『我れらが此の地よりカルデヤ人の地に逐ひ遣りしユダ国の捕囚の民を此の「佳き無花果」の如くに顧みて恵まん。六我彼らを顧みて之を恵み、彼らを此の地に帰らしめ、彼らを建てて仆さず、植えて抜かじ。七我彼らに我れのエホバなるを識るの心を与へん。彼らわが民となり、我れ彼らの神とならん。彼らわが許にその総心を挙げて帰り来らん。」（エレミヤ二四・五―七）

エレミヤの生涯は、ユダの国王マナセ（在位紀前六九三―六三九）の晩年から、アモン、ヨシヤ（六三八―六〇八）、エホアハズ、エホヤキム（六〇八―五九七）、エホヤキン、ゼデキヤ（五九七―五八七）の諸王の時代を貫いている。生誕は六四五年頃、預言活動はマナセ王の晩年の六二六年からバビロニヤ王ネブヤドネザルが首都エルサレムを攻略し、かの決定的なバビロニヤ（カルデヤ）捕囚の時（五八七年）にまで及んでいる。

「佳き無花果」とは、彼が捕囚の際見せられた神殿の前の二籠の無花果の霊幻の中の佳く熟した無花果のことで（二四・二）、イザヤの預言の「遺れる民」の如く、捕囚期（五八七―五三八）のあとまで、世代は変っても、エホバの聖心を知る民の必ずあることの預言である。預言者ホセヤやエレミヤの「知る」という言は神との霊交の深い消息である。「我は彼らの神、彼らはわが民」という表現は深い霊的人格的関係で、「彼らわが許に総心を挙げて帰り来らん」とは何と熱烈なる神人関係か！　神の本願をかく伝えたエレミヤは全身を涙としていたであろう。

7月16日

罪無き者の血
（エレミヤ記26）

一四 見よ、我は汝らの掌中にあり、汝らの目に善しと見ゆるところ義しと見ゆるところを我に為せ。一五 然れど汝ら確かとこのことを知れ、汝らもし我を殺さば必ず罪無き者の血は、汝ら自身とこの市とこの中の住民に帰せん。エホバ我を遣はしてこのすべての言を汝らの耳に告げしめ給ひたればなり（エレミヤ二六・一四、一五）

エレミヤは「火の如き」神の言、「磐を打ち砕く鉄槌の如き」エホバの言を告げ、「偽りの預言者らの敵となる」と三度びも語り給うたエホバの言を伝えたりして（二三・二九―三二）、憚ることがなかったので、迫害に遇った。祭司と偽りの預言者どもと庶民が遂にエレミヤを執へた。ユダの牧伯たちも王の家からエホバの神殿にやって来て新しい門の入口に坐りこみ、彼を訴へ詰った（二六・一〇、一一）。しかしエレミヤは叫んだ、「エホバは我を遣はし、汝らが聴けるすべての言をもて此の宮殿とこの市に向って預言せしめ給へり。故に汝ら今汝らの途と行為とを改めて汝らの神の声に従へ、然らばエホバ汝らに災を降さんとせしことを悔い給ふべし」（二六・一二、一三）。

この言のあとで彼は右掲の決死の言を吐いた。エレミヤのこの決然たる言に打たれて、牧伯たちはエレミヤを本当の預言者として彼を重視するに至った。

エレミヤの愛国心は武力を以て抗するのではなく、バビロニヤに対して善隣の心をもつことにあった。どこまでも神の言に信じ入り、義と愛の道を実践するにあった。「エホバは我らの義なり」（二三・五―八参照）として、神の義を行ずることを正道とし救となした。

7月17日

本願によって立ち帰る

（エレミヤ記31：18〔17〕—20〔19〕）

汝は我を懲しめ給ふ。我は軛に馴れざる犢の如くに懲しめを受けたり。エホバよ、汝はわが神なれば、我を引き帰したまへ、さらば我れ帰るべし。わが帰りし後に悔い、教を受けしのちにわが髀を打つ。我れ若き時の羞を身にもてば恥ぢかつ辱しめらるるなり。

エホバ言ひ給ふ、「エフライムはわが愛する子、悦ぶ子ならずや、我れ彼に就きて語るごとに彼を切に念はざるを得ず。是をもてわが腸は彼のために呻く、我れ彼を憐み恤む。」（三一・一八—二〇）〔一七—一九〕

エレミヤはエフライム（歴史的にはヨセフの子。有力な支族でイスラエルの別名の如く用いられた）の立場に自分を置いて告白している。

「汝我を引き帰し給へ、さらば我れ帰るべし」の一句は、極めて注目を要する。エレミヤは神の力と神の恵み、即ち神の本願の劫力に全的に圧倒され、信頼している。こちらからはなかなか立ち帰れない。自分の信仰なんていうものはあてにならない。あてになるのは神の恵みの力。「あなたが私を引き帰して下さいよ、そしたら私はみ力によってみ許に帰ります」という。果然、エフライムは神の愛する子であった。二〇節前半は神がキリスト・イエスにヨルダンに於ける受洗のとき語りかけた聖句である。エフライムの現状は神の「呻き」を喚起するものであった（ロマ書八・二六）。さはれ、この全身的投入の信仰、即ち信行に、信仰の奥義がある。み力にあづかって始めておのが無力を知ると、全身が神の霊の力に満ちて、行動的にならざるを得ない。

7月18日

新契約
（エレミヤ記31：31〔30〕—34〔33〕）

「視よ、期は来れり、」とエホバ宣ふ「我れイスラエルの家とユダの家とに新契約を結ばん。これは、エジプトの地より導き出だせし期に彼らの先祖と結びし契約の如きものに非ず。我れわが律法を彼らの腸の中に置かん、彼らの心に書き記さん。かくて我は彼らの神となり、彼らはわが民となる。彼らは再び各々その隣人に、各々その兄弟に教へて、汝らエホバを知れ、と言ふこと無し。そは彼らは皆いと小さき者よりいと大いなる者に至るまで我を知るべければなり、」とエホバ言ふ「そは我れ彼らの不義を赦し、彼らの罪をまた憶はざるべければなり」。（三一・三一…三四、原文三一・三〇…三三）

これが有名な、画期的な、エレミヤに告げられたエホバの新契約で、新約聖書のキリストの福音への橋渡しの如きものである。さすがは心の預言者エレミヤらしい預言内容である。新しい律法はあたまで憶え、うわべで行ふ律法ではなく、腸の中に刻み込まれ、心の中に書き記される内的な全身的な律法で、おのづから行為に表現されざるを得ない質のものだという。その超律法は何か、我々の「不義を赦し、罪を憶はざる」愛であった。噫預言者エレミヤの心はイザヤ書五十三章と相照応するものであった。即ちキリストが身を以てこれを体現し、十字架の贖罪をなし、聖霊を降し給うた恵みの愛の預言であった。

7月19日

永遠の契約
（エレミヤ32：37—41）

見よ、我わが怒りと憤りと激怒をもて彼らを逐ひ放てる諸々の国より彼らを集め、此処に立ち帰らしめ、安泰に居らしめん。彼らはわが民となり、我は彼らの神となる。我れ彼らに一心と一道を与へて、常々我を畏れしめ、以て彼らと彼らのあとなる子らに善福あらしめんためなり。我れ彼らより離れ去らず、彼らを祝福すべき永遠の契約を彼らと結ばん。我れ彼らを悦び、彼らに善福を施し、心を尽し魂をこめて信実をもて彼らを此地に植えつけん。（三二・三七—四一）

これはエホバがエレミヤを通してイスラエル民族、契約の民へ与えた「永遠の契約」である。「新契約」は彼らの心腸に与えた新律法、謂はば無法の法であったが、この「永遠の契約」はアブラハム以来の約束の地カナン、パレスティナ、今のイスラエル国の地に定住すべき契約である。神への不信のため、神の怒りを買った北王国イスラエルも南王国ユダも、神の怒りの、審判の手脚となったアッシリヤ及びバビロニヤに亡ぼされたが、預言者らを通して遂に神に立ち帰るに至り、神の愛憐、善福を受け故国の地に戻った。最も大切なのは神から賜はる「一心」であり「一道」である。一心とは何か、神との一如の心である。一道とは何か、神意の貫く天道である。即時即場が天道に即する地路である。イスラエル民族は遂に一九四八年に昔ながらの聖地に独立共和国を創立した。エレミヤへの神の永遠の契約の本願は事実となった。しかし愛の一心一道の体現や如何。

7月20日

断罪に因る滅亡の現実
（エレミヤ哀歌1）

一 噫、侘しらに居残るか民の満ちたりしこの都。
諸民の中にて大なりしもの寡婦の如くなり、
諸々の地域の中にて女王たりし者貢を納るる
者とはなりぬ。
二 彼女は夜な夜な痛く泣き、その頬に涙を浮べ、
その友らはみな背き、その仇人となり果てぬ。
三 ユダは迫害のため、大苦役の為に據はれゆき、
諸々の国民の中に住ひて安息を得ず、
義しきはエホバ、我その神命に叛けり。
聞かずや総ての民よ、わが哀愁を顧はずや！
四 わが処女もわが青年も俘囚はれ往けり。
五 エホバよ顧み給へ、我に苦悩あり、わが腸湧
き返り、
わが心衷に顛倒。我悖りに悖りたれば。
外には剣の虚殺、家には死の様相ぞ。

（エレミヤ哀歌第一章より）

「エレミヤ哀歌」は原文ではただ「哀歌」（エーカー）と謂ひ、語意は「如何んぞや！」「噫！」といった慨歎の言葉。作者不詳。エレミヤ的である。各章各節の頭音は所謂いろは歌的。南王国ユダの首都シオン・エルサレムがバビロン王ネブカドネザルの軍に攻略され、神殿は破壊され、首都の戦禍は惨憺そのもの、地獄の如くになった。主な人々は（紀前五九八年と五八七年に）捕囚となってバビロンに運ばれた。この滅亡は神のユダ国への審判に因る。作者は預言者魂でその罪を告白している。

7月21日

聖憤に因る慘状
（エレミヤ哀歌2）

一噫！　主はその憤激をもてシオンの娘を暗雲に鎖し、イスラエルの
栄光を天より地に擲げおとし、その憤怒の日に己が足台を心に留め
給はざりき。
二幼児らはその母たちに言ふ、パンと葡萄汁は何処に。彼らは致命傷
を負へるか市の巷に窶れ果て、その魂は母の胸に寄り添うて消え入
るばかりなり。
三エホバよ、覧し給へ、婦人その実にして抱き育てし孩児を食ふべけ
んや。祭司、預言者ら、主の聖所にて殺さるべけんや。

（エレミヤ哀歌第二章より）

バビロン軍に蹂躙されたエルサレムの惨状を目撃した人の詩句である。ここに挙げたのはその一部にすぎないから、哀歌を読んでいただきたい。第二次世界大戦を体験した我らには哀歌の悲惨な光景はまざまざと眼に映る想いがする。

イスラエル民族を愛する神の怒りの審判の凄さの現実である。母親がその幼児を食うに到っては狂気の沙汰である。（エレミヤ一九・九参照）。ダンテの『神曲』地獄篇第三三曲に於て描かれている牢獄に閉ぢこめられたウゴリイノ伯とその子及孫らの餓死の際の喰うか喰はれるかの深刻な問答を想う。戦乱は人を地獄の鬼にする。すべては神を無みする人間の罪の果である。

7月22日

苦難の中に神在ます
（エレミヤ哀歌3）

三 神の愛憐（あはれみ）はげに絶えず、その恩愛（いつくしみ）限りなし。
四 こは朝ごとに新なり、汝の信実は大いなり。
五 エホバはわが分前、我れ彼を待ち望む。
六 人若き時に軛（くびき）を負ふは善し。
七 神これを負はせ給ふ、独り坐して黙す。
八 口を塵につけよ、望みあり。
九 禍も福も共に至高者の口より出づるに非ずや。
一〇 我ら天に在ます神に向ひて手をも心をも挙ぐ。
一一 主よ、汝はわが魂の訴を助け、わが生命を贖ひ給へり。
一二 エホバよ汝はわが蒙うたる不義を見給へり。
一三 願はくは我がため義しき審判をなし給へ。
一四 汝み怒りをもて彼らを追ひ散らし、
一五 エホバの天の下より彼らを亡し絶ち給へ！

ヘブライ語の字母は二二、本章は六六節から成り、三節づつ節頭の字母が「イロハ」順になっている。全章の内容は、神の審判を正直に受けつつも、審判の義の奥に神の愛を救を贖ひを信じ、現実の苦難の中で既に神の力を受け、且つ歓喜の将来を待ち望んでいる。

「エホバはわが分前なり」とは何と大乗的な信仰の叫びなる哉。私は告白する「キリストはわが分前なり」と。キリストを有って他に何が要るか。二七、二八、二九の三節は私の忍待の慰めの力となった聖句である。

7月23日

本願回帰
（エレミヤ哀歌4；5）

第四章 山犬すらも乳房を垂れてその子に乳を哺ます。
然るにわが民の女は残忍く荒野の駝鳥の如し。
手づからおのが子らを煮て食となせり。
斯くなりしは預言者ら、祭司らの罪による。
彼らは即ち義人の血をその市に流したりき。
第五章 饑饉の烈しき熱気によりて我らの皮膚は爐の如し。
シオンにて女たち犯され、ユダの町々にて処女ら穢さる。
エホバよ、何とて我らを永く忘れ、我らを斯く久しく棄て給ふや。
エホバよ、我らを汝に帰らしめ給へ、我ら回帰せん。
我らの日を新に昔日の如くならしめ給へ！

（エレミヤ哀歌第四、第五章より）

戦争は人間を鬼畜を上廻はったものにする。人間が地獄を作る。その反面人間の中には悲惨の中に輝かしき天国を現ずる人もある。

天国、極楽への道に昇り往くか、地獄、陰府への道に降り往くかは、各人の自由に任せられてある。

神の都エルサレムの娘（市民のこと）が斯く成り果てたのは偽の預言者と祭司らに原因があったとエレミヤは叫んだ（エレミヤ二三・二九―三二）。

罪を犯して転んでも顚いても、神に立ち帰らんとの願は棄てないイスラエル民族は、神の永遠性を身に帯びた民族である。「汝に帰らしめ給へ」の本願回帰の祈りは本ものだ！

7月24日

起死回生への預言
（エゼキエル書11：18）

〇一九我彼らに唯だ一つの心を与へ、新しき霊を汝らの衷に賦けん。我彼らのからだの中より石の心を取りさりて肉の心を与へん。彼らをしてわが法規に遵はしめ、わが律法を守りて之を行はしめんがためなり。然らば彼らはわが民となり、我は彼らの神とならん。（エゼ一一・一九、二〇）（三六・二六・二七参照）

〇二〇汝らその行ひしすべての罪を棄て去り、新しき心と新しき霊を己れに起こすべし。然れば汝ら回帰して生きよ。（一八・三一、三二）

エゼキエルという預言者は青年期に第一期バビロン捕囚（紀前五九七年）の中にいた。彼は祭司的預言者であり、人間の素質からいくと神秘的霊幻を見る神秘家であると同時に健全な理性も備えているので、現実をよく観察している。ルターがイザヤの霊統とすれば、カルヴァンはエゼキエルの霊統と言えよう。

右掲の二句は相照応する内容で、「新しき霊」は新約の聖霊の徴と見て可い。「石の心」は頑くな心でパリサイ根性に通じる。「からだ」と「肉」は同じ「バーサール」という原語である。この場合の「肉の心」は所謂情慾ではなく、「あたたかいからだ」に宿る心で、「肉」は神から賜った「からだ」で粗末にしてはならない、霊肉渾然一如たるべき肉である。不変の「唯だ一つの心」は「新しき霊」と照応する。こういう新人が死んではならないとの悲願のこもった句で、神は死を負う人間の死を好み給はない。元来永遠に神と共に生くべき人（霊止）なのだ。神の創造力で起死回生せよ！

7月25日

義人の義はその人に帰す
（エゼキエル18：20—24）

罪を犯せる魂は死すべし。子は父の罪過を負はず、父は子の罪過を負はざるなり。義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰するなり。（エゼキエル一八・二〇）

この聖言は現代的な性格のものではないか。モーセの十言第二言の説明的な聖言には「我エホバ汝の神は妬む神なれば、我を悪む者に向ひては父の罪を子に報いて三、四代に及ぼし、我を愛しわが誡命を守る者には恩恵を施して千代にいたるなり」（出二〇・五、六）とある。

神と人との関係はどこまでも一対一の関係で、こういった功罪の因果関係は勧善懲悪的ではないか。封建時代には罪過の連帯性があって、どれほどの善良な庶民が無実の罪を帰せられた上に血族まで連帯の罪を負はされて、涙と血を流したことか。

エゼキエルに示されたこの聖言は光を放っている。しかもその聖言に続いて、悪人が悪を離れて律法を遵り、公義を行ったら、過去の罪悪を忘れて、その人を生かす。神は悪人の死を好まない、神に回帰して善道を踏み生きんことをこそ望み給う、とある。また反之、折角の義人が義を離れて諸々の悪むべきことをするに到ったなら、過去の義しきことを忘れて、そのあとの罪を審くから死ぬことになる、とある（一八・二二—二四及び三三・一〇—一六を参照）。

人間の現実は善悪、義不義が交錯してでてくることしばしばで、ドラマ的である。神がそれらを如何に判断なさるか。人間の側からは誰も本当の審判はできない。主要な一事は、ひたすら神・キリスト回帰しつつ、転んでも倒れても神の力で前進あるのみ。

7月26日

枯骨の復活
（エゼキエル37：1―14）

一エホバの御手我にかかり、エホバ我を霊にて出で往かしめ、平原の中に我を坐せしめ給ふ。二夥しき骨谷間の原の面に在り。しかも見よ、甚だ枯れたり。三彼我に宣ふ「人の子よ、是らの骨は生き還るや」。我言へり「主エホバよ、汝知り給ふ」。四彼我に言ひ給ふ「これらの骨に預言し、彼らに言ふべし、枯骨よ、エホバの言を聴け、五主エホバこれらの骨にかく言ひ給ふ、視よ我汝らの中に霊気を入らしめて汝らを生かさん。六我筋を汝らの上に張り肉を汝らの上につけ、皮膚をもて汝らを掩ひ霊気を汝らの中に与ふ、」（エゼキエル三七・一―六）

バビロニヤ軍のため潰滅、捕囚第一次（五九七年）第二次（五八七年）もつらつら体験した預言者エゼキエルは、故国の復興を悲願せざるを得なかった。そのどん底のある日、霊禱の中で、彼は霊にて出で往かされ、戦場に散乱している枯骨を霊視させられた。神から特に「人の子よ」と呼ばれているのは、特別な使命を帯びているからである。「骨は生き還るや」は反語。エゼキエルは信頼深く「汝知り給ふ」と応えた。エゼキエルは神命に従って預言した（三七・七―一〇）。枯骨が肉体に還った。そこに霊気が息吹かれて、立ち現はれたのはユダの軍隊であった。それは「イスラエル民族全家」の霊徴であった。ダビデ王の昔日の如き民族国家復活の預言である（三七・二四―二八）。

7月27日

神殿の霊水
（エゼキエル47）

九 凡そこの河の流れ往く処にはなべての動く生物は活きん。魚またさはに増しゆかん。この水到る処にて醫す業をなし、この河の往く処にてはものみな活くるなり。この河の岸辺の此の岸彼の岸に食のため実を結ぶ諸々の樹々生ひ育ち、その葉は枯れることなく、その実も絶ゆることなく、日々に新しき実を結ぶべし。これ正にその水かの聖所より流れ出づればなり。その実は食となり、その葉は薬とならん。（エゼ四七・九、一二）

エゼキエルという預言者は、第四十章から第四十八章まで、果然その祭司面を前面に出だし、神殿中心のふしぎな消息を啓示されている。しかもそれは現実性の瞭かなものと黙示的、神秘性の深いものが交錯している。その神秘性は第一章の虹の消息とふしぎな照応をなしている。そしてこれは、ヨハネの黙示録第二十一、第二十二章に変貌し、現じているとも謂えるふしぎな神の霊水の霊幻である。

総じて預言者たちに啓示されている内容は、神の現実性、現在性を強く現前せしめて終末性とが相照応している書なのである。しかもそれは人類の歴史のものすごい明闇のドラマを舞台としているから、深刻な救済性をもった神の歴史の展開なのである。それゆえ聖書は、眼と耳と手足とからだを聖書の現実の中に投入して身読すべき書なのである。

7月28日

出バビロン
（イザヤ書40：1—11）

一「慰めよ、汝ら慰めよ、わが民を！　二語れよ、
エルサレムの心に、これに呼ばはり告げよ。
その服役の期は満ちその罪は赦されたり」。
そはその罪過すべてに対する罰の倍加を
エホバの手より受けたればなり。
九「シオンの福音使よ汝高き山に登れ、
エルサレムの福音使よ、汝の声を強く挙げよ。
恐るる勿れ、ユダの町々に告げよ、見よ、汝
三らの神！」と。
見よ、主エホバ劫力をもて来たり給ふ。
二その臂はおのがため統治め給はん。
主は牧者の如くその畜群を養ひ、
その臂にて羔を集め抱き、之をその懐に入れ
て携へ、
乳をふくまする羊を柔に導き給ふ。

（イザヤ四〇・一、二、九、一〇、一一）

第二次バビロン捕囚は紀前五八七年、捕囚期は五三八年まで、正に半世紀間であった。ペルシャ王クロスが現はれて、捕囚をエルサレムに帰還せしめた。その背後には神エホバの聖手がはたらいていた。

ユダ国滅亡は大刑罰で捕囚半世紀間は正にエルサレム帰還を忍び待つ苦難倍加の歳月であった。冒頭の「慰めよ」の聖句は神の深い愛憐のひびきである。無名の大預言者は今し、神が出現して帰還の先頭に立ち、民を羊群の如く導き給ことを告げる。



（イザヤ40：11）イスラエルの牧人たる神・キリストの象徴的な相（B・ブロックホルスト）

7月29日

大宇宙の神
（イザヤ書40：12—26）

誰かエホバの霊を導き、その議士（はかりびと）となりしや。
視よ、諸々の国民は桶（おけ）の一零（ひとしずく）の如く、権衡（はかり）の塵の如し。
神のみ前には諸々の国民（くにたみ）みな無きにひとし。
エホバは地球の遙か上に坐し、
地に住むものを蝗（いなご）の如く視給ふ。
大空を薄絹（うすきぬ）の如く布き
これを住むべき幕屋の如く張り給ふ。
汝ら眼をあげて高きを見よ、
誰かこれらのものを創造せしやを想へ、
主は数を検べてその万象をひき出だし、
おのおのの名を呼び給ふ。
主の威力大いなる哉！
その力強大なるが故一人も欠くるなし。

（イザヤ四〇・一二…二六）

雄渾壮大なる神観をこれらの詩句に見る。萬国民が桶の一零にひとしいとは痛快な言である。また神のみ前には万国民は無きにひとしい。全く人類のあさましさ、空しさを喝破した言だ。左に自作の讃歌を掲げよう。

一涯しも知れぬ大宇宙
銀河の数は何億か
何億光年走るとも
極まりなけれその時空
夜空を仰ぎ言なし
神のみ業の神秘さよ

五 大自然には国境なし
幼児らにも国境なし
いづれの国も神の属
自国の使命自覚して
大指揮者たる神に拠り
交響楽を奏でずや

自作讃歌「最大の芸術家」歌調一
高寮歌「太平洋の波の穂に」

7月30日

鷲の如く翼を張りて
（イザヤ書40：27—31）

モヤコブよ、汝何故に「わが道は神（エホバ）に隠れたり」と言ふや。
ヌイスラエルよ、汝何故に「わが正審は神前を過ぎ去れり」と言ふや。
ネ汝知らずや聞かざるや、神は永遠（とこしへ）の神、地の極（はて）の創造者にして、
ノ倦み給ふことなく、疲れ給ふことなくその聡明（さと）きこと測り難し。
ハ疲れたる者には力を与へ、勢力（いきほひ）なき者には強きを増し給ふ。
ヒ年若き者も疲れて倦み、壮（さかん）なる者も衰ふ。
フ然かはあれどエホバに依り頼む者は新たなる力を得（え）、
ヘ鷲（わし）の如く翼（つばさ）を張り、翔（かけ）りて疲れず、歩みて倦まざるなり。（イザヤ四〇・二七—三一）

イザヤ書は第四十章から第五十五章までを第二イザヤ書、作者は無名の大預言者。この第四十章は朗々と音読しているうちにおのづから天来の光、力、生命にあづかる。聖書は天来の文字の波や風のゆたかな書である。特に預言書の中でもイザヤ書が最たるものである。この第四十章はカーライルが世界最大級の詩文だと言った由。「わが言は霊なり」とキリストは告白なさった。聖書はそのような聖句に溢れている。本書三六六日のどの頁からも天来の霊言が光を発し、愛の力を与え、生命の泉を迸（ほとばし）らせている。かくて我らは聖霊の翼で天翔けるが如しである。

7月31日

エホバの僕イスラエル
（イザヤ書41：8―14）

八 されど汝イスラエル、わが僕よ！
わが選びたるヤコブ、わが友アブラハムの裔よ。
九 我れ地の極より汝を伴れ来たり、地の端より汝を召し出だし、
かくて汝に言へり「汝はわが僕、我汝を選みて棄てざりき」と。
一〇 恐るる勿れ、我汝と偕に在り、驚くなかれ、我汝の神なればなり。
我汝を強くせん、我汝を助く。わが義しき右の腕汝を支へん。
一一 エホバまた宣へり「汝蟲けらなるヤコブ、イスラエル人よ、
懼るる勿れ、我汝を助けん、
汝を贖ふ者はイスラエルの聖者なり。（イザヤ四一・八―一〇、一四）

第二イザヤ書の焦点は「エホバの僕」（エベッド・ヤハウェー）に在るのだが、その前奏曲的に謳はれているのが右の詩句である。イスラエル民族は、霊的な人格共同体として「わが僕」と呼ばれている。

全にして個、個にして全の消息である。右腕は力の象徴である。神の力が助けると神自らの宣言。正に本願の劫力である。而も、呼ばれたヤコブ・イスラエルはそれ自体「蟲けら」だと言はれているところに、何とも言へぬ現実性がある。神は蟲けらの如き者を選んで僕、即ち神の使命を果す者とし給ふ。私も蟲けらだ。この蟲けらを聖なる神は選び贖って下さった。第十四節は福音そのものである。

8月1日

傷める葦・ほの暗き蠟燭

（イザヤ42：1－4）

一 見よ、我が支持するわが僕を、わが魂の喜ぶわが撰び人を。我はわが霊を彼に与えた。彼は諸々の国民に公義を齎す。二 彼は叫ばず、言挙げせず、その声を巷に聞えしめない。三 傷める葦を折らず、ほの暗き蠟燭を消さない。信実を以て公義を示す。四 彼は衰えず挫けないで公義を地に据えつける。津々浦々はその教法を待ち望もう。（イザヤ四二・一―四）

第二イザヤ書の要なる「エホバの僕」と謂われる詩の第一がこの四二・一―四である。ともあれ、エホバの僕は歴史的にはアブラハムから始まっている。彼は神の声に従って行動した信仰の元祖であったからである。神の僕は撰びの個人即撰びの一部族から発して民族そのものをも意味したりする。そういう霊的人格的融合性がある。特にその内実は当てはまる。此処に謂う「エホバの僕」はある特定の人物で、それはやがてナザレのイエスへの預言として受けとられることになる。

この僕は、義人であるから、義しい「審判」即ち公義を行ずる人である。しかも徒らに叫ばない謙虚な人である。弱者を深く顧る愛の人であることは「傷める葦を折らず、ほの暗き蠟燭を消さず」という言葉に於ていみじくも表現されている。そして彼の魂には、神の霊が特に与えられて、神と一如的な人となっている。正にキリストを思はしめる「エホバの僕」の第一歌ではないか。

8月2日

雲散霧消の贖罪
（イザヤ43；44）

○ヤコブよ、汝を創造したエホバ、今こう言い給う、
イスラエルよ、汝を造った者今こう言い給う、
「恐れるな、我は汝を贖った、我は汝の名を呼んだ、汝はわが有である。」（イザヤ四三・一）
（イザヤ四三・二五）
○我こそは我自らの故に汝の不義を消し汝の罪を心に留めない」
○汝はわが僕。イスラエルよ、我は汝を忘れない。（イザヤ四四・二一）
○我は汝の不義を雲の如くに消し、汝の罪を霧の如くに散らした。
汝われに回帰せよ、我れが汝を贖ったのだから。（イザヤ四四・二二）

福音は現在に関はるから「今」といっているのに注目。その「今」に於て既に贖われてある。だから何も恐れるに及ばない。神は私たち一人一人の名を呼んでおられる。「おまえは私の有だ」と本願の愛がつかんで下さる。神は、キリストは御自身の故に、私の罪過を消し、心に留め給はない。何たる圧倒的な愛ではないか。我々が「僕」とされるのは、こちら側の何の故でもない、恵みの撰びに由る。私の罪過は雲散霧消されている。これがキリストの十字架による贖罪のありがたさである。「エホバの僕」でありながら蝮者や瞽者の如きイスラエル（四二・一八―二二）を棄てないで救うエホバである。神に回帰できるのは既に贖われてある恵みの力による。この贖罪の神に全托すれば、水火をも突破して往ける（四三・二）。

8月3日

隠れて在ます神
（イザヤ45：14下，15）

彼らあなたに平伏し、あなたに祈願して言う、「誠に神はあなたの中に在ます、神は他には無い。絶無だ。[一五]誠にあなたは隠れて在ます神で在り給う、イスラエルの神よ救主よ！」[一四下]（イザヤ四五・一四下、一五）

ペルシャ王クロスは、イスラエルの神を畏れて、バビロン捕囚のイスラエルの民をエルサレムへ帰還させる役割を果した。それは恰も仲保者的な役割であった。しかもエジプトもエテオピアもセバもクロスに敵し得ない状態であった。「彼ら」とはそういう諸国のことで、「汝」とはイスラエルのことである。神はイスラエルの中に在ます内在的に力となって在り給う霊なる神であると彼らは告白している。目に見える偶像の神とはちがう。本当の神は人の間に、人の中に臨在している内在的な霊神で、他に神は無いのだと告白しているのは驚くべき認識である。第十五節の「汝」は勿論エホバなる神のことで、神は「隠れて在ます神」で見えざる実在者だ。それは超在し、遍在し、内在するところの、目には「隠れた神」でありながら、丁度大気が見えないけれども、上なる天に超在し、到るところに遍在貫在し、我らの体内に内在するが如くである。（エペソ四・六参照）。キリストも神のことを言い給うた「隠れたるに見給う汝の父」、「隠れたるに在ます汝の父」と（マタイ六・四、六）と。神は復活のキリストに於て最も「顕はれたる」神（deus revelatus）であったが、それは同時に十字架のイエスに於て最も「隠れたる神」（deus absconditus）であった。イエスの実存そのものが顕在即隠在の「躓き」であったのである。

8月4日

私は荷い，私は救う。
（イザヤ46：4）

老年に至るまで私は変らぬ者である。白髪になるまで私は荷う。私が造ったのだ、だから私は負い、私は荷い、私は救う。（イザヤ四六・四）

この聖言の前に「ヤコブの家よ、イスラエルの家の遺れる者よ、腹を出てから私に負われ、胎を出てから私に抱げられた者よ、皆私に聴きなさい」（四六・三）という句があるように、ヤコブ・イスラエルの遺れる者への語りかけであるが、この節には相手の代名詞が一つも使われていないむしろふしぎな句であるので、我々への呼びかけとして読むことにしよう。

人の寿命は全く神の手の中にある。しかも神は必ずしも狭義の聖旨のままにはなさらないと思われる。所謂運命や環境や、人間界の罪過や諍いや妬みや、さまざまな要素によって人の生涯は左右されることが大いにある。常道や秩序に対して矛盾や錯誤や混乱が交錯しているドラマが個人の生涯でもあり、社会や国家の歴史である。これに如何に対処するかに人生の死活がある。またその歴史的ドラマを如何に神は照覧し、取りあつかい給うか、審判し給うかに歴史と人生の真義がある。

この聖句のように神に老年まで護られ、導かれ、救われる人は、課題と使命と責任と光栄を荷わせられ、着せられる。その人はそれらを神に帰し、御本願に荷われ、救われつつ、み力を賜り、神の栄光を目的として生きなければ本当に生きることにならない。そのためには是非とも聖霊を賜りこれを力とすることを要する。

8月5日

神の栄光の宗教
（イザヤ48）

わが名の故に我は怒りを遅くし、わが名誉のゆえに汝をしのびて汝を滅ぼさなかった。
見よ、我は汝を鍛錬したそれは白銀によってではなく、艱難の爐で汝を試煉した。
我はわがため、己れのためにこれを成す、どうして我はわが名を汚させようや、我はわが栄光を他の者には与えない。（イザヤ四八・九―一一）

聖書の宗教は幸福主義ではない。御利益宗教ではない。安心立命、家内安全、事業繁栄、国運隆盛といった現世的幸福を祈願する宗教ではない。

神中心であって、神意成就が主眼である宗教である。神が主体であって、人は客体である。神が主であって人は僕である。神意を体現するのが目的である。そのためには献身する実存である。

神意に信従し、神意を体現することが義なのである。神は義の神であるから、不信不義罪過に対しては審判を以て臨むけれども、他面憐み深い神であるから、怒りをのばして、人が、民が、神に立ち帰ることを、回帰することを忍び待ち給う。回帰すれば、大乗的にゆるし給う。神との関係を正しく持するために、人を鍛錬し給う。艱難が来たら神の試煉と受けとる。イスラエル民族はしかし不信のために遂に神の怒りを蒙り、北イスラエル、南ユダの両国は滅びた。併しこの審判のあとに恩恵が待っていた。国は滅びても民は滅びない。深く愛惜され、顧みられた。その消息の焦点が「エホバの僕」のおとづれである。

8月5日

(詩) 第二イザヤの福音 (イザヤ40—48)

作詩：1982.8.28
歌調：S.530「うき世の嘆きも」

第二イザヤの福音

1
イスラエル・ユダの　罪はゆるされ
バビロンを出でて　帰りし如く、
我らも出我し　み許に来たり
十字架・聖霊の　道につきけり。

2
宇宙を創造れる　み神の眼には
諸々の民は　無きにもひとし、
あらがふ国々　塵にも似たり、
み神の霊知は　測りも知れず。

3
汝ら知らずや　耳にもせぬか、
み神はみ空ゆ　見おろし給ひ
地に住む者らを　蝗とぞ見る。
涯なきみ空は　神の幕屋ぞ。

4
み霊のみ神は　力の源ぞ
依り頼む者に　力を賜ふ、
晨に夕に　いそしみたれど、
み力臨みて　つかれを知らず。

5
「まことに我こそ　自らのゆえ
汝らの罪過を　心に止めず
汝らの罪過は　雲散霧消！
わが愛わが義を　与へて尽きず！

6
我は汝らを　あがなへる神、
汝らはわが有　名を与へたり。
水中を渡るも　溺れず水に
火中を往くとも　燃ゆることなし。

7
キリストの僕　撰びの群よ、
預言者・使徒らの　道を受け継ぎ、
聖霊の幕屋を　張りける僕、
み霊の火となり　突き進めかし。

8
選びのみ民よ　み霊の群よ、
汝らは誰しも　愛の人たれ、
傷める蘆をば　直く立たしめ

8月5日　（詩）第二イザヤの福音（イザヤ40—48）

作詩：1982.8.28
歌調：S.530「うき世の嘆きも」

9
小暗き灯火（ともしび）　燃え立たしむる。」
エホバのみ神は　み民のうちに
み霊の主として　隠れて在ます
うつせ身われらにキリスト・イエスは
隠り身となりて　はたらき給ふ。

10
「救をほどこす　我は義の神
胎を出でしより　汝を負へり
年齢（よわい）の果てまで　荷ひて救はん
使命のかぎりを　貫き果たせ！

11
我こそ今しも　汝に示さん
未だ告げさりし　世界の秘事を
わが名のゆえにぞ　怒りを抑へ
審判の時期（とき）をば　忍びに忍ぶ

12
われこそ歴史の　元始（アルパ）と終末（オメガ）
世界は今こそ　回帰せざれば
前代未聞の悲劇的終末（カタストローフェ）！
全地は地獄（ゲヘナ）に　変貌すべし！」

8月6日

わが僕イスラエル
「エホバの僕」第二歌
（イザヤ49：1－7）

一 津々浦々よ我に聴け、諸々の民よ遠方より耳傾けよ。
エホバは胎より私を召し、母の腹よりわが名を称えた。
二 彼は私に告げた、汝はわが僕、イスラエル！
汝が中にわが栄光は顕はされるのだ、と。
三 彼言い給う、汝はわが僕、我は汝を諸々の国民の光とし、わが救済
四 を地の極まで及ばしめる者とする。
エホバ、イスラエルを贖う者、その聖者は、侮られる魂、民に嫌わ
れる者、君侯たちに使役される者たるエホバの僕にこう言い給う、
諸王は見て立ちあがり、君侯たちは拝跪する、これ信実あるエホバ、
イスラエルの聖者、汝を選び給うた者のゆえである。

これが「エホバの僕」第二歌である。第三節に注目、即ちエホバの僕は同時に全イスラエルの融合的代表者で、これを復合的人格と称う。

日蓮が日本の柱と自覚したように。今日は広島原爆記念の日、「広島」といえば世界平和悲願の代名詞であるのと同軌である。「エホバの僕」十字架のキリストこそは、人類に対し、心の原爆を乗てよ！　との本願の叫びそのものである。

8月7日

神の義と救
（イザヤ46……51）

二
○我に聴け、心頑なにして義より遠き者よ。
我はわが義を近づかしめる。わが救は遠くないから待たせない。
我はシオンに救を、イスラエルにわが栄光を与えよう。
（イザヤ四六・一二、一三）

○我に聴け、ヤコブよ、わが召したるイスラエルよ、我は是れだ。
即ち我は始めであり、寔に我は終りである。
（イザヤ四八・一二）

○婦人その乳児を忘れ、おのが胎児を憐れまないことがあるか。
假令彼女ら忘れるとも、我は汝を忘れない。
（イザヤ四九・一五）

○汝ら目を挙げて天を仰ぎ、下なる地を観よ、
天は烟の如く消え、地は衣の如く朽ち、
その中に住む者は蚋の如く死に果てる。
されどわが救は永遠にながらえ、
わが義は破れ去らない。
（イザヤ五一・六）

これらの聖句は第二イザヤ書の特色を表はしている。
○神の義は審判の義であると同時に、神の義を慕って回帰しゆく者には、その義を与え給う救となる。故に義と救が同義語的に用いられる。
○神は歴史の、また個人の生涯にとって、創造の始と、救済の終をもつ。
○神は我々個人の存在を深い愛を以て顧み給う。
○天地は過ぎ往き、住者はみな死ぬ。しかし神の救は永遠であるから死者を復活させる。それが神の義である、愛である。

8月8日

朝な朝な門弟らしく

「エホバの僕」第三歌
（イザヤ50：4－9）

四 主エホバは門弟たる者の舌を私に与え、
言を以て疲れた者を扶助けることを教え、
朝な朝なわが耳を醒し門弟らしく聴かしめる。
五 私は鞭つ者にわが背をまかせ、
鬚を抜く者に頬をまかせ、
恥辱と唾を避けんとて顔を隠しもしない。
六 主エホバ私を助け給う私は辱しめられない。
この故に顔を燧石の如くして侮辱なきを知る。
七 私を義とする者近きにある、誰か私と争い得よう。
八 見よ、主エホバ私を助け給う、誰か私を罪し得ん。

（イザヤ五〇・四－九）

このイザヤ五〇・四－九は「エホバの僕」の第三歌とされている。

この第二イザヤなる預言者は神エホバの直弟子と見て可い。パウロがキリストのみ霊による直弟子であった如くに。私が「門弟」と訳した字義は「教へられた者」である。

迫害されたイエスを連想させるような迫害に第二イザヤ自身が出遭ったと見る。無抵抗で毅然たる相が目に見えるようだ。

神霊に在って、天来の力を受けると、そういう底力のある勇気が全身にこもる。人生は神・キリストのみ霊の力を体受してこそ万難を突破し得る。パウロがその最たる身証者であった。

8月9日

未見未知の霊止

「エホバの僕」第四歌（其一）
（イザヤ52：13—53：2）

五二・一三
見よ、わが僕奥義を行じ、
挙げられ、高められ、いと高くなる。
四多くの者汝に驚異した如く、——
そは、その面影害われて人ばなれし、
その容姿人の子らからも外れていたので
五その如く彼は多くの国民を驚嘆せしめ、
諸々の王は彼ゆえにその口を緘む。
そは彼ら未だ語られなかったことを見、
未だ聞かなかったことを悟ったから。
五三誰が信じたか、我らの聞きしことを。
エホバの腕は誰に現れたのか。
二彼はみ前に芽生えの如く、
乾ける地からの根株の如く生い立った。
彼には容姿なく、見るべき端麗さなく、
我らが慕うべき見栄えもない。
（イザヤ五二・一三—五三・二）

今日は長崎原爆記念の日だが、いよいよ最深最高の「エホバの僕」第四歌にさしかかった。これは全イザヤ書六十六章の心臓部であり、旧約聖書の絶頂であり、新約聖書とその福音書の焦点たる十字架のキリストへの預言である。

北イスラエル国がアッシリヤに紀前七二一年に亡ぼされ、南ユダ国がバビロニヤに五八七年に亡ぼされ、五三八年までバビロン捕囚半世紀の隷属を嘗め、エルサレム帰還とはなったが、その中に無名の大預言者（第二イザヤ）がいたと思われる。彼はある空前の人物の霊姿を神に示された。それは民衆も王者も驚異する人。一切の苦難と罪過、血涙と悲惨を一身に負っているような、相の霊止であった。

8月10日

悲痛の荷手

「エホバの僕」第4歌（其二）
（イザヤ53：3－6）

三 彼は蔑すまれ、人々に棄てられ、
苦患を知る悲痛の人であった。
ひとは顔を隠して彼を卑しめたが、
四 我らも彼を意に介けなかった。
まことに彼は我らの苦患を荷い、
我らの悲痛を負っていたのに、
我らは彼をこう見なした、
五 神に打たれ苦しめられているのだと。
否、彼は我らの不義の為に刺し貫かれ、
我らの罪のために砕かれたのだ。
彼に対する懲罰は我らの平安となり、
六 傷痕だらけの彼によって我らは治癒された。
我らは皆羊の如く迷いゆき、
各々その路に向った。
然るに神は彼の中にぶち込んだ
我らすべての罪を！

（イザヤ五三・三―六）

「エホバの僕」第四歌の中でも、この第四―第六節が最も中心部で、キリスト・イエス御自身が魂の奥底にこれを銘記しておられたにちがいない。この預言のまま身証し給うた。「苦患」は具体的な苦痛、病患を意味するが、内面的には苦悩である。「悲痛」も具体的な悲歎、痛恨であるが、内面的には悲哀、悲涙である。「知る」とは全存在で体験し体認することである。彼は世界苦を一身で負っている人である。世の末までも！　キリストの十字架は、我らの不義と罪のために「砕かれた」と私は受けとったので、「砕けの神学」を告白したのであった。

8月11日

神の羔
「エホバの僕」第四歌（其三）
（イザヤ53：7—10上）

七 彼は迫害されたが耐え忍び、
しかもその口を開かなかった。
屠場に索かれる羔の如く、
毛を剪る者の前の雌羊の如く、
彼は黙してその口を開かなかった。
八 彼は虐待と断罪によって取り去られた。
だが誰が慮ったか彼の命運を！
彼が生者の地から断たれ
わが民の罪過の為に打ち殺されたとは。
九 彼の墓場は悪人と共に設けられ、
彼の死に当っては富者と共に。
彼は乱暴をはたらかず、
その口に虚偽はなかったのに。
一〇上 神は彼を砕くことを欲い、
彼を刺したのである。

（イザヤ五三・七—一〇上）

東西いづれの国でも権力者が善良な庶民を抑圧するので、庶民は塗炭の苦しみを嘗め、血と涙の中にこの世を去った人々が無数にいる。この霊人は、それを体験して、人々の苦しみをどん底で荷うことの出来た人である。罪のなやみも艱難から来る苦しみも、一身で荷い、助力と贖罪を果し得た人は、この預言を体現したナザレのイエスのみであった。そのキリストを無視してこの「エホバの僕」の預言を空しくしているのが、ユダヤ教信奉のユダヤ人である。噫！「悪人」も「富者」もこの世の人の中でも神に叛いて権勢や財力に与した者どもである。この義人の「墓場」がそんな連中と一緒であるとは何たることか。しかしそこに贖罪の愛の相がある。「羔」というふしぎな表現は正に神の羔たるキリストへの暗号である。

8月12日

どん底の執り成し

「エホバの僕」第四歌（其四）
（イザヤ53：10下―12）

一〇下 もし彼がその生魂を罪の犠牲に供したとするなら、彼はその後裔
の末永き日を見、神の法悦は彼の手にて満たされたわけだ。
二 彼はおのが煩労を見て心足りた。わが義しき僕はその知によって
多くの者を義とし、彼らの不義を彼は荷っている。
三 この故に我は多くの者を彼の分前とし夥しい獲物を頒ち取らしめ
る。そは彼れおのが生魂を注ぎ尽して死を招き、不義なる者の數
に入れられたが故に。げに彼は多くの人の罪を負い、不義なる者
たちのため執り成しを果した。

（イザヤ五三・一〇下―一二）

このイザヤ書53章は正にキリストの十字架の贖罪死を預言した驚くべき文字である。そしてイザヤ書35章は終末的天国の素晴らしい預言である。而もキリストは地上でこの35章を体現したあとで53章の預言を十字架で成就し給うた。我々罪びとは53章の贖罪を信受すると、35章の聖霊のゆたかな現実を賜る。謂はば、35/53が十字架のキリストと聖霊のキリストを表はすことになる。ふしぎな数字ではないか！

8月13日

夫なる神と妻なるイスラエル

（イザヤ54：1，4，5，10）

五四：一 歓べ、孕まざる石女よ。
高唱歓呼せよ、産の苦しみ無き者よ。
げに独身の子らは
嫁げる者の子らより多い、と神言う。
四 恐れるな、汝辱しめられじ、
惶てるな、汝赤恥を受けじ。
汝若き日の恥を忘れよ、
汝が寡女時の恥辱を最早憶はざれ。
五 そは汝が主人は汝が造り主、
その名は万軍のエホバ、
汝が贖主はイスラエルの聖者、
全地の神と謂われるお方。
山々は移り諸々の岡は動くとも、
わが愛は汝より移らず、
わが平安の契約は不動、
とは汝を憐む神の言。

神エホバと妻イスラエル民族という関係を惨憺たる結婚生活そのものを通して預言させられたのはホセアであったが、エルサレムは荒廃し、バビロンの捕囚の憂き目を嘗めさせられた「石女」の如く、「寡婦」の如き選民、その昔はエジプトの奴隷生活を送った若き日をもつヨセフの族、こういったイスラエル民族を妻として新たに顧み、いよいよ深く愛し、永遠不動」（第十節）と神は確言している。

翻って女性の生涯を思う。石女の女性、寡婦の女性、独身の女性、いづれの女性も第二の国民の貴い母である。キリストに愛されて、幼児の、青少年の霊的な愛の母としての使命を夫々の生活を通して全うせられよ！　合掌

8月14日

永遠の契約
（イザヤ55：1－5）

一 噫、渇ける者は皆水に来よ、銀銭なき者も来よ、来て穀物を買って食べよ、然り穀物を銀銭なしに、値なしに葡萄酒と乳とを買え。
二 何故糧食でないものに銀銭を量り、腹ごたえなきものに労力を費すのか。我に心して聴け、かくて好きものを食べよ、汝らの生魂は脂で飽き足りよう。
三 汝らの耳を傾けてわが許に来よ。よく聴け、汝らの生魂は活きる。我は汝らと永遠の契約を、ダビデへの信実なる愛を契る。

（イザヤ五五・一―三）

これらの言はすべて神の言である。国破れて半世紀を経たエルサレム・シオンであるが、神殿なく王者ないペルシヤの属領となっている惨めなエルサレム・シオンである。

我々はしかしこれらの聖言を我々への啓示として今受けとろう。経済大国と言はれている日本人は、実は魂が「渇ける者」である。神が与えようとしている「水」とは何か。これは金銀では買えない聖霊である。キリストがサマリヤの女に与えようとした「水」である（ヨハネ第四章）。キリストはおのが血と肉を葡萄酒とパンに於え象徴して、我が血を飲め、わが肉を喰えと言った。オリーヴの油も聖霊の徴である。要するにキリストという「好きものを食べる」と我らの生魂は活きる。これがキリストが与え給う「永遠の契約」たる永遠の生命である。この「信実なる愛」の契りを信受、体受せんのみ。

8月15日

天道地路
（イザヤ55：6―13）

六 汝ら神の見出され得る間に彼を尋ねよ。近くに居給う間に彼に呼ばはれ。
七 悪しき者はその路を棄て、虚しき人はその思念を棄てて神に帰れ。
八 さらば彼は憫み給はん、我らの神に帰れよ。彼は豊かに赦し給う。
九 げにわが霊想は汝らが思念と異なり、わが道は汝らの路と異なる。天の地より高きが如くわが道は汝らの路より高い、わが霊想は汝らの思念よりも高い、と神言い給う。

（イザヤ五五・六―九）

神を発見し得る期間は定かではないといって可いが、青年時代が最も大切である。惰念が純真熱烈であるから。神は理念でも観念でもない。極めて具体的実存的である。天然の中に神の栄光が現はれている。人間界の中に神の相が映っている、幼児乳児の相に、純情の乙女の姿に。憐み深き人の顔に。併し全存在として顕然と神を体現した唯一の人があった。「我を見し者は父を見しなり」と告白したナザレのイエスである。

福音書を読んでそのイエスの言行に接して降参したときに神が発見される。イエスの天道は我らの地路とはちがう。彼の言の霊的な権威、彼の行為のけたちがいな次元。それはこの第二イザヤへの神の聖言の通りだ。キリスト・イエスに接してはじめて、イザヤ書の聖言の現実を見るのである。然らば我らは生来の地路を棄てて、キリストに帰入し、御霊の力と知慧により天道に即した地路を歩まん哉。

8月15日

（詩）エホバの僕（イザヤ49—55）
（エベド＝ヤハウェー）　作詞：1982.11.5
歌調：S.359「夕陽はかくれて」

エホバの僕

1
主なるキリストは　選びの民の
救主なれど　彼らは受けず
さはあれキリスト　世の終末まで
彼らの帰るを　祈り待ち給ふ

2
「ああイスラエルよ　選びの民よ！
母親情れなく　その乳児を
忘るるあるとも　我は忘れじ
永遠の愛に　抱かれざるや」

3
主は侮られて　人に棄てられ
苦患を知り給ふ　悲哀の人！
しかるに我らは　神に打たれて
苦しめられたる　人と思へり。

4
苦しみを忍び　口を開かず
屠場に向ふ　羔の如
我らの罪をば　荷ひて独り
十字架の上にて　砕かれ給ふ

5
復活の主は　パウロを選び
聖霊の器に　飜へらしめ
異邦人への　栄光となして
世界にあまねく　道を伝へり

6
「わが義は来たれり　我は救ぞ
この義を受くれば　救はれてあり
贖はれし者　讃歌を謳へよ
汝れらが胸には　歓び絶えじ」

7
み母の胎より　生れにし時ゆ
み神に護られ　育くまれたり
聖言聖霊は　わが生命なり
イエス・キリストの　無者たる僕

8
「わが愛の幕屋　大胆なれよ
エホバの僕よ　時期は迫れり
身証の伝道　地道になして

8月15日

（詩）エホバの僕（イザヤ49—55）
（エベド＝ヤハウェー）　作詞：1982.11.5
歌調：S. 359「夕陽はかくれて」

幕屋を拡めて　綱を延ばせよ」
いづれの人をも　迎へ抱けよ！」

9
実存主をたづねよ　日の暮れぬ間に
近くに居給う　主を求めよや
とやかく思はで　イエスに帰れ！
み腕を拡げて　抱き給ふぞ

10
日の本の人よ　聖書に来たれ
神のドラマたる　現実の中に！
キリストの力　われらに迫り
思はず叫ばん　ハレルヤ・アーメン

11
「渇ける人々　来たりて飲めよ
永遠の水を　われは与へん
我は聖霊の　バプテスマせん
歓び尽きせぬ　生命に溢れん。

12
わがエクレシャよ　使徒らの如く
我れに立ち帰り　一如となりて
いづこも聖国の　現実となして

8月16日

神に迎えられる人
（イザヤ57：1，2）

義しい人が歿し去るとも心にとめる人なく、
愛の人々が取り去られても顧(かえりみ)る人がない。
げにや義人は悪の面前から取り去られた。
（だが）彼は平安に入る、彼らは安息の場で休らう、
誰でも真直(まっす)ぐ歩いた者は。

（イザヤ五七・一、二）

地味に地道に正直に暮していった義しい人が世の中にはいる。大方馬鹿を見たり、損をしたりしている。しかしそんなことを意に介しない。自分の仕事、それも社会的には目立たない。彼は手仕事人であるか、ある団体の下部で働いている人か。要するに小市民である、または田舎の村人の一人である。自分の仕事、持場を真面目に尽している人である。或はまた愛の深い女性で、いつも下積みで人のために働き、身体の弱い人、貧しい人のために自分の衣食も顧みないで尽している人である。

さきの義人は悪者に出遭って（「悪の面前から」という表現）存在を消されてしまった。このような義しい人も愛の人も、世を去ったが「心にとめる人がいない」「顧る人がいない」知名の人たち、社会的に権勢のある人たち、財力のある人たちには大げさな葬式が営まれる。何と世の中には虚しいことが多いか。

原文には「だが」はない。沈黙の無音の「だが」である。彼は神に迎えられて平安(シャローム)に入る。彼女らは天界のオアシス（緑蔭水辺の場）で安息する。地上で義を愛を貫いた人々は、天界で神のパラダイス(ハレルヤ)に迎え入れられる。これが本当の平安(シャローム)であり神讃美である。

8月17日

天地の抱擁
（イザヤ57：15）

高く崇高く永遠に住み給う者、その名聖者なる者が、げに斯く言い給う、「我は高き処、聖き処に住む、また我は砕けたる者、霊の貧しい者と偕に住み、貧しき者の霊を活き返らしめ、砕けたる者の心を活き返らしめる。」（イザヤ五七・一五）

イザヤ書五六―六六を学問的には第三イザヤ書と称う。第一イザヤ書は一―三九で、第二イザヤ書に於てその精神は継がれ、且つその民族性が世界性へと突きぬけている。第三イザヤは第二イザヤの精神を継ぎ且つ展開して更に終末論的で新約の黙示録に投影している。第一イザヤは信仰の面が強いが、第二イザヤは正に愛の面が深い。そして第三イザヤは希望の面が優っていると言える。イザヤ書全六十六章は全聖書六十六巻と数を同じうし、内容が信、愛、望というパウロの福音神学の根本構造を有ち、キリストの福音を雄渾、深刻、壮美にうち出し預言しているわけで、正に旧約、新約の縮図の如き預言書である。

ここに掲げた五七・一五は福音的な黄金文字である。神は霊的空間の至高、至聖なる処に住み給う。その神が光の如く降って砕けた魂の者、どん底にいる惨めな者、霊の貧しい、自分を何者とも思はない無者と偕に住み給う。

天国と地獄の抱擁、接吻をして下さるのがこの聖なる神である。しかもその貧しい霊、砕けた心に復活の力、永遠の生命を与え給う。これ以上の消息があるか！

8月18日

「わが嘉する断食」
（イザヤ58：6－9上）

「六 わが嘉する断食は、此の如きではないか。悪の縄目をほどき、軛の結び目を解き、押えつけられた者を自由にしてやり、すべての軛をへし折ってやること。

（イザヤ58：6－9上）

七 また飢えた者に汝のパンを割いてやり、貧しき旅人を汝が家に宿し、裸身の者を見たら衣せてやり、汝が同胞から身を隠さぬこと。」

八 さらば汝が光曙の如く破れ出で、汝が治癒は速かに萌え出で、汝が義は汝に先立ちて往き、エホバの栄光は汝が後べを照さん。

汝呼べば神応え給い、汝叫べば彼言はん、「我此処に在り」と。

預言者の宗教は祭司のそれとは異なり、人間としての実存を問題としている。実存の第一は神との縦の関係で神意に従って僕として実存することである。第二は人との横の関係である。それが上掲の事態である。即ち「わが嘉する断食」という命題を以て。いろいろ迫害されている者を自由にしてやること、衣、食、住に困っている旅人や弱者や貧者を心から具体的に助けてやること、開放的な心根で同胞を惜しみなく受け入れること等が、本当の断食だという。そうすると、我々は光の人となり、病があれば癒されるし、人を癒す力も与えられる。神意に従うその義が道案内をし、神の栄光が後べから照らして下さる。神を呼べば応えて下さる。我々は神に帰入して力を賜り、人へ転出して人を助ける。これがまことの断食である。

8月19日

安息日に神を楽しむ
（イザヤ58：13，14上）

「一三若し安息日、わが聖日におのれを楽しませる業から汝が汝が足を転ずるなら、安息日を称えて歓喜の日となし、神の聖に尊厳を帰し、これを尊びておのが道を行ぜず、おのが好む業をなさず、おのが言を語らないなら、一四上その時汝は神を楽しむことになる。」

（イザヤ五八・一三、一四上）

第三イザヤの時には、第二神殿が出来あがっていた。第二神殿は紀前五一五年に完成した。であるから、神殿における礼拝が始まった。それ以来をユダヤ教時代という。それで上掲の如き神の宣託があった。これがモーセの十言の第四、「安息日を憶えてこれを聖とせよ」の精神である。

我々のはキリスト道における安息日で、ユダヤ教の場合とはちがうが、精神は同じである。キリスト復活の晨を憶え、キリストの復活の生命に与かるのがキリスト者の安息日である。私個人の体験を聖名のゆえに語らせていただくとすれば、私は十九歳の頃入信して以来、八十余歳の今日まで、安息日を正直遵って来た。学生時代、翌日が試験日でも、安息日には聖書を読んだ。自分で独立の集会を始めたのが一九四〇年の秋九月二十二日、舎兄政美召天の日を記念して開始したが、これは必ずや地上を去るまで続けるであろう。我々同志は聖書というドラマの中に読み入って、キリストのみ霊のみ力にあづかり、「キリストを楽しみ」の主体とさせていただいている。ハレルヤ！

8月20日

神の甲冑，契約の霊言

（イザヤ59：16，17，21）

一六 彼れ人なきを見、仲保者なきを奇異み給い、おのが臂を以て自らを助け、おのが義を以て自らを支え給うた。
一七 彼は義をまとうて鎧となし、救の兜を頭にいただき、復讐の法衣を衣とまとい、妬みを羽織って衲襖となした。
二一 「これは彼らと結ぶわが契約である」と神宣う、「汝が上に臨めるわが霊と汝が口に入れたるわが諸々の言は、汝が口、汝が裔の口、汝が裔の裔の口から、今より後永遠に至るまで離れることはない。」

（イザヤ五九・一六、一七、二一）

神は単独、孤独で在り給う、唯一神なるが故に。神はそのような絶対者でありながら、相対的存在面を有ち給う、愛なる神であるから。その相対者に仲保者が隠れておられる。旧約の神は単独でおのが義を貫く。しかしそれは反面に愛を隠している。神の甲冑の表現がおもしろい。義の神意を犯した者には復讐をする。神の愛する者を奪うサタン的な者に対しては妬みの愛が燃えるのである。（以上五九・一六、一七）

神の霊は神の言と不可分的である。「わが言は霊なり生命なり」とキリストが言った通りである。第三イザヤへのこの啓示の一節（五九・二一）は極めて重要である。ヨエルの聖霊の預言と共にこの霊言の預言は忘れてはならない。神の霊、神の言は同時に作用力と行動力をもっている。そこが人間の思想とは次元が異うのである。

8月21日

神の光を浴びて

（イザヤ60：1，15，16，19，20）

起きよ、輝け、汝に光が臨んだ、
神の栄光が汝の上に照り出でた。
我汝を永遠の栄華、世々の歓喜に作り成す。
汝諸民の乳を、諸王妃の乳房を吸って
我れ神、汝が救主、汝が贖主、
ヤコブの全能者たるを汝は知ろう。
太陽は最早汝がため日中の光とならず、
月華の皓も汝がため光とならず、
神こそ汝がため永遠の光となり、
汝が神は汝が壮美となろう。
汝が太陽は最早沈むことなく、
汝が月華は陰ることなし、
そは神汝がため永遠の光となり、
汝が悲歎の日は終るからである。

（イザヤ六〇・一、一五、一六、一九、二〇）

亡国のイスラエル・ユダにとってエルサレム・シオンは新しき都、神の都となって来た。預言者第三イザヤにとっては現実の希望であると同時に終末的な神の都への預言となった。

誰が太陽なき昼間を、月華なき夜中を考え得よう。神が永遠の光で、神が太陽、月華たる霊光である。これは歴史の終末に到来する神の都を預言した新約の黙示録に投影している。（黙二一・二三）。

そして上掲の第十六節は奇異な表現であるが、創造の傑作女性の乳房が神の恩恵の生命的象徴とは美しい哉（イザヤ四九・二三参照）。

8月22日

神靈臨みて福音を
（イザヤ61：1，3）

一主、神の靈が私に臨んだ。これは神が私に油を灑ぎ、貧者に福音させるためであった。げに彼は私を遣はして、心の破れた者を繕ろい、捕囚人に自由を告げ、捕縛者に解放を告げしめ給うた。
二また神の愛恵の年と我らの神の義報の日を告げさせ、すべて悲しむ者を慰めしめ給うた。
三またシオンの悲しむ者を喜ばせ、灰に替えて飾の冠を与えさせ給うた。悲歎に代えて歓喜の油を、不安の気分に替えて讃美の衣を。かくて彼らは義の樫の木々、神の植えた栄光となった。（イザヤ六一・一―三）

イスラエル民族は顚いても倒れても、神に立ち帰ることをたましいの相としている民族ではないか。民の不信の波に逆って神信頼の帆を掲げて驀進した預言者の船が相継いで現はれた。この第三イザヤはその著しい船の一つであった。

このイザヤ書六一・一―三は素晴らしい福音である。神の靈が降臨することを油が灑れたという。メシヤとは「油灑がれたる者」の謂いである。ギリシヤ語のクリストスである。

我々は即ちキリストの十字架の贖罪の現実を体受すると、聖靈が臨んでくる。かくて始めて本当のキリスト者（油灑がれたる者）となる。そのとき、このイザヤ書の預言が我々にも現実として体験し、また体現できるようになる。聖靈は力ある愛の靈であるからである。基督者が「福音する」とは、十字架・聖靈の福音を体現体与することである。

8月23日

神に在っての喜び楽しみ

（イザヤ61：10，62：1）

私は神に在って大いに喜び、わが魂はわが神に在って楽しむ。げにや彼、私に救の衣を着せ、義の外衣をまとわせて、新郎が飾り冠をいただき、花嫁が玉飾の晴衣を装う如くなし給う。シオンのために私は沈黙さず、エルサレムのために私は休安まない、シオンの義、朝日の如く照り出で、エルサレムの救松火の如く燃えるまでは。

（イザヤ61：10，62：1）

シオン・エルサレムは今や新しき神の都であり、惨澹たる過去は悪夢の如く消え去り、新郎に迎えられる花嫁の如き心地である。預言者に示されている神の都は、ペルシャの属領といった現世の政治的次元を越えた宗教的次元である。

神の与え給うシオンの義とエルサレムの救とは同義語である。第二イザヤに於ての如く（イザヤ五一・五、六、八参照）。神と民との信愛関係の貫いている事態が義であるから、救がそこにある。それ故、これが成就するまで預言者は沈黙せず、休安することはない。

第三イザヤ自身がシオン・エルサレムとなって、神に在って喜び楽しんでいる。「神に在って」という現実は観念でない。パウロが「キリストに在って」（エン・クリスト）とよく言っているように。み霊に在って信仰が信交であるとき喜び楽しみが生ずる。新郎と花嫁の関係の如くである。だから「新郎の花嫁を喜ぶ如く、汝の神汝を喜び給はん」（六二・五）といっている。花婿キリストに喜ばれる花嫁エクレシヤ（教会、幕屋、召団）である。

8月24日

我は独りで酒槽を踏んだ

（イザヤ63：1－6）

「[二]なぜあなたの服飾は赤く、あなたの衣は酒槽を踏む者と同じなのか」

「[三]我は独りで酒槽を踏んだ。……

[五]我は見廻はしたが、助け手がなく、我はあやしんだが支え手は竟になかった。そこでわが臂は我を助け、わが憤りは我を支えた。

（イザヤ六三・二、三、五）

イザヤ書六三・一―六を見ると、エドムの都ボヅラを審判の中心とした記事である。エサウとヤコブの兄弟争いの歴史をもつエサウの後裔エドム族とヤコブの後裔イスラエル族とは不倶戴天的な関係である。イスラエルはその不信のため神の審判を受けて一度び国が亡びた。エドムも審判を受けねばならないことはその他の諸民族と同様である。現代の諸国家も夫々、神の審判を受けるべきものをもっている。日本とドイツは第二次大戦で、その高慢な権力者ども、とりわけ軍閥の故に神の審判に遭い、ソ連やアメリカに無条件降伏をした。しかしそれは神の前の無条件降伏であると自覚すべきであった。この自覚があれば、今日の日本とは別な復興の仕方をしたはづである。ソ連もアメリカも神の審判を受ける日が来るだろう。そのときは世界はどうなるか。日本もその余波を受けてどうなるか。

酒槽を踏むと葡萄汁で衣は緋に染まる。キリストの酒槽は十字架であった。彼の衣は彼自身の血で染った。万人の審判たる神の義憤を自らにひき受けた贖罪の血であった。

8月25日

神の底ぬけの愛
（イザヤ63：8，9）

彼宣えり「実に彼らはわが民、虚偽の無い子らである」と。かくて彼は彼らのため救主となった。
彼は彼らの艱難のときは自らもなやみ、彼自ら天使の相となって彼らを助け、愛と憐れみとを以て彼らを贖い、はるか昔から日に日を貫いて彼らを抱げ彼らを荷い給うた。
（イザヤ六三・八、九）

神エホバはイスラエル民族を特に「わが民」としているわけだが彼らが「虚偽の無い子ら」であるという点を悦んでおられるようだ。心が神に、人に、天に、地に「いつわりがない」ということは人間として最も大切な一点である。あるがままのおのれということは、自分自身に対していつわりがないという焦点をもっていることである。まちがえたらまちがえた、悪かったら悪かった、と正直に告白する心である。そういう魂は必ず救はれる。

第九節に語られている神の愛は何と底ぬけの愛ではないか。神と民との関係がこのような相であるとは。イスラエル民族は何といっても恵まれた宗教的民族である。人間味の深い、人格的な神、底ぬけの愛の神、そして六三・一―六に見たような徹底的な義の神、そして六三・一〇―一四に見るような霊の神を有つイスラエル民族は、やがて全世界の救主イエス・キリストの出現を見る民族であるわけだ。だがそのキリストに彼らは躓いた。そのキリストを救主としない大きな躓きを悟るときが歴史の終末となるであろう。

8月26日

本当のしがみつきの信仰
（イザヤ63：10……64：1）

六三・一〇 然るに彼らは悖りて彼の聖き霊を悲しませたので、彼は翻って彼
一一 らの仇となり、自ら彼らに敵対し給うた。
一二 かくてその民古昔のモーセの日を想い出でて言った。「彼らとその群の牧者とを海より導きあげし者〔今〕いづこ。彼らの中に聖き霊を授けし者は〔今〕いづこにあるや」と。
一五 あなたの熱意とあなたの大能の御業とは今いづこにあるか。あなたの腸の愛と憐憫を留保め給はざれ。
一六 エホバ 神よあなたはわれらの父、昔からあなたの名は「贖主」。
一七 神よ、なぜ我らを汝が道より迷い離れしめ、我らの心を頑固にし、あなたを畏れざらしめ給うや。願はくは帰り給へ、汝が僕らの為、汝が嗣業なる諸族のために。願はくは天を裂きてて降臨し給へ！
六四 六三・一九(後文)

（イザヤ六三・一〇、一一、一五、一六、一七）

旧約聖書の中に「聖き霊」という表現は滅多に出て来ないから注目。六三・一〇、一一は破れた民の歎きであると同時に預言者の呻き。「我らの父」にも注目。民の離叛も頑固も神に帰し、神の方からの帰来、降臨を願う信仰の図太さ深さ！これが本当のしがみつき！

8月27日

思いがけない神
（イザヤ64：2—65：1）

六四・四（三）昔から聞かず、耳にせず、眼に見たこともなかった、あなたを措いて如何なる神が、待ち望む者にかかることをなしたかを。六五・一我を尋ねなかった者に我は巡り遭い、我を求めなかった者に我は見出だされた。我は我が名を呼ばない民に、「我は此処だ、我は此処だ、」と言った。

（イザヤ六四・四〔原文三〕、六五・一）

右掲の二句はまことにふしぎな聖言である。六四・四はイスラエルの民に自らを言と行為で啓示し給うた神エホバ（ヤハウェー）を一言で告白しているような句である。しかもその神を父と呼んで信頼したイエス・キリスト自身が人類の史上、未聞、未見、未曽有の、そして空前絶後の存在として出現したから、この句はその預言にもなっている。

六五・一は、イスラエル民族にとっては異邦である全世界の諸民にとっての不思議な預言ともなっている。大イザヤ書の終りに近きところにこの二句あるはまことに霊しき摂理、聖書は正に神に書かしめられている書である。

筆者自身の体験からも、正にこの二句の通りで、私は聖書という神のドラマの中に入って身読していると、ただ驚嘆驚倒させられるばかりだ。旧制中学校生時代に、東京の小石川同心町の借家の二階の同室でキリスト者に化した舎兄政美と五年間暮していたとき、私は耶蘇教（基督教）信者になろうとは夢思っていなかったが、この兄政美の生きざまが隠れた要因となり、彼の北京での召天以来俄然、キリストに思いがけずつかまえられた！

8月28日

栄光の乳房

（イザヤ65：17，19，20；66：10，11）

六五・一七 然り、見よ、我は新天地を創造する。
一九 先のものは想い出されず、心にも昇らない。
我はエルサレムを欣び、わが民を楽しむ。
二〇 最早その中に悲歎の声も、悲痛の叫もない。
日足らずして死ぬる嬰児も、
生命の日満たざる老人もその中に無い。
然り、百歳で死ぬる者もなお若しとせられ、
六六・一〇 百歳で死ぬる者は詛はれた罪人とされる。
エルサレムと偕に喜べ、彼女の故に歓呼せよ、
彼女を愛するすべての者よ！
彼女と偕に大いに歓喜せよ、
彼女のために悲しみしすべての人よ！
一一 彼女の乳を吸い、その慰めの乳房に飽き足り、
その乳首を吸い、栄光の乳房によって
蘇生せんがためなるぞ！

（イザヤ六五・一七、一九、二〇。六六・一〇、一一）

第三イザヤは神から突如「新天新地」創造の聖声を聞いた。そのエルサレムは地上のエルサレムの窮極の相であると共に天界のエルサレムの投影である。

神の創造の傑作女性、愛と歓喜の象徴たる女性にエルサレムは譬えられ、女性美と生命の泉たる乳房が栄光と恩恵の徴と謳はれている。さて母という漢字は乳房の象形文字、その乳房の泉たる母乳は乳児の生命の水、水は聖霊に譬えられる。然らば乳房は聖霊の愛の相ではないか。乳房の秘義ここに極まる哉！

8月28日

(詩) 第三イザヤの預言 (イザヤ56—66)
—永遠の乳房— 作詞：1981.8.10
歌詞：S.537「わが主のみ前に」

永遠の乳房

1
み霊の主イエスに 深く祈り入る
悲しみにかえて 歓喜の油
愛いの心に 讃美の衣を
与えてやまざる われらの義の主よ

2
願はくは汝 み空を裂きてぞ
天降りし給ひて 汝が義のみ霊を
霰と降らしめ 枯葉にも似たる
われらの空しき 義を吹き飛ばせよ

3
日の本の国の 義朝日の如く
大和民族の 救松火と
燃え輝くまで われらはみ霊の
炎をともして 休むことあらじ

4
われらキリストを 大いに喜び
われらの魂 主をたのしみとす
新郎が新婦を よろこぶが如く
キリスト我らを 喜び給ふぞ

5
第三イザヤの 新たに示せる
聖霊のおとづれ 断じて忘るな
口に置かれたる み神の言霊
言は霊なり 永遠の生命なり

6
主イエスのみ霊は わが衷に来たり
われらは福音を 語らざるを得ず
たましひを救り 心の呻きを
からだの痛手を 鎮めしめ給ふ

7
われは独りにて 酒槽を踏めり
主キリストのみは 我を知り給ふ
主の義のゆえにぞ 憤りたれど
救贖の故に 黙して荷へり

8
「いつはりなき子ら 汝らわが民！
われに祈り入れ われに帰り入れ！
わが愛の腕 抱きて荷はん

8月28日

(詩) 第三イザヤの預言 (イザヤ56—66)

—永遠の乳房— 作詞：1981.8.10
歌詞：S.537「わが主のみ前に」

み霊の力は　汝れらに溢れん」

9
天なるみ国の　幻の中に
第三イザヤの　見たるは何ぞや
み霊に満ちたる　永遠の乳房
父なるみ神の　恵みの徴ぞ

10
汝は我らの　衷なるみ神よ
我らは汝の　衷なるみ民よ
天地を新たに　創造り給ふ主よ
百年生くるも　永遠の一日

11
イザヤの預言は　ひびきて新たに
ヨハネの黙示に　希望の花をば
咲かせて果てなき　み国を現じて
み民に讃美の　ハレルヤ挙げしむ

8月29日

神霊の力は火をも制する
（ダニエル3）

「今私が見ていると四人の者が縄目が解けて火の中を歩み、だれも何の害をも受けず、またその第四の者の容貌は神の子のようだ。」
ネブカデネザルはそこでその火の燃えている炉の口に進みよって呼んで言う「至高者の僕シャデラク、メシヤク、アベデネゴよ、お前たち出て来よ！」と。……
この人々の身体は火もこれを害する力がなかった。またその頭髪は焼けず、その衣裳はそこねず、火の臭もこれにつかなかった。

（ダニエル三・二五―二七）

ダニエル書はヘブライ語原典では「諸書」の中にあって、これは本来の預言書ではなく黙示文学書である。ダニエルはエゼキエル一四・一四にノア、ダニエル、ヨブという義人として挙げられている伝説的人物である。伝説であるから実在しなかったというのではない。本書の内容を見るとその歴史的背景はシリア王アンテオクス第四世エピファネス（紀前一七五―一六四）時代で、彼のユダヤ教に対する宗教的迫害は烈しかった。これに対して神のみ力と智慧によって信仰の戦をした勇士のユダス・マカベウスの象徴としてのダニエルの名である。ダニエルの伝説とエピファネスの事実と歴史の終末的黙示とが文学的構造で編み成されている。

右掲の三者はダニエルの同僚たる信仰の勇士で、天使が現はれて彼らを火の中で獲った。

8月30日

メネ・メネ・テケル・ウパルシン
（ダニエル5）

二五そこに書かれた文字は、「メネ、メネ、テケル、ウパルシン」
二六この言の解明はこうである、「メネ」（数えられた）は神が汝の治
世を数えてこれをその終りに至らせたことを謂うのである。
二七「テケル」（秤られた）は汝が権衡に秤られて、汝の重みの足らな
いことの現はれたことを謂う。
二八「ウ・パルシン」（そして分たれた）は汝の国が分たれてメデアとペ
ルシヤに与えられることを謂う」

（ダニエル五・二五―二八）

ダニエル書第五章の記事の中の出来ごとであるが、時期はバビロニヤ王国の末期で最後の王ナボニダス（紀前五五五―五三九）の子ベルシヤザルが執政（「ベルシヤザル王」ではない）をしていたときのことである。彼は諸侯、側近等千人を参集させて酒宴を設けた。先王ネブカデネザルがエルサレムの宮殿から奪取した金銀の器を用いて妻妾らも交えて歓楽の饗宴酣の折しも、あやしげな人の手が幻の如く現れて白亜の壁にふしぎな文字が記された。ベルシヤザルは即ち法術士、卜筮師らにその文字の解明を求めたが誰もできなかった。時に大后が「聖き神の霊の宿れる人」ダニエル（ベルテシヤザル）あることを異げたので彼を呼んだ。ダニエルは忌憚なくネブカデネザル及びベルシヤザルの高慢を責めた揚句、この文字を右掲の如く解明した。神に叛く不信不義の徒も社会も国家も世界もその運命はメネ・メネ・テケル・ウパルシンである。審判を受ける。

8月31日

大破局（カタストローフ）と星の人
（ダニエル6：12）

○六・二 ダニエル王に言う「王、生命（いのち）永かれ。
三 わが神そのみ使を遣って獅子の口を閉ぢさせ給うたので獅子は私を害しませんでした。私が辜（つみ）なきこと彼のみ前に明かです。
（ダニエル六・二一、二二）

○一二・一 その時汝（な）が民の子らの為に立つ大なる君ミカエル起き上る。これ艱難（なやみ）の時（とき）期である。国あってこの方この時期に至るまで、このような艱難のあったことはないだろう。その時汝（な）が民は救はれよう。即ち書に録された者はみな救はれる。
（マタイ二四、マルコ一三参照）
霊知者（さとき）は空の光輝（かがやき）（太陽）の如く耀（かが）よう。また多くの人を導いて義に到らしめた者は星の如くなって永遠に至る。
（ダニエル一二・一、三）

○ダニエルはバビロンの某王（「ダリョス」ではない）に起用されたが重臣どもの隠謀に遭い、あらぬ勅令のため獅子の穴に投げ入れられた（六・一六）。ところが祈り深いダニエルは神に護られて獅子が咬みつかなかった。隠謀者らは彼に獅子の穴に投げ入れられて咬み殺された。ひとを妬み呪う者はその呪を自らにかぶることになる。

○世界の終末時には大艱難、大破局（カタストローフ）が来ることはエレミヤもイザヤも預言している。そのとき誰も知らぬ天界の神の書に記されている人々は救はれる。そのとき人々を助けた輝く高次の聖霊の人人は太陽や星辰と輝いて神を讃美する。

新約聖書（九月—十二月）

9月1日

言い逆いの徴（上）
（徴の宗教）（ルカ2）

二・三四 そこでシメオンは彼らを祝福してその母マリヤに言う「見よ、此の子はイスラエルの多くの人の倒れるか起きるかの為に、また言い逆いの徴の為に置かれた。」（ルカ二・三四）

新秋第一日と共に我々は新約聖書に入る。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書は夫々、言、行、心、霊の特色を有った福音書と見るが、謂はばクワルテット（四重奏曲）の如くである。イエスの降誕（受肉）、受洗云々と進めてゆく。

大ローマ帝国の第一人者たるアウグストの治下に、世界の唯一人者が出現した。寒村ベツレヘムの洞窟小屋の片隅の馬槽の中にどん底の貧しき相で。系譜は「アブラハム…ダビデ」（マタイ一・一）ではあっても父ヨセフは名ばかりで、母マリヤは聖霊の力でイエスを孕んだのであった。マリヤ自身全く驚いたのだが、天使の言によってこの天的な事態を知り、「ハイ、私は主の婢女です。み言の如く私に成って下さい」（ルカ一・三八）と答えてイエスの降誕となった。

聖霊の人シメオンという老人が、第二イザヤの預言の成就の日を待っていた。時期が満ちてその日が来た。マリヤの腕からイエスを取り抱き、右掲の重大な言を吐いた。即ちこの子が「言い逆いの徴」だという預言である。徴とは啓示の暗号であり且つ顕現であるということ。イエスは換言すれば「躓きの石」（ペテロ前書二・四―八参照）であり、「工師の棄てた隅の首石」（詩一一八・二二）である。それ故、福音の、救贖の大なる徴をイスラエル人自身が見そこなって十字架につけた。キリストの目的は、地上王国でも、御利益宗教でも、戒律宗教でもない。それでユダヤ教徒の躓き、「言い逆いの徴」となった。

9月2日

言い逆いの徴（下）

（ルカ2）

祭司も律法学者も律法厳守のパリサイ派も自由思想的なサドカイ派も禁欲主義的なエッセネ派も民衆もローマの官憲も兵士たちもそしてキリストの弟子すらも皆夫々の角度からキリストに躓いた。そして歴史の終末まで、キリストの十字架、復活、聖霊に躓く人々は所謂キリスト教徒の中にも絶えない。であるから正に「言い逆いの徴」なのである。

キリストの言も行為も謂はば水わりではなく霊酒そのものだからである。次元がちがうからである。例えば「私が地に平和を投ずるために来たと思うな。平和ではない、反って剣を投ずるために来たのだ……」（マタイ一〇・三四……三九参照）の如きは「平和の君」たる彼と矛盾した言である。

私は茲に端的に言っておきましょう。福音書はすごいドラマですから、このドラマの中に投身してキリストに体当りして降参するまではキリストの言行に躓くのです。降参してキリスト自身の中に投身してごらんなさい。するとものすごい力が、それは愛の力ですが、全身を貫いて、なるほどこれが聖霊のバプテスマかと気がつくと、こんどはキリストの烈しい言もけたたちがいの行為も力となり、歓びとなって体受できるのです。それでこそ「よろこびのおとづれ」即ち福音たることがあたまではなくからだで感得、体得できるのです。そのときはじめて日蓮の言った身読という読み方ができるのです。聖書について研究するのではなく、聖書の現実の中でキリストを見、キリストを聴き、キリストに捉えられるのです。そのときはじめていかにキリストが「言い逆いの徴」たる人物であり、神の子であるかが頓悟せしめられ、我々自身がキリストの徴となってゆくのです。



母マリヤと幼児イエス（レオナルド）

9月3日

受肉
（ヨハネ1：1—18）

一・一 元始に言霊があった、言霊は神と共に在った。言霊は神であった。
三 万物はこれによって成った。……四この中には生命があった。そしてその生命は人々の光であった。（ヨハネ一・一、三、四）
四 言霊は肉となって我らの中で幕屋した。我らは彼の栄光を見た。父からの独子の栄光で恩恵と真法とに満ちていた。（一・一四）
七 律法はモーセによって与えられ、恩恵と真法とはイエス・キリストによって到来した。八未だ神を見た者はない。ただ父のふところの中に没入した独子のみがこれを顕した（ヨハネ一・一七、一八）

神は永遠の実在である。元始とは創造の元始で、言、即ち言霊が創造以前からあった。それは神性であった。神と共に実在した神格であった。この言霊には生命があり、且つ光源であった。万物はこの神格によって創造された。人間もそうである。しかもこの言霊（ロゴス）が受肉して我ら人間界の中で幕屋を張った。即ち我々と同次元の肉なる存在となった。しかもそれは光と生命で輝いていた。神を父と呼ぶ独子であって、神の恩恵と真法に満ちていた。律法（十言、十戒）はモーセによって与えられ、恩恵と真法の現実即ち愛と義の現実は受肉のキリスト・イエスによって到来した。イエスは父の懐に没入した正に父と一如の実存である。その言霊なる実存に生命があった。その生命の実質は愛である。愛は熱いから光なのである。言霊は生にして愛にして光なのである。この言霊によって創造された人間には同質の霊が宿る。だから霊止なのである。創世紀一・二七と照応する。

9月4日

少年イエス
（ルカ2：40—52）

「なぜ（二・四九）ぼくをおたずねになったのです。ぼくのお父さん〔父なる神様〕のことに関っていなければいられないことが、あなた方はおわかりではなかったのですか」（ルカ二・四九）

イエスの幼少年時代のことは、十二歳のイエスが過越の祭の際に両親に伴われてエルサレムへの都のぼりをした時の記事（ルカ二・四一—五一）のほか何も記されていない。

この記事の前後に次の二句がある。「この幼児は次第に生い立って逞しくなり、智慧が満ち、しかも神の慈悲が彼のうえにあった（ルカ二・四〇）という。また「イエス智慧も、年齢も増し加はり、神の前、人々の前に益々慈愛を受けた」（ルカ二・五二）という。

イエスの両親、ヨセフとマリヤはお祭がすむと帰路を急いだ。イエスが同道していないのに一日路を歩いたあとで気がつき、エルサレムに引き返した。やっと三日目に神殿にいるイエスを発見した。そのときの問答でのイエスの応答が右掲の言である。少年イエスにとってはお祭よりも父なる神のことを神殿で祭司や律法学者と問答することの方が大切なことであった。ところが宗教的専門家たちが、神童イエスに問答でかなわない。次元がちがうのである。なぜか、彼は天の父、霊なる神との祈りの世界で深い霊の交りをしていたからである。その後の約二十年間の生活も、シナゴーグでの礼拝と旧約聖書（主として律法と預言書と詩篇）の身読、独りで朝まだきや深夜にタボルの山等で深く祈って、父神霊神のみ力にあづかったにちがいない。

9月5日

聖霊のバプテスマ
（マタイ3：11～17）

「私は本当に貴方らを水の中でバプテスマして回帰させよう。だが私より後に来る方は私に優る力の御仁で、私はその鞋をお脱がせするにも価しない。彼は貴方らを聖霊と火の中でバプテスマなさる。
さてイエスはバプテスマを受けて直ちに水の中から上ると、見よ、天開け、神の霊、鴿の如く舞い降りて彼の上に臨むを見給うた。また見よ、天から声があって曰く、「これは我が愛する子、これを我は悦ぶ」。（マタイ三・一一、一六、一七）

バプテスマ（洗礼）のヨハネは、ヨルダン下流に現はれて、水のバプテスマで人々の身も心も神への回帰（「悔い改め」という訳語は消極的）を促す先駆的役割を神に命ぜられていた。しかし彼よりあとに立ち現はれるイエスは火の如き聖霊のバプテスマをなさる方である。水の洗礼を要せぬイエスは、我々罪びとの次元に自らを置いてヨハネから敢て受洗した。全身の祈入を以て神の中に回帰、帰入したイエスは水の中から立ちあがると直ちに聖霊が天降りした。その霊光の相が鴿の如くであった。聖霊は彼の中に入ったのである。すると天来のみ声が響いて来た、「これわが子よ、われに愛せらるる者、この者の中に我は悦び入ったのである」と（直訳）。洗礼のヨハネが預言しているように、この全的な聖霊の人イエス。我々も天界のキリストから聖霊のバプテスマに与かってこそ始めて真正のキリスト者となるのである。

9月6日

キリスト対サタン
（マタイ4：1—11）

「人の生きるのはパンのみに由るのではない、神の口から発するすべての言葉に由る。」（申八・三）

「汝は汝の主たる神を試みてはならない。」（申六・一六マタイ四・七）

「サタンよ退け！『汝の主たる神を拝して、彼にのみ仕えよ』」（申六・一三）と録されてある」

聖霊の人イエスは伝道に乗り出す前にサタンとの一騎打ちをしてこれにうち勝つを要した彼はまづ荒野で四十日四十夜断食して飢え給うた。狡智なサタンはイエスに「もしあなたが神の子だというなら、これらの石がパンに成るように命じなさいよ」と言った。これに対してイエスは右掲第四節の言（申八・三）で応じた。人間は霊肉不可離の存在であるが、魂の問題は普通棚あげになっている。しかしイエスは神の言をパンより重視した。神の言は霊的な生命力を与えるからである。このことは聖霊を受けるとよく解る。肉体が空気を必要とする以上に人間の魂は神の霊気をもった霊言を要する。**経済問題**で負けたサタンは次に**宗教問題**をもちかけた。即ちイエスを霊にて神殿の頂上に伴れて来て、神の子ならそこから跳び降りても天使が助けてくれるからやったら好い、と唆した。イエスはこれに対して第七節の言で応えた。奇蹟や御利益を求めて神意を求めない宗教を拒否した。次にサタンは**政治問題**をもちかけて、現世に勢力を擅にしているサタンに拝跪すれば全世界をやると言った。これに対してイエスは第十節の「サタンよ退け……」で応じた。我々にとっては神に仕えるか、サタンに拝跪するかで、天国ゆきとなるか地獄ゆきとなるかである。

9月7日

天国回帰（上）

（マタイ4：17—5：3）

「汝ら回帰せよ！　天国が近づいたから。」（マタイ四・一七）（三・二参照）

「恵福なるぞ、霊の貧しき者らよ、天国はその者らの有だから」（五・三）

「汝ら回帰せよ！　天国が近づいたから」は洗礼のヨハネの第一声であった。全存在の転向、回帰の宣言である。そして「蝮の裔よ」とまで叫んで時のユダヤ人の在り方を糾弾した。

この同じ言がイエスの伝道の第一声であった。ヨハネはイエスを指したが、イエスのは自らの告白であった。即ち、天国とは神意支配の場であると共に神意体現者たるイエス自らのことだ。近づいた、とは此処に来てある、ということだ。何処へ回帰するのか、イエスの許へなのである。私に来よ、私が天国だ！　という告白である。

イエスはガリラヤ湖の北側の高原で所謂「山上の垂訓」を語った（マタイ五—七章）。驚くべき内容、キリストの全福音がこの中にある。これは「山上の大告白」と申したい。

その第一言が福音の天的な鍵である。イエス自身霊が貧しかった。自分を何ものともしなかった。イエス自身は神の前に空っぽで、幼稚園の童児同然であった。私はそれで、イエスを無（私）者と申し上げている。正に神童であり給う。だから神が完全に占領した。無即無限無尽者となった。だから「我を見た者は父（なる神）を見たのだと言った（ヨハネ一四・九）。「我と父とは一つなり」（ヨハネ一〇・三〇）と告白した。これが「霊の貧しき者」の真相である。イエスという神童が即ち天国体なのである。では我々はどうしたらいいのか。

9月8日

天国回帰（下）
（マタイ5：3—12）

「恵福なるぞ、霊の貧しき者らよ、天国はその者らの有だから」
「恵福なるぞ、義のために迫害された者らよ、天国はその者らの有だから」（マタイ五・三、一〇）

山上の大告白の劈頭の「恵福なるぞ」はむしろ「恵まれたるぞ」なのである。天的な幸福である。我々はイエスの如く神の前に無私無我で在り得ない。自我、我執、利己である。これを罪という。だから万人は罪びとで、その意味で義人はイエスを措いて他に皆無である。この我執を贖って無罪、無私の根源現実を賜ったのがキリストの十字架の贖罪である。私はこのキリストの第一言を祈りを以て冥想していたら、こうひびいて来た。「恵まれたる哉、汝、わが十字架によって霊の貧しさ即ち無私なる根源現実を賜った者よ、天国即ち聖霊の我れ汝の中に在り」と。かくて十字架の主の中に私は祈入し、回帰し、帰入した。キリストの聖霊が私の中に入って下さった。私は畳の上に平伏した。全身が熱くなった。「聖霊と火のバプテスマ」とはこのことであった。十字架と聖霊は不可分の絶対恩恵となった。一九五〇年晩秋、大阿蘇の垂玉温泉瀧見荘に於ける祈りの場での聖霊降臨の体験とその後の自宅での単独の沈黙の祈りに於てのこの体験が決定的なものとなった。私は使徒たちの信仰の次元に入れられた。それから使徒行伝的な霊的体験をさせられた。ところがこの天与の「義のために」あるグループから疎外された。やむを得ない。私は孤軍となった。しかし預言者と使徒が私に味方となった。私は死に至るまで罪びとに過ぎないが、この恵福を如何にせん！　聖霊を身証せずんばあらずである。

9月8日

八恵福

作詞：1987.9.1
歌調：「美しき天然」田中穂積作曲
（起句「空に囀る鳥の声」）

1
恵福なるぞ　汝が霊は
わが十字架に　あがなはれ
無の貧しさに　澄む菫
汝のものよ　天国は

2
恵福なるぞ　佗しらに
野に咲く桔梗　昨日今日
悲しむ人よ　キリストは
なぐさめ給ふ　涙して

3
恵福なるぞ　柔和なる
影は河原の　撫子よ
斯かる人こそ　地を嗣がめ
この世の末の　聖国にて

4
恵福なるぞ　夏の日の
向日葵草の　すがたにて
天つ義の陽に　飢え渇く
そのたましひは　飽くを得ん

5
恵福なるぞ　紅の
薔薇の如く　芳はしく
人を憐れむ　愛の人
主のあはれみに　愛せらる

6
恵福なるぞ　谷川の
白百合の如　清らけき
心の人は　隠れたる
神を見るなり　現世に

7
恵福なるぞ　平安の
床しきすがた　コスモスよ
平和を醸す　その人は
げに神の子と　称へらる

8
恵福なるぞ　義のために
責められし人　天国は
その人の有　桜花
散りゆく相　美はしや

9月9日

律法と福音

（マタイ4：13―5：42）

五・二一 昔、人々に「殺すなかれ、殺人者は審判を免がれない」と言はれていたのを汝らは聞いている。二二 けれども汝らに告げる、凡そ兄弟に対して怒る者は審判を受ける。また兄弟に馬鹿者呼ばはりする者は衆議に、また痴者よという者はゲヘナの火にあう。（マタイ五・二一、二二）

モーセの十戒（十言）は神との関係が前半の四言、人との関係が後半の六言であることは既に見たわけだが、対人関係で最悪の罪は殺人である。これは刑法に触れる犯罪である。これが国際関係の破局たる戦争となると罪でなく功績となるとは何たることか。

一般の怒りは憎しみの心に発する。憎しみ、妬み、争い、等がエスカレートして殺人となる。女性に対する色情もイエスは既に姦淫だと言い給う（五・二七、二八）。モーセの十戒の根本精神はかつて述べたからここには触れないが、一般の伝統的なとり方としては要するに外的行為面に関はっているが、イエスの「山上の垂訓」は人間の内心面、内心の相を見ての諭しである。そうなると誰もキリストの言を満たし得る者はない。福音の言それ自体が審判のようにひびく。假令モーセに及第してもキリストには落第する。ダンテの「地獄」ゆきとなる。

それでは何が福音か。イエスはところが汝は落第生だから、私に降参したから天国に入れてやるよ、と言い給う。天国体たる私の中にあるがままで入って来なさいと。キリストの中に入ると、光も生命も愛も義も力も我々の中に入ってくる。するとキリストの言が逆に力となる。だから福音なのである。

9月10日

敵をも愛する
（マタイ5：44—45上）
（ルカ6：27—30）

五・四四
されど我汝らに告ぐ、汝らの敵を愛し、汝らを責むる者のために
祈れ。四五これ天に在ます汝らの父の子とならんためなり。（マタイ五・四四、四五上）

キリストは我々に不可能のことをずばりとおっしゃる。しかもこの場合、あの場合とかいう状況判断や条件づきなどではない、無条件に断言的に言いなさる。とにかく福音は全的な全身的な霊肉渾然たる世界である。イエス自身には父なる神あって他に何もないといった境地、彼自身が父なる神の中に投身しておられるからである。

だからキリストの言を外から聞いていたのではダメ。キリストの言をキリストの中で「エン・クリスト」で聴くところに福音を受けとる場がある。キリストはどん底の愛で敵をゆるし且つ荷う。その極限は十字架上から「彼らをゆるしてやって下さい」と父なる神に祈り給うたあの愛である。その敵の一人が罪びとなる私である。そのように、キリストに文字通り生命がけの愛でゆるされ、愛されている。そのキリストの中に投身すると敵を荷うゆるしの愛が、キリストの聖霊の愛が、わがうちに火となって燃える。「我に来よ、我が中に入れよ、さらば汝をして敵を愛せしめる」とのみ声である。不当に責められ、白眼視され、除け者にされ、迫害されようとも、却て相手が気の毒になり、祈りを以て逆に荷うことになる。キリストと共に、キリストの中で、エン・クリストで、在天の父なる神の子とされるのである。不可能が可能になるから、そこにはもう敵は無い。真の天下無敵とはこのことである。ただキリストの聖名を讃えるのみである。合掌。

9月11日

最高の言

（マタイ5：45—48）
（ルカ6：32—36）

五・四五下 天の父は、その太陽を悪者の上にも善人の上にも昇らせ、雨を義しき者にも義しからぬ者にも降らせ給う。四八さらば汝らの天の父の全きが如く汝らも全かれ。（マタイ五・四五下、四八）

キリストの発した言の、そしてこの山上の大告白の中での最高の言である。地球そのものの存在も地球のあらゆるものも太陽に絶対依存している。太陽の恵みも雨の恵みも万人に平等、一視同仁である。神の恵みはそうである。だから汝らもそのような全さを有て、とキリストは絶対命令であるかの如く語った。誰にそんなことができるか。それなのにキリストはなぜ、こんな至上命令のようなことを言い給うのか。

ルカ福音書では「汝らの父の慈悲なる如く汝らも慈悲なれ」（ルカ五・三六）とある。「愛は律法の完全なり」（ロマ一三・一〇）とあるように、父の完全な内実は愛であるから、同義語である。要するに鴻大無辺な愛の人たれということである。

これもイエスが父と一如である如く、我々も贖主に信入し、帰入して、キリストと一如になるとそのような大きな愛の泉が、湧き、光が流れる。そうするととても楽になり力が来る。十字架で自我がすっとばされ、キリストの無者に根源現実でなっているから、相対的人間Kはどうであれ、愛の力に圧倒されて、「父の全さ」「慈悲心」が質的に来る。その相（すがた）は三日月であっても満月の影を抱いている三日月である。ありがたき哉！



（マタイ5：45—48）啓示と体験による告白的伝導をなし給うキリスト（レンブラント）

9月12日

いのり
（マタイ6：5－8）

六・六 汝は祈るとき、おのが部屋に入り、戸を閉ぢて、隠れて在ます汝の父に祈れ。（マタイ六・六）

キリストのこの言の前後は「汝ら」と複数であるが、この句は特に単数になっている。これは祈りというものの本質は神・キリストへの一対一の関係であるからである。たとい複数であっても信仰の問題は本質的に単数、現在、一人称、二人称の関係である。上からは「我・汝」であり、下からは「あなた・私」である。

イエスが父なる神に祈り給うたとき、それは「父よ・私」であった。私は贖主キリストに対して「主よ・私」である。私はあまり「父よ」とは祈らない。「主よ」というときその背後の「父なる神」にキリストを通して無言で呼び奉っているわけである。祈りの中で聖霊が自由に執り成し且つ能いて下さる。「部屋に入り戸を閉ぢて隠れて在ます汝の父に」というみ言はいのりの神秘の世界で主の御本願を寂聴する態勢である。祈りに形式は要らない。野辺、海辺、山間、林間、電車の中、礼拝堂、いづこであろうと自由にこの境地に入れる。夜更けや朝まだきは静かで独り祈るには適している。沈黙の祈り、深い祈りである。「我は門なり」というキリストの十字架の門を平伏して通ってキリストの中に入る。そこは詩篇第二十三篇のような憩の水辺、縁の野辺といって可い。聖霊の風が魂を甦らせて下さる。聖言が慰め、励まして下さる。時には聖書を黙読することが直ちに力づけられる祈りとなる。「わが言は霊なり生命なり」（ヨハネ六・六三）であるからである。祈りによってキリストと一如の現実に入れられる。

9月13日

主の祈り（其一）

（マタイ6：7—15）

天に在ます私たちのお父様！　あなたのみ名が聖として崇められますように。

一　あなたのみ国が来ますように。あなたのみ意が成し遂げられますように。天に於てのように地に於ても。

二　私たちの日用の糧を、今日も私たちにお与え下さい。

三　私たちの負債を私たちにお赦し下さい、私たちに負債ある者たちを私たちが赦しましたように。

四　私たちを試惑につり込まないで下さい。私たちを悪しき者から救い出して下さい。

（附）み国と能力と栄光とは永遠にあなたのものでありますから。アーメン。

（マタイ六・九—一三）

内容を簡単にいうと、

第一在天の父神霊神への呼びかけ。
第二聖名の讃仰。
第三聖国の来臨を祈る。
第四聖意の天成地現を祈る。
第五今日一生の祈り。
第六キリストに赦された土台での祈り。
第七サタンの試みからの救の祈り。
（附）神・キリストに一切を帰する祈り。

9月14日

主の祈り（其二）

マタイ6：7—15）

六・一〇 あなたのみ国が来ますように。あなたのみ意（こころ）が成し遂げられますように、天に於てのように、地に於ても。（マタイ六・一〇）

主イエスは十字架にかけられる時の迫りを知ったとき、「目をあげ、天を仰いで」父よ！と叫んだ。彼が「父よ！」と祈ると、彼は直ちに父のふところの中である。父と一つである。我らにとって神の聖名は聖である。預言者イザヤが特にその第六章で示したように。聖なる神と我々はいかにして関はりが有てるのか。キリストの十字架の贖罪によってである。だから罪びとが畏れを以て親しく聖名を呼ぶのである（コリ前一・三〇参照）。それゆえ、第一、第二の祈りが我らにゆるされている。

第三、第四の祈りにこれから入る。歴史の終末に神の国が来臨することを祈る。それは天からの啓示的希望だ。福音はそういう終末的な迫りに於て伝道されたものである。ところでこの聖国来臨が本当に祈れるためには、実は聖国がわが衷（うち）に来ていなければならない。それはどういうことか。マタイ五・三で既に見たように、十字架の贖罪により十字架の門をくぐって聖国の中に入れられ、聖霊がわが中に入って下さっている現実である。これが聖国の内在である。わが胸の中に否全身に聖霊の気が充満しているから我々は天国体とされている。だから終末的な聖国の来臨を確かなる希望として祈れるのである。天上、即ち霊界では聖意は成っている。その如く地上でも現成して下さいとの祈りは、提身してでなければならない。即ちどうぞこの僕婢の中で、を通して、成って下さい。どうぞお用い下さい、との祈りである。聖意体現の祈りである。

9月15日

主の祈り（其三）
（マタイ6：7－15）

六・一二
私たちの負債（おいめ）を私たちにお赦し下さい、
私たちに負債ある者たちを
私たちが赦しましたように。（マタイ六・一二）

マタイ六・九、一〇即ち「主の祈り」の第一、第二は神・キリストと我らの関係の祈りであるが、六・一一―一三は我ら自身に関はる祈りである。六・一一は「来る日毎の」生活問題の祈りである。「今日も」パンを下さい、という祈りである。それは勿論、はたらかなければならない。しかし子供たちは必ずしも「バイト」ができない。要するに「善く学び善く遊び」「父母を尊敬し」善く仕えれば、パンはいただける。今日一日を全力投球的に生きることは、六・三四「一日の苦労は一日にて足れり」の精神。

六・一二の「負債（おいめ）」は金銭上のこともあろうが、他人に対する罪過（広い意味）である。「私たちが赦しましたように」という事実の裏づけを以てするか、決意を表はすか（ルカ一一・三）、要するに他人を赦すことなくしては祈りは聴かれない。隣人（広義）を恨んだり妬んだりしている心を以てしては祈りの聴かれようはずがない。「七度を七十倍するほどに」（マタイ一八・二二）ゆるす心を以てである。他人を赦すことは、我々がキリストに十字架で根底からゆるされていることの感謝の自覚に於て可能である。赦すばかりでない、相手のために執り成しの祈りができるのである。

社会及び世界の平和は実はこの祈りの実践に於てこそ成りゆくのであって、お互いにゆるす大きな心のないところ、要するに利己的、主我的な心が禍いで、慾心が戦争の原因だとヤコブ書にある通りである（ヤコブ四・一）。

9月16日

主の祈り（其四）

（マタイ6：7—15）

六・一三 われらを試惑（こころみ）につり込まないで下さい。
われらを悪しき者（悪）から救い出して下さい。（マタイ六・一三）

試惑は広い意味でサタン的なものである。それも神の光の中であることを忘れてはならない。人間は弱いから、ということは我々の中に慾心があるから、それに良心が負けることが多いから、試惑の環境に立ち入らぬように、という祈りである。マタイ四・三に「試むる者」とあるはサタンのことで、この試惑とは同根の言である。原語の「悪しき者」も同じくサタンで、原語が「悪」なら中性だが、ここは第二格であるので、どちらにもとれるが、両義的にとっても可いが、具体的な悪の力あるものはサタンだから、サタンと見るのが現実的である。サタンとの一騎打にキリストは勝ち給うたが、我々は勝てない。だから、この祈りと共に、キリストの中に投身するに限る。「神はわれらの避け所また力なり、なやめるときのいと近き助けなり」というあの有名な詩篇四六・一である。キリストの中に遁げ込むとそこに力がくる。その力で主が勝って下さる。これがサタンとの戦に勝つ道である。ルターは詩篇第四六を基にしてあの有名な讃美歌を作った。「神はわが櫓」（自由和訳二六七番）を歌って下さい。

終りに一つ附言したいのはシュヴァイツァーの「つけたりの祈」である。幼児のとき彼は「主の祈り」のあとで「愛する神さま、気息（いき）をして生きているものをみんな獲って恵んでやって下さい。すべての禍害（わざわい）から防ぎ、やすらかに眠らせてやって下さい」と祈った、ということが彼の「わが幼少年時代」という原書の中に書いてあった。彼はこの祈りの通り、在世中、一匹の虫も殺さない生き方をした。

9月16日

聖書は神のドラマ

（マタイ７：７に因みて）
作詞：1980.10.28
歌調：S.370「めざめよわが霊」

1
聖書の扉に　体あたりし
平伏し仰げば　門はひらき
われらは入りたり　神の国に
みどりの牧場に　泉辺にぞ

2
聖書の現実は　神のドラマ
われらの集会は　その中にて
衆身の心で　祈り叫び
み言を喰い　み霊を飲む

3
祈りの場にて　み霊臨み
恵みとたまもの　豊かなれば
或る人は異言　或るは霊歌
病もいやされ　み名を讃う

4
十字架されれば　み霊臨み
み言息吹くよ　あなうれしや
我らはいのちに　満ち溢れて
み名を讃えつつ　主にぞ生くる

9月17日

人を審かぬこと
（マタイ7：6）

汝ら人を審くな。審かれざらんためなり。（マタイ七・一）

生来人間は自己義認、自己弁護をする傾向をもっている。他人の欠点を言あげする。他人を見くだしたり、けちをつけたりする。そういう根性をパリサイ根性という。キリストが不可とされた心のあり方である。自分の目に梁木のあるのを棚にあげて他人の眼の塵を見て何のかのと審く。これをキリストは偽善者と言った。自分の欠点を自認して、心を低くして、更に無心となると、他人の眼の塵を同情してそれをとりのぞくことができるとキリストは諭し給う。神の「最後の審判」を畏れん哉。

こういう審きとはちがって、真理に即せんとして、社会悪や政治の非を批判するのは、義の戦であるから聖霊の権威を以て為すべきである。それは十字架道である。

フランスの世界的文豪ユーゴーはナポレオン三世の政治を批判したので、国外に追放された。彼はペンを執った。フランスで出版できないのでベルギーのブラッセルの出版会社に交渉した。その本をよんで、「これは生きた聖書です。これを読んで泣かない人はないでしょう」といった由。その本はやがて出版された。その出版会社社長にユーゴーは手紙を書いた、世界未曽有の短かい手紙を。即ち「？……」としか書いてない。出版主はこれに対して「！……」と返信した。正に言以上の言である。これが何を意味するか読者は御自由に判断していただろう。ユーゴーは筆で政治批判をした、小説の形で。それは最早単なる政治批判ではない。人間社会が神の前に如何の問題である。その小説は歴史の終りに至るまでの不朽の名作、超批判、深い愛の名作『レ・ミゼラブル』（「噫無情」）であった。

9月18日

求めよ、然らば与へられる
（マタイ7：7－11）

求めよ（七・七）、然らば与へられる。探ねよ、さらば見出だす。門を叩け、さらば開かれる。（マタイ七・七）

キリストの言は断言的、無条件である。聖霊の権威と愛に因っているからである。だから、求める方も全的な全身を以てする体当り的な求めでなければならない。第八節で畳みかけてキリストは断定しておられる。一体何を求めれば好いのか。何でも好いらしい。ただ私心慾心の求めではダメである。生命がけの求めでなければならない。何でもいのちがけなら得られる。しかも求めの究極のものはキリスト自身をである。キリストを祈り求めるのである。するとキリストは自分自身を全的に与え給う。これほど確かなことはない。キリストを得ることはキリストの有（もの）となることである。そうすると我々の側の個々の求めの内容は神・キリスト中心となって私心なき求めとなり祝福される。

だから何はさて措きキリストを祈り求めることだ。キリストに祈入する、帰入するのである。それは全身をキリストの中に投身することなのである。キリストを探ねればキリストは其処に身近かに居られる。燈台下暗しであるから燈台の中に入ればよく見える、難破しそうな船も。そして助け舟と自分がされる。キリストという十字架の門に体当りするのが「叩け」である。必ず開かれる。自分は門の下にぶっ倒れる。キリストが起して下さる。聖霊の力を与えて下さる。「在天の父は求むる者に善きものを賜はらざらむや（七・一一）とある。「善きもの」とは「聖霊」のことである（ルカ一一・一三）。聖霊は何ものにも替えられない。

9月19日

黄金律
（マタイ7：12）

それゆえ人々が汝らになさんことをおよそ願うかぎりのことを、その如く人々になせよ。これこそが律法であり預言者である。
（マタイ七・一二）

この句を黄金律といっているわけである。「律法と預言者」という表現は、我々キリスト者にとっては旧約聖書ということになる。ユダヤ教徒は旧約とは言はない。彼らの聖書は「律法、預言者諸書」という長い名称である。要するに旧約の根本精神を一言で称うならこうだとキリストが告白なさった。人にしてもらいたいこととは何か。具体的にはいろいろある。それを煮つめれば愛せられたいことである。愛せられたいように愛せよ、ということになろう。ひとばかりではない、動物をも植物をもそのように愛すると、動物も植物もよろこぶ。

だからキリストは全心全霊全力を以て神を愛せよ、また隣人を愛せよ、これは同じ愛の両面である。仏教も慈悲に尽きるし、孔孟の教も仁に尽きることをおもえば、要する愛すること、人助けをすること、人を救いあげることが天道であり人道であるということに帰する。挺身の、棄身の愛の行為に優るものはない。その極致がキリストの十字架の贖罪愛であった。マキシミリアン・コルベ神父がナチスのユダヤ人大殺害のアウシュヴィッツ強制収容所で一死刑囚の生命の身代りをした愛を想う。

ヨハネ伝の「元始に言霊があった」と実は「元始に愛（の行為）があった」と告白したいくらいである。愛こそは神のそして神から来る力のアルパでありオメガである。黄金律はこの霊愛道に極まる。

9月20日

狭き門
（マタイ7：13，14）

七・一三 狭き門より入れ、滅びに到る門は大きく、その道は広く、これより入る者多し。一四 生命に到る門は狭く、その路は細く、これを見出す者少なし。（マタイ七・一三、一四）

「狭き門」というと、我々日本人はすぐ入学試験の関門を連想する。入試の狭き門はどれほど日本の青少年少女の精神的肉体的マイナスになっているか、由々しき問題である。青少年がその天性天資の資質才能に即した勉学ができるように大門大道への学制の大改革を要する。文部省は政治に左右されず、独立的存在として世界的視野を以て道を拓くべし。

神・キリストの門は狭い。それは各人が裸一貫で何も持たずに体当りする門である。十字架という門だ。この関門に体当りしてぶっ倒れて「透得」すると、自我、我執が贖はれているので「乾坤独歩」することができる。天の「大道は無門」である。聖霊の風の吹く道であるから。『無門関』という禅宗の句も、キリストの十字架と聖霊を体験すると楽にうなづけるのである。地路は各人の足で歩く路である。一人一人がのっぴきならぬ路を歩かせられる。それが運命環境の特殊性であり、人生なのである。「千差路あり」とはこのことである。その路を歩くに当って神・キリストを路案内とすると行きづまりを知らない。人生風雨あり、荊棘あり、岩石あり、しかしまた真清水あらばキリストを飲め、葡萄の房あらばキリストを喰へ（ヨハネ六・五五―五八）。キリストを飲みキリストを喰い、キリストを道案内として歩く細路が生命の路で、そういう地路は即ち天道なのである。

9月21日

聖意体現
（マタイ7：15—28）

七・二一 私に対して、主よ主よという者ことごとくは天国に入らない。そうではなく、天に在ますわが父の御意を行う者は天国に入る。（マタイ七・二一）

キリストはこの言の前に、羊の扮装をして内心は豺狼である偽預言者に注意せよ、と警告している。宗教界にはそういう霊的高慢の白いサタンが時折出現する。それがまた似而非なるカリスマ的なはたらきすらやるのでキリストはこの言のあとでそのことに触れておられる（七・二二—二三）。

最も大切なことは神意を体してそれを体現することである。神意を体するためにはキリストの十字架を冥想し、無私の心境に於て神・キリストの本願を承り、全身をキリストの中に投身することである。信仰とはそのような内的な全身的な行為であるから、信仰を私は信行と謂う。そうすると聖霊の力が臨むから、外的な行為がおのづから発動するわけである。それを体現という。信仰と行為という二段構えではダメである。信即行としてキリストと一如にされるから、それがまた即体現として現はれる。人間はダメだから、それが自然法則の如くはいかぬことも勿論ある。しかし、この霊的必然の中を生きることが大切で、いかに体現の面がみじめであっても、それは作られた立派さよりも神の眼には美しいにちがいない。「御意を行う」ということで、天的な霊然の相である。キリストの行為に福音書でぶつかると、キリストは正に神然の世界である。キリストは聖意を行ずる人を磐上の家に譬えている（七・二四、二五）。

以上を以て「山上の大告白」を終るが、聖霊の「権威ある」力ある愛の聖言であった。

9月22日

百卒長の信仰
（マタイ8：5—13）
（ルカ7：1—10）

「（八・八）ただ一言だけ言って下さい。そうすれば私の僕は癒されます。」「まことに汝らに告ぐ、このような信仰を我はイスラエルの中に一人として見出だしことがない。」（マタイ八・八、一〇）

ガリラヤ湖の北岸のカペナウムはキリストの伝道の根拠地であったが、ローマ軍の百卒長が、イエスに自分の僕が中風を病んで苦しんでいることを申し上げた。では行ってやると答えたが、百卒長は、とんでもない。自分は自分の屋根の下に先生をお迎えするに価しない者です。ただ一言賜はれば癒えます、と率直に答えた。そしてその僕は自分の命令によく聴き従う旨を告げた。これを聞いて、イエスは驚きあやしんで言った「こんな信仰者はイスラエルの中に一人も居ない。異邦人たちが東西からやって来てアブラハム、イサク、ヤコブと共に天国の宴につくとき、選民は外に逐い出されて切歯哀哭するだろう」と。そして百卒長に「往け、汝の信ずる如く汝に成れ！」と叫んだ。とその時直ちに百卒長の僕は癒やされた。

私も陸軍関係の諸校でドイツ語を教えていた時期があったが、軍人が命令に絶対服従で上官が部下を愛する限り、それは美しい信頼関係であるのを見た。この百卒長と僕の関係も正にそうである。キリストを全的に信じている百卒長はキリストの一言に力あるを信じていた。だからキリストが「汝の信ずる如く成れ」の力ある霊言を発するや、時間、空間を越えて直ちに癒された。聖書は永遠の現在の書である。聖言を本願として全身に信受すると、その瞬間に聖力が来て、身心はみ霊の力と愛と光と生命の現実に入る。

9月23日

人の子は枕する処なし

（マタイ8：10—27）
（ルカ9：57—60；8：22—25）
（マルコ4：35—41）

「狐は穴あり、空の鳥は塒あり、然れど、人の子は枕する処なし」（八・二〇）

視よ、海に大いなる暴風雨起こりて、その舟波のために蔽するばかりなるに、イエスは眠り居給ふ。（マタイ八・二四）

「狐には穴がある、空の鳥には樹の中に塒がある。ところが、人の子、私には枕するところが無い」とイエスは言った。彼には一定の宿るところがない。無宿者である。石枕、草枕、或はイエスを迎えるどんな人のところにでも一夜を明かす。この場合は弟子たちと舟に乗っておられた。ところがガリラヤ湖上を暴風が吹きまくってきた。舟は波をかぶるばかりになった。それでもイエスは眠っていた。艫の方に茵を枕として（マルコ四・三八）。弟子どもは舟が沈むと言って恐がってイエスを呼び起こした。イエスは風と波に「黙せ、鎮まれ」（マルコ四・三九）と叫んだ。すると大いなる凪となった。そして弟子たちに「なぜそんなに恐がるのか、信仰なきは何ごとか」（マルコ四・四〇）と言った。枕するところなき「人の子」キリストは到るところを枕とする人であった。いつ、いかなる処でもそこを神のふところとして眠ることのできる平安の魂であった。彼の信仰の現実は、我々がどこに居ても空気の中であるように、いづこでも神のふところの中、み腕の中であった。我々がいつどこであろうと我れキリストの中、キリストわが内という現実が身について来たら、えらいことになる。それを身を以て証したのは、実に使徒パウロであり、且つペテロ、ヤコブ、ヨハネであった。信仰とは正に信交という現実となってこそ本ものである。祈りの魂でみ霊の内住が身につくことを要する。

9月23日

（詩）「人の子は枕する処なし」

作詞：1980・1・15
歌調：S.39「日くれて四方はくらく」

1
きつねに穴ぐらあり
小鳥には塒あり
人の子枕するに
宿るべきところなし

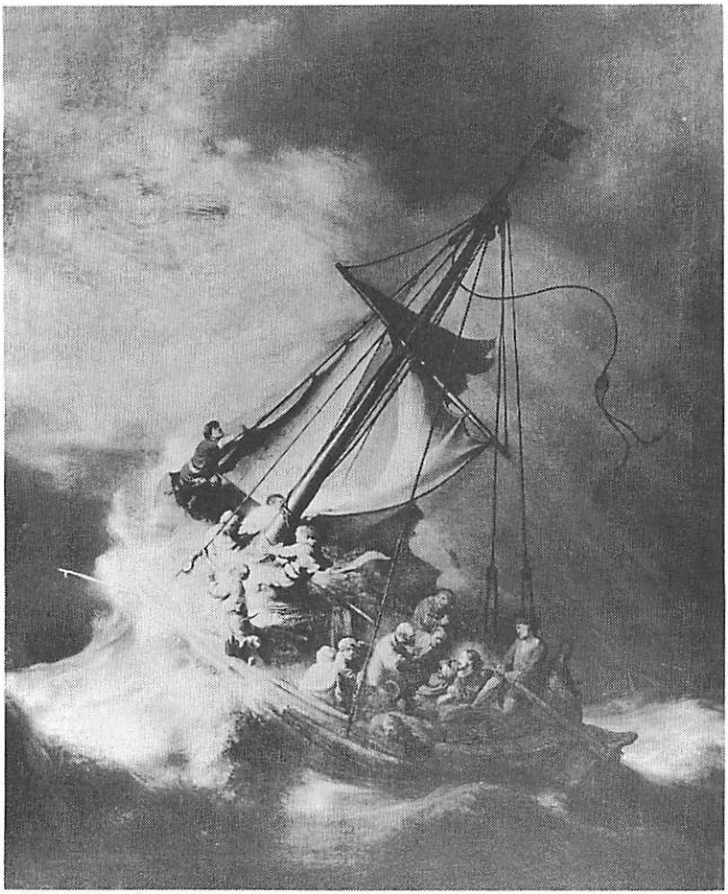
2
山ゆかば石枕
野べにては草枕
主はかくぞ眠りける
父のふところとして

3
小舟は木の葉の如
波風にゆらぐとも
舟板を枕とし
キリストは眠りけり

4
あらしをいたくおそれ
弟子どもは主を起こす
起きざまに主は言へり
「何ぞおそれまどふや」

5
舳に主は起ちてぞ
叫びける「風黙せ！」
あらしは凪ぎとなれり
ああみ霊のキリストよ！

6
憂ひに沈むときも
病気になやむときも
キリストのふところに
眠りてみ力を得ん！



(マタイ8：18—27)「その船波のためにはるるばかりなるに、イエスは眠り居り給ふ」
(レンブラント)

9月24日

我は罪びとを招かんとて来れり

（マタイ9：9—13）
（マルコ2：13—17）
（ルカ5：27—32）

汝ら往きて学べ「われ憐れみを好みて犠牲を好まず」とは如何なる意ぞ。我は義しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとて来れり。（マタイ九・一三）

カペナウムの収税所のマタイを見て、イエスは「我に従へ」と言ったら彼は直ちに従ってイエスの弟子の一人になった。彼の家で多くの取税人や律法を遵らない人たち（罪びと）がイエスと弟子たちを招いて食事をした。この常ならぬ光景を見て律法実践を誇っているパリサイ人たちが弟子たちに「なぜ君たちの先生は取税人や罪びとらと食を共にするのか」と詰った。イエスはこれを聞いて、「健康者は医者が要らない。ただ病人には医者が要る。お前たち（シナゴーグにでも）往って学んだら好い。『我憐みを好んで犠牲を好まず』とはどういうことか」と。これはホセヤ書六・六にある名句で、所謂宗教行事として、犠牲の羔を捧げるよりも、実生活で人を憐んで助けるのが本当の宗教的行為なのだと暗に責め給うた。キリストは高慢なパリサイ人には用がない。彼らは本当は生命をもたない。律法が遵れないといっている「罪びと」をこそ救いに来たのだ、と。言や行為を繕っている所謂宗教家には偽善の雲がかかっている。その時その場をあるがまま正直に生きて躓いたり滑ったり転んだりしている人の方が本当の人間だ。そういう罪びとは愛すべしでキリストはそういういつわりなき人々の友となりこれを救い給う。取税人であれ、遊女であれ、或はどんな犯罪者であれ、神の前に平伏す魂は救われる。

9月25日

天剣の十字架道

（マタイ10：34—39）
（ルカ12：51—53）

一〇・三四 われ地に平和を注がんために来たとは思うな、平和ではない、反って剣を投ぜんために来た。三五 自分の十字架をとって我に従わぬ者は、我に相応しくない。三八 自分の生魂を獲る者はこれを失い、わがために自分の生魂を失う者はこれを獲る。（マタイ一〇・三四、三八）

キリストは一〇・三四のあとで、自分が来たのは、子を父から、娘を母から、嫁を姑から分裂させるためだとか、仇は家の中にいるとか（マタイ一〇・三五—三七）、自分より父母妻子、兄弟姉妹を愛する者、更にはおのれ自身の生魂まで憎むのでなければわが弟子となることは出来ない、などと言っている（ルカ一四・二六、二七）。それはどういうことか。イエスは父なる神のみを相手として生きた。父母も兄弟姉妹も眼中になかった、ということは父神霊神と一如になったら、神の力、光、生命、愛、智慧が彼に満ち溢れ、それで棄てられた人々が神からの愛で包まれ、貫かれ、担われた。その愛をどう受けるか、それはさまざまであった。やむを得ない。受けない人は自らを審いているまでである。イエスは御自分の実存を告白しているまでのこと。福音は天剣、天下の宝刀だから剣を投ずるために来た、と喝破した。いつわりの平和ではない。神との一対一の絶対関係、我々にとってはキリストとの一対一の絶対関係が立つために相対関係を問題とするな、ということ。そうすると逆に棄てた人々を皆救うことになる。誤解、迫害に遭うこの道が十字架道である。キリストのため、キリストに在って棄身になると生魂のみならず本当の生命がくる。また人々を本当の生命の中に入れることになる。だから福音である。

9月26日

一粒の芥種（からしだね）
（マタイ13）

天国（一三・三一）は一粒の芥種（からしだね）の如し、人これを取りてその畑に播くときは、萬（よろず）の種よりも小さけれども、育ちては、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり。（マタイ一三・三一・三二）

一粒の芥種、それは掌の中に置いても、さてどこにあるかというように小さい。しかしこの小さい一粒の芥種は生命で充満している。畑に播（ま）いたら、もうわからない。しかし、それが殻を破って根を張り、芽を吹き出し、どんどん大きくなって樹となり、しまいには空の鳥が巣を枝の間に作って宿るという。天国はそのように大きくなるのだと。我々一人一人が芥種だとしても、魂の奥に聖霊という天来の種が宿らないと、この譬話のようにはならない。聖霊は原始力を有（も）っている。これがないと深く、広く、高く展開してゆくことはできない。いろいろな運命環境の変転を、波状に寄せては返す艱難を、突破する力は聖霊にある。苦しんでいる人、悲しんでいる人、病んでいる人、迷っている人、求めている人、そういう人々を福音の中に導入する力は聖霊の愛と力と智慧にある。私も聖霊を宿す芥種一粒となってから、即ち一九五〇年の晩秋天から聖霊が私に降って以来、北は北海道から南は九州まで十二の召団が知らぬ間に形成された。いづれの召団も破れ幕屋であるがキリストの愛が抱いて下さる。ただ聖名を讃え奉る。

また我々一人一人が芥種一粒の如き原子核的な信に魂が凝集すれば不可能を知らぬ力にあづかる（マタイ一七・二〇）。それを霊子核とでも言はんかな。

9月27日

湖上のキリスト

（マタイ14：22—33）
（マルコ6：45—52）
（ヨハネ6：15—21）

元氣（二七）を出せ、わたしだ、怖（こ）はがるな！（マタイ一四・二七）

キリストが五個のパンと二匹の魚を受けとって天を仰いで祝し、五千人と女子供たちに頒ち与えたという大奇蹟を行ったことが、どの福音書にも記されてあるが、キリストという天的生命体は無尽の生命を宿している徴であった。（マタイ一四、マルコ六、ルカ九、ヨハネ六を見よ）。

そのあとで、キリストは山に登って独りで深い祈りをなさった。それは徹夜の祈りであった。弟子たちは舟で帰ることになっていた。ところが夜風が吹きあれて来た。弟子どものことを顧（おも）って、夜明けの四時頃、イエスは湖上を歩いて舟に近づいた。弟子どもは変化（へんげ）（幽霊）の者と思って怖れ叫んだ。弟子どもの惶（あわ）て騒ぐのを見て、キリストは「元気を出せ、わたしだ、怖（こ）はがるな」と語りかけた。ペテロは「主よ、もしあなたなら、私に命じて、水を踏んで、み許に往かして下さい」と叫んだ。イエスは「来い！」とさし招いた。ペテロは言下に舟から出て水の上を歩み始めた。ところが、風を見て怖れた。とその瞬間に沈みかかった。「主さま、助けて下さい。」イエスは腕を伸ばしてペテロを捉えた。「噫、信仰うすき者よ、汝何で疑うか」と言って、ペテロと共に舟に乗った。イエスのこの言、「信仰うすき者よ」に躓いてはならない。信仰をそれでは厚くしようなど考える必要はない。自分の信仰などあてにせぬがよい。あてにするのはキリストだけ。「私だ」というみ声を霊聴せよ。こちらは空っぽで好い。絶信だ。キリストの全的な信が入っている。絶信の信、無信即無量信を賜る。そのとき俄然また果然み力がはたらく。

9月28日

カナンの女

（マタイ15：21—28）
（マルコ7：24—30）

視よ、[一五・二二]カナンの女、このほとりから出て来て、叫んで「主よ、ダビデの子よ、お憐み下さい。娘が悪鬼に憑かれてひどく苦しんでいます」[二六]「子供のパンをとって小犬に投げてやるのは好いことでない」[二七]「そうです、主よ、小犬はそれでも主人の食卓から落ちるパン屑を喰べるのです」[二八]「女よ、お前の信仰はえらい、お前の願いのように成れ！」娘はこの時刻から癒った。（マタイ一五・二二…二八）

ガリラヤ湖畔の伝道をひとまづ終えて異邦を巡回しようと西の方ツロとシドンの地方へイエスは足を向けた。土着のカナンの女が途上に現われて右掲の如き歎願をした。イエスは始め答えもしなかったが、あまり叫ぶので問答となった。イエスは選民イスラエルの「失せた羊」、即ち牧者たる神から離反している人たちを救うのが自分の使命だといって断った。「小犬」のような異邦人を救う使命はないのだ、と。どうもイエスらしくない答えである。カナンの女は喰いさがって「パン屑」で好いのですと迫った。イエスはこれには一本参った。それで直ちに娘は癒やされた。

あざやかにイエスを参らせたのはこのカナンの女が始めで終りかも知れない。ともあれ、イエスは全身でいつわりなくぶちまける態勢を無条件的に受け入れ給う。その人の過去がどうだこうだは問題でない。取税人であろうと遊女であろうと盗賊であろうと殺人犯人であろうと。イエスはその場その時に全存在でみ前に自分を投げだす魂をハタと体受し給う。その瞬間にその人自身が救われる。このカナンの女自身も救われたわけだ。

9月28日

（詩）カナンの女
作詞1981・1・7.
（マタイ15：21—28）　歌調S. 217「あまつましみづ」

カナンの女

1
カナンの女　道べより
主のみ姿に　叫び寄る
「主よ、ダビデの子　憐み給へ
悪鬼に悩む　わが娘！」

2
されどイエスは　応答せず
弟子どもも主に　請ひて言ふ
「帰し給へよ　叫ぶ女を！」
主は之を受け　可しとせり

3
「我は父より　遣はされ
ヤコブの家の　失せにける
羊の如きわが民のみを
救はんとてぞ　来りける」

4
カナンの女　跪き
「助け給へよ　我を主よ！」
「子供のパンを　小犬に投げじ」
主は憎れなくも　拒みけり

5
女応へて「然り主よ、
小犬も喰ふ　食卓より
落つる主人の　食屑をすら」
噫、この言葉　主を撃てり

6
「カナンの女！　平安れよ
汝が信こそは　大いなり
願ひの如く　汝れに成れかし」
願ひの如く　癒やされぬ

9月29日

エクレシヤの磐(ペトラ)ペテロ

（マタイ16：3—20）
（マルコ8：27—30）
（ルカ9：18—21）

「汝(一六・一五)らは我を誰と謂(い)うか」シモン・ペテロ(一六)答えて言う「あなたはキリスト、活ける神の子であり給う」（マタイ一六・一五、一六）

イエスはガリラヤの北方のピリポ・カイザリヤ地方に方向を転じた。弟子たちに、「人の子」、我を人々は誰だと言っているか、と訊ねた。「ある人は洗礼のヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、等という」と弟子どもは答えた。次に「汝らは我を誰と謂うか」との問いに対してペテロは右掲の如く答えた。この答に対してキリストは、汝の答は天の父からの啓示だ、お前はペトラ（磐）である、私はこの磐の上にわが教会を建てる、云々と宣言した、とある。しかし終末的な神の国、神の民を語っていたイエスが、いきなり「教会」というはづはない。これは教会の根拠づけのためのつけ加えというのが一般の学説。

誰にせよ、イエスを「活ける神の子、キリスト」即ち救世主(メシヤ)と告白するその人は磐になる。伝道、それも一対一の伝道で宜しい。伝道によって、二、三人キリストの聖名に在って集るところに即ちエクレシヤ（召されたる者の群）、教会が成るのである（マタイ一八・二〇）。教会(エクレシヤ)は文字に即して訳すと「召団」というべきで、私は私の群を「召団」といっている。これは私の恩師藤井武先生が「教会論」でそう書いたので私はそれを実践しているわけである。

ともあれ漁夫ペテロは歴史的に見て、弟子どもの首(かしら)であったし、使徒ペテロとしてカトリック教会の創始者とされている。ペテロは併しこの告白のあとで、キリストに躓いて「サタンよわが後に退け」と一喝された（一六・二三）。ペテロもペンテコステで聖霊が臨むまでは浮きつ沈みつの漁夫であった。

9月30日

生魂の重さ

（マタイ16：21—28）
（マルコ8：34—9：1）
（ルカ9：23—27）

一六・二四 人もし我に従い来らんと欲はば、己れ自身を棄て、おのが十字架を負ひて我に従へ。
二五 己が生魂を救はんと欲う者は是れを失ひ、わがために己が生魂を失ふ者は是れを見出さん。
二六 人、もし全世界を得るとも、己が生魂を失はば、何の益あらん。またその生魂の代に何を与へん。（マタイ一六、二四、二五、二六）

これはイエス自身の大告白である。彼は本当に己れを十字架上に棄て給うた。神のため己が生魂を棄て血を流し給うた。彼は復活して永遠の霊生を身証なさった。今も霊界で生きて我々にはたらきかけ給う。彼は己を十字架上に棄てて、世の罪を贖い、全世界を得ておられる。霊界に君臨し給うキリストに誰が反抗できるか。反抗する者は自ら滅びる。

このキリストの十字架道を聖言に従って歩く者はキリストから見えざる十字章を額上にまた心臓の中に賜わる。この世のいかなる勲章もこれに如くものはない。その人は聖霊の力で十字架道を歩むことができる。世界史の中にそういう殉道の勝利者が人の知ると知らざるに拘らず星の如くいた。それは天界の神の書に記されてある。星の光よりもすばらしい光を放っている存在である。勿論キリスト者に限らない。神のみが知り給う。

人一人の生魂（プシュケー）は全世界にも代えられない。天秤の左の皿に地球を載せ、右の皿に一人の人を載せて重さを量るに、地球の方が軽くあがって、一人の人の方が重く下る。キリストの天的論理、物理はそういう霊理である。

10月1日

カナの婚宴
（ヨハネ2：1—11）

二・三 母、イエスに言ふ「彼らに葡萄酒なし」。四 イエス言ひ給ふ「女よ、我と汝と何の関係あらんや、わが時は未だ来らず」……イエス僕に「水を甕に満たせ」……九 筵宴長、葡萄酒に化りたる水を嘗めたり……イエスこの第一の徴をガリラヤのカナにて行へり。（ヨハネ二・三、四、七、九、一一）

イエスの故里ナザレの東北方のカナの村に婚宴があった。母マリヤばかりでなくイエスと弟子たちも招かれた。相当の人数が婚宴に招かれたと見えて、途中で葡萄酒が尽きたので母がイエスに告げた。ところがイエスは母の言に対してそっけないような答を右の如くした。キリストは唯天の父の御意に従うのみで、母に無責任な答をしなかったのである。キリストの「わが時」はいつも神の時なのである。勿論母の言を聞いた次の瞬間にイエスは心の中で祈った。祈りの中で父のみ旨が来た。食事に用いる水甕が六個あったので、それに満水を僕どもに命じた。満水と同時に天来の力が臨んだ。水は葡萄酒に化った。筵宴のところへ葡萄酒が運ばれた。さきの酒よりこの酒の方が味が優れているではないか。驚いた。筵宴長は新郎を誉めた。彼にはキリストに於てはたらいたみ霊の愛の力などわからなかった。弟子たちも驚いた。これがキリストの愛の力の第一の徴であった。実にイエス自身が父なる神の最大の徴でそれが自在に言行に於て徴として現われる伝道であった。水は霊水になる。大気は霊気になる。言は霊言となる。歌は霊歌となる。医術は霊術となる。キリストの中に深く祈り入り、我々自身キリストの徴とならん。

10月2日

イエスとサマリヤの女
（ヨハネ4：3—42）

「四・一三この水を飲む者は誰でも渇く。一四だが私が与える水を飲む者はいつまでも渇くことがない。私が与える水はその人の中で湧きでる泉となって永遠の生命をもたらす。」
「二女よ、私に信頼せよ。この山でもエルサレムでもなく、お前たち父（なる神）を拝する時が来る。三まことの礼拝者たちが霊と真を以て父を拝する時が来る、今もう来ている」。

ユダヤからガリラヤへの途次、サマリヤのスカルという町にイエスは立ち寄った。そこには有名なヤコブの井泉がある。サマリヤの女が水を汲みに来たので、イエスは「飲ませてくれ」とたのんだ。女は「あんたはユダヤ人なのに何で（仲の悪い）サマリヤの女に飲ませてくれなど言いなさる。」問答がつづく。イエスは右掲の言を吐露した。イエスの与える水は、霊水である。即ち聖霊である。問答の中で、イエスは彼女の素性をずばりと言ったので、女は驚き、イエスを預言者だと告白する。

イエスは礼拝所は「此の山」ゲリジムでもなくエルサレムでもない。本山は到る処にあり、時刻はいつでもよし。という真の礼拝・真の宗教が何であるかをずばり喝破した。「霊と真」を以て、とは「聖霊に在って本気で」ということだ。女はすっかり驚きよろこんで町へ走っていって「来てごらん」と人々をイエスのみ許に伴れてくる。まことにキリスト自身が神殿。我々自身が聖霊の宮。生活そのものが礼拝ということだ。



（ヨハネ4：3—42）イエスとサマリアの女

10月3日

無者キリスト
（ヨハネ5：19—47）

五・二〇 父は子を愛してそのなす所をことごとく子に示し給ふ。我自ら何
三〇 ごともなし能はず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し。そ
は わが意を求めずして、我を遣はし給ひし者の御意を求むるに因る。
三七 汝らは書物（旧約聖書）に永遠の生命ありと思ひて之をしらぶ。さ
れどこの書物は我につきて証しするものなり。

普通は信仰が一種の信念で、精神的統一をもった力だと思っている。ところがイエスはそんなことは言わない。彼はひたすら父に祈り入って、父から聞き、父を見、存在的には父のふところに入って一如一体となっている。だから父から力ある言を賜わってそれを語り、力ある業を行ぜしめられるだけである。であるから「わが教はわが教に非ず、我を遣はし給ひし者の教なり」（七・一六）と言っている。イエスは彼自身、無能、無意、無言、無教の人である。それで私はイエスのことを無者と申している。自分を何者ともしないでただ父なる神一切、一点張の人である。それで霊界からの無限無尽な言、行が展開した。福音書のおどろくべきドラマの中のキリストの言葉も行為も全く神の力に源泉がある。力と光と生命と智慧と義と愛に満ち溢れている人である。無即無限無者たる実存だ。だからこのキリストに降参して、キリストの中に全身投入すると、ふしぎなことになる。投入の門は十字架、そこを平伏して通ると詩篇第二十三篇の如き自由の天地が展けてくる。

10月4日

我は生命のパンなり
（ヨハネ6：22—71）

「神のパン[六・三三]は天より降りて生命を世に与ふるものなり。」「我[三五]は生命のパンなり、我に来たる者は断じて飢えず、我に信じ入る者は断じて渇かず。それ我が天より降りしは、わが意[こころ]をなさん為に非ず、我を遣はし給ひし者の御意[三八]をなさん為なり。わが父の御意はすべて子を見て信じ入る者の永遠の生命を得る是なり。我れ終末の日にこれを甦活せしめん。」

イエス言ひ給ふ「誠に誠に汝らに告ぐ、人の子の肉を食はず、その血を飲まずば汝らに生命なし。」

キリストは我々に永遠の生命を与えたくて仕方がないので、このヨハネ第六章で徹底的に語りかけている。神の欣び給う業[わざ]（単数）（六・二八）はキリストの中に信入することだ、と。即ち信仰即行で霊的に全身的に信じ入ることが業だという重大な言である。信仰即信行即信交である。それはもっと烈しい表現では、自分は天来の生命のパンだから食べろ、神の羔だからわが肉を喰い、わが血を飲めという。キリストの霊的生命を沙漠の宗教らしく具体的な血と肉で語っておられる。キリストを食べれば永遠の生命となる、という。そしてキリストと生命的一如の関係に入る。エン・クリスト（キリストの中に）という一体の霊的現実である。こういう信即行という全身的消息が使徒たちの信仰の現実であった。聖餐式ではなく、霊的現実で「主よ、あなたは私の血の血、肉の肉です」と告白するのだ。

10月5日

キリストの栄化

（マタイ17：1－8）
（マルコ9：2－8）
（ルカ9：28－36）

一七・二 六日の後、イエスはペテロ、ヤコブ及びその兄弟ヨハネを伴れてひそかに高い山に登った。二 かくて彼らの前で変貌し彼の顔は太陽の如く輝き、彼の衣は光の如く白くなった。三 すると見よ、モーセとエリヤが彼（イエス）と語るのが彼らに見えた。四 ……。五 彼（ペテロ）がなほ語っているうちに、見よ光る雲が彼らを掩った。すると見よ、その雲から声があって言う、「これはわが愛する子、我これを悦ぶ、六 汝らこれに聴け」と。七 弟子らはこれを聴いて平伏し、いたく恐れた。イエスは近づいて彼らに触れ「起きよ、怖れるな」。（マタイ一七・一－七）

これは所謂「変貌の山」の記事だが、ピリポ・カイザリヤでの弟子たちとの会話で、彼がメシヤ（キリスト）であることを弟子たちに語ってから一週間前後のことで、高い山というのはおそらくその北方のヘルモン山だと思う。白雪をいただくこの世ばなれした神秘的な山で、彼が祈り給うや右掲の如き相に栄化し給い、旧約の代表的人物モーセとエリヤが現れた。そしてイエスの十字架の死のことが語り合われた（ルカ九・三一）。ペテロはイエスとモーセとエリヤのために三つの幕屋を張りましょうなどと（マタイ一七・四）ペテロらしい思いつきを口走った。その間霊雲が彼らを掩うと見るや、イエスのヨルダンに於ける受洗の時と同じ天来のみ声がひびいて来た。三人の弟子は平伏した。イエスは彼らに按手して起してやった。このキリストの霊的栄化は正に復活のキリストの予徴であった。

10月6日

「ペテロの魚」
（マタイ17：24—27）

彼らを躓かせぬ為に、湖へ往って釣を垂れ、初めに上る魚を取れ、その口を開くと銀貨を見出だす、それを取り出だして、私とお前の為に彼らに納めよ。（マタイ一七・二七）一七・二七

この記事はマタイ福音書特有のものである。これはガリラヤ湖北岸の村カペナウムの岸辺の出来ごとである。取税人どもにペテロは神殿納金のことを訊かれた。「あんた方の先生は納金を納めないのか」と。イエスがメシヤだとの噂が立ちはじめていたからである。ペテロは「納めるよ」と答えた。その問答を早くも察知したイエスはペテロに「シモンお前はどう思うか、世の王たちは税や貢を誰からとるか、自分の子からか、庶民からか」。ペテロは答えて「庶民からです」。イエスは「そうかそんなら（神の）子（自分）は自由だ」。だけれども、彼らを躓かせない為にといって右掲のふしぎな指示をした。「銀貨」と訳した原語は「スタテール」で、一シケル銀貨のことである。半シケルは二ドラクマで、ユダヤ人は二ドラクマ納税をエルサレム神殿になす義務があった（出三〇・一三以下参照）。この魚の口から出た銀貨は一シケルで四ドラクマになるから二人分の納税金に相当する。こういうふしぎな魚が釣にかかることを看破するキリストは全く大へんな人である。我々が一九八一年の春聖地の旅をした際、三月二十八日（土）のことであった。正にこの故事の湖辺の家で昼食を認めた際、「ペテロの魚」という鯛に似た魚が食卓にのぼった。この旅のガイドをしてくれた当時エルサレム大学生であった手島勲矢君がシケル銀貨をその魚の口に銜えさせて一同に見せてくれたのはまことに印象的であった。

10月7日

童心の天国

（マタイ18：1－4）
（マルコ9：33―37）
（ルカ9：46―48）

我誠に汝らに告ぐ汝ら翻りて幼児の如く成らずば、天国に入るを得じ。（マタイ一八・三）

山から降りてくる道すがら弟子どもは天国で大なる者は誰だろうなどとくだらぬ話合いをしていた。カペナウムに辿りつくと、イエスは十二弟子を呼んで（マルコ九・三五）、頭になろうと欲う者は、人々の奉仕者となれ、と諭した。そして幼児を抱いて、右の言を語り出でた。幼児、あの幼稚園の児童たちの言動は全心即全身的で、心身一如のあり方、動き方である。キリストはあのような全的な在り方を尊重した。（マルコ一〇・一三―一六参照）そして「幼児たちの守護天使は天に在ますわが父のみ顔をつねに見ている」という霊的消息を語った（一八・一〇）幼児は単純に神さまと信じ、心から祈る。こういう存在を侮ったり、躓かせたり、いつわったりする者は「大なる碾臼を頸に懸けられて海の深処に沈められた方が好い」（一八・六）などと烈しい言をキリストは吐いた。

「幼児の如く」とは、瞬間に全存在をいつわりなく投ずる生き方である。あるがまま太陽の如き心根で言動する在り方である。神・キリストの前にぶっつぶれた砕けの心根である。キリストの愛に圧倒されて聖霊に燃えている生きざまである。どんな芸術家も学者も、政治家も軍人も、医者も実業家も、教育者も会社人もいかなる天職の人も、本当に天的童心を以てうちこむ人には偉大性が具わる。男も女も童心なくしては天国に入れない。

10月7日

（詩）幼児の如く
作詞1980. 11. 26
（マタイ18：3） 歌調S. 538「すぎゆくこの世」

幼児の如く

1 母の乳房を　吸う兒の如く
主のみ靈をば　飲みてぞ生くる

2 母がすべての　をさなごの如
わが身を全く　主に投げ入れぬ

3 主のふところに　祈り入りてぞ
み靈は臨み　力に溢る

4 エン・クリストに　生くるわが身に
み靈の力　みなぎりあふる

5 み靈の流れ　脈々たれば
み民われらは　生命の泉

6 み靈の火焔（ほのお）　炎々（えん）たれば
何をかのぞまん　力ぞみつる

7 いざや我らは　燃ゆるみ靈を
胸中（みむね）に宿し　灯（ひ）を点さなん



（マタイ18：2，3）キリスト・イエスと幼児

10月8日

幕屋の原相
（マタイ18：20）

二三人が集まって我が名の中へ入ったら、その人たちのただ中に我は在る（マタイ一八・二〇）

この聖言はマタイ福音書だけにある。神・キリスト・我という縦の垂直関係は、聖霊の媒介によって四位一体的に成り立つ。これが宗教的実存の原相である。

キリストの右掲の聖言は、エクレシヤ（教会、召団）の原相である。キリストの名の中へと入るためには聖霊が臨んでいなければならない。聖霊内住の前提的土台は十字架の贖罪を体受するところに在る。右の事態を図形的に表現すれば、十字架の柱を中央に立てて、三角垂体の幕屋（天幕）を張ると、頂点をS（十字架の頂点）としたS-a・b・c（abcは平面上の各個人）という一番単純な三角垂体の幕屋が張れる。幕屋の空間は聖霊が充満している。私はこのことに一九四二年三月八日にヒルティーの『眠られぬ夜のために』の第一巻（独乙語原文）のこの日付の処の最初のくだりを読んだとき霊感の如く閃めいたのであった、幕屋！　という語が。ヒルティはそこで「基督教団は未だ嘗て一度もその創設者の考えに完全に適合した全く正しい形成を見たことがない」と言っている。幕屋！即ちイスラエルに自現したエホバ（ヤハウェー）の神は幕屋を張らせながら民と旅をしている。創世記から黙示録まで、即ち神の歴史は神が人と幕屋を張りながらの旅で、創造の晨から歴史の終末、新天新地の神の国の到来まで、幕屋がエレクシヤの本態である。原相である。キリストのこの聖言がそれを指示している。

10月9日

愛と永遠の生命

（ルカ10：25—28）
（マタイ22：34—40）
（マルコ12：28—31）

彼（教法師）答えて言う「汝主たる汝の神を愛せよ、汝の全心で、汝の全魂で、汝の全力で、また汝の全念で。そして隣人を汝自身の如く愛せよ」と。彼（イエス）言い給う「正しく答えた、汝これを行へ、そうすれば生きる。」（ルカ一〇・二七）

或る教法師がイエスを試みる作意で、「先生、永遠の生命を嗣ぐには何をしたら」と訊ねた。イエスは律法に何とあるかと反問した。教法師の答は右掲の如くであった。これは旧約の申命記六・四の「聴けイスラエルよ…」のひとくだりにある句でユダヤ人なら幼児も暗誦できるもの。「隣人を汝自身の如く」はレビ記一九・一八下の句である。すると教法師は己れを義とせんとして「隣人とは誰ぞ」とまた設問した。これに対してイエスはかの有名な「憐れみ深いサマリヤ人」の話をした（ルカ一〇・二九—三七）。教法師は完全にやっつけられたわけである。

イエスにとっては宗教・道徳は実践の世界のことで、実存に裏づけられていない道徳や信仰論は空しいことをこの教法師たる偽善者、パリサイ人に示したわけであった。恵・信・言・行一如の実存構造が身につくまでは所謂信仰も空しい。まず神・キリストの恵みが何たるかを福音書のドラマに体当りして体感することだ。キリストの言は言霊で力をもっている、彼の行為もみな愛の力の現われだ。極まるところは十字架の贖罪死、永遠の生命の実証たる復活、愛の力たる聖霊の降臨。是らに圧倒されると、聖霊の力がくる。かくて恵・信・言・行一如の消息が身についてくる。この愛こそ永遠の生命の実質である。

10月10日

深処に漕ぎ出でよ！
（ルカ5：1—11）

「深處に漕ぎ出でよ！　網を下して漁れよ！」「先生！　夜通しやってみたんですけれど、空らっきし駄目でした。だけれど、御言通りに網を下しましょう！」（ルカ五・四、五）

イエスは渚に寄せてあったペテロの舟に乗って、舟の中から汀に蝟集して来た群衆に福音を語った。語り終ると、ペテロに「深みに漕ぎ出でよ！　網をおろして漁れよ！」と命じた。ペテロは右掲の如く答えた。漁獲にかけては玄人のペテロである。素人のイエスの言は普通なら「何をおっしゃる」といって拒否されるところだ。前夜の時化から判断してダメだと思ったから二艘の舟人は網の整理をやっていたところである。

けれどもペテロは信頼する先生の言だ、イエスの言は言霊の宿っている言だ。それで自分の経験も判断も乗り越え打ち消して、「だけれど」と言って師の言に信従した。すると驚くなかれ大漁ではないか。もう一艘も呼び寄せたが、二艘の舟も沈まんばかりの大漁とは！　大漁に驚き、師を畏れ「どうぞ私から離れて下さい、私は罪がある者です、主様！」とペテロらしい言を放った。「懼れるな、お前は今から人を漁ることになるぞ」。大漁は大伝道の徴であった。勿論ペテロはまだまだである。キリストに何度も躓く。復活のキリストにすら躓く。ペンテコステの聖霊降臨を受けて、はじめて本当に眼が醒めた、別人とされた。「深所に漕ぎ出でよ！」キリストのこの一言を我々は確かと胸に受け、自己を突破してキリストという深処に突入することだ。するとえらいことが起きる。これを体験体現する人は人生の勝利者とされる。

10月10日

（詩）「深所に漕ぎ出でよ！」
（ルカ５：１－11に因みて）　作詞1986. 7. 31.
歌調：「卯の花の匂う」：夏は来ぬ

深所に漕ぎ出でよ！

一　ゲネサレの　湖の岸べの
群衆に　舟より語る
イエスのみ言　み霊の波

二　「やよペテロ　舟を深処に
乗り出だし　網をおろせよ
漁り大ならん　いざ往けよ」

三　「終夜　労したれども
徒らに　漁りしのみ
されども　み旨に従はん」

四　こは如何に　大漁のために
網は裂け　舟は傾き
二艘の舟に　魚は満つ

五　驚きて　ペテロは言へり
「去り給へ　主よわが神よ
み前に堪えず　罪の身は」

六　キリストは　ペテロに言へり
「懼るなよ　汝今より
世の人々を　漁らん！」

七　主よ、然り　我を否みて
み力を　全身に受け
深き情けの　旅路往かむ

10月11日

イエスと富める青年

（マルコ10：17—31）
（マタイ19：16—22）
（ルカ18：18—23）

「なぜ私を善いと言うか。神一人のほかに善い（といえる）者は居ない」（マルコ一〇・一八）

イエスがガリラヤ方面から南エルサレムに向う最後の旅の途上に青年が走り寄り、跪(ひざま)づいてイエスにたずねた「善き先生、永遠の生命を嗣ぐには何をしたら好いですか」と。ユダヤの青年の問題意識はすばらしい。永遠の生命と行為の関係を問うている。今の日本の青年にこのような問題を問題としている者果して在りやである。

ところでイエスはまづ何と言ったか。右の言の「善き先生」がイエスの心につっかかった。「何故私を善いと言うか。善い者は神の他に一人も居ない」と断乎として喝破した。イエスは自分を何者とも思っていない。無善、無教、無行者なのである。彼は皆神から臨む善、愛、教、言、行を体現しているまでのことである。だから私はイエス・キリストのことを無者と申し上げているのである。

次にイエスはモーセの「十言」（誡）をお前は知っているか、どうだなと訊いた。「幼い時から遵っております」と青年は答えた。イエスは感心だと愛(いつく)しんで目を止めて更に言った。「だがなほ一つ欠けているよ、往ってお前の所有(もち)物をみんな売って貧者に施せよ、そしたら宝を天に得る。そして私に従いて来なさい！」（一〇・二一）。金持ちの青年は悲しんで踵(きびす)を返して去った。イエスは弟子どもに言った、「金持ちが神の国に入るより駱駝が針の孔を通る方が易しい」（一〇・二五）と。当時「針の孔」という名称の狭い門があったのでイエスはこう言った。金持ちに限らない。凡そ人間は自分の財力、体力、智力、権勢、等々に於て自分を惜しんでいる。おのれを神有として無者魂になれとのみ旨だ。

10月12日

マルタとマリヤ
（ルカ10：38—42）

「なくてならないものは少ない、否唯一つだ」（ルカ一〇・四二上）

多分ベタニヤだと思われるが、ある村にイエスは弟子どもと進んで行った。マルタが外に出て行ってイエスたちを家に迎え入れた。妹のマリヤはイエスが話を始めると足下に坐って御言に聴き入るのであった。マルタはおもてなしのことに心をくばって饗応に忙しい。マリヤが自分を助けないので、イエスのところへ来て「主様、妹が私一人に働かせているのを何ともお思いになりませんか、妹に私を助けるようにお命じになって下さい」と言った。主はこれに対して「マルタよマルタよ、お前はいろいろなことに心を配り気をつかっている。だけれど無くてならぬものは少ない、否唯一つだよ。マリヤは善い方を選んだ、これは彼女から奪ってはならないものだ」と答えた。これはルカ伝特有の記事である。

マルタは黙っておもてなしに専念していればよかった。イエスはそれはそれで認めなさる。マルタの心は分裂した。マリヤは専らイエスの言を喰っていた。聴くべきときに全身を耳にするのがこの時最善の道であったから、イエスはマルタに右の如く言った。静のマリヤ、動のマルタ、ある時はマリヤとなり、ある時はマルタとなる。静動自在な在り方が本当だ。どの道全的でなければならない。

キリスト者にとって無くてならぬものが唯一つある。聖霊、キリストの霊である。聖霊は無限無盡の内実をもつ霊で、これは何ものとも替えられない。わが生命の生命だ！

10月13日

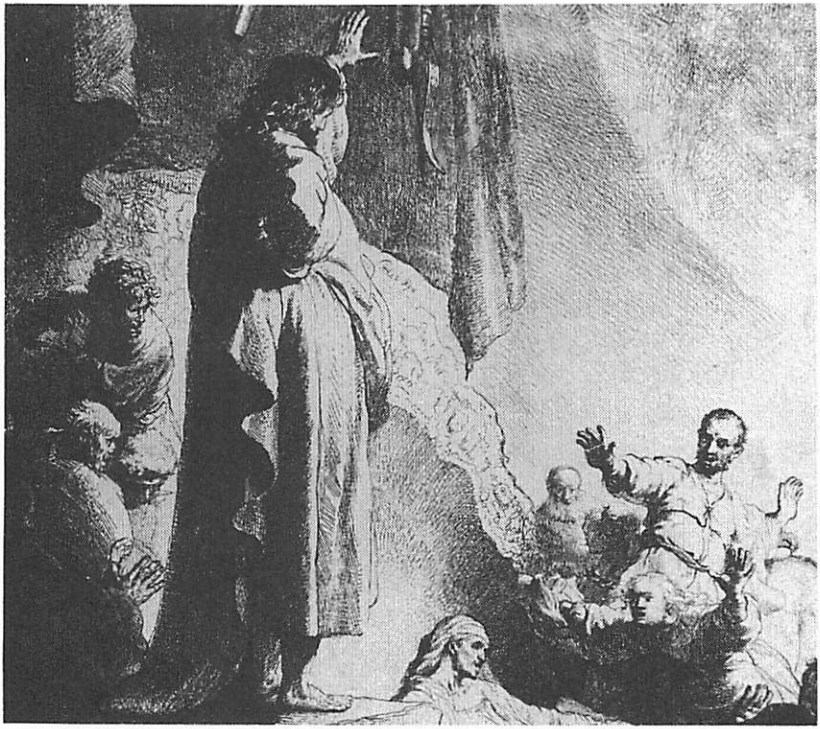
ラザロの復活
（ヨハネ11：1―46）

彼は大聲に叫んだ「ラザロよ、出て来なさい！」（ヨハネ一一・四三）

イエス・キリストが言霊（ことだま）のみ力で死者を甦らせた例をここに挙げれば、其一は「ヤイロの娘」で、彼女は会堂司ヤイロの十二歳の少女であったが、イエスは深く憐み「タリタ、クミ！」（乙女よ、起きよ！）と叫んで少女を甦らせた。（マルコ五・二一―四三、ルカ八・四〇―五六参照）。

其二は、「ナインの若者」で、ナザレの南東方ナインの町の寡婦の独息子の葬列に出遭ったイエスは、柩に添って泣き顔で歩いているその母親を憐んで、柩に手を按き、柩の中の若者に向って「若者よ、お前に言う、起きよ！」と叫んだらその若者は甦った。（ルカ七・一一―一七）。

其三がこの「ラザロの復活」である。エルサレムから東方エリコへと下る途上、三粁ほどの地点にベタニヤという村があったが、そこのマルタ、マリヤ姉妹にラザロという兄弟がいたが、彼が死んでしまった。埋葬されて四日目である。マルタはこの時も動的で、イエスを出迎えて問答をした。そのときのイエスの言「我は復活なり生命なり……」（ヨハネ一一・二五、二六）に注目しなければならない。而もイエスは深い涙の人で、この時も涙し給うた、マルタ、マリヤの涙と共に。ラザロの墓場に来て、イエスは天を仰いで叫んだ「父よ、お聴き下さったことを感謝いたします……」、まだラザロは死んでいるのに、イエスは既に先を見て斯く叫んだのである。そして大声で「ラザロよ出て来なさい！」と叫んだ。ラザロは言下に、手足が白い布で巻かれたままで出て来た。何たる驚くべきことか。私もその遺跡を訪ねたが何とも印象深く、キリストの永遠の声が天界から……！



（ヨハネ40：1—44）ラザロの復活（レンブレント）

10月14日

我も汝を罪せじ

（ヨハネ８：１―11）
作詞1979．12．6
歌調S．245「おもひ出づるも」

1 みめ美しく　純情の
女を捕へ　連れ来たり
パリサイ人ら　学の徒ら
イエスのみ前に　曳き出せり

2 「師よこの女　道ならぬ
わざをせし時　捕へけり
律法によれば　石をもて
打つべきなるぞ　如何にせん」

3 師は身を屈め　地の上に
もの書き給ふ　應へせず
偽善者どもは　いらだちて
返答を求め　問ひ迫る

4 師は身を起こし　言ひ給ふ
「汝らのうちの　潔き者
石を投げ打て！」　かく言ひて
再た身を屈め　書き給ふ

5 この聖言に　胸打たれ
老ひも若きも　手の中の
石を落して　次ぎ次ぎに
姿を消せり　罪びとら

6 師は身を起こし　見給へば
女と師のみ　残りたり
「女よ汝れを　責むる者
何処に在りや」「誰もなし」

7 情け深くも　キリストは
彼女に手を按き　言ひ給ふ
「我も汝れをば　罪せじな
再びすなよ　いざや往け！」

8 人の心を　知り給ふ
主のまなざしは　いと深し
審きと赦し　あざやかに
現はし給ふ　荷ひつつ！

「われも汝を罪せじ」
　ヨハネ八・一一

ヨハネ福音書八・一―一一を読者は読んでこの詩（讃歌）を読んで下さい。解説の代りに自作の讃歌を載せた。
ヨハネ第八章のこの記事はルカ第二一章の終りにあるべきか、過越の祭の前の一件。



（ルカ15：3—7）迷える一匹の羊

放蕩息子
（ルカ15：11—32）

「この我が子、死にて復た活き、失せて復た得られたり」（一五・二四）

頸脩に白髪がまじり始めた親仁が窓辺に寄って、野末を見やっている。幾日も空しく過ぎてゆく。何を待っているのか。家には毎日野良に出て働く律義な長男がいる。気も姿も四角四面だ。と、ある午さがり、陽が西に傾きはじめた頃、はるか彼方にぽつんと動く影。あれは人か獣か。家を出ていったあの次男坊にしてはあまりにも変り果てた姿ではないか。跣足で襤褸を着ている。正に乞食同然の恰好である。痩せ細っているが歩きっぷりからすると次男坊らしい。直感した親仁は家を跳び出して走っていった。七十路を越えた人とは思えぬほどの力強い走り方である。親仁と書くように、正に父の仁が力の秘密であった。

イエスはこの情景を述べて次のように言った「彼れ（息子）がなほ遠く離れていたのに、彼の父は彼を認め、情動してあわれみ、走っていって、その頸に倒れかかるようにして抱きつき、彼に心ゆくまで接吻した」と。これは砕けた魂の立ち帰りに対する神・キリストの無条件的なゆるしの愛である。

これはルカ福音書第十五章の有名な「放蕩息子」の譬話であるから、聖書を読んでことの次第を知って下さい。次男は父から離れて独立を志したはよかったが、神から離れて放蕩三昧でどん底に落ち、「神と父に罪を犯した」といって帰って来た。長男は父の許で働いてはいたが、心が父からも神からも離れて自己を義としていた。だから弟が帰って来たのに父と共に憐れんで迎えず、審いた。父の言「このわが子、死にて復た活き、失せて復た得られたり」は、神の万人に対する悲願本願である。



（ルカ15：11—32）放蕩息子（レンブレント）

10月16日

主の大饗宴
（ルカ14：1―24）

「一四・一五 恵福なるかな神の国でパンを食べる人は」。二四 私はお前たちに言う「かの招いておいた者のうちわが晩餐を味い得る者は一人もいない。」（ルカ一四・一五、二四）

イエスはあるパリサイ人の頭領の家に入った。そこでいくつかの問答をした。それを聞いて、「神の国でパンを食べる人は恵まれた人ですね」といった。そこでイエスは次のようなことを語った。

ある人が盛大な晩餐をもうけて人々を招待した。時刻が迫って来たので案内の従僕を遣わした。第一の者は、田地を買ったので行って見なければならないから、と言って断った。第二の者は、五耦の牛を買ったので、どんなかを験すために行くので、と言ってこれも招きを断った。第三の者は、このほど妻を娶ったので参上できかねるといって断った。従僕が右の事態を主人に報告したところ、主人は怒って従僕に命じた、「はやく街の大路小路に行って貧者、不具者、盲人、跛者などを伴れて来てくれ。従僕は直ちにそのようにしたが、なほ余席がある旨を報告すると、主人は「道やまがきの辺に行って人々を強いて連れて来て、わが家に余席がないように満たせよ。あの招待しておいた者たちの一人も私の晩餐を味わい得る者は無い」。所謂選民も所謂キリスト者も天国に入りそこなって、本当の人間が天国に入るというものだ。

私は一九四〇年以来日曜の集会をやっているが、日曜集会はキリストの霊的な饗宴で天来の力を賜るものである。この天的饗宴に右の例話のようなさまざまの理由で来ない人たちがいる。聖霊が呻いている。どなたでもどうぞ日曜の聖書饗宴に！

10月16日

(詩) 主の大饗宴 (ルカ14：15—24に因みて)

作詞：1986．8．1．
歌調：「追憶」(起句：「星かげやさしく」)

1 ゆたけき夕食ぞ　設けられたる
招かれたる人　使ひの者に
「田地を買ひたり　我見ざるを得ず
此度びはゆるせよ」再たとなき招き
ああ拒めり　その夜

2 「われ五耦の　牛を買ひたり
これを験すため　往かざるを得ず」
「われ妻帯せり　往くこと能はず」
呼ばれし者たち　断はれりすべて
ああ何たる　ことぞ

3 僕の報せを　家主は聞きて
怒りて街路より　貧しき人と
身体障害の　人々を呼びて
席に着かせしが　なほ余りありし
ああ世人を　呼べり

4 アブラハムの子ら　キリスト教徒
名のみの信にて　サタンに負けて
世とその慾とに　心乱れなば
主の大饗宴　招かれ往く者
ああ一人も　無きぞ

5 キリストの僕！　主の日を遵り
聖書の霊泉に　み力を受け
六日の旅路を　勇ましく歩み
道往く人にも　霊水を頒たん
ああ饗宴の　恵み！

10月17日

盲人バルテマイ

（マルコ10：46—52）
（マタイ20：29—34）
（ルカ18：35—43）

「ダビデの子[四七]イエスよ、我を憫[あわれ]み給へ」……盲人[五〇]上衣を脱ぎ捨て、躍り上りてイエスの許に来れり、……「わが師[五一]よ、見えんことなり」。イエス彼に「往け、汝の信仰汝を救へり」と言ひ給へば直ちに見ることを得、イエスに従ひて道を往けり。（マルコ一〇・四七、五一、五二）

イエスは南下してヨルダンの下流、エリコの町に来た。海面下二四〇米、世界最低の町である。イエスは弟子ども及び大いなる群衆と共にエリコを出ようとした。すると、路傍にいた盲人バル・テマイ（テマイの子）がナザレのイエスが通りかかると聞いて、叫び出した。「ダビデの子イエスよ、我をあわれみ給へ」。これは全身からの叫びであった。ダビデの子とはメシヤ、救主、というのと同義なのである。「主よ、あわれみ給へ」である。忠犬が主人を見て、おなかがすいたといって「ワンワン」と吠えるのと同じである。ところが心なき大衆が黙[もだ]させようとしたが、この盲人は叫んでやまない。イエスは立ちどまった。「彼を呼べ」と言った。バルテマイは文字通り欣喜雀躍した。「上衣を脱ぎ捨て躍り上って」イエスの許にやって来た。イエスの問いに対して「先生、見えたいのです！」イエスは彼の全身的な叫びと、上衣を脱ぎ捨てて立ち向って来たことで彼が棄身で求めているのを見たので、言下に受けとめて、「往け、汝の信仰汝を救へり」と言った。盲人にいきなり「往け」とは驚くべき言だ。直ちに開眼してイエスに従って道を歩くのであった。イエスの「汝の信仰汝を救へり」という言に躓いてはいけない。「汝がかくも私を通してはたらく神の力を信じたことが、救となった」の意である。

10月18日

パリサイ人と取税人の祈り
（ルカ18：9—14）

けれども取税人は遙か彼方に立って、目を天に向けることさえできず、胸を打って言った「神さま罪びと私をお憫み下さい！」（ルカ一八・一三）

イエスはよくある偽善的な宗教人のタイプと正直な心の人間とを祈りの相で対比した。これは譬話というよりも一つの例話と見て可い。パリサイ（人）は神殿の内庭で祈る。取税人は外庭の隅で祈っている。律法を知り、律法を遵って神の前にも人の前にも自己義認をやっているパリサイは昂然と立って心の中でこう祈った。「神よ、私は他の人たちのように強盗や不義や姦淫をするような者でなく、またこの取税人のようでないことを感謝しています。一週に二度は断食し、すべて取得したものの十分の一を献げています」。ところが取税人は右掲のように、すがたも心もくづほれて「神さま、罪びと私をおあわれみ下さい！」のほか何も言えない。魂が砕け、平伏して神にただ無条件のあわれみを願う。かかる者を神・キリストは無条件にゆるし、抱き給う。神はあわれみをキリストの十字架で決定的に与えておられる。それが贖罪である。霊的十字架を冥想し、その下でこの取税人のようにぶっ倒れて祈ると、決定的な贖罪が与えられている霊的現実に入る。そこに聖霊が与えられる。義とし給う内容が聖霊であることに一般のキリスト教界は気がついていない。「信仰によって義とされる」とは、十字架の赦しの恵みを体受すると聖霊という義と愛の内実が与えられる。そうでないと信仰はいつまでも観念の域を脱し得ない。パリサイ人サウロはこれに気がついて己が義を棄てた。

10月18日

(詩) パリサイ人と取税人 (ルカ18：9－14に因みて)

作詞：1986．8．2．
歌調：「荒城の月」起句：「春高楼の」瀧廉太郎作曲

1
パリサイ人と取税人
宮にのぼりて祈りせり
パリサイ人は立ち上り
心の中にかく祈る

2
「神よ感謝す我が義をば
強奪(うばひ)も不義も姦淫も
他人(よそびと)のこと。献物(さしげもの)の
律法(おきて)の如し断食も」

3
見よ、はるかな取税人
平伏し拝み胸うちて
「あはれみ給へ神よ主よ
罪びと我れを」かく祈る

4
パリサイ根性自己義認
おのが信仰誇るなり
主の本願は唯だ一つ
十字架・聖霊受くるのみ

5
我らもつねにあるがまま
ただ平伏して祈りつつ
キリストの無者自覚して
荷いて往かんどん底で

10月19日

寡婦のレプタ二枚

（マルコ12：1－14）
（ルカ21：1－14）

「この寡婦は其の乏しい中から持物の總てを、自分の生命の糧を皆投げ入れた」（マルコ一二・四四）。

イエスは地上を去る時が近づいていた。彼は神殿の賽銭箱にお金を投げ入れている宮詣のありさまを見ていた。いろいろな人が思い思いに投げ入れていた。すると襤褸衣を身にまとった寡婦が現われた。彼女は財布をさかさまにした。レプタ二枚が掌の中にこぼれた。財布は空っぽになった。彼女はその二枚をそのまま投げ入れて深く祈りを捧げた。いかにも清々しい面持ちで階梯をおりて行った。イエスはじっと見ていた。とその瞬間すぐ弟子たちを呼び寄せて言った、「よく聴け、あの貧しい寡婦は誰よりも沢山投げ入れたのだ。ほかの人たちはありあまるなかからいくらかを投げ入れたが、あの女は生活の糧代を全部捧げたからだ」

レプタはユダヤ貨幣の最低のもの、レプタ二枚は一日の糧代、それを全部捧げたので、彼女は正に自分自身を神に捧げた生命賭けの参拝をしたのであった。やもめのこのすがたがやきつくようにキリストの目にとまったのである。弟子たちよりも本当の弟子がそこに動いていたのであった。彼女は人知れず姿を消した。

新島譲がアメリカを去るに当り、キリスト教大学創設の志を別れの挨拶の中で述べたら、献金がなされ、その中に二ドルの献金をした老人がいた。それはその時の彼の持金のすべてであった。彼は何哩かの帰り道をとぼとぼと歩いて帰ったという。貴い愛のすがたである。

我々も一日を一生として神に己れを全的に捧げる生き方を！

10月20日

十人の乙女
（マタイ25：1—13）

ところで心がけの好い乙女たちは燈油を器に入れてランプと一緒に携えた。（マタイ二五・四）

このキリストの譬話はマタイ福音書特有の記事である。十人の乙女の中、五人は心がけが好く、五人はぬけている。それは天国への準備のはなしである。新郎たるキリストを迎えるわけなのだが、新郎が夜おいでのようだからカンテラを用意して待つことになった。来臨がおそいのでまどろみ始めた。と夜半に「さあ、新郎のおいでぞ、お出迎えをしなさい」と呼ばはる声がする。乙女たちは燈火の用意をしたが、心がけのよい五人は燈火と一緒に燈油をもっていたが、ぬけた五人はその燈油の備えがないので、頒けてくれとたのんだが、そんな余分はないから、買って来なさい、と言った。不心得の五人が買いに行っている間に、新郎が来たので、彼と共に婚筵に入った。天国の門は閉された。あとから五人の乙女が来て、「主よ、主よ、開けて下さい」とたのんだが、「私はお前たちを知らない」と言って断わられた。

天国の婚宴に招かれる資格は何であろう。燈火と燈油は何を意味するのだろう。我々は地上のどんな物も携えては行けない。聖書すらダメである。すると魂が、魂の中にもっているものでなければならない。それは聖霊のほかにはない。燈火が聖霊とすると燈油は聖霊の賜でなければならない。賜は千差万別、多種多様である。それを一言で言えば、神・キリストの栄光を天賦の才能資質で具体的に体現した実存そのものであらねばならない。それは何らかの意味で世のため人のためになったはずである。自分のためではない。そういう在り方が天国ゆきの燈火燈油ではないか。



（マタイ25：1—13）十人の乙女（ブレイク）

10月21日

羊と山羊
（マタイ25：31—46）

「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは、即ち我になしたるなり」（マタイ二五・四〇）

「十人の乙女」の譬話のように、この「羊と山羊」のはなしもマタイ福音書特有の記事である。

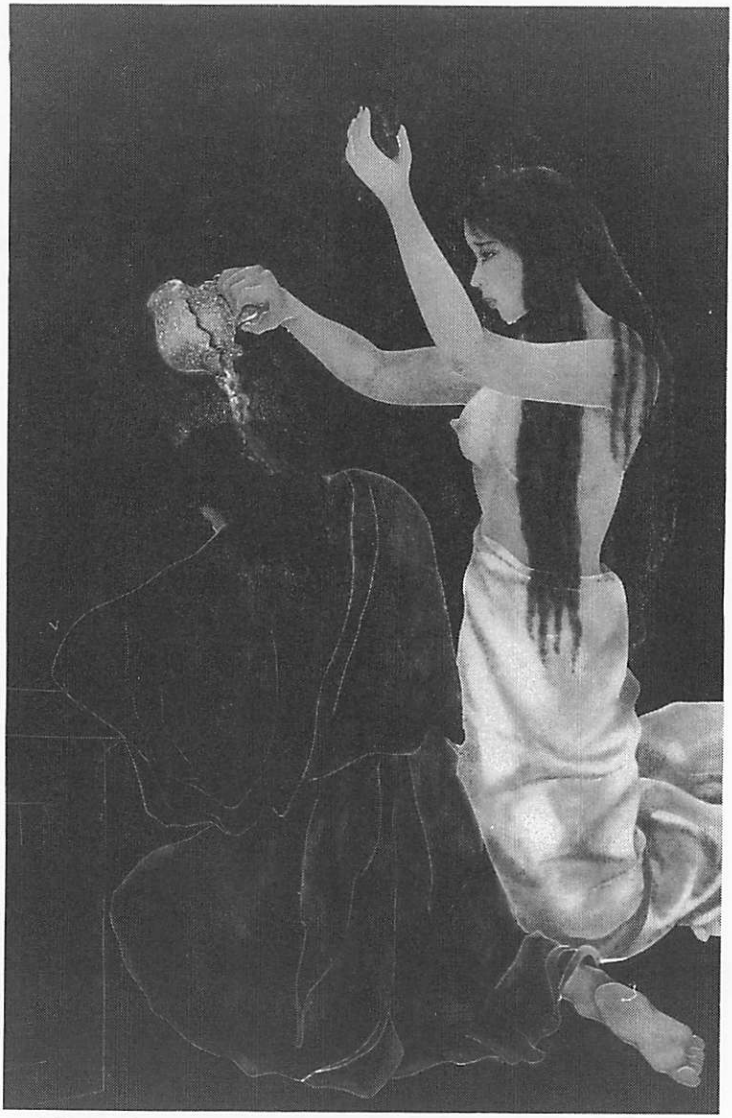
キリストが栄光を以て、諸々の天使を率いて来臨するとき、その栄光の御座の前に諸々の国人を集め、これを二つに別けようとなさる。そのやり方は牧羊者が、羊を右に山羊を左にしてわけるように、諸国人を大きく二分する。即ち王者が右の者たちに言う「わが父（神）に祝福されたる者たちよ、来りて世の創めより汝らのために備えられたる国を嗣げ。汝らわが飢えし時に食はせ、渇きし時に飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、裸なりし時に衣せ、病みし時に訪ひ、獄にありし時に来りたればなり」と。すると右の者たちはいつそんなことをあなたにしましたかと反問した。それに対しての答が右掲の言であった。即ち「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは即ち我になしたるなり」。弱者、困窮者、旅人、病者、被迫害者等を助けた愛の心の人々は永遠の生命を天国で与えられるが、その反対の左の者らは永遠の刑罰を地獄で受けるという。一言以て表現すれば、思い遣りあつく、愛の行為を以て具体的に、人を助けた人たちは天国人であるというので、これは世界の億万人を天国か地獄かに二分する重要な標準であるに相違ない。山上の大告告の第五「恵福なる哉、憐みある者」である。

10月22日

ナルドの香油 マルコ14：3－9 マタイ26：6－13 （ルカ7：36－50） （ヨハネ12：1－8）

一四・三 イエス、ベタニヤに在まして癩病人シモンの家にて食事の席につき給ふとき、或る女高価なる生粋のナルドの香油の入りたる石膏壺をたづさへ、その壺をうち砕きてイエスの首に灑ぎたり。……「この女はなし得る限りをなしてわがからだに香油を灑ぎ、豫め葬りの備へをなせり。誠に汝らに告ぐ、全世界いづこなりとも福音伝道のなさるる處には、この女のなしたることも記念すべく語らるべし。

過越の祭の営まれる春ニサンの月の一四日が近づいて来た。そしてイエスがゴルゴタへ往く日もあとにつづく。そういう土壇場の迫りを感じて、ある女（マルコ、マタイ共通）が右の場を訪れた。彼女はインドのナルド産の極上の香油、三百デナリといえば三百日間の生活費に価する香油の入ったアラバストロンを持参している。彼女はこれが主イエスとのお別れと思って、もうこの壺は要らないとの心で、壺をうち砕き、心をこめてキリストの頭上から全身に灑ぎかけた（マルコ、マタイ共通）。香油は彼女のあつき涙、あつき血潮であった。ところがそこに居合わせた者どもが、勿体ないことをするなと彼女を詰った。かしキリストは汝ら何を言うか。此の女は心を尽くして私の葬りの備えをしてくれたのだ、と深い響きの声を放った。誰も自分の心境を察してくれない中で唯一人全身的な涙をもって灑ぎかけてくれた女の愛をイエスは全身で体受した。それで爆発した聖言が右の一四・九。この女こそは十字架、墓場、復活の主を極めて慕った女マグダレーナと私は見る。



マグダレーナがキリストの首に香油をそそいでいる画（斎藤桂子製作）

10月22日

（詩）ナルドの香油

作詞1981．8．15．

歌調：「庭の千草」〈Tis the last rose of summer〉（アイルランド民謡）

1 ベタニヤなる ある女
石膏壺（アラバストロン）を うち割りて
主の首（こうべ）に 心こめて
ナルドの香油を 灑ぎけり

2 主の弟子どもは これを見て
勿体なやと 憤（いきどお）る
「それを売りて 貧者のため
施しごとを なすべきに」

3 主は言ひ給ふ「この女
葬（ほうむ）りのため わがために
涙ながら 灑（そそ）ぎたるぞ
我はほどなく 別れ往く

4 まことに告げん 全世界
いづことなりとも 福音の
伝へらるる ところにては
憶えらるべし この女！」

Tatsuo Koike, 1981. 8. 15.



洗足
（ヨハネ13：1―11）

「我もし汝を洗はずば、汝われと関係（かかはり）なし。」（ヨハネ一三・八）

これはヨハネ福音書特有の記事。時期はユダヤの三大節の第一たる過越（すぎこし）の祭のとき。この祭は今の春分の頃。過越及びこれにつづく除酵祭の由来は出エジプト一二・一―二〇を参照。イエスはこの過越の祭のときに最後の晩餐を思い立った。十字架の死が迫って来たので、イエスの胸に閃（ひらめ）いたのが「洗足」であった。そこで晩餐に臨む前に上衣をぬぎ、手ぬぐいをまとい、盥（たらい）に水をいれて、弟子たちの足を洗い、且つ拭（ぬぐ）い始めた。ペテロの番が来た。ペテロは驚いて訊（き）いた。「私のすることは、お前は今はわからない、今に悟るときがくる」とイエスは言った。しかしペテロは言った「私の足なんか、いつまでも洗はないで下さい」。するとイエスは「もし私がお前を洗はなければお前は私と関はりがない！」と。ふしぎな言であった。即ち、足を洗うことは、我々の罪を贖う意（こころ）であった。贖罪による救済のためにイエスは地上に現われたのである。洗足を拒むことは贖罪にはあづからないでいいということになる。それではキリストからの本願的関係が切れるから、キリストはこのように言ったのである。十字架の贖罪のあと、復活、昇天するキリストが約束したのは聖霊の降臨であった。聖霊が五旬節の日に降って、ペテロは、始めて、十字架の贖罪と共に洗足がその豫徴であることを悟った。

10月23日

（詩）過越の祭——洗足

作詞：1980．6．15．
歌調：S330「あめなるわが家を」

1
過越の祭　近づきたり
この世を去るべき　時は近し

2
キリスト世にある　おのが者を
きはまりなきまで　愛し給ふ

3
イエスには父より　父に還る
正道、権威　授けられぬ

4
最後の晩餐の　時にのぞみ
上衣をぬぎすて　布を腰にす

5
盥に水くみ　僕と成り
弟子らの足をば　洗ひ給ふ

6
ペテロはかしこみ「主よ足をば
洗ひたまはざれ　とこしなへに」

7
「われもし汝を　洗はざれば
汝と我とは　かかはりなし！」

8
イエスのわれらへの　関係こそ
十字架・聖霊の関身なれ！

9
我らも互いに　足を洗ひ
キリストの愛を　身につけなん

10月24日

最後の晩餐

（マタイ28：20—29）
（マルコ14：17—25）
（ルカ21：14—23）

二六・二六 彼ら食しをる時、イエス、パンをとり、祝して裂き、弟子たちに与へて言ひ給ふ「取りて食へ、これはわが体なり」。二七 また酒杯をとりて謝し、彼らに与へて言ひ給ふ「汝ら皆この酒杯より飲め、二八 これは契約のわが血なり、多くの人のために、罪の赦を得させんとて流すところのものなり」（マタイ二六・二六、二七、二八）

過越（すぎこし）の祭で羔を屠るべき日が来たので、イエスはペテロとヨハネに最後の晩餐の準備を指示した。二階座敷で食につく前に、キリストは弟子どもの足を自ら洗った。

さて晩餐たけなわであったとき、イエスは右掲の如く、パンをとり祝して裂き、十二人の弟子たちに順ぐりに与へて「とって食へ、これは私の体だ」と言い、次に葡萄酒の杯をとって謝し、この酒杯から飲め、といって、「これは契約の私の血だ、人々の罪の赦のために流すものだ」といって飲ませた。このマタイ福音書によると、パンに於て永遠の生命が意味され、葡萄酒に於て贖罪の血が意味されている。ヨハネ六・五三—五六を見ると「人の子の肉を食はず、その血を飲まずば汝らに生命なし」とあるように、霊的にキリストを食うことがキリストと一如の生命にあづかることになる。最後の晩餐は正に、十字架の贖罪の血と復活の生命の肉を霊的に受けよ、との聖霊に在っての祈りの現実を意味しておられた。そのような聖餐式を行うことは何も指示していない。それはむしろパウロのコリント前書一一・二五の言による。

10月25日

我は道なり，真相なり，生命なり

（ヨハネ14：1—30）

「我は道[一四・六]なり、真相なり、生命なり」。「我を見たる者は父を見たるなり」「何ごとにてもわが名に在って我に願はば、我れこれを成さん[一四]」「父は他に助主を与へて汝らと偕に居らしめ永遠に到らしむ」「助主、即ち父わが名に在って遣はし給ふ聖霊は、汝らによろづのことを教へ、また我が汝らに語りしことを想ひ出さしめん」。「我れ平安を汝らに遺す」、「我往きて汝らに来たるなり」

ヨハネ一四・一—一六・三三は所謂「イエスの袂別遺訓」で極めて重要な内容である。私は是れを「イエスの遺言」と申したい。この遺言を体受する者は永遠の生命を生きることになる。右掲の句はまことに重厚無量のもので、祈り入ってその現実に入るほかはない。

キリストの「道」は天道である。我々の地路が天道に即せんことのみ。私が真相と訳した言は一般に真理と訳されているが、単なる理ではない。神の言が体現されている実体そのものがイエスであるので「真相」と訳したい。だから「私を見た者は父を見たのだ」と喝破した。真相は正に真法、神法の相なのである。イエスの言は神（からの）言、イエスの業は神（の力による）業である。「父」と「我」とは相互内住であるから（一四・一〇）。彼自身は無言、無行者、即ち無者である。イエスの名は実名だから聖名に在って祈ることは根源現実で成る。助主、聖霊が降臨すると、イエスの霊言、霊行が身で受けとられ、同質のことが起きる。聖霊が内住すると、本当の平安がくる。この平安には力がある。人生の風波いかにもあれ、難破しない船となる。

10月26日

葡萄樹
（ヨハネ15；1―13）

「五」我れは本当の葡萄の樹、わが父は農夫である。五我は葡萄の樹、汝らは枝である。わが内に宿る者あらば我も彼の内に宿る。この者は多に果を結ぶ。汝ら我を離れたら、何ごとも為し得ない。七汝らもし我が内に宿り、わが言汝らの内に留まるならば、何でも望むがままに求めよ、さらばそれは汝らに成就する。九父の我を愛し給うた如く、我も汝らを愛した、わが愛の内に宿れよ。（ヨハネ一五・一、五、七、九）

キリストは自分が本当の葡萄の樹だ、と言う。自然の葡萄の樹はキリストの徴だと言はんばかりである。ゲーテの有名な句、「あらゆる過ぎゆくもの（現象）は（本体の）映象たるのみ」を連想させるすごい言だ。神はすばらしい農夫なのだ。何と楽しい言ではないか。そして私たちはその本当の葡萄樹の枝であるから、当然キリストに連らざるを得ないわけである。幹があっての枝だから、樹液が流れている。キリストの生命が我々の中に流れて我々を活かしている。だからキリストの中に宿らないでは生きようもない。キリストの霊言を全身で受けとると御言が留まる。要するにキリストと相互内住内在関係、一如的な現実なのである。第九節、神がイエスの生命、光、愛、一切であることが「父の愛」であった。そのようにキリストは我々一人一人に対して全生命を与えておられることがキリストの「わが愛」である。その愛の内に宿れという。キリストは豊かな生ける宿屋である。どんな宿屋も、キリストという宿屋にはかなはない。私はこの宿屋でキリストの肉を食べキリストの血を飲んで活きている（ヨハネ六・五三―五七）。

10月26日

（詩）葡萄樹
作詞：1980．2．7．
歌調：S.48「しづけき夕の」

1
「汝れ我が衷に　しかと宿らば
祈り求めよ　さらば成るべし

2
み父のわれを　愛する如く
汝を愛す　わが愛に居れ」

3
われ主に在りて　み力を受け
ひとを愛せん　み霊は助く

4
キリストのため　生命を賭けて
友を愛せん　み霊は助く

5
「汝れは愛なり　愛の炎ぞ！
聖霊の愛を　貫き生きよ」

6
キリストこそは　霊の葡萄樹
われらその枝　生命は通ふ

7
生命の君に　連りありて
永遠の生命を　生きてし在らん

8
「わが葡萄園　わがエクレシヤ
み神の民よ　愛の光よ！

9
十字架の道　地道に歩み
使徒らの跡を　継ぐ者たれよ」

10
世界に亙る　キリストの民
聖霊の愛を生きてし往かん

10月27日

聖霊，助主，慰主

（ヨハネ16：1—33）

「けれども私は本当のことをきみらに告げる。私が去るのはきみらに益である。私が去らないと助主はきみらに来ない。私が往ったら、これをきみらに遣はす」（ヨハネ一六・七）

「きみら世にあっては患難がある。けれども雄々しくあれ、私は既に世に勝ったから」（一六・三三）

ヨハネ一五・二六に「父（なる神）の許から私が遣そうとする助主（パラクレートス）、即ち父から出る真法（まこと）の御霊が来ると、私について証（あか）しをする」とあるように、聖霊はキリストが十字架の贖罪死を遂げたあとで復活昇天してから臨む霊であって、地上のキリストから直接には来ない。このことは極めて大切な真法なのである。一般に真理と訳される「アレーティア」はかくれたものごとがあらわにされた事態をいうので、本当のこと、本当のもの、真法という意味で真理というような観念的なひびきとちがう。「助主」とは弁護のために側に呼び出された者の意で、慰め主とも言われる。我々罪びとの側に立って執り成して助け慰め給うみ霊が聖霊であって、正に十字架の贖罪愛を果したキリストの霊と同質なのである。であるから十字架を信受、体受すると聖霊が臨んでくる。十字架と不可離の霊が聖霊なのである。このことは銘記しなければダメである。「私が去るのはきみらに益だ」とはこの事態をいう。運命、環境、患難、迫害、何が襲って来ようとも聖霊は逆に力強く助け給う。だから聖霊を身に宿すことが何より重要なことなのである。私というからだは聖霊の幕屋、宿屋である。だからキリストと偕に勝てる。雄々しくさせられる。

10月28日

大祭司の祈
（ヨハネ17：1―26）

一 イエスこれらの事を語り終りて、目を挙げ天を仰ぎて言ひ給ふ「父よ、時来れり、我は汝に往く。聖なる父よ、我に賜ひたる汝の御名の中に彼らを守り給へ。これ我等の如く、彼らの一つとならんためなり。汝我を世に遣はし給ひし如く、我も彼らを世に遣はせり。父よ、汝我に在まし、我汝に居る如く、彼らも我らに居らんためなり。我は汝の我に賜ひし栄光を彼らに与へたり。これ我らの一つなる如く、彼らも一つとならんためなり。即ち我彼らに居り、汝我に在まし、彼ら一つとなりて全くせられん為なり。

ヨハネの伝えたキリストの遺言（一四、一五、一六章）が終って、イエスが天を仰いて叫ばれた大祭司的な執り成しの祈りが第一七章全部である。その中の数句を右に掲げたが、キリストの祈りのこころは、父子（神とイエス）一体一如の如く、神、救主、使徒弟子どもが一如一体とならんことである。神・キリスト・聖霊が三位一体であるように、神・救主・キリスト者が聖霊の媒介によって一如となる。個人としては神・キリスト・聖霊・我という四位一体の生き方である。聖霊に在って生きることなくしてこれは本ものとならない。聖霊は我々を「本ものたらしめる霊」である。「真相を現ぜしめる霊」である。

10月29日

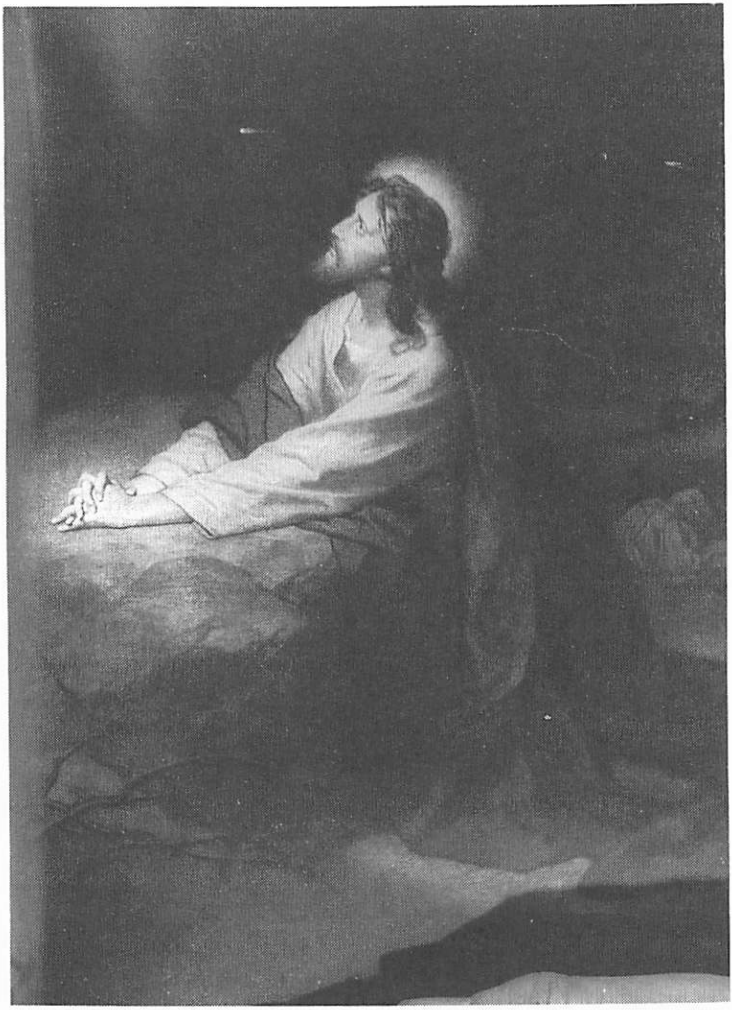
ゲツセマネの血禱

（マタイ26：36—46）
（マルコ14：32—42）
（ルカ：22：40—46）

「わが魂深く悲しみて死ぬばかりなり（二六・三八）。汝ら此処に止りて我と共に目醒め居れ」（イエス）少し進みゆきて平伏し、祈りて言ひ給ふ「わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ、されどわが欲うままに非ず、汝の御意のままに。」

イエスは十字架の贖罪死を何によって自覚されたか。それはイザヤ書の第五十三章によってであることは疑いの余地がない。「彼は侮られて人に棄てられ、…彼はわれらの罪のために傷けられ、我らの不義のために砕かれ、自ら刑罰を受けてわれらに平安を与ふ」（イザヤ五三・三、五）が特にその預言の焦点である。

そして十字架と復活を弟子どもに三度び豫告した（マタイ一六・二一、一七・九、二〇・一八）。しかしいよいよそれを父神への祈りに於て決定的に体受し給うたのが、エルサレムの東方ケデロンの谷を渡って入るオリーヴ山林の中のゲッセマネ（「油しぼり」の意）の血禱に於てである。ペテロ、ヤコブ、ヨハネも共にいたが彼らは魂が眠っていた。天から御使が現われてイエスに力を添えたが、イエスは祈りに於て文字通り油汗をしぼられ、滴る汗は血の雫の如くであった（ルカ二二・四三）。正に血禱であった。いきなり天界にエリヤ以上に昇るべき人が、贖罪のため十字架されねばならないという人類の歴史を両断する瞬間の祈りであった。人間イエスは三度同じ祈りを祈り、死の苦しみをここに受け、自己の願に死に、神の本願を体受し給うた。神の本願の化身となったイエスはユダの裏切りを受けローマ兵に泰然として捕われたのである。



（ルカ22：39—46）ゲッセマネの祈り（ホフマン）

10月30日

十字架

マタイ27：15—26
マルコ15：6—15
ルカ23：13—49
ヨハネ19：17—30

二七・二〇 祭司長、長老ら、群衆にバラバの赦されん事を請はしめ、イエスを亡ぼさんことを勧む。二一 総督（ピラト）答へて彼らに言ふ、「二人の中いづれを我が赦さん事を願ふか」彼らいふ「バラバ」。二二 ピラト言ふ「さらばキリスト（メシヤ）と称ふるイエスを我いかにすべきか」。皆いふ「十字架につくべし」。（マタイ二七・二〇、二一、二二）

民の長老たち、祭司たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派、ローマの官憲・兵卒などに敵視され、弟子どもに知らん顔され、弟子の長ペテロにすら否まれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、雷同的な民衆に棄てられ、政治犯、瀆神者ときめつけられ、囚人に上まわる極悪人とされ、悪口雑言を浴びせられ、唾きせられ、鞭打たれ、衣をはぎとられ、緋色の上衣を着せられ、荊の冠をかぶせられ、「ユダヤ人の王、安かれ！」と嘲弄され、再び上衣を剝がれ、血の雫と汗が顔に流れ、傷だらけの軀にされ、侮辱の極みの中を七十瓩もある十字架を負わされて、エルサレムの城門外北西のゴルゴタ（髑髏）の丘へと、ヴィア・ドロロサ「苦難の道」をよろめき辿らしめられゆくイエス！

人間の、人類の、世界歴史の過去、現世、将来の、どうにもならぬ不信の、忘恩の、反逆の、悪魔的、地獄的、闘争的、虚偽と混沌と矛盾と擾乱の実相の逆徴が、イエスの、キリストの、十字架を負い給うこの姿である。十字架されたイエスの宝血がゴルゴタの土に泌み入る。誰か知らん「人類の罪を負う神の羔」なる文字がキリストの血で大地に書かれていたのだ！

10月31日

今日私と一緒にパラダイスだ！
（ルカ23：39—49）

「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒に、お前はパラダイスだ！」（ルカ二三・四三）

ゴルゴタの丘の上にキリストの十字架に並んで右と左に十字架が立っていた。一方の悪人はイエスに不遜にも「あんたはキリストぢあないか。自分と俺たちを救え！」と嘯いた。すると他方の悪人が禁めて「お前は同罪のくせに、神を畏れないのか、俺たちはやったことに対する報いを受けているのだから当然なことだが、この人は何にも悪いことはしていない」と言い、更にキリストに向って、「イエスよ、聖国にお入りになるとき、どうか私を憶えて下さい」と懇願した。この悪人は、最後の瞬間に神を畏れ、罪を悔い、キリストに、心砕けて、私を憶えて下さいと告白した。

キリストはその言下に、「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒にお前はパラダイスだ！」と。この一言は、キリストが吐露した言の中で最も慰め深い救いの言ではないか。私も人生の終りの瞬間に、この罪びとと同じ聖言を賜りたい一念である。キリストのどん底の思い遣り、白熱の愛、深い泪をうちにふくんだみ言を賜って天界に飛んでゆきたいものである。若し墓碑が立てられるなら、キリストのこの聖言を刻んでもらいたい。

そして毎日「今日汝は我とパラダイス」の聖言の中を歩いて往こう。

人類をもし二分する規準があるとすれば、神の前に平伏す魂と神の前に平伏さない魂の二分ではないか。傲慢な魂はサタンの国へ、平伏す魂は神の国へ。天国、極楽か、地獄、陰府かである。しかしまた中間の人間もダンテが言うように案外多いのであろう。ともあれ、毎日がキリストと共に天国である在り方がある。み霊のお宿の人たるのみ。

11月1日

十字架の義と愛

ルカ23：26—48
マタイ27：31—54
マルコ15：20—39
ヨハネ19：25—30

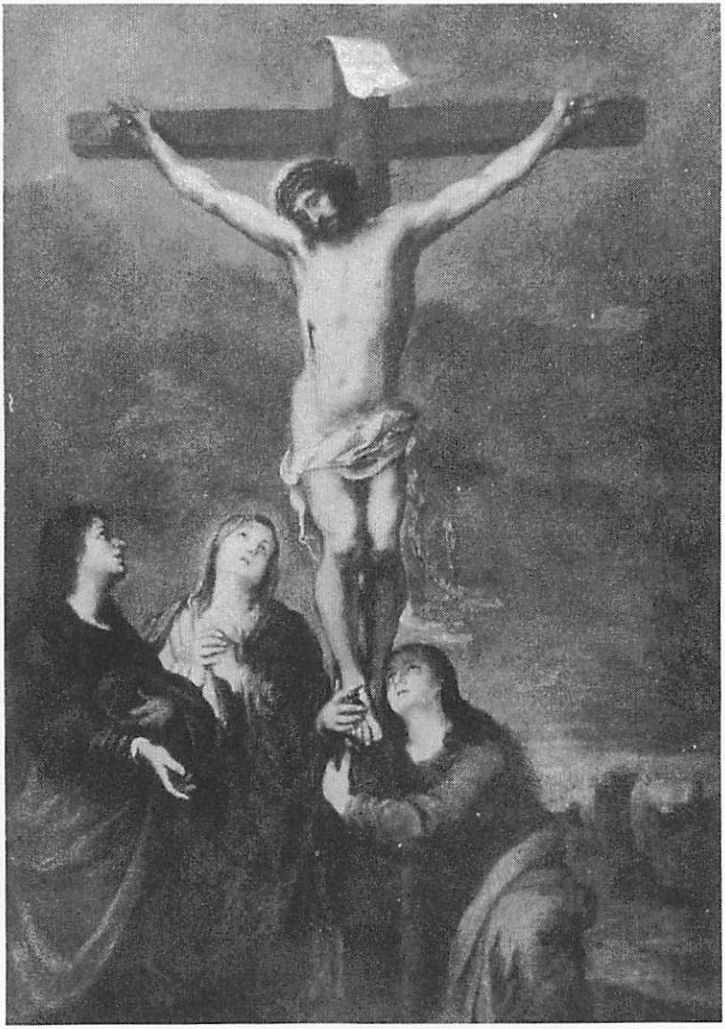
○「父よ！　彼らをゆるしてやって下さい。彼らのわきまえのないこの仕打ちを！」（ルカ二三・三四）
○「わが神、わが神、何ぞ我を見棄て給ひし」（マタイ二七・四〇）
○イエス大声に叫ぶ、「父よ、わが霊を御手にゆだぬ」。（ルカ二三・四六）

イエスが十字架されたのは朝の九時頃。彼の十字架の両側に二人の強盗が十字架に懸けられた。何たるコントラストか。正に罪人の首とされたわけである。実はキリストは自ら罪人の首となってあらゆる人の罪を自ら負って贖罪の死を遂げつつあった。憎しみのもろもろの眼をよそにして、み脚にしがみついたのはマグダレーナであった。

罪なき人、神の子だけが贖罪の力を有っている。十字架上のキリストの「父よ、彼らをゆるしてやって下さい」の一言は世界史上の唯一の言である。私もこの一言でゆるされた。「わが神わが神何ぞ我を見棄て給ひし」のこの一言は、前言との絶対矛盾の自己同一である。イエスは全生涯を神意信従体現で貫いた唯一の義人である。この義の叫びがこれである。この義が立たないなら人類に義の意味も価値もなくなる。イエスは神然たる義のために大音声で叫んだのである。この義の叫びあっての「ゆるし」の愛である。十字架は正にこの縦の義と横の愛の徴である。イエスはこの烈々たる義とこの深刻なる愛のクロスするところに砕かれたのである（イザヤ五三・五）。かくて大声で「父よ、わが霊を御手にゆだぬ」と叫んだ。これに先だつ義の叫びの異言的大音声と共に神殿の聖所の幕が上から下まで二つに裂けた！　旧約の預言はここに成就し、旧約の世界はここに破れ去った！



（ヨハネ19：25）十字架上のキリストを慕い仰ぐマグダレーナ（カルロ・ドルチ）



（ヨハネ19：25—27）十字架上のキリストの御脚を抱いているのはマグダレーナ。中央は母マリヤ、左はその妹

11月1日

（詩）十字架上の七言
作詞1985.3.10
歌調S.136「血潮したたる」

1
あやしき雲に空は暗み
ゴルゴタの上に立つは何ぞ
十字架は三基　何の徴
罪びと左右　義人真中

2
「汝はキリストか　いざおのれと
我らを救へ」　かくうそぶく
声に応へて　「我らは罪！
汝畏れよ　神の聖名を」

3
「主よキリストよ　憶えたまへ
み国の旅に昇るときに」
「よき告白ぞ、我と共に
汝れは今日しも　パラダイスぞ！」

4
地の罪びとを　執りなしてぞ
十字架イエス　叫び給ふ
「道に外れし　彼らなれば
ゆるしたまへや　父よ神よ」

5
ヨハネを見詰め　マリヤに言ふ
「女よ見よや　これは汝が子」
ヨハネに向ひ　かくはさとす
「母のマリアは　汝が母なり」

6
天地海冥　午后の三時
「わが神、み神！　何ぞ我を
見棄て給ひし！」　かく叫べば
雷光雷鳴　これに応ふ

7
血潮したたり　地に泌み入る
「ああわれ喝く！」　血の呻きぞ
「事は畢りぬ」　愛の叫び！
あがなひの業　ここに成りぬ

8
「わがたましひを　聖手にゆだぬ
父よみ神よ！」　大音声！
聖所の幕は　震ひ裂けぬ
天地ともに　霊に震ふ

11月2日

キリストとマリヤ・マグダレーナ

復活のキリスト（其一）マルコ15：40—16：9
マタイ27：56—28：9
ルカ8：1—3，24：10
ヨハネ19：25—20：18

「その処（ゴルゴタ）にて遙かに望み居たる多くの女あり、イエスに事へしガリラヤより従ひ来りし者どもなり。その中にはマグダラのマリヤ…居れり」（マタイ二七・五五）。（アリマタヤの）ヨセフ屍体をとりて浄き亜麻布に包み岩にほりたる己が新しき墓に納め、墓の入口に大なる石を転しおきて去りぬ。其処にはマグダラのマリヤ…墓に向ひて坐し居たり（二七・五九—六一）。一週の初の日のほの明き頃、マグダラのマリヤ…墓を見んと来りしに、視よ大なる地震あり、これ主の使天より降り来りてかの石を転し退け、その上に坐したるなり。（二八・一、二）女たち恐れと大なる歓びをもて速かに墓を去り弟子たちに知らせんとて走りゆく、視よ、イエス彼らに遇ひて「安かれ」と言ひければ、進みゆきて、御足を抱きて拝す（二八・八、九）。一週の首の日の払暁、イエス復活して先づマグダラのマリヤに現はる（マルコ一六・九）。「女よ、何ぞ泣く、誰をたづぬるか」…イエス「マリヤよ！」と言ひ給ふ。マリヤ振り返りて「ラボニ！」（先生！）と言ふ。…マグダレーナ往きて弟子たちに「我は主を見たり」。（ヨハネ二〇・一五…一八）

11月2日

キリストとマリヤ・マグダレーナ

復活のキリスト（其一）マルコ15：40—16：9
マタイ27：56—28：9
ルカ8：1—3，24：10
ヨハネ19：25—20：18

ガリラヤ湖の西岸近くのマグダラのマリヤは資産少なからぬ女性で他の女性たちとイエスの伝道に財その他を以て奉仕していた。霊的な女性であるので七つの悪鬼になやまされていたが、イエスに完全に癒されたので彼女は最も献身的に仕え且つイエスを全的に慕っていた。ナルドの香油を壺を砕いて惜しみなく灑いだ「ある女」こそ彼女だと思う。十字架の主のみ足に抱きついたのも、墓場を先づ訪ねたのも、復活の主に先づ出遭ったのも彼女。皆夫々の場合彼女が第一人者であった。

11月2日

（詩）復活の主とマグダレーナ（ヨハネ20）

作詞：1981.4.17
歌調：S.214「北の極なる」

復活の主とマグダレーナ

1
イエスは十字架に　あがなひの死を
果たし給うて　葬られぬ
主の日の晨　死に勝ち給ひ
霊麗をもて　石扉倒す

2
マリヤ・マグダラ　石扉なきを見
ペテロ、ヨハネに　その旨告ぐ
弟子たち走り　み墓を見しに
主の影見えず　おどろきたり

3
泣きつつマリヤ　み墓のうちを
見れば二人の　み使立つ
白き衣の　み使は言ふ
「女よ何ぞ　泣き悲しむ」

4
「誰かわが主を　とりのぞけしや
いづこにおきし　我れ知りたし」
彼女振り向けば　人影のあり

「女よ泣くな　誰をさがす」

5
マリヤはそれを　園守と見て
「君は何処に　彼を置きし」
主は懇ろに「マリヤよ、マリヤ」
声におどろき「ラボニ、わが師！」

6
マリヤ迫りて、主に寄りすがる、
「われに触るな、弟子に告げよ
父のみ許に　われは昇ると」。
マリヤ弟子らに　主を証しす。

7
その夕主は　閉ぢたる室に
入り給うて「シャロム・ラケム！
我れ汝らを　世につかはさん
祈り入りてぞ　聖霊受けよ！」

11月3日

エマオ途上のキリスト

復活のキリスト（其二）エマオ途上のキリスト（ルカ24：13—32）
エルサレムの弟子たちに現はれたキリスト（ルカ24：33—43）
（ヨハネ20：19—31）

○視よ、この（復活の）日（の午後）二人の弟子エルサレムより…エマオといふ村に往きつつ、凡々有りし事どもを互に語りあふ。イエス自ら近づきて共に往き給ふ。……「ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よキリストは必ずこれらの苦難を受けて、その栄光に入るべきならずや」……「我らと共に留まれ、時夕に及びて日も早や暮れんとす」……共に食事の席に著き給ふ時、パンを取りて祝し、裂きて与へ給へば、彼らの目開けてイエスなるを認む。而してイエス見えずなり給ふ。」（ルカ二四・一三……三一）

○イエスその中に立ち「平安汝らに在れ」と言ひ給ふ。かれら怖ぢ恐れて……霊ならんと思ひしに、……「汝ら何ぞ心騒ぐか。……我が手わが足を見よ、これ我れなり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見る如し。」……イエス言ひ給ふ「此処に何か食物あるか」かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、之を取り、その前にて食し給へり。（ルカ二四・三六……四三）

キリストの復活体は我々の理性の次元をはるかに越えた霊性の体現である。可視、不可視自在の在り方をなし給う。而も復活のキリストが一片の魚を食べたとは！



（ルカ24：28—31）エマオ途上のイエスと二人の旅人（レンブラント）



（ヨハネ20：26—29）復活のキリストとトマス

11月4日

聖霊を約束するキリスト

復活のキリスト（其三）マタイ28：16—20
ルカ24：44—49
マルコ16：14—18
ヨハネ20：19—31

○されば汝ら往きてすべての国人を弟子となし、父と子と聖霊の名の中に漬け（ものとせ）よ！（マタイ二八・一九）

○「視よ、我は父の約し給へるもの（聖霊）を汝らに贈る。汝ら上より霊力を著せらるるまでは都に留まれ。」（ルカ二四・四九）。

○「全世界を巡りて、凡ての被造物に福音せよ。信じて（聖霊の中へと）バプテスマされる者は救はるべし。……信ずる者にはこれらの徴伴はん、即ちわが名に在りて悪鬼を逐ひ出だし、新しき（異）言を語り、……病める者に按手せば癒ゆ。」（マルコ一六・一五—一八）。

○「平安汝らに在れ、父の我を遣はし給へる如く、我も亦汝らを遣はす」息を吹きかけ言ひ給ふ「聖霊を受けよ」（ヨハネ二〇・二一、二二）。

復活のキリストは、今や聖霊を与えんことを強く望んでおられる。十字架によって贖罪の大業を果されたからである。しかし彼らはまだ十字架の贖罪を全身で受けとるところまで来ていない。やがてその期がくる。それまでまだ祈り待つ十日間を要した。十字架の後四十日間、復活のキリストは自在に現はれて永遠の生命を実証されたから、彼らは歓喜と希望に満ちては来たが、聖霊潅け（バプテスマ）となるまでは本当の力は臨まない。

11月5日

復活のキリストとペテロ

復活のキリスト（其四）ヨハネ21：1—25

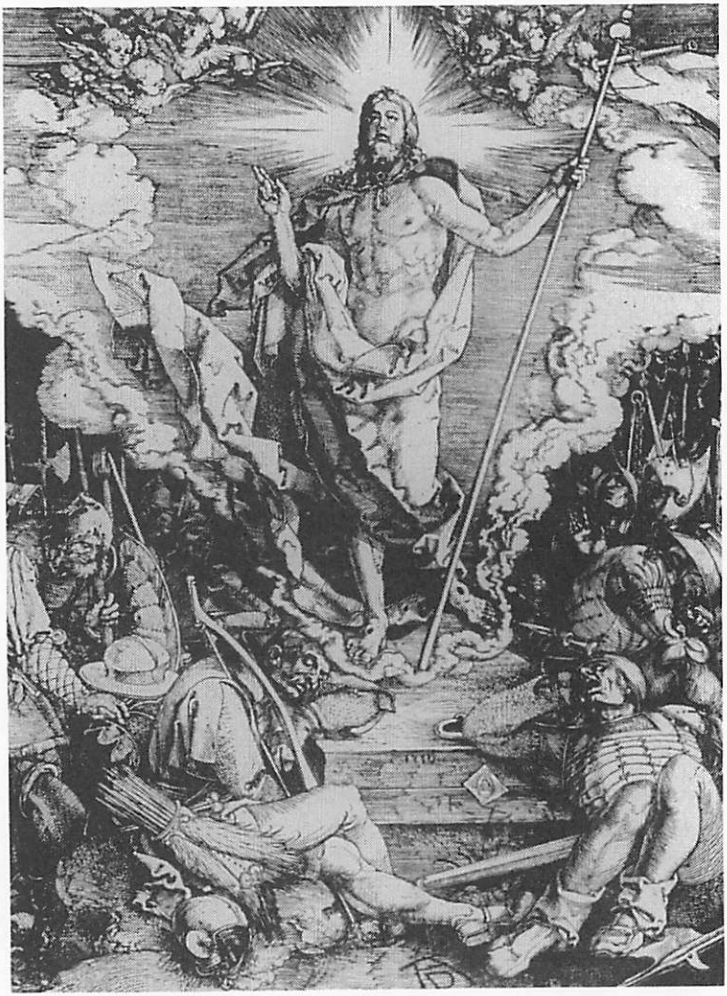
二一・一五

「ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝りて我を愛するか」（アガパス）ペテロいふ「主よ、然り、わが汝を愛することは（フィロー）、汝知り給ふ」イエス言ひ給ふ「わが羔（ラム）を養へ。」……「誠に誠に汝に告ぐ、汝若かりし時は自ら帯して欲する処を歩めり、されども老いては手を伸べて他の人に帯せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん。」一九是れペテロが如何なる死にて神の栄光を顕すかを示して言ひ給ひしなり。かく言ひて後彼に言ひ給ふ「われに従へ」。（ヨハネ二一・一五、一八、一九）

ヨハネ福音書第二十一章は他の福音書にない記事である。天使がイエスの墓場を訪ねた女たちに告げたように、イエスはテベリヤ（キンネレテ、ガリラヤ）湖畔に帰って来た弟子たちに現はれた。そして彼らの漁獲を助けて百五十三尾の大魚を得させた。

そのあとで右掲の如くイエスはペテロに語りかけ、同じことを三度び訊ねた。「羔を養へ」とは牧者となって伝道せよ、人を漁れ、というキリストの本願である。そしてあの「クオ・ヴァディス・ドミネ」（主よ、何処へ往き給ふや」に対するキリストの指示に従ってローマに戻り逆十字架にかけられ殉道の死を遂げたのはキリストのこの預言の如くであった。「神の栄光を顕す」とはこのことである。

ヨハネ、「主の愛し給ひし弟子」はエペソ伝道の後、パトモス島でキリストの「顕示」を受け「黙示録」（顕示録）を書く使命を帯びていた。



（マタイ28：16—20）復活のキリスト（デューラー）

11月6日

キリストの昇天
マルコ16：19—20
ルカ24：50—53

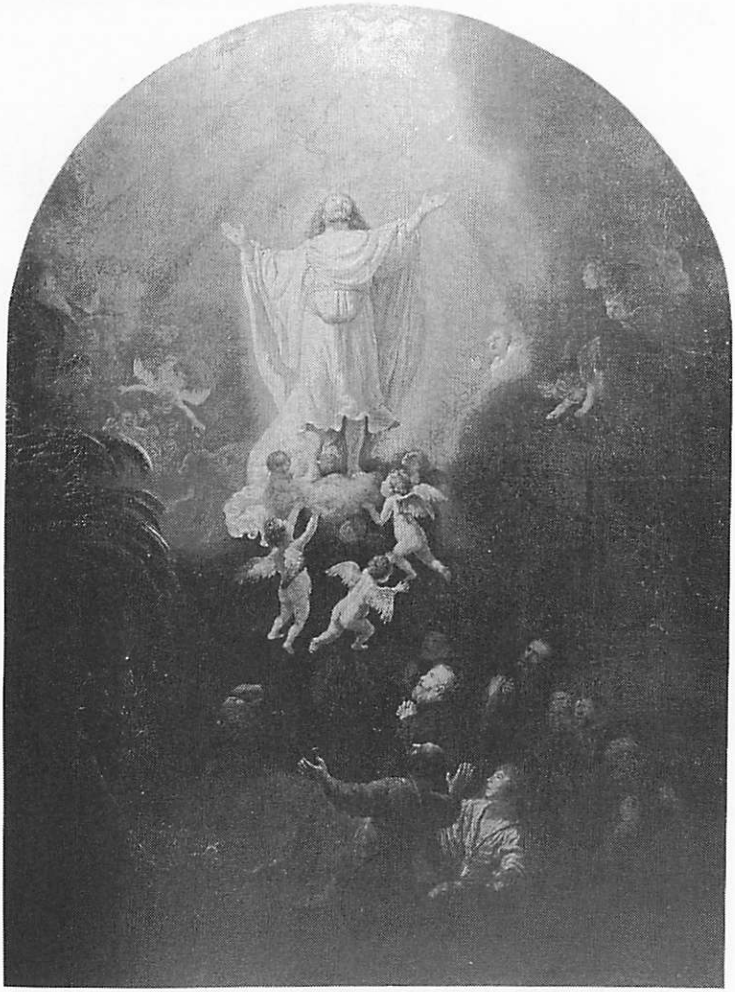
○五〇遂にイエス彼らをベタニヤに連れゆき、手を挙げてこれを祝し給ふ。五一祝する間に彼らを離れ給ふ。五二彼ら大なる歓喜をもてエルサレムに帰り、五三常に宮に在りて神を讃美したり（ルカ二四・五〇—五三）。

○語り終へてのち、主イエスは天に挙げられ、神の右に坐し給ふ。弟子たち出でて、遍く福音を宣べ伝へ、主もまた偕に働き、伴ふところの徴をもて、御言を確うし給へり（マルコ一六・一九、二〇）。

イエスの実存を見ると、天界における神との共在、天からの降誕（受肉）、ヨルダンに於ける受洗（受霊）、サタンとの一騎打なる曠野の霊戦、霊言霊行を以てするガリラヤ伝道、ヘルモン山間での変貌栄化、ゴルゴタ丘上の十字架、三日目の復活、ベタニヤからの昇天、やがて五旬節の聖霊降臨、そして歴史の終りを劃する再臨、新天新地に於ける愛の王者。という十二相、十二転進と称はん哉である。

「人の子の栄光を受くべき時来れり。誠に誠に汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん。もし死なば、多くの果を結ぶべし」（ヨハネ一二・二三、二四）。十字架の死を遂げる前の千歳の遺言である。イエスは一粒の麦どころか、いかなる原子爆弾もかなわない原始核である。この原始核爆弾によって無数の人々が光と生命と愛の世界に救い入れられた、そして世の終末まで。

そして福音の証者は一粒の麦となって後進の魂にキリストの芽を吹き出させ花咲かせ果を結ばせてゆく。私にとって舎兄小池政美がその死を以て一粒の麦たることを身証した。



（ルカ24：50—53）キリストの昇天（レンブラント）

11月7日

約束の聖霊
（使徒行伝1：1—14）

されど聖霊汝らの上に臨むとき、汝ら力を受けん、しかしてエルサレム、ユダヤ全土、サマリヤ、及び地の極にまでわが証者とならん」（使徒行伝一・八）

使徒ルカは医者で使徒パウロの弟子にして同労者、ルカ福音書と使徒行伝の著者として福音のため不朽のはたらきをした人物。この第一章のはじめに、イエスが十字架の死のあと、復活して四十日間しばしば弟子たちに現はれ、なほ神の国を語り、彼らに特にエルサレムを離れないで自分から聴いた父なる神の約束、即ち聖霊の降臨を待つように告げた。弟子たちはイスラエル国の回復のことを尋ねたが、イエスはその時期は神の権威の中にあるのみ、汝らの知る要なし、と答へた。一九〇〇年経てイスラエル共和国が建国した（一九四七年）。しかし現イスラエル国は果してキリストの本願に適っているか。キリストの本願の国は実は地上のいづれの国にも成就されない。キリストの体、キリストの幕屋としてのエクレシヤ（教会、直訳は召団）が全世界に散在している。それらが本ものであるためには、右掲のキリストの本願たる聖霊体受をしなければならない。十字架の贖罪は既に歴史的事実として果された。十字架を身受すれば、必ず聖霊は臨む。キリストへの祈入が現に焦眉の問題である。使徒たちはこのキリストの聖言に従って祈り待っていたら果然、俄然、臨んだ。彼らは本当に力を受けて聖霊の力の人となって、力強い伝道が始まった。これを記しているのが使徒行伝、謂はば聖霊行伝である。であるからカトリック（旧教徒）にせよ、プロテスタント（新教徒）にせよ、問題は現実に使徒的次元の信仰を体現、証身するにあるのみ。

11月7日

(詩) 十字架と聖霊 作詞：1980.10.14
歌調：S.343「こよなきめぐみの」

十字架と聖霊

1 われには受くべき バプテスマあり
ゴルゴタの丘の 十字架にぞある！

2 罪をばあがなふ 棄身のわざを
成し遂ぐるまでは 祈りに祈る。

3 あがなひわざなる 十字架ののちに
聖霊臨まん 祈り待てかし。

4 聖霊臨まば み力に満ち、
聖国のみ民と 汝れはなるべし。

5 聖霊の火のほか 何をかのぞまん！
ハレルヤの叫び 汝れは叫ばん！

6 主のこのみこころ われに成りたり！
み霊の身証を なさずばあらじ。

11月7日　（詩）十字架・復活・聖霊降臨　作詩：1979.12.12
歌調：S.320「主よみもとに」

十字架・復活・聖霊降臨

1
「わが み神よ　十字架の
この苦杯を　取り去り
み許にゆき　父と共に
とこしなえに　在りたし

2
されど我は　み父の
み旨により　十字架を
負いて往かん　ゴルゴダへと
我を棄てて　従はん」

3
主の十字架の　かたえに
悪しき者ら　懸けらる
驕る心　砕ける胸
これぞ人類の　分れ目

4
主言い給う　砕けの
胸の者に「汝は
我と共に　今日この時
パラダイスに　在るべし！」

5
午後の三時　天地は
雷鳴のため　晦冥
いなづま飛び　地震振へり
歴史を絶つ　徴候ぞ

6
十字架の主は　叫べり
エリエリレマ　サバクタニ
更につづく　大音声
聖所の幕は　裂けたり

11月7日　（詩）十字架・復活・聖霊降臨　作詩：1979.12.12
歌調：S.320「主よみもとに」

7
主は十字架を　荷なひて
あがないわざ　果たして
甦りて　現れたり
マグダレナに　最先(いやさき)に

8
復活の主は　昇りて
神の右に　坐したり
み約束の　み霊(く)降だす
時を待ちて　祈り給ふ

9
聖(み)霊は火か　疾風(はやて)か
祈る群に　臨めり
ペンテコステの　バプテスマぞ！
エクレシヤは　成りたり

11月8日

五旬節（ペンテコステ）（聖霊降臨）

行伝2：1—47

二・一 ペンテコステ 五旬節の日となり、彼らみな一処に集ひ居りしに、二 烈しき風の吹き来たる如き響、遽かに天より起りて、その坐する家に満ち、三 また火の如き舌現はれ、分れて各人の上に止どまる。四 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異なる舌（言）にて語り始む。

ニサンの月の十四日、即ち過越の日、この日から数えて五十日目にユダヤ人は初穂を奉納する。この祝祭を五旬節と称している（レビ二三・一五—二一参照）。弟子たちは既に同信の者を集めて、昇天のキリストの命によって祈りつづけていたが、この「ペンテーコステー」の日右掲の如き全く異常なことが起きた。正にこれが聖霊降臨であって、この日からキリスト教徒の歴史がスタートを切った。

この異なる舌の響きが「異言」と訳されている現象なのである。特にペンテコステに於ける異言は高次なもので、地中海の諸地方から（二・八—一一）五旬節を期して参集していた人々は各地方の言葉を以て使徒たちが福音を語るのを聴いたから驚いた（二・一一）。「これ何ごとぞ」（二・一二）であった。筆者のキリスト召団には時にそのような高次の異言や預言や霊夢を賜る人々がある。現代世界を非常に嘆き憂える預言が示されている。天界のパウロからの言もある。

ペンテコステに於ける聖霊降臨は正に旧約の預言者ヨエルの預言の成就。使徒ペテロは聖霊を受けてがらり一変した。行伝二・一四—三六に亙るペテロの滔々たる証言を聴いた人たちは聖霊を賜り、愛の美しい実存共同体が自ら成った（二・四三—四七）。

11月8日

（詩）ペンテコステの歌
作詞1981.5.5
歌調S.239「さまよう人々」

ペンテコステの歌

1
ゴルゴタの丘の　十字架の上
天涯孤独の　主の御姿
あがなひの血潮　地に滴り
十字架に極まる　主の義と愛

2
主はよみがえりて　墓を破り
マグダラのマリヤ　女たちと
弟子にここかしこ　四十日
現はれ給ひて　約束せり

3
「汝らは日ならず　聖霊にて
バプテスマされん　祈り待てよ
聖霊臨まば　霊力を受く
世界の極まで　証者となれよ」

4
ペンテコステの日　相集ひて
使徒ら女たち　切に祈る
天よりにわかに　臨みたるは
み霊の疾風よ　み霊の火よ！

5
祈れる者みな　うちに燃えて
み霊に満たされ　異言の波
別人の如く　今や成りて
主のエクレシヤは　ここに成れり

6
現今のエクレシヤ　危機を孕む
使徒らの次元に　立ち帰らん！
われらもいよいよ　祈り入りて
み霊の証しを　果たし往かん

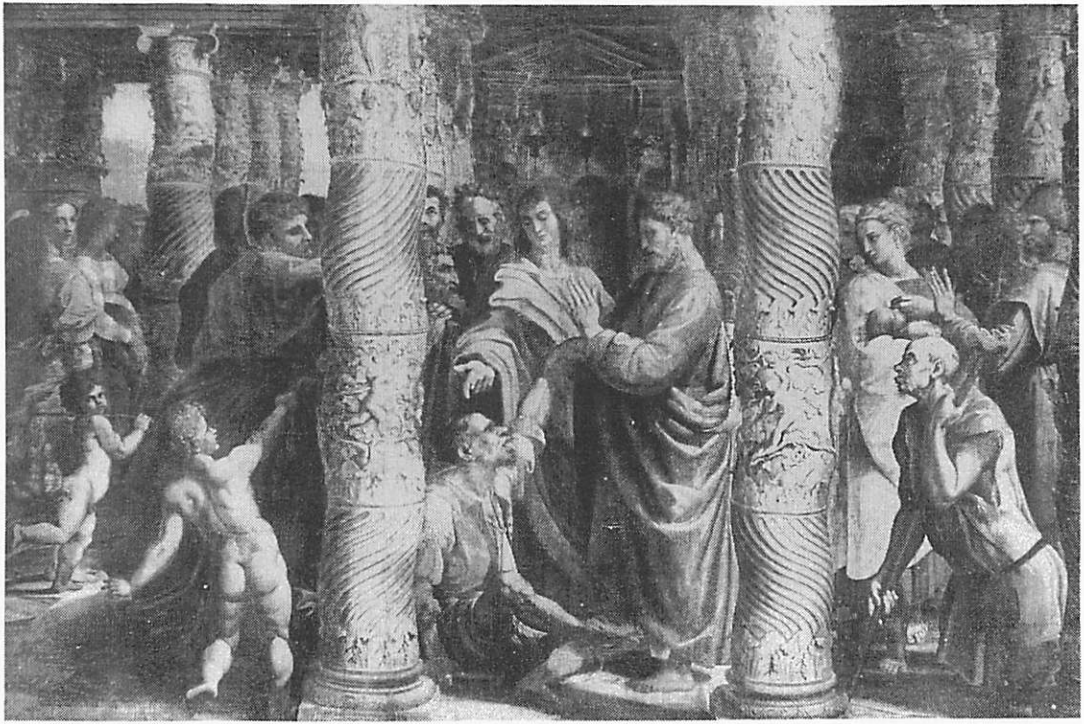
11月9日

キリストの無者ペテロ
（行伝3：1—26）

四ペテロ、ヨハネと共に目を注めて「我らを見よ！」と言ふ。五彼れ（跛者）何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、六ペテロ言ふ「金銀は我に無し。然れど我に有るものを汝に与ふ、ナザレのイエス、キリストの名の中で歩め」。七直ちに歩み出だせり…。

『イスラエルの人々よ、何ぞこの事をあやしむか。何ぞ我らが己が力と敬虔とをもて此の人を歩ませし如く我らを見つむるか。』われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光あらしめ給へり。（三・四—八、一二、一三）

生来の跛者が、神殿の「美麗の門」のほとりにかつがれてやって来て、宮詣での人々から生活の糧を買う銭を乞うことを習慣としていた。ペテロとヨハネがその前にさしかかった。ペテロは跛者をじっと見て、「我らを見よ！」といった右掲の如く。このときのペテロの言に注目。ペテロのからだの中にはキリストの名が活きていた。ということはキリストの聖霊の力が充満していた。イエスの名は即聖霊である。「キリストの名の中で歩め」は聖霊のみ力にあづかって歩め、ということ。ペテロの発言はそのまま聖霊の力であった。「わが言は霊なり生命なり」のキリストの言と同質にされているペテロであった。跛者が歩くのをみて人は驚いた（三・一一）。そこでペテロは、「何で我らを見つめるか」我らではないキリストだ、と叫んだ。ペテロは自分を何ものともしていない、正にキリストの無者と成り、キリスト一切である。聖霊に在る信仰の真骨頂を見よ！



（行伝3：4—8）使徒ペテロと生まれながらの跛者

11月10日

最初の殉道者ステパノ
（行伝6：1－8：3）

五一「項強くして心と耳に割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆ふ。その先祖らの如く汝らも然り。五二汝らの先祖たちは預言者のうち誰をか迫害せざりし。彼らは義人の来るを豫じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。」（行伝七・五一、五二）

十二使徒が聖霊と智慧に満ちた福音の戦士を七人選んだ。その第一人者はステパノ。ステパノはキリストの聖霊とその力に満ちた人物で、民衆の中に不思議と徴を身証していた。これを妬む者どもが彼を謗って「モーセと神とを瀆す言を吐いた」といって民衆と長老、学者どもを煽動して彼を捕え、議会に曳き出した。ステパノは堂々と議会で演説をした。その額は御使の如く輝いていた。イスラエルの信仰史を説法するのであった。その大演説の終りに当り、右傾の如く、「汝らは常に聖霊に逆う。……」と叫んだ。

ステパノが現代のキリスト教界一般を見たら、やはり同じ調子で叫ぶだろう「パリサイにして心と耳に聖霊のバプテスマなき者よ、汝らは常に聖霊に逆う」と。ステパノがここで義人といっているのはキリストのことである。「汝らは常に聖霊に逆ふ」と言ったのが、彼らを怒らせた。ステパノは聖霊に満ち、天に目を注ぎ、神の栄光とキリストを霊視して「視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給ふを見る」と叫んだ。町の外に逐い出され石で撃たれて殉道の死を死ぬ時「主よ、この罪を彼らに負わせ給うな」と祈って天界に凱旋した。サウロ、後のパウロはこの迫害を可しとした者の一人であった。このような十字架道は歴史の終末まで継がれてゆく。

11月10日

（詩）殉道者ステパノ
作詞1980．10．24
歌調S228「ガリラヤの風」

殉道者ステパノ

1
みたまとちえの　ステパノなれば
神の歴史を　力づよく
パリサイの徒に　述ぶるすがたは
み使の如　かがやきたり

2
「父祖アブラハム　イサクとヤコブ
兄らをゆるす　神のヨセフ、
出エジプトを　果せしモーセ
ダビデ・ソロモン　神のドラマ

3
うなじは硬(こわ)く　心と耳に
割礼なきは　汝れらなるぞ
げに汝らは　聖霊(みたま)に叛く！
かくてイエスを　十字架せり」

4
ああステパノは　かく叫びたり
彼ら怒りて　彼をとらえ
町より出だし　石にて撃てり
ここにステパノ　道に殉ず

5
み霊に満ちて　天に目をとめ
神の栄光(さかえ)と、主を仰ぎて
敵のゆるしを　主に祈りつつ
凱旋したり　わがステパノ！





（行伝6：1—8：3）上：ステパノ大祭司及び議員どもの面前で大証言をなす
下：ステパノ城門外で殉道の死を遂げる

11月11日

パウロの回帰

行伝 9：1—22
21：40—22：21（参照）
26：1—32（参照）

三往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち天より光いでて、彼を環り照らしたれば、四彼れ地に倒れて「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」といふ聲を聞く。（行伝九・三、四）

七アナニヤ……彼の上に手を按きて言ふ「兄弟サウロよ、主、我を遣はし給へり。汝が再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされんためなり。」一八直ちに目より鱗の如きもの落ちて見ることを得たり。（九・一七、一八）

律法学者ガマリエルの一番弟子サウロは、ユダヤ教に熱心なパリサイの徒であったから、イエスの信者迫害の急先鋒で、ダマスコの諸会堂への大祭司の添書を持って、キリストの道の者を男女に拘らず捕縛していた。ところが右掲の如くダマスコ途上でキリストの霊言と霊光に霊撃されてぶっ倒れた。三日間、見えず、聞えず、という霊撃であった。

しかしキリストはアナニヤという聖霊の器をしてサウロに按手せしめた。彼の按手によって聖霊のバプテスマを受けた。彼の目から鱗の如きものが落ちた。この決定的な聖霊のバプテスマによって魂が開眼し、迫害したキリストに全存在を以て回帰することとなった。こんな鮮かな回心回帰はない。ステパノの迫害死を可としたサウロは慈に完全に降参！ステパノの最後の祈りが彼の魂に甦った。パウロはその後聖霊の力で、「ダマスコに住むユダヤ人を言ひ伏せた」（九・二二）。パウロはこのキリスト回帰の体験を第二二章では千卒長の面前で、第二六章ではアグリッパ王の面前で堂々と告白した。

11月11日

（詩）パウロの回帰
（行伝９）作詞1980．10．24
歌詞Ｓ286「神はわが力」

パウロの回帰

1
パリサイ・サウロは　基督者たちの
男女のすべてを　捕えて伴れてゆく

2
ダマスコへの途にて　み霊の光に
矢庭に照らされ　途に倒れたり

3
「サウロ、サウロ何ぞ我をば迫むるや
我はイエスなり！」サウロは平れ伏す

4
イエス、アナニヤに　サウロを示して
「サウロは選びの器ぞ」と諭す

5
「兄弟サウロよ！　我は主イエスに
遣はされたれば　汝れに手を按かむ」

6
噫！　彼の眼より　落ちたるは何か
鱗か心か！　聖霊ぞ臨める

7
パウロは聖霊の　バプテスマを受け
曠野に祈れば　十字架ぞ立ちたる！

8
「我は主と共に　十字架されたり
我れは地に死にて　み霊の主に生く」



（行伝26）アグリッパ王の面前でキリスト回帰の証言を堂々と述べているパウロ

11月12日

キリスト者
（行伝11：19—30）

二五 かくてバルナバはサウロを尋ねんとてタルソに赴き、二六 彼に逢いてアンテオケに伴ひきたり、二人ともに一年の間かしこの教会に共に集められて幾許かの群を教ふ。弟子たちのクリスティアノス（キリスト者）と稱へらるる事はアンテオケより始まれり。（行伝一一・一九—三〇）

バルナバ（語義「慰めの子」）はその名の如く使徒たちに協力して慰安ともなり、仕手役を充分つとめたパウロ的信仰の人であったから右掲の如くパウロをアンテオケに伴れて来た。当時このオロンテス川沿いのアンテオケはエジプトのアレキサンドリヤに劣らぬ小アジア半島のつけ根に位置する港市であった。ユダヤ人やギリシヤ人が、ピニケ、ツロ、シドン、クブロス島等から信仰を求めて集まって来た。ステパノの殉道が狼火となったのである。バルナバは勿論聖霊の人であるから、アンテオケに於けるパウロとの一年は異邦伝道に最初の成果をもたらした。人々は彼らをクリスティアノス（複数クリスティアノイ）と称した。クリスティアン（英語）はこれに由る。超ユダヤ教徒だからクリスティアノスの名がアンテオケ・エクレシヤ（教会）の信徒につけられたのは当然のことであった。要するにキリスト者の濫觴である。

ルターの宗教改革によって、「プロテスタント」（反抗者）と呼ばれる新教徒が生じたのもこれに類し、ルターのロマ書序文に感動し、モラヴィア教団の影響も受けて、聖霊体験をして立ち上ったJ・ウェスレーのホーリー・クラブ一団の在り方から「メソディスト」という名称がつけられたのも之に類する。

11月13日

神の中に生き，動き，在る
（行伝17：16—34）

「我らは彼の中に生き、また動き、また在るなり」（行伝一七・二八）

聖霊はパウロとバナルバを選びの器として第一次伝道旅行（一三・一—一四・二八）を小アジア半島の南部一帯に導き給うた。福音の証の言にはみ霊の力あり、また徴と不思議がこれに伴って、聖霊の業が到るところで現われ、異邦伝道の実は着々と実るのであった。

パウロの第二次伝道（一五・三六—一八・二二）にはシラスが同道した。パウロは霊幻を視て、小アジアからマケドニヤに渡った（一六・六—一〇）。最初の入信者はルデア（女）とその一家であった（一六・一一—一五）。かくてギリシャ伝道が進展し、テサロニケを伝道し（一七・一—九）、ベレヤを経てアテネ伝道に移った。パウロはアテネのアレオパゴス（軍神「アーレスの丘」の意）で大説法をした（一七・二三—三一）。彼はこの説法の中で、アテネに「知られざる神に（アグノストーオ・テオー）」という祭壇があるが、天地創造の神は、人の手で造った宮になど住まない云々と、喝破した（一七・二四—二七）。そして右掲の一句を叫んだ。しかもこの句は紀前三世紀のギリシャのストア的詩人のアラトスの詩句で、パウロにとってこの「彼」なる「神」はキリストである。聖霊の人となると、この句くらい身についた句は考えられない。「エン　アウトー　ゾーメン　カイ　キヌーメタ　カイ　エスメン」である。ドイツの大詩人ゲーテが実はこの句「神の中に生き、動き、存る」を特愛していた。ゲーテは神・大自然・我の融合した魂であったからである。「わが衷なる神」が宗教の最高段階と彼は感得していた。これを体現したのが実はキリストである。

11月14日

パウロの按手
（行伝18：1～19：20）

彼ら[五]は（これを聞いて）主イエスの名の中へとバプテスマされた。
即ちパウロの手[六]が彼らの上に按かれると聖霊が彼らの上に臨んだ。
すると彼ら[七]は異言（グローサ）を語りそして預言した。
その人々はみんなで十二人ほどであった。（行伝一九・五、六、七）

パウロはアテネからコリントへ移った。帝王クラデオのユダヤ人追放に遭いローマからやって来たアクラと妻プリスキラ（ユダヤ系ギリシャ人）に出遭った。パウロと同業の幕屋製造業者であったので親交を結んだ。一年半ほどコリント伝道をした。何か仕事をしながらの伝道の自由をパウロは実証した。

かくて第二次伝道を終えてオンテオケに帰った（一八・二二）。

第二次伝道（一八・二三―二一・一四）に入って小アジアのエペソに来た。これにより先きアポロというユダヤ人が福音伝道をしていた。アポロの伝道によってキリスト者となった御連中とパウロとの問答で、彼らが水の洗礼者ヨハネ的なバプテスマしか受けていないことがわかり、聖霊のバプテスマをパウロは按手によって施した。勿論パウロはキリストの中に祈り入って聖霊に満されて按手をするのである。そうすると手を通してみ霊の力がつたわるのである。聖霊のバプテスマを受けると、そのときの霊的な現象はいろいろだが、たましいがたしかに次元のちがったものを受けたことを体感する。パウロから受霊したのは、このとき十二名程だったという。筆者を通して十二の召団が聖霊のバプテスマによって生じているので不思議な冥合を感ずる。

11月15日

パウロの棄身の伝道
（行伝19：1—20：38）

○神はパウロの手によりて尋常ならぬ力ある業を行ひ給ふ。（一九・一一）
○ユテコ熟睡して三階より落つ。……パウロ降りて其の上に伏し、……『汝ら騒ぐな、生命は内にある』（二〇・九—一〇）
◎ただ聖霊いづれの町にても我に証して縄目と患難と我を待つと告げ給ふ。然れど我わが走るべき道程と主イエスより承けし……福音を身証し尽さんためには固より生命をも重んぜざるなり。（二〇・二三）
○汝ら……聖霊は汝らを群の中に立てて監督となし神の己の血をもて買ひ給ひし教会を牧せしめ給ふ。（二〇・二八）

○他の使徒たちはペンテコステの時に集団的に聖霊を受けたが、パウロは独り、ダマスコ途上で復活のキリストから一対一で聖霊の強烈なバプテスマを受けた。彼には全伝道に於て、言にも業にも聖霊の力が鮮かにはたらいた。
○トロアスでパウロは徹夜の集会をして語り明かした。高楼三階で聴いていた若者ユテコが睡魔に襲われて眠り込んで三階から墜落して死んだ。ところがパウロは急ぎ降りて彼の上に身体を伏せて祈った。エリヤ（王上一七・一七—二四）。エリシャ（王下四・三四）がかつてやったように。若者は甦った。到る処でパウロを通して聖霊の能力が発揮された。
○迫害はまたつきもので、彼は屢々身の危険にさらされた。併し聖霊は彼を支えた。
○教会は聖霊に満された人物に指導されることを第一前提とする！

11月16日

神の力
（ロマ1：1—16）

我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始め、ギリシャ人にも、凡て信受する者を救ひに入らしむる神の力なればなり。（ロマ一・一六）

ユダヤ教パリサイ派の旗頭サウロは、ダマスコ途上で復活のキリストに霊撃されて聖霊のバプテスマを体受せしめられ、実存的大転回と成り、パウロに変身した。彼はアンテオケを起点として第一次、第二次、第三次と地中海沿岸世界の大伝道を果した。その間いくつかの公的書翰を彼のこの異邦伝道の力によって生じた諸教会にあてて書いた。

このロマ書はその第三次伝道の際、コリント滞在中にしたため、ケンクレヤ教会の女執事フィーベに託してロマ教会に送ったものである。彼の書翰は大方次の順に書かれたものと思われる。

テサロニケ前、後書、ガラテヤ書、コリント前、後書、ロマ書、コロサイ書、ピレモン書、エペソ書、ピリピ書、紀元五〇年前後から六〇年前後に亘るものである。

ロマ書はキリストの福音の十字架・聖霊を不離の二焦点とした生まの有機体的構造の神学を内に蔵している。福音の太陽系、または大殿堂と言わんか。福音書がキリストの御姿ならば、ロマ書はキリストの僕パウロの弁慶像とでも言わんか。パウロは伝道で患難と迫害に遭ったが、福音をいささかも恥とせず、いかなる民族の人であろうと、これを信受、体受するなら、ゆるぎなき救にあづかり得る世界的宗教として宣べ伝えたのである。その確信は何に據るか。ただ神の力に據る。具体的にはキリストから賜った聖霊の力である。神・キリスト・聖霊の力・生命・愛は無比なものである！

11月17日

神の義の顕現
（ロマ1：17—20）

神の義はその福音のうちに顕はれ、信仰より出でて信仰に入らしむ。録して「義人は信仰に因って生く」とあるが如し。（ロマ一・一七）

「神の義はその福音のうちに顕はれ」という一句は、旧約時代のサウロには思いもよらぬ真理であった。神の義は律法を実践する者に於て顕われると思っていて、その律法の義を誇っていたサウロであった。生活の祈りに於て神意を承り、これに従うところに神の義があることを知らなかった。ところがキリストはモーセの律法を越えた神意に全存在を以て信従し、体現したのであった。神意体現に神の義が成就するのである。そのようなことはイエスの外誰もなし能はぬことである。我々が罪びとであるというのは、我意、我執のために神意に信従できない。神の義はその実践者、即ち義人イエスに於て顕われた。この義を与えるキリストが福音体である。キリストの十字架の贖罪を体受すると、キリストは我々の罪を贖いとって、罪なき無の根源現実を賜う。そしてキリストの義を賜わる。では義の実質は何か。聖霊である。イエスは神に全身を投入したから神と一如となった。すると神意は神の霊と共に受けとれた。神意を体現し得た力は聖霊であった。であるから十字架のキリストを信受体受すると聖霊が降臨してキリストの義が力ある内容として受けとれる。信仰は実は信入である。全存在的信行信入、そしてキリストと一如の信交である。これが信仰より出でて信仰に入る、である。パウロはハバク書二・四の聖句を福音的に引用した。実はこのような「信仰に生きる者が義人である」というのである。

11月18日

恵信の義：恩恵―信仰―信行―信交
（ロマ3：21―31）

三・二一 然るに今や律法の外に神の義は顕はれたり。これ律法と預言者とに由りて證せられ、イエス・キリストを信受するに由りて信ずる者の中に臨みたる神の義なり。これには何らの差別なし。三三 凡ての人罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、三四 無償にて神の恩恵により、キリスト・イエスに在る贖罪によりて義とせらるるなり。

パウロは三章前半で、ユダヤ人もギリシャ人もみな罪の下にあると断じ、神の前に義人なし、一人だになしと告白している（三・九・一〇）。律法を厳守したと自任していたパウロ自身、実は律法の根本精神を満たしていなかったことを悟ったからである。律法は律法を越えた立場に立たなければ本当に満すことができない。これを成就したのがイエスであった。実は律法は隠れた福音であった。「汝殺すなかれ」ではなく「汝は殺さない」という神の信頼の言であったからである。これを満たすには神と一如になるを要する。人間にこれができない、「罪を犯す」我執者であるからである。「律法と預言者」即ち旧約聖書はキリストを指している、知らずして。福音が隠されている。神の義、聖意体現者たるキリストを信受、体受する者の中に神の義、キリストの義が与えられる。信仰は観念的であってはいつまで経っても生命も力も来ない。この義は力、生命、光、天道、生きた自由の律法であるから信行一如の質をもっている。だから、キリストという恩恵体そのものを全存在で受けることが本当の信仰で、ハッキリ信交と書くべきだ。このような受けとりには必ず聖霊が同時に臨む。「義とされる」も「義を与えられる」意である。

11月19日

新しき永遠の生命
（ロマ6：1—23）

汝ら知らずや、凡そキリスト・イエスの中へとバプテスマされた[三]我らは、彼の死の中へとバプテスマされたことを。[四]それゆえ死の中へのバプテスマによりて彼と共に葬られたるは、キリスト父の栄光によりて死の中より復活し給ひし如く、我らも亦新しき生命に在りて歩まんためなり。（ロマ六・三、四）

さて今や罪より解放されて神に属ける僕とされたれば聖に至る汝らの実を得たり。その極は永遠の生命なり。[二三]それ罪の代価は死なり。されど神の霊賜（カリスマ）は我らの主キリスト・イエスの中に在りての永遠の生命なり。（ロマ六・二二、二三）

キリスト・イエスの中へと浸された、とはキリストの十字架の中へ入れられたことで、パウロがガラテヤ二・二〇で「我はキリストと共に十字架されたり」というのと同じことである。キリストと共に十字架された（死の中へとバプテスマされた）以上、旧き我に根源現実に於て死んでいる。それは相対現実ではなほ罪びとではあるが、復活のキリストと共に新しき（カイノス）もはや古びない生命に在って歩んでやまないためである。そのように罪と死から根源現実で解放された我らは神・キリストの僕として、キリストの義を賜っている聖霊に在っての現実である。相対現実では未だ聖ではないが、その中核たる実が与えられてある。永遠の生命の核も賜っている。

11月20日

罪との戦
（ロマ7：7—25）

二三 我は内なる人によれば神の法（ノモス）を悦べど、二三 我は見る、わが肢体の中に他の法ありてわが心（ヌース）の法と戦ひ、わが肢体の中にある罪の法の中に我を虜とするを。

二四 噫我れ悩める人なるかな、この死の体より我を救はん者は誰ぞ！

二五 神に感謝す、我らのイエス・キリストに頼りて！（ロマ七・二二—二五）

ロマ書第七章七節以下二四節は、万人の心の葛藤の問題を告白している。心の中の善悪の戦を偉大な宗教家たちは洋の東西を問わず真剣に苦しみ戦って、夫々何らかの道を発見し突破して別次元の中に入った。それが救なのである、或は悟りなのである。ただこの戦を戦はず、一直線に信入して神と一如になった例外者がイエスであった。彼は罪を意識しても罪の虜にならず、これに勝った。しかしサタン、罪の首魁とは戦って決定的に勝ち給うた。このキリストこそは救主でパウロを救いあげた。私も救われた一人である。

「心の法」とは良心の法で、神の律法を学びこれに従わんとする先験的意識をもつ良心の法である。この良心はカントの言う善意志である。ところが肢体の中にある「他の法」というのは我執、エゴイズムの慾心の法である。ゲーテも『ファウスト』の中でこの戦を詠っている（一一一〇—一一二一行参照）。良心がとかく慾心に負ける。即ち人間はエゴイズムからぬけきれない。これが万人の悩みで、パウロは是に苦しんで「噫我悩める人なる哉、この死の体！」と叫んだ。アウグスティヌスも深くなやんだ。ルターも独房でこの苦しみでぶっ倒れた。キリストの十字架がこの罪性を贖って下さった。

11月21日

霊と肉
（ロマ8：1—17）

一 この故に今やキリスト・イエスの中に在る者には断罪なし。二 キリスト・イエスの中の生命の御霊の法は、汝を罪と死との法より解放したればなり。九 神のみ霊汝らの中に宿り給へば、汝らは肉の中に非ずして霊の中に在るなり。されどもしキリストのみ霊を有たずばキリストに属く者に非ず。（ロマ八・一、二、九）

キリストの十字架の贖罪を体受した者は、根源現実に於て罪なき者とされているから、もはや罪せられることはない。十字架上のキリストがあの一方の十字架上の盗賊を贖って天界に伴れていった事実はこのことの何よりの証拠である。パウロはその手紙の中で、「エン・クリスト」「キリストの中で」というたぐいの表現を一六四回用いている由。それほどまで彼の信仰の現実は正に信交的一如なるものであった。聖霊はキリストの永遠の生命の霊だから、その霊法は力をもっている。だから罪と死の法にうち勝ち既に解放して下さっている。

十字架・聖霊の絶対恩恵によって、我らは罪から解放され、復活の生命をみ霊に在って生きている。それがキリスト者である。もしそうでないなら、即ち聖霊を宿していないなら、キリスト者ではない、とパウロは九・九で明言している。パウロがここで肉（サルクス）の中」といっている肉とは自己本位な在り方を謂う。「霊プネウマ）の中」の霊とは聖霊のことで、その現実は神・キリスト中心の在り方である。どんなに立派であっても自己中心は肉である。どんなに破れていても神・キリスト中心は霊である。

十字架・聖霊の現実

1 十字架のもと　祈り入れば
み霊臨み　身は火の如し
魂も燃えて　聖名を讃ふ
わが主イエスよ　わがすべてよ

2 主よわが主よ　今此処にて
我をとらへ　み旨を示し
智慧と力　そそぎ給へ
汝がみ業を　なさせ給へ

3 主よ、われらは　汝のもの
汝がうちにぞ　我ら生きて
汝が愛をば　生命として
愛に生きん　永遠まで

（作詞一九八一・九・五
歌調S366「わが主イエスよ」）

聖霊は原始力

1 信じ入れば　み力を得
行に転じ　人を助く

《おりかえし》
主に在りて　力あり
主のみ霊こそ　原始力ぞ！

2 主に愛され　抱かれなば
捨身の愛　われにみつる

3 新天地の　望みに生く
主の光を　四方に放つ

（作詞一九八〇・一一・三七
歌調S514「よわきものよ」）

11月22日

聖霊の讃歌・聖霊の執り成し
（ロマ8：18—30）

二六 このように御霊もわれらの弱きに与し助けて下さる。我らはどう祈ったらよいかわからないけれども、御霊みづから言ひ難き呻きをもって執り成して下さる。
二七 また人の心を極め給う者はみ霊の念いをも知り給う。み霊は神に即して聖徒のために執り成し給う。（ロマ八・二六、二七）

ロマ書第七章は、罪の問題で地獄的な苦しみを内的に苦しんでいる。これは生れつきの我々万人が心の中に有っている問題である。大方はそれほど苦しまないでこの世のたのしみ、文明文化の中でお茶をにごしている。しかし真剣に自己と戦う人は苦しみなやむ。しばしばそのために自殺をする。文人や哲人にしばしばその例を見る。決してけなし得ない真面目な事柄である。

キリストの十字架でこの世の苦しみを突破させられたパウロは第八章にくると聖霊の天国的な次元のゆえに感謝と讃美に溢れている。第八章は聖霊の讃歌と名づけたい。

この八・二六は聖霊がいかに深い思い遣りの愛の霊であるかを告白している。パウロは八・一八—二五で自然も人間も救いの全うせられんことを祈り待つ消息を語っている。聖霊は、誰にも語れないまたわかってもらえない苦悩の中で祈りようのないときにも、聖霊は深い思い遣りと呻きを以て執りなして下さる。しかも二七節では「人の心を極め給う者」キリストがみ霊と念いを一つにして下さっている。かくキリストも聖霊も神意に即して贖はれたる者（聖徒）のために執りなし給う。かくて本当の平安と力が臨む。合掌。

11月23日

神・キリストの愛
（ロマ8：31—39）

己の御子を惜しまずして我ら凡ての為に付し給ひし者は、などか之にそへて萬物を賜はらざらんや。我らをキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ。患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。然れど凡てこれらの事の中に在りても、我らを愛し給ふ者に頼り、勝ち得て余りあり。われ確く信ず、死も生命も権力ある者も今ある者も後あらん者も……我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。（ロマ八・三二—三九）

神が独子キリスト・イエスを我らの罪の贖いのために十字架にかけ犠牲の死を遂げしめたので、萬物も同じく惜しみなく賜はるという壮大な気宇である。それはまた何も要らないという逆説的なものでもある。このキリストの生命賭けの愛に圧倒されているパウロはいかなる苦難も迫害も、このキリストの愛から自分を離脱させることはできないと叫び、愛し給うこのキリストの中で、キリストと一如とされているから勝ち得て余りあると叫んでいる。そのあとでまた畳みかけていかなるものも神・キリストの愛から自分を離すことはできないと絶叫している。このロマ書第八章の終りの節のパウロは火のようだ。これはもはや文字ではない。ベートーヴェンの第九交響曲の大合唱、ヘンデルの「メシヤ」のハレルヤ大讃美がこのパウロの絶叫に呼応していると言はんか。キリストの愛に圧倒されて生きてこそ本当のキリスト者。パウロはこの愛で万難突破、殉道凱施した。

11月24日

アナテマ魂
（ロマ9：1－3）

一 私はキリストの中で本当のことを言う、うそはつかない。わが良心も聖霊の中で自らに証（あかし）する、二 私に大いなる悲しみがあることを、絶えず痛みがわが心にあることを。三 肉に於けるわが兄弟わが骨肉のためにはキリストに棄てられ、呪詛（アナテマ）となることすら願うところである。（ロマ九・一、二、三）

かつてはパリサイ派の親玉であったパウロは今や完全に聖霊の器としてキリストにみ霊に於て一如となっているパウロである。それ故ユダヤ教の頑固な連中を何としても回心転向させたい悲願に炎えている。各地方に散在しているユダヤ人たちをある程度は救ったが、迫害にも少なからず遭って来た。ユダヤ人の頑固さは誰よりもパウロ自身が知っている。復活のキリストに霊撃されぶっ倒されなければ心眼の開けなかったパウロである。だから仮令（たとい）キリストの呪詛（アナテマ）となっても肉のつながり、即ち同胞骨肉の救のためには願うと告白している。ユダヤ人の頑固さが彼の悲しみであり痛みであった。今もユダヤ人はなかなかキリストには回帰しない。メシヤはまだ来ていないといってキリストを認めない。キリストにもパウロにも躓いている。実にキリスト自身が今もユダヤ人のアナテマで十字架につけっ放しである。また聖霊を受けた使徒的信仰の基督者が、一般の観念的基督者たちからアナテマにされている。基督と共に創造的な改革者たちはいつの世でもアナテマである。

11月25日

神より出でて神に帰る
（ロマ11：1―36）

一一・三三　噫、神の智慧（ソフィア）と知識（グノーシス）とはいかに豊かにして深い哉！　その審判（さばき）は測り難く、その諸々の道は尋ね難し。誰か主の心を知りし、誰かその相談相手となりしや。それすべてのものは神より出で、神によりて成り、神に帰するなれ。栄光永遠に神にあれ！

中世の偉大な神秘思想家エックハルトも言った。「神が理解できたらそれは神ではない」と。神学に組織神学という部門がある。神の真理はしかし組織化して可いものか。アクィナス、カルバァン、バルト、ブルンナーの如き偉大な神学者たちはこの部門に属する。彼らの神学上の業蹟に勿論心から敬意は表する。しかし、アウグスティヌス、エックハルト、ルター、キエルケゴール、スウェーデンボルク、ベルジャエフの類（たぐい）いの神学は組織（システム）ではなく告白的神学である。神学が神の啓示の書たる聖書を基とする限り、啓示神学であり、告白神学であるのが神学の本質であろう。パウロはその諸書翰を以ておのづから生まの神学を展開している。矛盾の要素、劇的な構成、有機体的（オルガニーツシュ）な構造をもっている。神の鴻大な生ける真理（真法、霊法）に圧倒されているのだ。右掲の如き感嘆の言を吐露しているわけである。預言者たちは波状的に吹き寄せる神の啓示の言を伝えると、それは自（おのづか）ら詩になった。特にイザヤ書は驚くべきものだ。

私の如き小さな魂も神・キリストに圧倒されているので、聖霊の力と智慧で告白したら「無の神学」（著作集第三巻）になった。無即無礙という性格である。天界の預言者や使徒を相手にしているのでそのうちに愚生からも詩泉が湧いて流れるであろう。

11月26日

愛は律法（道徳）の完成
（ロマ13：8―14）

汝ら互に愛を負ふのほか何をも人に負ふな。人を愛する者は、律法を全うしたるなり。愛は隣人を害はず、この故に愛は律法の完成なり。（ロマ一三・八、一〇）

パウロはロマ書第十二章第一節で「おのが身を神の悦び給ふ清き活ける供物として献げよこれ霊の祭なり」といって、日常生活そのものが、神さまに悦ばれる生き方をすれば、それが本当の霊的な（霊的とは神中心ということ、地球が太陽中心で動いているように）お祭だという。そして彼は第十二章で、家庭や社会に於ける各人は、恰も有機体的人体の如く、夫々の部分が夫々の役割を完全に果してこそ健全な体であるように、各人がおのが存在の意義と使命をみ霊に在って自覚して果せよ、と懇切に語っている。

そして人体を環流してやまない血のように、我々は互に愛し合うことだけが大切だ、一切の律法、道徳の事項も愛によってのみ全きを得る。愛が律法（道徳）を満たすものだと明言している。愛は単なる感情ではない。具体的に人助けをすることである。有形無形に愛の心がはたらくと、自他共にたのしいのである。快楽を求めるのは危いことだが、楽しさがおのづから伴う在り方が、本当である。「己の如く隣人を愛せよ」とは己を愛することは人間の自然だが、それを顧みず、隣人（他人）を愛することが自然、霊然であれ、という。そのためにはキリストの中に祈り入って、「キリストを衣て」聖霊の愛の力にあづかることが極めて大切である。一三・一一―一四でアウグスティヌスの魂の目が醒めたことが、彼の有名な『告白』の中に書いてある。

11月27日

十字架と聖霊
（コリント前書1：1～2：16）

一・一三 ○キリストは分離されたか。パウロはあなたのために十字架されたか。あなた方はパウロの名の中へとバプテスマされたか。
一八 ◎まことに十字架の言は亡びゆく者には愚かごとだけれども、救われる我らには神の力である。（一・一八）
二五 ○み霊の（プネウマティコス）人は、すべてのことをわきまえる。しかも己れは人にわきまえられることがない。（二・一五）

コリント市は当時商業の中心的な大都市で、而も学問の都市でもあったが、他面偶像崇拝も多く、道徳的水準は低く「コリント」という語は淫蕩の代名詞の如き響きをもっていた。そのような雑多な因子の混淆している都市であるのでコリント教会の内部にもさまざまな問題が生じていたから、コリント教会は勿論パウロが建てたのだが（第二次伝道のとき）、彼はそのため、第三次伝道でエペソ滞在のときこの手紙を書いていろいろな実際問題に対して然るべき指示を与えている。

右掲の聖句を簡単に解説しよう。教会に宗派は生じても問題はキリストに即する点では一つでなければならない。

「十字架の言」とは、十字架という言ならざる言、即ち十字架自身が無益の義と愛の表現であること。十字架をあざける類いの人は自ら滅びゆく。しかし、十字架に信入する我らは救はれ、同時に「神の力」が臨む。それが霊の力である。「み霊の人（プネウマティコス）」は自分の性来の次元を越り超えて霊知を賜り、霊力にあづかる。その間の消息は第二章で。

11月28日　アナンケー（やむにやまれざるもの）
（コリント前書9：1～16）

一六 我れ福音するとも、我れに誇るところ無し。やむにやまれざるもの（アナンケー）我を圧倒し居るなり。我れもし福音せざれば、我れは実に禍なるかな！（コリ前九・一六）

キリスト・イエスという恵みそのものが、幾の実力者が、愛の実体が、そしてキリストの霊と一如なる聖霊の力がパウロの上にのしかかっている。パウロはキリストに全く圧倒されて生きている。「われ生くるに非ず、キリストわが衷に生き給うなり」（ガラテヤ二・二〇）の現実である。だから福音伝道（福音）せざらんとするも能はずなのである。これを「やむにやまれざるもの」（原語アナンケー）、天的必然、霊然、まことの自由を以て福音しないではいられないと叫んでいるのである。必然と自由は一つなのである。生ける霊法である。

佐藤一齋がその「言志録」の中で、雲煙集於不得已。風雨漏於不得已。雷霆震於不得已。と詠じているように、雲も霧もやむを得ずして集る……そういう自然界の必然法則のように道徳界もそうであるなら、それを「至誠」という。宗教界では、パウロが此処で言っている「やむにやまれぬ言動は聖霊の力であり、生ける霊法であって本当の自由即ち霊然で、原語のアナンケーである。西郷南洲は一齋のこの言が好きで、天を相手として生きたら、そういう在り方となった。ヒルティーも『眠らぬ夜のために』第一巻四月十四日の箇所で、「せざるを得ずして為す人のみが偉大なことを為す」と言っている。ルターはウォルムスで「我かくせざるを得ず、我此処に在り、神よ助け給へ！」と叫んだ。

11月29日

自主（自由）と僕（愛）の実存

（コリント前書9：17—27）

一九 我れいかなる人に対しても自主の者なれども更に多くの人を得んために、自らすべての人に対して奴隷となれり。我れユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり。これユダヤ人を得んがためなり。律法の下にある者には、——律法の下に我れはあらねども——律法の下にある者の如くなれり。これ律法の下にある者を得んがためなり。弱き者には弱き者となれり。これ弱き者を得んためなり。我れすべての人には凡ての人の状相に従へり、これ如何にもして、幾許かの人を救はんためなり。（コリ前九・一九…二二）（コリ前一〇・三一—三三参照）

パウロのこのコリ前九・一九はルターの珠玉篇『基督者の自由』第一節の二命題の源となった。即ち、「キリスト者は万事に自主な者であって誰にも依存しない。キリスト者は万事に奉仕する僕であって、どの人にも依存する。」その意義は、絶対者たる神・キリストの僕であるから、誰にも依存しない自主自由者である。そのような自主自由者は自ら進んで聖霊の力の愛で奉仕する僕であるから誰にも仕える。だから神に在っての僕は自由で、この自由は愛の性格であるので、隣人に自ら奉仕するという意で、パウロの聖句に全く照応している。その自由は弾力性があるから、あらゆる人の立場に自らを置いて、聖霊の愛と力と智慧でそこから相手の人を福音へと導入するのが、本当の伝道なのである。決して上から高圧的に相手を説き伏せるのではない。

11月30日

聖霊とその霊賜（たまもの）

（コリント前書12：1―31）
（コリント前書14：1―40参照）

一 さて、兄弟たちよ、君らが霊の賜（たまもの）ある（プネウマティコス）ことについて無知なのを私は好（す）かないね。四 ところで霊賜（たまもの）（カリスマ）は多種だが、霊は同一。五 奉仕（ディアコニア）は種々だが主は同一。六 また活動（はたらき）はそれぞれだが、凡ての人の中ですべてのはたらき（エネルゲイア）をなし給ふ神は同一である。（コリ前一二・一、四、五、六）

パウロは知悟意のゆたかな人物、しかもこの三要素を統括する霊の根源に聖霊を賜ったので、すばらしい有機体的構造となった。聖霊を賜って祈りが深くなると異言が迸ったり、病者に按手をすると病が癒えたり、人の世や自然界に対する預言が与えられたり、智慧（ソフィア）の言や、知識（グノーシス）の言を賜ったり、というようにさまざまな聖霊の賜（カリスマ）が人によって、また一人の人に於ても時機に適っていろいろな賜が作用する。それはこの第十二章でパウロが証言している通りで、パウロは実に豊かに多種の賜を賜った。筆者もいろいろカリスマを賜っている。医者が不思議に思うような治癒の現象がかなり多く今までにもあった。要するにパウロが一二・一二―三一に述べているように、体は一つ、体の肢は多種で一つに統合されているように、聖霊は一つ、カリスマは多種である。そして賜の最大なものは愛の行為である。イエスは異言のことは語っていないが彼の言は霊言であるから「わが言は霊なり生命なり」で、死人を甦らせる力、自然の風波を鎮める力をもっている。それはみな愛の行為で聖霊は愛に於て最大の力を現はす。

12月1日

愛の讃歌
（コリント前書13：1―13）

縦い[二]、また、私に預言する力があり、總ての秘義と總ての知識とに通じ、山を移す[四]程の全き信仰があっても、もし私に愛がないなら、私は空しい。愛は寛容であり、愛は情け深い。愛は妬まない、愛は誇らない、高ぶらない。[七]愛は總てを荷いぬき、總てを信じぬき、總てを望みぬき、總てを耐えぬく。[八]愛は断じて滅びない。しかし預言はすたれ、異言はやみ、知識もすたれる。[一三]そういうわけで永遠に存へるものは、信、望、愛の三者である。これらの中で最大なるものは愛である。（コリント前書一三・二、四、八、一三）

使徒ペテロが希望の人であるなら、使徒ヨハネは愛の人であり、パウロは信仰の使徒である。しかしパウロはこの第十三章で愛の讃歌を詠っている。

彼は第十二、十四章で聖霊の賜（カリスマ）のことを詳しく語っている。その中を割って愛を詠っている。この愛は聖霊から臨んで来た愛で、愛を人格化して語っている。愛・信・望は不可離の関係にあり且つ三相一如である。信は十字架のキリストの愛を信受することであり、過去の歴史的啓示的事実に基づくものである。望は終末的将来に対する希望であるが、愛はキリストという永遠の主体、終末的現在のキリストのみ霊を源泉とする極めて現在的なものである。聖霊の愛はわが衷なる愛となって、愛の力が溢れてくる。

12月2日

復活の讃歌
（コリント前書15：1―58）

血氣[四四]の体にて播かれ、霊の体に甦へらせらる。魂体ある如く霊体あり。録[四五]して始の人アダムは、生命ある魂となれり、とあるが如し。而して終のアダムは、生命を与ふる霊となれり。（コリ前一五・四四、四五。）

使徒行伝第九、第二二、第二六章で証言しているように、パウロは復活のキリストに霊撃され、聖霊のバプテスマにあづかり、十字架の贖罪を全身で受け、旧き我に死に、新しき我に復活せしめられた。であるから、パウロにとって、十字架、復活、聖霊は全く不可離の体験で、「もしキリストが復活しなかったら伝道も信仰も空しい」（コリ前一五・一四）と叫んでいる。この十五章は復活の讃歌を称して可い。

このキリストの復活の霊生を生命として生きるのがキリストの生命で、その値は愛である。神の愛なき生命は永遠であり得ない。永遠性を有っているものはこの愛だけである。しかもあらゆる愛は本来神からの愛だ。それを「神からの」という自覚を失ったところに多くの乱れが生じた。さて「血気の体」とは原語の「ソーマ・プスーキコン」の日本語だが、直訳すれば「魂の体」であって、これは地的である。なお、「霊の体」は「ソーマ・プネウマティコン」で聖霊を宿した体で、永遠性をもった天的なものである。キリストの復活は正に血気の体が、始から聖霊を宿していたから霊体に化して出現したのである。これは即ち「終のアダム」で我々に「生命（永遠の）を与ふる霊」と成り給うた。パウロは一五・四六―五八に亙り、復活の凱歌を挙げている！

自由の霊
（コリント後書3：1―18）

一七 主は即ち御霊なり、主のみ霊のある所には自由あり。一八 我らは皆面帕を除かれて鏡に映る如く主の栄光を見、主のみ霊によって、栄光より栄光へと進み、主と同じ相に化するなり。（コリ後三・一七、一八）

パウロはこの第三章で、我らは「活ける神の御霊で録されたキリストの手紙」（三・三）だといっている。正に文字通りの活字なのである。だから本当に地上をみ霊の自由に在って生きるなら、その生活そのものが不立文字で天界に記されている。人がどう思うこう思うではない。人の毀誉褒貶如何にもあれ、「キリストの手紙」とならんことのみ。

また彼は「儀文は殺し、霊は活かす」（三・六）といっているように、聖書も書かれたグラマであるが、聖書は聖霊で書かれた書だから、聖霊の光と生命と愛で読まなかったらパウロの言う「儀文」にしてしまう。読んで力が来るのでなければ霊の書として読んでいないことになり、所謂「聖書研究会」的な読み方ではダメである。聖書をよむことが直ちに力となり、愛であるような身読が大切。聖書は眼で聴き、体で受けとる書だ。

右掲の聖句は全くすばらしい。聖霊は天的自由を与える。空を飛ぶ鳥には道がないが、あれが自由の道である。「われは道なり」と言ったイエスは正にこの自由の道であった。キリストの中に全身で祈り入るとキリストの光を浴びる。実は鏡に映る以上に主の栄光に目がくらむ。光に貫かれて栄光化されてゆく。その人はその人らしくして、本質に於てキリストの相に化せられてゆく。

神・キリスト一点張り
（コリント後4；5）

○我らこの宝を土の器に有てり。われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方尽くれども希望を失はず、常にイエスの死を我らの身に負ふ。これイエスの生命の我らの身に現はれんためなり。（コリ後四・七―一〇）

○我らは知る、我らの幕屋なる地上の家やぶるれば、神の賜ふ建物、即ち天にある、手にして造らぬ永遠の家あることを。（五・一）

○我らもし心狂へるならば神の為なり。心慥ならば汝らの為なり。キリストの愛我らを抱けり。

○神は罪を知らざりし者を我らの代りに罪となし給へり。これ我らが彼に在りて神の義となるを得んためなり。（五・一三、一四、二一）

○この宝とはみ霊のキリスト（天的な器）、我々は正に土器（地的な体）。我らはキリスト主体の存在であるから力が神から来る。四面楚歌であっても、孤軍万軍！

○この「幕屋」はこの肉体のこと。「永遠の家」とは永遠の生命を宿している霊体のこと。

○神・キリストのためには世人に気がおかしいと思われるくらいひたむきに生きよ。霊の戦をなせ。しかし対人関係に於ては健全な理性も感情もあり。これが霊的人格というもの。

キリストの愛につながり、抱かれ、圧倒されて生きよ。日々是れ楽園である。

○キリスト・イエスは我らの為に罪人の首となり、罪をひきうけ、義を我らに賜うた。

12月5日

無一物無尽蔵
（コリント後書6：1—18）

八 我らは人を惑はす者の如くなれど眞。九 …死なんとする者の如くなれど、視よ、生ける者。…憂ふる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。（コリ後六・八……一〇）

天来の真理は観念的ではない。常識や理性を超えた次元であるので、人を惑はすことが大いにある。だけれども霊的な現実をからだで受けとってみると、これこそ本当だということがわかる。棄身の行為だから死ぬのかと思われるが、どっこい生命力が旺盛である。世を見ると正直憂苦に耐えない。だが哀なる世界では天的な歓喜の中にいる。正直貧しい。米と沢庵と味噌汁と豆腐と卵といったもので生きている。人を豊かにさせて喜んでいる。何も食べ物に限らない。一切は神の有である。土地こそ国有にして神有だ。日本の土地問題は馬鹿気きっている。こんな政治があるか。右掲の文でパウロは「ホース」（如く）と言っているが、一種の修辞で、実際そうだが、しかし、といった語調であり、内容である。

最後の句は正に無一物無尽蔵に当る句だ。キリストが正にそうであった。神のほか彼には何もなかった。神から無尽蔵なものが来た。そしてそれをみんな人々に頒けて限りない。今もその無尽蔵を下さる。何か、聖霊である。一なる小池を零（無）にし給うは十字架である。すると無尽蔵なる聖霊が与えられる。$\frac{1}{0}=\infty$という数学と同じだ。禅宗の第六祖廬能が人間「本来無一物」と喝破した。その彼に如来の力が臨んで法衣にまで霊力がかかったパウロと同次元。

12月6日

鴻大なる黙示
（コリント後書12：1—13：13）

○我はわが蒙りたる顕示の超絶なるによって、高ぶることの無からんために肉体に一つの刺を与へらる。即ち：我を撃つサタンの使なり。我れがこれがために三度びまで之を去らしめ給はんことを主に求めたるに、言ひ給ふ「わが恩恵汝に足れり。わが力は弱きうちに全うせらるればなり」。然ればキリストの力の我を庇はんために、寧ろ大いに喜びてわが弱きを誇らん。（コリ後一二・七—一〇）

この後書第十二章の始めに、パウロには十四年前に「第三の天」に取り去られた特別高次な霊的体験を受けたことを語っている。そこはパラダイスであった。彼がいかにキリストと一如の実存であるかを知る。彼はそれを「超絶なる顕示」といっている。旧訳に「鴻大なる黙示」とある言である。こんな霊的体験がなくても、我々は地上で、本当にキリストの中に生きているときは、それは質的に「第三の天」である。天地融合の境地である。パウロは実に多種多様のカリスマに与っているし、福音の内容は古今独歩的である。全く超絶にして鴻大なる黙示を受けた人物だ。それに驕らないために肉体に刺が与えられるという。しかもサタンの使だという。おのが「弱き」をこそ誇らんと言っている。人間パウロなる哉、筆者も「弱き」を誇るありがたさである。キリストの愛に圧倒されているのは、筆者も弱き人間だからである。「弱き」無者とされている。そこにものすごいキリストの力が臨んで下さる。アーメン。

12月7日

十字架・聖霊の体受
（ガラテヤ1：1—3：14）

一九 我れ神に生きんために、律法によりて律法に死にたり。二〇 我れキリストと共に十字架せられたり、最早われ生くるに非ず、キリストわが内に在りて生き給ふなり。今われ肉にあって生くるは、我を愛してわがためにおのれ自身を棄て給ひし神の子への信交に在りて生くるなり。（ガラテヤ二・一九、二〇）

このガラテヤ二・二〇はプロテスタント信仰の金科玉条ともいうべきものであるが、これが一般に観念信仰になっていること、「信仰によって義とされる」を信仰義認といった言い方で納得している事態と同軌である。さてまず十九節の意味は何か。パウロはサウロ時代に律法を行じて義人であると自負していた。神意を念とせず、律法を他律的に遵っていたサウロは実は律法の根本精神を満たしているのではなかった。所謂道徳屋が偽善であることはカントが道徳哲学で指摘しているように、サウロも信仰の世界の偽善者であったからキリストが「偽善なる律法学者、パリサイ人」と責め給うたのである。神意ぬきのサウロは、律法に生きられなかった。聖霊を受けて、彼は自分の自己義認の罪がキリストの十字架で贖はれていることに気がついた。旧き我はキリストと共に十字架されていた。「キリストわが内に」とはキリストの聖霊である。キリストは天界に在り給うが、み霊なるキリストは、十字架のキリストを体受している限り、万人にいつどこででも入って来て下さる。これが霊界の神秘の現実である。だから十字架と聖霊は絶対不可離の関係にある。信仰はそのような全存在的具体的な体受であることを要する。

12月8日

無限無量なるキリストの愛
（エペソ1：1－3：21）

○汝らは恩恵により、信仰によって救はれたり。是れおのれに由るに非ず、神の賜物なり（エペソ二・八）
◎汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・イエス自らその隅の首石たり。（二・二〇）
○父その栄光の富に循ひて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、信仰によりてキリストを汝らの心に住はせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、凡ての聖徒と共にキリストの愛の廣さ、長さ、高さ、深さの如何許りなるかを悟り、その測り知るべからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てるものを汝らに満たしめ給はんことを。（三・二〇、三・一六―一九）

○恩恵とはキリストの十字架の贖罪と聖霊の自由な降臨で、キリストが恩恵の主体でこれを体受することが信仰（信交）で、神のはたらきかけによる賜物である。親鸞の「歎異鈔」にある「弥陀の御もように由る信」と同様である。二・二〇は旧約の預言者の預言、新約の使徒の証言が土台となっているが、キリストがその隅の首石たる根源である。我々信徒は「聖霊の宮」であるから、諸々の教会は夫々の特色をもちつつ大同である。
○三・一六以下は要するに父なる神キリストの愛の御はたらきにより、御霊の力が臨み、個人としても教会的集団としてもキリストの愛の身証、愛の展開を以て天国を現じてゆく。

12月9日

神・キリストの超在、遍在、内在
（エペソ4：1―16）

四・四 体は一つ、御霊は一つなり、汝ら召命への一つの望に在って召されたるが如し。主は一者、信仰は一つ、バプテスマは一つ、万人の父なる神は一者なり。神は万物の上に在まし、万物を貫き、万物の内に在まし給ふ。（エペソ四・四―六）（参照せよ、ロマ一一・三六、コリ前八・六、エペソ一・一〇、ピリピ二・一〇、一一、コロ一・一五―一七）

パウロは雄大な気宇の人物である。それも聖霊が宿ったからであった。「体は一つ」、とは有機体である体は非常な多の因子から構成されていて、どの一部分を欠いても血が流出すれば生命に関はる。一即多、多即一たる一である。「御霊は一つ」正に然り、宗派の如何に関はりない。しかも霊賜は多種である。「望は一つ」、然り、死と歴史の終末に来るべき新天地の神の国への大希望は一つである。主は一者、キリスト・イエスあるのみ、時満ちて神の経綸に従い、天上天下一切のものがキリストに在って帰一するのである。（エペソ一・一〇）。主体は救主キリストであるから、信仰は必然一つである。バプテスマは聖霊のバプテスマだから一つに決っている。キリストに因って拝跪する対象たる父なる神は一者。神は神秘なる霊なる実在だから、宇宙万物に超在し、万物に貫在、遍在し、万物に内在し給う。実にこれ以上の気宇があるか。（ロマ一一・三六、コリ前八・六参照）。しかもキリストは、見得べがらざる神の像であって、万物に先在し、万物は彼によって創造され、天上天下の可見不可見のもの、彼によって成り、彼の為に在る（コロサイ一・一五―一七）。彼は救済の愛の主だからである（四・一五、一六）。

12月9日

（詩）新宗教改革作詞1981．5．8
（エペソ4：1—16）　歌調S．271「いさをなき我を」

新宗教改革

1 いづれの教派も　夫々意味あり
ただ胸に在りや　砕けの十字架

2 いづれの集会も　観念不可なり
体當りせんかな　聖書の現実に

3 いづれの教派も　使命はそれぞれ
ただ胸に在りや　いのちの聖霊

4 いづれの集会も　それぞれ今こそ
祈り入りゆかん　使徒らの次元に

5 キリスト教界　形式を乗り越え
み霊に在りて　内面より改革！

6 キリスト教界　自由の心と
み霊の愛にて　世人を愛せん

7 キリスト教界　主と一つになり
み霊の力で　まことの伝道

8 主イエスの僕婢ぞ　み霊の火となり
預言者と使徒の　後を継がん哉

12月10日

キリストの戦士たれ！
（エペソ6：1—24）

六・一〇 終りに言はん、汝ら主に在りて、その大能の威勢（いきおい）に在りて強かれ。
悪魔（ディアボロス）（誹謗者）の術に向ひて立ち得んために、神の武具をもて鎧うべし。我らは血肉と戦ふに非ず、政権、（金）権、この世の暗黒を掌る者、天空にある悪の霊どもと戦ふなり。一五 汝ら立つに誠を帯とし、義を胸當とし、平和の福音の備えを靴とせよ。一六 なほ他に信仰の盾を執れ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。また救の冑（かぶと）及び御霊の劍、即ち神の御言を執れ。（エペソ六・一〇—一七）

パウロは霊界に君臨するこの世の君たるサタンとの戦を戦へと烈々たる士気を以てローマの獄中でこの手紙を書いた。第二、第三次伝道で永く逗留した親しいエペソ教会の信徒への最後のよびかけである。エペソには女神アルテミスがいた（行伝一九・二三—四〇）。その壮麗な神殿はアテネのあの巨大なパルテノンの四倍もある大神殿であったという。乳房をたくさんもっている多産の豊穣の象徴の女神像である。祭祀は官能的で聖娼という矛盾した女がいた。権勢と財富と酒色をあやつるサタンとの戦である。これはコリントに於ても然りであった。いつの世でも大都会はかのバビロンが歴史的な代表であったように類似する。黙示録にこのことが出現し、大なるバビロンに審判が降る。パウロは霊的な戦士の雄姿を具象的に語っているが、焦点は聖霊である。聖霊の人となって、聖名に在っての御力で戦へというのである。「雄々しかれ、我既に世に勝てり」の主は護り給う。

12月10日

（詩）福音の戦士（エペソ書第6章に因みて）
作詞：1979. 12. 7
歌調：S. 169「きけよやひびく」

福音の戦士

1 時は来れり　大和島根の
民の在り方　神に問はれん

2 心おごれる　昭和元禄
混濁の世は　いづこへ往くや

3 人の心に　愛のかげなく
利をのみ追はば　崩れゆくなり

4 み霊の子らよ　いかなるときも
祈りて受けよ　主のみ力を

5 いざや友らよ　主の武具を執れ
世紀の終末（をわり）　近づきたれば

6 恵みの胄（かぶと）　み霊の剣
聖言（みことば）の盾　武装はよきか

7 主の義を鎧ひ　愛を帯（おび）して
恵信一如　希望に燃えよ

8 生くるは伝道　いかなるときも
福音（よきおとづれ）の証人（あかしびと）たれ！

12月11日

無的実存と一切の秘訣
（ピリピ1：1—2：11；4：8—23）

○汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。[二・五]即ち彼は神の相にて居給ひしが、[六]反って己を空しうし、十字架の死に至るまで順ひ給へり。[七]○我は卑賤に処る道を知り、[四・一二]富に処る道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。[一三]我を強くし給ふ者によりて凡てのことをなし得るなり。

○パウロは、ローマで獄中書翰をいくつか書いた。著しいのがエペソ、コロサイ、ピリピだが、このピリピ書は最期のもので、謂はば遺言のようなものである。右掲前半の句はキリストの無的実存を魂をこめて語っている。神の相（モルフェー）とは何か、無相の相で、誰か知らんやである。次の大切な言は「己を空しうし」である。空しうする（ケノオー）は、無私の無となることで、彼の地上の実存は神に対して全く己が無かった。神一切であった。それを私は無的実存といっている。それが「エホバの僕」とイザヤが預言している相なのである。イエスはそのような無者として実存し、十字架の死にまで貫いた。完璧な神意体現の無者はイエスの他に一人も居ない。これを義人という。義は神意体現の相であり内実である。キリストの心とはこの無の相であり、十字架道である。使徒らはキリストの心を心として殉道した。旧訳「心を心とする」は原文通りではないが妙訳だと思う。○パウロはいかなる運命環境にも処し得た。それは聖霊が有つ弾力性に由る一切の秘訣である。コリ前九・二〇—二三も、一〇・三一—三三も、コリ後六・三—一〇も、一一・二三—三〇も、皆然りである。

天地一如，萬物浸透
（コロサイ1－4）

○汝らもしキリストと共に甦へらせられしならば、上にあるものを求めよ。汝らは死にたる者にしてその生命はキリストと共に神の中に隠れ在ればなり。（三・一）
○…この新人は、これを創造り給ひし者の像（エイコーン）に循ひ、いよいよ新たになりて霊知（エピグノーシス）に至るなり。それキリストは萬物の中に在り。

○コロサイ書も獄中書翰であるが、彼の天的生命に溢れていることを見ても、いかに彼が聖霊の人であるかがわかる。パウロはよく「もし」という仮定的な言い方をするが、「もし、もしパウロさん」といって、天界のパウロに、「私も地上にありながら天界の次元に居りますから御安心」と応える。我々の生命は神・キリストを隠れ蓑としている。パウロも歴史の終末的現実にいる意識が強い。我々はもっと終末的現実にある。
○楽園喪失の現実にありながら、キリストのゆえに楽園回復の終末的現実を我々は生きている。聖霊の力によって新創造の人間にされた。霊知が臨んで、所謂国境はない。日本人という特殊性を有ちながら世界人、宇宙人である。キリスト・イエスはユダヤ人でありながら、その民族の特殊性を突破した本当の人間であり給う。万物に浸透している大実存だ。我々も破れ器ながら然か在り得る、聖霊の力で、アーメン。

絶えず祈る，御霊を熄さない。
（テサロニケ前書5：1—28）

常に喜べ。[一七]絶えず祈れ。[一八]万事に感謝せよ。これキリスト・イエスに在りて神の汝らに求め給ふところなり。[一九]御霊（の火）を熄すな。[二〇]預言を蔑すな。[二一]きよき接吻をもて凡ての兄弟に挨拶せよ。[二二]願はくは主イエス・キリストの恩恵汝らと偕に在らんことを。（テサ前五・一六……二八）

このテサロニケ前書なる公の手紙は、第二次伝道の際、テサロニケ教会にコリントから書き送ったもので、パウロ書翰の現存の最初のものである。四・一三—一八では特に再臨のキリストを希望しているので、いかに使徒たちはキリストを慕っていたことか。

右掲の短かい数連の言は我々の日常生活へのパウロの勧めとして深く銘記すべきものなのである。「常に喜べ」、これは可能か。どんな不如意のときでも、常に喜び得るか。そのためにはキリストをわが衷に迎えて、天国をわが胸三寸の中に現ずることによって可能である。「絶えず祈れ」は、魂が祈りを呼吸とすることによって可能である。エン・クリスト！　キリストの中にいる態勢が、祈らざるを得ないようにする。祈りがたのしみとなる。祈りが力となる。そのとき不断の祈の魂となる。「万事に感謝せよ」、悲しいこと、口惜しいこと、憤慨に耐えぬこと、その他感謝できないようなときにも、魂をキリストに向けると、聖霊が臨み、あらゆる逆境に在って、逆に聖霊の力が強化されて感謝せざるを得なくなる。これが本当の勝利である。「御霊（の火）を熄すな」魂の目をキリストに向けると、聖霊の火が燃える。聖霊の火は消えない。「預言」を受けるには祈りを要す。「きよき接吻」主に在っての愛情は生命を若返らしめる。

罪びとの首，使徒の首
（テモテ前、後書全部）

○「キリスト・イエス罪人を救はんために世に来たり給へり、とは信ずべく正しく受くべき事ぞ。その罪人の中にて我は首なり」。（一・一五）
○この故にわが按手に由りて汝の内に得たる神の賜物をますます熾にせんことを勧む（テモテ後書一・六）
○我はこの福音のために苦難を受けて悪人の如く繋がるるに至れり。然れど神の言は繋がれたるに非ず。（テモテ後書二・九）
○我は今供物として血を灑がんとす。わが去るべき時は近づけり。われ善き戦を戦ひ、走るべき道程を果し、信仰を守れり。（四・六）

○テモテ前・後書はテトス書と共に牧会書翰と謂われている。パウロが愛弟子テモテ（父はギリシャ人、母はユダヤ人）に与えた私信。パウロは自分を「罪びとの首」と告白した。キリスト信徒を殺害したことを意識しての言であろう。しかし殉道者ステパノの故に、パウロは救われた。ついに彼は使徒の首となった。これほど美事な劇的な変転は類例がなかろう。内村鑑三も自らを「罪びとの首」と告白し、万人救済論を唱えた。ところがキリストこそ「罪びとの首」と自らなり給うて、十字架の死を遂げ贖罪を果して下さった。
○パウロによる聖霊の按手でテモテは恵まれた。この筆者もかなり多くの男女に聖霊の按手を施した。み霊を受けた後、聖言を化体してゆくことが大切である。そして十字架が土台になっていることを要する。十字架と聖霊は不可分である。

12月15日

聖霊の維新
（テトス3：1—11）

三・四 されど我らの救主なる神の仁慈（なさけ）と人を愛し給ふ愛との顕はれしとき、五・六 我らの行ひし義の業（わざ）にはよらで、唯その憐憫（あはれみ）により、更生（うまれかわり）の洗ひと我らの救主イエス・キリストをもて豊かに注ぎ給ふ聖霊の維新とにて我らを救ひ給へり。（テトス三・四—六）

テトスはギリシヤ人（ガラテヤ二・三）でパウロによって入信した。パウロの伝道に同道して協力した。特にエペソ教会、コリント教会との交りがあつくあった（コリント後書二・一三、八・二三、一二・一八）。その後テトスはクレタ島で伝道をして、島の中心人物となった由。

右掲の聖句で著しい語は「聖霊の維新」である。キリストが「人新たに（上より）生れずば神の国を見ること能はず」（ヨハネ三・六）と言い、更に「人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能はず」（ヨハネ三・五）と言っておられる様に、ここで言う「更生の洗ひ」とは水のバプテスマ即ち悔改、回帰の水のバプテスマのことである。が大切なのは、「キリストから豊かに注ぎ来たる聖霊」のバプテスマである。聖霊を本当に受けるとその瞬間から別の次元に入ったことを覚える。これは体験するのでなければわからない。正に「聖霊の維新」である。いつかも告白したように、筆者も一九五〇年の晩秋、大阿蘇山のふところで、即ち瀧見荘での祈禱会に於て、十字架の冥想を祈りの中でしているうちに、天界から聖霊が注がれた。全身がしびれた。これが私にとって、信仰生活二十七年にして、起きた聖霊による維新であった。魂の遍歴における大なる峠となった。

四・一五 我らの大祭司は我らの弱さを思ひやること能はぬ者に非ず、罪を外にして凡ての事、われらと等しく試みられ給へり。この故に我らは憐憫を受けんが為、憚からずして恵の御座に来たるべし。

七・一 ○このメルキセデクはサレムの王にて至高き神の祭司たりしがアブラハムは彼に凡ての物の十分の一を分け与へたり。その名を釈けば、第一に「義の王」、次に「サレムの王」、即ち「平和の王」なり。父なく、母なく、系図なく、齢の始なく、生命の終なく、神の子と同類にして、限りなく祭司たり。（七・一―三）（特に五・一―一〇。参照）

このヘブル書の作者は多分パウロの弟子、多分レビにしてユダヤ教から改宗したヘレニスト（ギリシャ語を語るユダヤ人）。ギリシャ文体は非常に美しいとのこと。主題はキリストを独一の大祭司としていること。しかも十字架の信仰が土台となっており、聖霊の権威も瞭かである。謂はばゴルゴダの丘の上に円現した霊虹の如きものである。手紙か、神学論文か、福音の解明か、いづれをもふくむふしぎな一書である。

右掲の聖句を見ると、受肉のイエス、どん底に立って我々の罪を十字架で荷い贖って下さったキリストの絶対恩恵に憚らずして浴せよ、という。メルキセデクという不思議な祭司（創世一四・一八―二〇）は詩篇一一〇・四に謳はれている彼で、イエスはこの彼を型として自覚しておられた。この七・三に至ってはいよいよ以てキリストの型の如くである。

12月17日

永遠の贖罪・永遠の嗣業
（ヘブル9；10）

九・一二 されどキリストは来らんとする善きことの大祭司として来たり、手にて造らぬ此の世の属ならぬ更に大なる全き幕屋を経て、山羊と犢との血を用ひず、おのが血をもて唯一度び至聖所に入りて、永遠の贖罪を終へ給へり。……永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給ひしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事へしめざらんや。一五 この故に彼は契約の中保なり。……召されたる者に約束の永遠の嗣業を受けさせん為なり。（ヘブル九・一一―一五）

「されど」というのは、九・一―一〇に述べてある旧約の礼拝（出二五、二六参照）に対して、新約の霊的礼拝に移らんとするからである。一二節「唯一度び至聖所に入りて」とは何か。十字架のことである。十字架の贖罪死こそ「永遠の贖罪」で、イエス自ら大祭司となり、羔となって十字架という極刑台を至聖所と化した。東西古今唯一の至聖所で、永遠の贖罪を果し給うた。キリストの霊は今も尚現在して能き給う、十字架が今も尚現在して我らに現前する事実である如く。これが「永遠」の活現性である。旧約から新約への中保となって旧約を成就して贖罪し、新約たる永遠の嗣業、即ち神の国を嗣ぐ者として下さった。その実質は何か。聖霊の降臨を受けて、聖霊の人となることである。これは十字架の絶対恩恵を無条件に体受するところに臨む絶対恩恵の聖霊であって、こちらに何の条件も資格も要らない。

12月18日

慕ふところは天に在り
（ヘブル11：1―40）

○信仰は望まれおるものの現実、見られざるものの確証なり。信仰に由りて我らは、諸々の世界の神の言にて創造られ、見るものの顕はるるものより成らざるを悟る。信仰に由りてノアは、……畏みて……方舟を造り、……信仰に由る義の世嗣ぎとなれり。信仰に由りてサラも約束し給ふ者の信実なるを思ひし故に、年過ぎたれども胤を宿す力を受けたり。

○彼らは皆信仰を懐きて死にたり。未だ約束のものを受けざりしが、遙かにこれを見て迎へ、地には旅人また寓れる者なるを言ひ表はせり。させど彼らの慕ふ所は天に在る更に勝りたる所なり。

信仰はこちらの何ものでもない。主体的対象から受けとる希望の現実であり、不見の主体的対象が何らかの徴として受けとられている確証である。信即現である。これは聖霊のわざである。「天国は汝らの内に在り」と言い給ふた聖言が裏づけて下さっている。神の霊言、霊気が万象を現じ出だす。山の上に方舟を造っていたノアは気狂いと思はれたろう。ところが方舟は信仰の現実であり確証であった。見よ、大洪水が襲来して方舟のみが救はれた。サラも常識を超えた老年で胤を宿した。約束のものの保証は信仰が抱く聖霊である。霊賜である。天界には神が天の都を備へておられる（一一・一六）。内なる天国は、外なる天国の保証であった。

12月19日

陣営より出でて御許へ

（ヘブル13：1—25）

一三・一一 大祭司、罪のために活物の血を携へて至聖所に入り、その活物の体は陣営の外にて焼かるるなり。この故にイエスも己が血をもて民を潔めんがために門の外にて苦難を受け給へり。一三 されば我らは彼の恥を負ひ、陣営より出でてその御許に往くべし。

旧約時代の大祭司は羔の血を携へて神殿の幕屋の至聖所に入り、血を祭壇に濺いだが、羔（牡牛と山羊）の体は陣営の外で焼かれた（レビ記一六・二七参照）。イエスはエルサレム城門外のゴルゴダで十字架され給うた。「彼の恥」とは十字架道のことである。陣営とはこの場合ユダヤ教であろうが、我々にとっては神を無みする徒輩であったり、同じキリスト者でありながら、自己義認をして他人を審くパリサイであったりする。そういう陣営から出でて、キリスト直結のため許へ往くのが天道である。四面楚歌の声であろうと結構だ。天の万軍が味方する。預言者たちや使徒たちが応援する。筆者自身もそういう経験をもった。数十年独歩して来た。先生や先輩や友人や弟子からも見棄てられた。自己弁護は要らない。聖霊が呻きを以て執り成し給ふ。わが真意と善意は主が知り給う。「わが義は天に在り」である。「陣営より出でてみ許に往くべし」の一句は身に泌む。ありがたい聖言だ。万斛の涙を知り給う主の故に。もう人生の夕暮だ、詩の旅路である。夜道を独りで辿ってゆく。夜もすがら歩く。主のカンテラ聖霊の光で。永遠の晨が明けるまで。み空に星が三つ輝いている。D・M・G！ わがオリオンよ！

12月20日

本来倡・行一相一如
（ヤコブ書全体）

○それ[一・二三]み言を聞くのみにして之を行はぬ者は、鏡にて己が生来の顔を見る人に似たり。[二五]されど全き律法、即ち自由の律法を懇ろに見て離れぬ者は、業を行ふ者なり。（ヤコブ一・二三―二五）

○我らの父アブラハムはその子イサクを祭壇に献げしとき、行為によりて義とせられたるに非ずや。[四・一]（ヤコブ二・二一）

○汝らの中の戦争（ポレモス）は何処よりか、分争（マケー）は何処よりか、汝らの肢体の中に戦ふ慾（ヘードネー）より来るに非ずや。[五]（ヤコブ四・一、五）

「神は我らの裏に住ませ給ひし霊を妬むほどに慕ひ給ふ」と言へり。

キリストの義を賜るのはパウロの言う如く信仰のみによるのか、ヤコブの言う如く行為によるのか。信仰と行為をかく二段構えとするなら、パウロが正しい。しかし、信仰そのものが実は全身的内的霊的行為であって信即行である。信とはキリストの恵みの力に圧倒されて起きる受動的行為、本願による行為である。信即行で、まことの行為は信仰の現象面たるのみ。火が燃えれば炎が立つように。どんなにそれが惨めな相（すがた）であっても。故に行為（炎）なき信仰（火）は偽信仰（くすぶり）である。かくてパウロ、ヤコブは真理の表裏であって本質的には一相であるはずだ。「自由の律法」とは天的必然、霊然の法で、行為せざるを得ぬ法である。「慾（ヘードネー）」は要するにエゴイズム（利己主義）でこれが罪の根だ。神・キリストの愛は我々の霊がサタンに奪はれぬように慕って下さる。

12月21日

愛と栄光の聖霊
（ペテロ前書4：1―19）

○四・七万事万象の終末近づけり。然れば汝ら心を鎮め、深く祈り入れよ！　八何ごとよりも先づ互に相愛せよ。愛は多くの罪を掩へばなり。○二愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火の如き試煉を異なることとして怪しまず、三反ってキリストの苦難に与れば与るほど喜べ、汝ら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまんためなり。一四もし汝らキリストの聖名のため謗られなば恵福なり。栄光と御霊、即ち神の御霊汝らの上に留まり給へばなり。（ペテロ前四・一二、一三、一四）

紀元一世紀後半から二世紀初葉にかけてのネロ、ドミティヤヌス、トラヤヌス帝らの迫害を背景とした初代キリスト者たちの生命賭けの信仰をこのペテロ前後書翰に於ても見る。世の終末は人間世界の現実の相である。神が世界の終末をいつ終わらせても、人間の側に弁解の余地はない。審判に堪え得るものは、十字架でゆるされたその愛と同質の愛を以て他人の罪を掩う愛のみである。「火の如き試煉」とは迫害のことで、キリストが十字架の苦難に勝ち給うたのは聖霊の愛の力であった。ペテロも主の跡を追って逆さ十字架の苦難に勝った。パウロも、主の兄弟ヤコブも殉道の死を以て凱旋した。旺なる聖霊に生きる者には苦難の中にも歓喜がある。苦難に遭えば遭う程聖霊の力は増大してくる。聖霊は無敵の霊である。深く祈り入って聖霊の化身とならん。

12月22日

一日千年

（ペテロ後書3：1—18）

三・八 愛する者よ、汝らこの一事を等閑にするな、主のみ許では一日は千年の如く、千年は一日の如くである。主その約束を果すに遅きは、ある人々の遅しと思ふが如きではなく、ただ何ぴとの亡ぶるをも望み給はず、凡ての人の回帰し来らんことを望みて、汝らを永く忍び給うのである。されど主の日は盗人の如く来らん。汝らいかに潔き行状と敬虔とをもて、神の日来たるを待ち、之を速かにせんことを勉むべきではないか。この日には天燃え崩れ、諸々の天体焼け溶けん。だが我らは神の約束によって義の住む新天新地を待つのである。

「一粒の砂の中に宇宙を観、一茎の野草に大空を観じ、君の手の掌に無限を握み、一刻の中に永遠を有つ」とブレイクが詠った。正にその如く主のみ許では一日は千年であり、千年は一日である。主が永遠の実存で在り給うから、主と偕に、主の中に在る者にとっては一日は永遠性を有っている。三六六日、一年のどの一日も永遠である。千年とは永遠のことである。万人救済の悲願、本願を有ち給う主が、人々の神への回帰を待って居られる。神の義の日が輝いているところの、また主の愛の源泉が湧いているところの新天新地を待つには、自ら「清き行状も敬虔」も意識せず、ひたすら聖霊の恩沢にあづかり、大自然の如く霊然たるの生き方を以て信より信へ、望より望へ、愛より愛へと生きるのみ、合掌。

12月22日（其一）

（詩）一日千年作詞1979. 12. 16
歌詞：S260B「千歳の岩よ」

一日千年

1
神を無みして　萬づの事を
いかに謀るも　空の空なり
ああ亡びゆく　文明文化

2
剣を執れば　剣に亡ぶ
萬づの国は　自滅への道
ああ人の世の　罪ぞ果てなき

3
世紀の終末　近づきたれば
心を裂きて　神に帰れよ！
三次大戦　いつかは知れず

4
大和島根の　人よ醒めよ
古来われらは　道の民なり
今こそ受けよ　キリストの道

5
預言者どもも　主の使徒たちも
亡びゆく世に　真理の道の
証しを立てて　世を去りゆけり

6
幼児どもに　国境なし
イデオロギーの　限界を悟り
人間に帰りて　手を握り合へ

7
人はもと霊止　神仏なり
萬象帰一　物心一如
萬づの人よ　相抱けよや

8
歴史の終末　明日に迫るも
主にこそ在りて　人をば愛し
今日一日を　千年と生きん

12月22日（其二）　（詩）世紀末作詞：1980．1．18
（ペテロ後書第四章に因みて）　歌調：S513「あめにたから」

世紀末

1
世の終末は　近づきたり
心こめて　祈らん
主に在りてぞ　世をば愛し
聖国の民を　創造らん。

2
火の試煉　近づきたり
キリストの名のため
譏られなば　幸なり
み霊うちに　燃ゆれば

3
み霊による　たまものをば
惜しみなく　ほどこし
魂の宝　天に積みて
聖民の証示をせん

12月23日

永遠の生命たる言（ロゴス）
（ヨハネ第一書1：1―3：24）

○一・一元始より在りしもの、我らが聞きしもの、目にて見しもの、つらつら見て手触（さわ）りしもの、即ち生命の言に就きてなり。一・二この生命すでに顕はれ、我らこれを見て証（あかし）をなし、そのかつて父と偕に在まして今我らに顕はれ給へる永遠の生命を汝らに告ぐ。（ヨハネ一書一・一、二）

○一・三汝らの衷には、主より注がれる油留（とど）まる故に、人の汝らに教ふる要なし。この油は汝らに凡てのことを教へ、かつ真（まこと）にして虚偽（いつわり）なし、汝らはその教へし如く主に居るなり。（二・二七）

○二・六主はわれらの為に生命を捨て給へり、之によりて愛を知りたり。我らも亦兄弟のために生命を棄つべきなり。（三・一六）

このヨハネの第一の手紙は、その出だしがヨハネ福音書の冒頭に照応する。即ちそれは言（ロゴス）であってしかも生命である。この言（ロゴス）なる主体はヨハネが耳で聞き、目で見、手で触ることの出来た慕はしい人物であった。この人は父なる神と偕に先在し、地上に肉体を以て出現し給うた。それは永遠の生命の実証者たる主イエスである。「主より注がれた油」とはペンテコステのとき降臨した聖霊のことである。み霊が臨むと私の言ったりしたことがみんなわかるぞ、とイエス自身が遺言なさった。「主に居る」とはヨハネ福音書第十五章でイエスがさんざん語っておられる表現である。主と一如的な在り方である。三・一六はヨハネ福音書の三・一六と相照応するではないか！

12月24日

愛は神より出づ
（ヨハネ第一書4：1—21）

四・七 愛する者よ、我ら互いに相愛すべし。愛は神より出づ。凡そ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。八 愛なき者は神を知らず、神は愛なればなり。九 神の愛われらに顕はれたり。神はその生み給へる独子を世に遣はし、我らをして彼によりて生命を得しめ給ふに因る。一〇 愛といふは、我ら神を愛せしに非ず、神我らを愛し、その子を遣はして我らの罪のために宥めの供物となし給ひし是なり。一一 愛する者よ、かくの如く神我らを愛し給へり。……一二 未だ神を見し者あらず我ら互に相愛せば、神われらに在まし、その愛も亦われらに全うせらる。一三 神、御霊を賜ひしに因りて我ら神に居り、神我らに居給ふことを知る。（ヨハネ一書四・七—一三）

ヨハネ第一書四・七—一三は神の愛を語って完璧な聖句で、これ自体が天来の霊風であり、霊歌である。読者は聖書をひらき、たましいをこめて音読し、祈り心を以て黙読せられよ。神・キリストの愛迫り来たり、全身これ神・キリストの愛で火の如くなろう。「愛は神より出づ」、これは絶対的な一言である。それが恋愛であろうが、親子愛、師弟愛、夫婦愛、兄弟姉妹愛、友愛、凡そいかなる愛でも「愛は神より出づ」の大前提、太源あるときに始めて永遠性、生命性を有つことになる。唯この一事を銘記せん哉！

12月25日

「視よ，我れ戸の外に立ちて叩く」
（ヨハネ黙示録；七つの教会１－３）

一・八 ○今在まし（ホ・オーン）、昔在まし（ホ・ヘーン）、後来たり給ふ（ホ・エルコメノス）者、主なる全能の神いひ給ふ『我はアルパ也、オメガ也』汝らの兄弟にして汝らと共にイエスの艱難と国と忍耐とに与る（あづかる）我ヨハネ、神の言とイエスの証（あかし）との為にパトモスといふ島に在りき。一〇 われ主日（しゅじつ）に御霊に感じゐたるに、我が後にラッパの如き大なる声を聞けり。一一 曰く、「汝が見る所を巻物に書きて、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤの七つの教会に贈れ」と。一二 われ振り反りて我に語る声を見んとし、振反りて見れば七つの金の燭台（メノラー）あり。一三 また燭台の間に人の子の如き者在ます。…一七 「懼るな、我なり、最先（プロートス）なり、最後（エスカトス）なり」…二・一 ○視よ、我れ戸の外に立ちて叩く、わが声を聞きて戸を開かば、我その中に入りて彼（なんぢ）と共に食し、彼（なんぢ）も亦我と共に食せん。三・二一 勝者には我と共にわが座位（くらゐ）に坐することを許さん。（黙一・八…一七、三・二〇、二一）

○いよいよ最終の巻『黙示録（アポカリプシス）』（本当は「顕示」録の意である）に入る。「今在ます（ホ・オーン）者」、この現在者は過去を有ち将来を有つ永遠の現在者。創造の元始（アルパ）と完成の終末（オメガ）を有つ永遠者とキリストから。ヨハネはドミティアヌス帝（八一―九六年）の迫害時を背景として、エーゲ海の小さなパトモス島（エペソの南西九〇粁）でこの黙示を受けた。小アジアの七つの教会（第二、第三章）に使信を書き送る。魂の扉を叩き給うキリストを迎え入れて言霊を食せん哉！（頁数の関係で解説の余白が乏しいので読者は黙示録をよく読んで下さい）



（黙3：20，21）「視よ、我戸の外に立ちて叩く」

12月26日

血の復讐，羔の怒，羔の血
（黙示録：七つの封印４－７）

○[六・一〇]「聖にして真なる主よ、いつまで審判かずして地に住む者にわれらの血の復讐をなし給はぬか」（黙示録六・一〇）
○[六・一六]山と岩とに対ひて言ふ「請ふ……羔の怒より我らを隠せ。……誰[七・一四]が立つことを得ん」（六・一六、一七）
○　……「彼らは大なる患難[一六]より出で来たり、羔の血に己が衣を洗ひて白くなる者なり。……御座に坐し給ふ者は彼らの上に幕屋を張り給ふ。[一七]彼らは重ねて飢えず、重ねて渇かず、日も熱も彼らを侵すことなし。御座の前に在ます羔は、彼らを牧して生命の水の泉に導き、神は彼らの目より凡ての涙を拭ひ給ふべければなり。」（七・一四……一七）

○東西古今、いかに多くの個人、家族、村落の民衆、奴隷たち、弱者たち、信徒たちが、権力者、上役どもの奸策により不当極る処置、裁断、迫害のために血を流したことか。その血の復讐のための血の叫びは断えない。歴史の終末まで。併し彼らは天界に、迫害者らは地獄にいる。
○「羔の怒」、温和なる羔が怒ると獅子も震える。羔はキリストである。一切の不当なる権勢者たちは「最後の審判」を待つまでもなく、仮地獄の中にいる。ダンテの「地獄篇（インフェルノ）」。
○七・九―一七は諸々の人生の艱難に遭った人々へのあつい慰めの聖句である。パラダイスでの彼らの歓喜いかばかりぞや。彼らは感激の嬉し涙を流すであろう。

12月26日

天界の幕屋

作詞1980. 10. 16
ヨハネ黙示録第７章に因みて
歌調「美しき天然」田中穂積作曲
起句：「空にさへづる鳥の声」

1
羔(こひつじ)の血を　身に浴びて
あがなはれたる　白き群、
苦難(くるしみ)経たる　生涯(いのち)ゆえ
栄光(さかえ)ゆたけき　御座(みざ)の許(もと)。

2
神の幕屋の　張られたる
その天然の　霊泉に
渇きを知らぬ　永遠(とこしえ)の
生活(いのち)たのしむ　パラダイス。

3
数えつくせぬ　国民(くにたみ)の
星と散らばる　幕屋かな
類は相呼び　集りて
主のエクレシャ（召団）ここに成る

4
我らも地にて　聖名ゆえに
十字架を負ひて　生き貫かん、
み霊の光　身に浴びて
主のみ生命を　身証(あかし)せん。

12月27日

羔の君と十四万四千人
（黙示録14：1－5）

一四・一 われ見しに、視よ、羔シオンの山に立ち給ふ。十四萬四千人これと偕に居り、その額には羔の名及び羔の父の名記しあり。二 彼ら新しき歌を御座の前…にて歌ふ。四 彼らは人の中より贖はれて神と羔とのために初穂となれり。五 その口に虚偽なし、彼らは瑕なき者なり。（一四・一―五）

ヨハネはエペソ教会で永年牧会をしていたが、彼がパトモス島で観且つ聴いた黙示は何たる神秘の啓示であるか。七つの燭台を以て象徴されたるものは七つの教会であった。小アジア半島の西海岸沿いの面から北へエペソ、スミルナ、ペルガモの三教会と之に略並んで陸地帯を北から南へテアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤの四教会への使者を受けたあとで、羔の君が七つの封印の巻物の封印を次々と解く度びに色々な啓示があり、次に七人の御使が七つのラッパを次々に吹くことになる。その第七の御使がラッパを吹いて最初に現はれたのが、この一四・一―五のシオンの山の羔と十四万四千人。

素晴らしい立琴の大合奏の伴奏の中に響いて来たのは新しき歌の斎唱である。その十四万四千という象徴的な数（完全数十二の自乗の千倍）の初穂的な、一粒の麥的な魂の中にはアブラハム、モーセ、サムエル、エリヤ、エレミヤ、第二イザヤ、ヨハネ・バプティスト、ピリポ、ステパノ、パウロといった魂がいたに相違ない。その他今日まで同種の魂が天の川の星の如くこれに参じ入れられたことであろう。

12月28日

ハル・マゲドンの戦
（黙示録16：1―16）

一六・一三 第六の者その鉢を大河ユウフラテの上に傾けたれば、河水涸れたり。これ日の出づる方より来たる王たちの途を備へん為なり。我また龍の口より、獣の口より、偽預言者の口より、蛙の如き三つの穢れし霊の出づるを見たり。一四これは徴を行ふ悪鬼の霊にして、全能の神の大いなる日の戦のために全世界の王等を集めんとて、その許に出でゆくなり。一六かの三つの霊、王たちをヘブル語にてハル・マゲドンと稱ふる処に集めたり。（黙示録一六・一三…一六）

ヨハネへの霊幻霊声はその後もいろいろあったが、七人の御使に「往きて神の憤りの鉢を地の上に傾けよ」という声があって（一六・一）、逐一、鉢が獣（暴君）の上、地の上、海の上、河と水源の上、太陽の上、第六の者がその鉢を大河ユーフラテスの上に傾けた。すると右掲の如き奇怪なサタン軍の悪霊どもが立ち現れた。それが全世界の権力者どもを集めんとて出で行った。悪魔の三位一体的な三つの悪霊がハル・マゲドン（「メギドン山」の意）（王下二三・二九、歴代下三五・二〇―二六参照）。特にユダの名君ヨシア（王下二三・二五）がエジプト王の言に逆って立ち向ったために戦死したのがメギドンの谷であった悲劇的故事があるが、ハル・マゲドンはこれに因んだ象徴的な決戦場を意味する。日本史の関ヶ原の戦を連想する。謂はば、サタン軍の優勢な世界史に於て、神の軍が復讐的な最後の決戦をサタン軍に対していどみ、これを潰滅させる。この戦がハルマゲドンの戦で、その後に来る「千年王国」と「バビロンの壊滅」が新天地を迎える序曲となる。

12月29日

羔の婚姻
（黙示録19：1—21）

一九・六 われ大なる群衆の聲洪水の音の如く、烈しき雷霆の聲の如きを聞けり。曰く「ハレルヤ、羔の婚姻の期至り、すでにその新婦みづから準備したればなり。彼女は輝ける潔き細布を著ることを許されたり。この細布は聖徒たちの義しき行為なり」御使また我に言ふ「汝書き記せ、羔の婚姻の饗宴に招かれたる者は恵福なり」と。（黙示録一九・六—九）

第七の者がその鉢を空中に傾けると、聖座から大いなる声が「事すでに成れり」と呼んだ。この世の権勢と邪悪の象徴なる大なるバビロン、大淫婦の審判が終り、血の復讐は成り、御座から声が響いて来た、「すべて神の僕（婢）たるもの、神を畏るる者よ、小なるも大なるも、我々の神を讃め奉れ。」そして更に右掲の如き大群衆の叫び声が轟いて来た。神の国の到来の華たる「羔の婚姻」即ち、キリストと神の民の婚姻という表現を以て表はされる愛と歓喜の大婚礼大饗宴的な期の到来であり、神に栄光の帰せられる大讃美の饗宴である。この饗宴に抱かれた者たちは皆地上で苦難の道を歩み、夫々の路に於ておのが使命を果し、何らかの内容を以て真理の証を身を以てたてた人々である。何もキリスト者に限らない。神の民の範疇の広さ深さを誰か知らんや。視よ、白馬に乗った人を！　その眼光は炎の如くであり、その名は「神の言」と称う。彼は「王の王、主の主」（一九・一一—一六）。正に神の言なる羔と全歴史全世界の神の民なる新婦との婚姻である。

12月30日

神の幕屋
（黙示録21：1－8）

二・二 われまた聖なる都、新エルサレムの夫のために飾りたる新婦の如く準備して、神の許を出で、天降りするを見たり。三 また大いなる聲の御座より出づるを聞けり。曰く「視よ、神の幕屋、人と偕にあり。神、人と偕に住み、人、神の民となり、神自ら人と偕に在まして、四 彼らの涙をことごとく拭ひ去り給ふなり。今よりのち死もなく、悲歎も號叫も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去れり。

（黙二一・二―四）

いよいよ輝しき啓示のフィナーレである。新天地の霊幻である。聖都が花嫁の如く装うて天降りした。右掲の聖句の単純にして何ぞ深きや。「神の幕屋、人と偕にあり。神人と偕に住み、人神の民となり、神自ら人と偕に在まして…」人とは誰か、最も人らしき人々である。誰かこれを限定し、説明し得ん。神知り給う（詩一三九篇）。最早いかなる苦しみ悲しみの涙もない。あるはただ神・羔への感謝、感激の涙のみ。聖都の石垣や礎石はみな宝石宝玉である。

ヨハネに啓示された神の都、神の国の幻影はすばらしいが、みな象徴である。人類の地上の歴史の終末のあとに現ずる新天地の神の国の現実は誰か知らん。神深く是を秘め給う。

12月31日

「然りわれ到らん速かに！（ナイ・エルコマイ・タクー）

—キリストの再臨—

（21：9—27；22：1—21）

二二 ○われ都の中に宮を見ざりき。主なる全能の神及び羔はその宮なり。
二三 都は日月を要せず、神の栄光これを照らし、羔は燈火なり。
二四 ○御使また水晶の如く透徹れる生命の水の河を我に見せたり。この
二五 河は神と羔との御座より出でて都の大路の眞中を流る。河の左右に
二六 生命の樹ありて、十二種の実を結び、その実は月毎に生じ、その樹
二七 の葉は諸国の民を醫すなり。（二二・一、二）
二八 ○われ はダビデの萌生またその裔なり。輝ける曙の明星なり」御
二九 霊も新婦も言ふ「来りたまへ」、聞く者も言へ「来たり給へ」。
三〇 ○これらの事を證する者いひ給ふ「然り、われ到らん速かに」（ナイ・エルコマイ・タクー）アー
三一 メン、来り給へ、主イエスよ。（イルクー・クリエ・イエスー）（二二・二〇）

神の都には神殿が見当らなかったとヨハネは告白している。「主なる全能者たる神及羔（アル）がその宮（ニオン）であるという。会堂（ナオス）もないだろう。神の民そのものの多くの小さき群（ルカ一二・三二）がエレクシャ（教会、幕屋、召団）であるにちがいない。また聖都には日月が要らない。神の栄光がこれを照らし、羔の君自身が燈火であり、日、月、星辰であるという。何たる驚くべくも快哉なる神秘の現実かな。都大路に清水が流れ、生命の樹があって生命の糧たる果実と葉がある。何たる天界のイエスの黙示かな！ 羔の君は「速かに往くぞ！」と約束し給う。我らも「速く来て下さい」と祈り入る。アーメン、ハレルヤ。

12月31日　（詩）羔の婚姻（黙：19—22）　作詞：1984，9，4
歌調：一高寮歌「あゝ玉杯」

羔の婚姻

1
救済と栄光　神のもの
御審判義なり　真理なり
神の僕ら　報はれぬ
血の復讐は　果たされぬ
ハレルヤアーメン　僕たち
全能の主を　讃美せり

2
忍び待ちたる　時機は来ぬ
羔イエス　今こそは
エクレシヤなる　花嫁と
婚姻の座に　つき給ふ
幸の極みの　時は来ぬ
み国の晨　明け初めぬ

3
鳴呼歓喜の　徒輩よ
聖名を讃へん　羔の
婚姻の時期　遂に来ぬ
新婦今や　かがやける
細布を着て　備へせり
そは聖徒らの　行為なるぞ

4
白馬に騎れる　神の人
炎の如き　眼の光
衣の色は　血潮なり
「神の言」は　その聖名ぞ
白き細布　まとひたる
天の大軍　従へり

5
騎士の口には　利き剣
その聖手の中　鉄の杖
神の烈しき　み怒の
血の酒槽を　踏み給ふ
その聖衣の　文字は是れ
「王の王」なり　「主の主」なり

6
われまた見たり　み使の
日影の中に　立ちたるを
彼れ叫びたり　「鳥どもよ

12月31日　（詩）羔の婚姻（黙：19—22）　作詞：1984，9，4
歌調：一高寮歌「ああ玉杯」

7
神の族を　苦しめし
王侯代官　もろもろの
悪の徒輩の　肉を喰へ」
われまた見たり　獣らと
地の権勢と　その魔軍
白馬の騎士と　天軍に
挑みかかれる　決戦を
ハルマゲドンの　この戦
サタンの魔軍　敗れたり

8
我また見たり　み使の
鍵と鎖を　たづさえて
蛇なるサタン　うち捕へ
陰府に投げ入れ　封ぜしを
千年の間　悪魔より
諸国の民を　護るべく

9
我れまた見たり　キリストと
神の言を　証して
カイザル礼拝　拒みたる
殉道の士が　よみがえり
千年の間　キリストの
栄光のみ座に　侍べれるを

10
千年王国　終りたり
ここにサタンは　放たれて
ゴグとマゴグを　いざないて
悪の軍旅を　集はしめ
聖徒の陣営　囲みしが
神の火魔軍を　焼き尽す

11
ああ開かれぬ　新天地
聖なる都　エルサレム
新婦の如　準備して
神のみ許ゆ　天降りせり
大いなる声　聖座より
出づるを聞きて　歓喜せり

12
「神の幕屋は　人と偕

12月31日　（詩）羔の婚姻（黙：19—22）　作詞：1984，9，4
歌調：一高寮歌「ああ玉杯」

13
神は今こそ　霊止の中
人は今こそ　神の民
神は自ら　人に住む
今や死も無く　かなしみも
くるしみも無し　涙無し」

「視よ我れすべて　新たにす
旧きは去りて　事成れり
我れアルパなり　オメガなり
我は生命の　源泉よ
勝利の子らよ　わが子らよ
来りて飲めよ　永遠に」

14
聖なる都　エルサレム
その光輝は　碧玉か
都の城の　石垣に
十二の門あり　その上に
十二支族の　名を記す
十二の使徒の　名は礎石に

15
神の都の　石垣に
基を見よや　さまざまの
光かがやく　宝石よ
あな美はしや　み空なる
虹の光の　結晶か
十二の宝玉の　石垣よ

16
都の内に　宮を見ず
全能の神　羔は
天つシオンの　宮なるぞ
ああ日も月も　照らすなし
神の栄光ぞ　光なる
羔はその　燈火よ

17
都大路の　真中には
水晶の如　透徹る
生命の水の　河流る
その両岸に　樹々ありて
十二種の実を　結ぶなり
その樹々の葉も　妙薬ぞ

12月31日

（詩）羔の婚姻（黙：19—22）　作詞：1984，9，4
歌調：一高寮歌「ああ玉杯」

18
「この書の預言　封ずるな
不義をなす者　不義をなし
義に生くる者　義に生きて
黒白あらはに　現はれて
神のみ民と　陰府の子の
別るる時期は　迫りたり」

19
「視よ速やかに　我れ到る
おのが衣を　わが血にて
洗ひし者に　幸あれよ
われはダビデの　萌生よ
輝く曙の明星よ
我れ速かに　到るべし」

20
聖霊も新婦も　叫ぶなり
「新郎イエス　来たりませ！」
「われ速かに　到るべし」
「アーメン主イエス　来りませ」
天地に木霊す「マーラナタ、
アーメン　イルクー　クリエ
イエス！」

ハレルヤ！

●著者略歴

一九〇四年東京生れ。高師付属小学・中学出身。旧制水戸高校、東大文学部独乙文学科卒（一九二九年春）。東幼・陸士・陸大教授歴任。終戦後一高・東大教授。その間断続的に昭和医専・医大、早大、東歯大等の講師。一九六一―六二年西独ハンブルク大学の日本学交換教授。東大停年退職後、独協大学教授兼独協中学・高校第十四代校長。一九七九年春、五十年間の教職を退く。西ドイツ政府から第一級功労十字章を授かる。現独協大学名誉教授。

内面史、水高・東大時代から内村鑑三・藤井武・塚本虎二の聖書集会に相前後して列席。一九四〇年秋から武蔵野市の自宅で日曜聖書講筵を開いて今日に至る。一九五〇年秋、十字架・聖霊の本格的体験以来、使徒的次元の原始キリスト道を唱道し、日本キリスト召団を結成。独立伝道者にして詩人。

著作活動、嘗て「旧約知識」誌、「キリスト教常識」誌の同人。後に「曠野の愛」誌、「曠愛新書」及び「エン・クリスト」誌の主筆。そしてこの「小池辰雄著作集」の著者。訳書は、白水社版の「眠られぬ夜のために」（ヒルティ著作集第四巻）、「神と人間の実存的弁証法」（ベルジャーエフ著作集第六巻）等。

©一九八八

小池辰雄著作集　第十巻

聖書は大ドラマである

初版印刷　一九八八年十一月一日
初版発行　一九八八年十一月十日

著者　小池辰雄

発行　小池辰雄著作刊行会
東京都武蔵野市吉祥寺東町
四ノ一五ノ一九（〒一八〇）
TEL　〇四二(21)三四三三
（振替）東京五―六一三一八

（責任者）奥田昌道

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

装幀　前野洋一

頒価　三五〇〇円（送料不要）

●小池辰雄著作集（全十巻）

頒価、各巻三五〇〇円（送料不要）、分買自由。

第一巻　無者キリスト（一九七五）……（四版）
第二巻　芸術のたましい（一九七六）……（再版）
第三巻　無の神学（一九八二春）……（初版）
第四巻　詩篇珠玉集（一九八〇）……（再版）
第五巻　百世の師ヒルティー（一九七七）……（再版）
第六巻　随想集（一九八二春）……（再刊）
第七巻　聖書の人ルター（一九八四）……（初版）
第八巻　詩歌集（一九八六春）……（初版）
第九巻　感想と紀行（一九八七春）……（初版）
第十巻　聖書は大ドラマである（一九八八秋）…（初版）

口座番号	東京5—61318
加入者名	小池辰雄著作刊行会

●申込みは郵便振替にて